博多 14

—博多遺跡群第39次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第229集

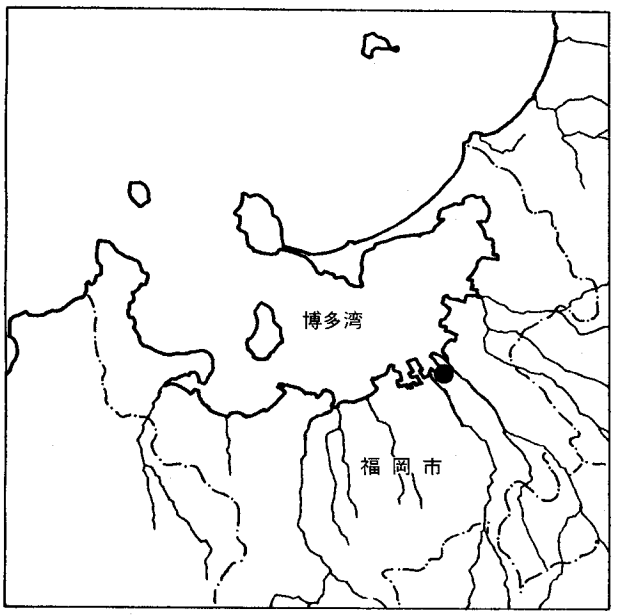
1990

福岡市教育委員会

博　多　14

—博多遺跡群第39次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第229集



1990

福岡市教育委員会

序

ＪＲ博多駅から博多湾にかけての市街地の地下には、古代以来大陸との貿易で栄えた博多遺跡群が埋もれています。

近年、都心部の再開発が急速に進み、それに伴って60次を越える発掘調査が実施されてまいりました。

その結果、多種大量の輸入陶磁器に代表される膨大な量の遺物が発見され、中世の国際都市「博多」の繁栄を彷彿とさせるものがあります。

本書は、その第39次発掘調査の概要を報告するものです。

本書が市民の皆さまの文化財に対するご理解を深めていく上で広く活用されると共に、学術研究の分野においても貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理に至るまでの費用負担、便宜をご快諾いただいた三井不動産、清水建設および多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表わすものです。

平成２年３月

福岡市教育委員会

教育長　佐　藤　善　郎

例言・凡例

1．本書は、ビル建設に先立ち福岡市教育委員会が調査を実施した、博多遺跡群第39次調査（博多区店屋町2･3･4･5･33－1･33－2･33－6）の概要報告書である。

2．本書の編集、執筆は、大庭康時が行った。

3．本書に使用した遺構実測図は、大庭・山口満・馬瀬直子が、遺物実測図は、大庭・山口・田川明美が作成した。また、整図には、大庭・山口・田川・森本朝子・小金丸昌世・井上涼子が分担してあたった。

4．本書に使用した遺構写真は、大庭が撮影した。また、遺物写真は、大庭が撮影し、萩尾朱美が焼付した。

5．遺物の整理には、生垣綾子・保利みや子・古谷宏子・村田喜代美・井上恵子・森本・山口・萩尾があたった。また、銅銭の銹落し・解読・集計・拓本には、馬瀬直子があたった。

6．本書に使用した方位は、すべて磁北である。

7．遺構番号は、遺構をその形状から土壙・井戸・溝・柱穴・集石にわけ、それぞれに付けた。なお、発掘調査時には、検出した順に通し番号をつけた。出土遺物の注記、発掘調査の記録類は、すべてこの通し番号によっている。本書では、遺構番号の後に括弧書きで、この通し番号を示した。例：４号土壙（0022）

8．本書に示した遺物は、遺構ごとに通し番号とした。

9．本調査に関するすべての記録類、出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵管理される予定である。

遺跡調査番号	８８０６		遺跡略号	ＨＫＴ３９	
調査地地番	博多区店屋町２・３・４他		分布地図番号	天神４９	
開発面積	1,056㎡	調査対象面積	612㎡	調査実施面積	612㎡
調査期間	1988年５月９日～８月31日				

本文目次

第一章　はじめに……1
　1．発掘調査にいたるまで……1
　2．発掘調査の組織と構成……1
　3．遺跡の立地と歴史的環境……2

第二章　発掘調査の記録……5
　1．発掘調査の経過と概要……5
　2．弥生時代の遺物……16
　3．古墳時代の遺物……16
　4．古代の遺構、遺物……18
　　153号土壙……18
　　163号土壙……19
　　4号溝……20
　　169号土壙……20
　　216号土壙……22
　　46号井戸……27
　　その他の古代の遺物……28
　5．古代末、中世の遺構、遺物……32
　　(1)　土壙……32
　　5号土壙……32
　　41号土壙……36
　　43号土壙……38
　　44号土壙……40
　　47号土壙……40
　　51号土壙……43
　　53号土壙……46
　　73号土壙……46
　　78号土壙……48
　　81号土壙……51

85号土壙……54
95号土壙……60
108号土壙……63
127号土壙……68
135号土壙……70
215号土壙……72
(2) 地下室状遺構……76
172号土壙……76
(3) 井戸……84
71号土壙……84
27号井戸……90
45号井戸……96
(4) 土壙墓・木棺墓……97
102号土壙……97
124号土壙……101
144号土壙……104
207号土壙……111
(5) その他の中世の遺物……114
① 土器、陶磁器、石製品……114
② 墨書土器……114
③ 銅銭……122
6．近世の遺構、遺物……125
1号溝……125

第三章 小結……128

第一章　は　じ　め　に

1．発掘調査にいたるまで

1987年９月９日、三井不動産株式会社より福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区店屋町2、3、4、5、33－1、33－2、32－6に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。同地は、福岡市教育委員会が博多遺跡群として周知している地域の、ほぼ中央にあたった。周辺の既往の調査成果からも、遺構・遺物の存在が十分予想された。そこで、埋蔵文化財課では同年10月８日、開発事前審査担当の下村智、米倉秀紀（埋蔵文化財第２係)、大庭康時(同第１係)を派遣し、試掘調査を実施した。その結果、既存建物の基礎が残存している部分を除く全面に遺構の存在が想定された。これを受けて、埋蔵文化財課は全面発掘調査の方針を固め、申請者である三井不動産株式会社、建設業者である清水建設株式会社と協議にはいった。

協議の結果、申請地内に既存建物のコンクリート基礎杭等で、実質的に発掘調査不可能な部分がしぼり出され、また安全対策の為、境界から若干の引きを取り、申請面積1056㎡の内の612㎡につき発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は、清水建設による鋼矢板打込、表土すき取り（地表面マイナス1.8ｍ）終了後の1988年５月９日より、同年８月31日までの約４ヶ月間実施された。調査担当は、同年５月埋蔵文化財第１係より同第２係に移った大庭康時である。

2．発掘調査の組織と構成

調査委託　　三井不動産株式会社

調査主体　　福岡市教育委員会　教育長　佐藤善郎

調査総括　　埋蔵文化財課長　柳田純孝

　　埋蔵文化財第２係長　飛高憲雄（現第１係長)

調査庶務　　埋蔵文化財第１係　松延好文

調査担当　　埋蔵文化財第２係　大庭康時

調査作業　　山口満、岩隈史郎、熊本義徳、関義種、高浪信夫、森山恭助、山崎光一、岩本朝子、江越初代、衛藤富子、黒木静子、近藤澄江、関加代子、曽根崎昭子濱地フサエ、村崎祐子、村田敬子、森山タツエ、柳瀬伸、前田直子

室内作業　　濱崎富美子、松本未来子、小金丸昌世、村田由紀、菊地貴子、江崎幸

その他、発掘調査に関する種々の条件整備、調査中の便宜については、清水建設株式会社の御協力をいただいた。

3．遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群とは、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらには近代、現代へとつながる複合遺跡である。地理的には、福岡平野の博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東は江戸時代に開鑿された石堂川、南は石堂川開鑿以前に那珂川に向って西流していた旧比恵川によって画される。

博多遺跡群においては、1977年の高速鉄道（地下鉄）祇園町工区の調査を嚆矢とし、一連の地下鉄関係調査、都市計画道路博多駅築港線拡幅関係調査および、60次をこえる民間関係調査が行なわれている。その結果、弥生時代中期前半には、砂丘上に竪穴住居址、甕棺墓などを営なんでいたことが、明らかとなった。古墳時代では、竪穴住居址、方形周溝墓などが調査されているが、博多遺跡群第28次調査において砂丘上に前方後円墳を築いていたことが判明した。

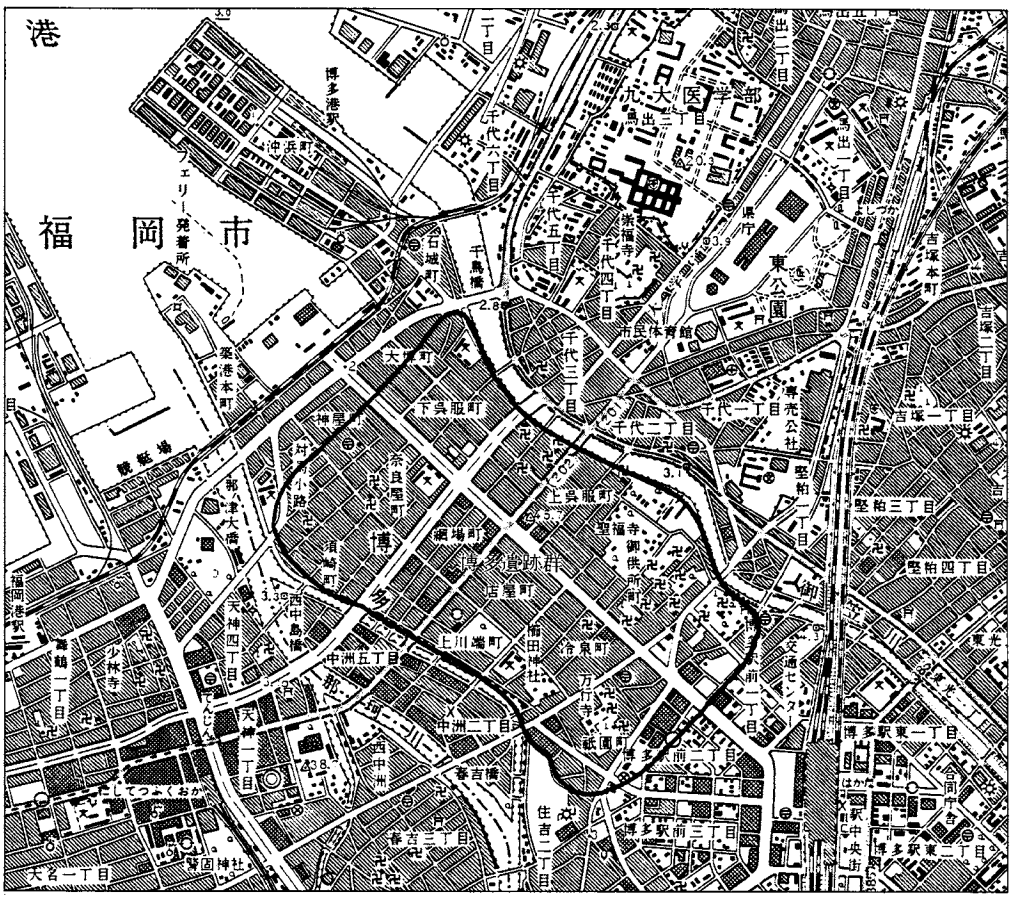


Fig. 1　博多遺跡群位置図（1/25,000）

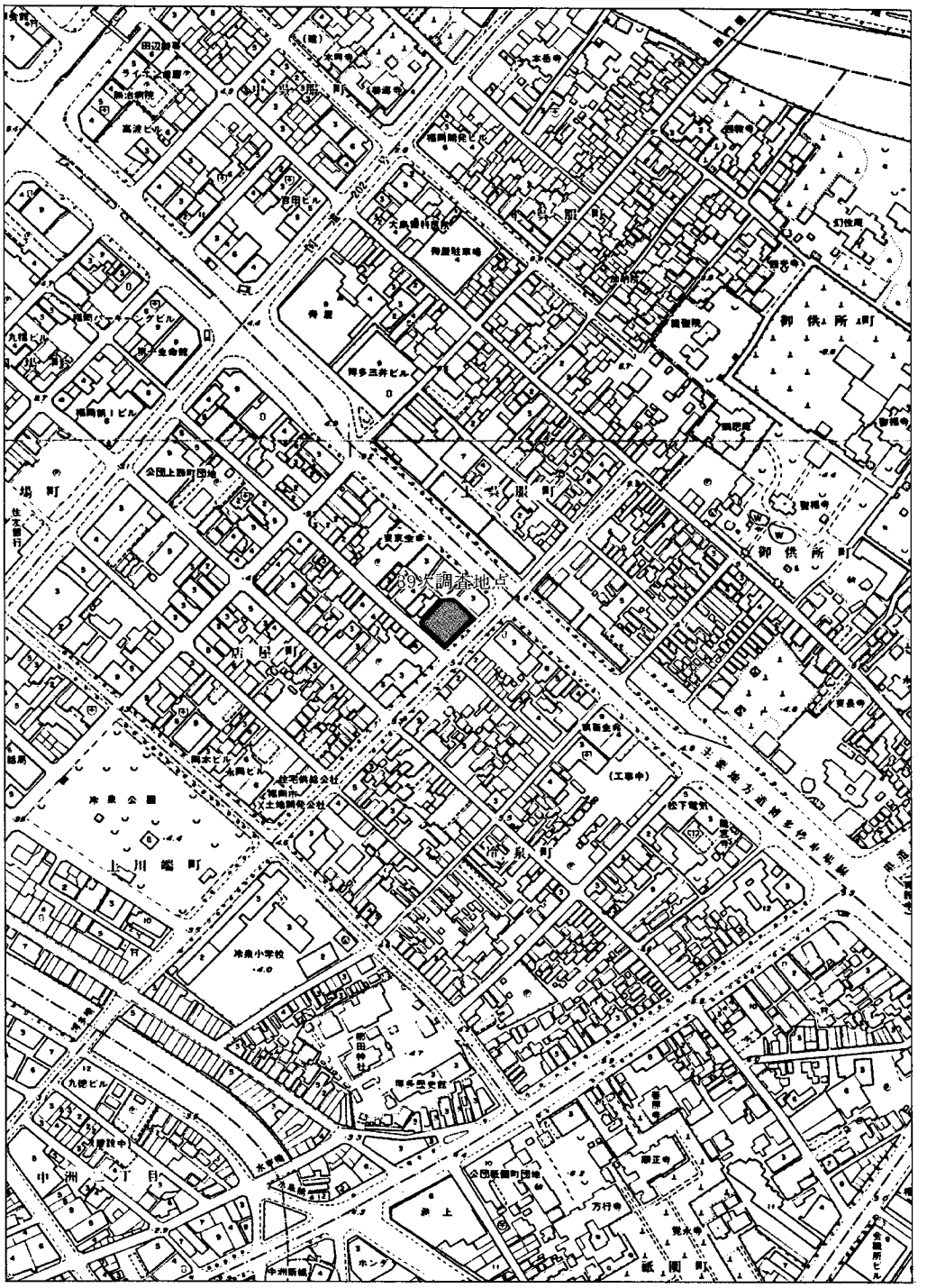


Fig. 2　第39次調査地点位置図（1/5,000）

歴史時代にはいると、博多は対外貿易の拠点として独自の発展をとげることになる。688年を文献上の初見とする筑紫館、842年以降その名が見える大宰府鴻臚館は、博多遺跡群から入海ひとつを隔てた丘陵上に設けられたものであった。これら迎賓館としての施設が置かれて、博多湾が大宰府の外港として位置付けられたことは、その後の博多の発展を考える上で重要である。これまでの発掘調査において、銅銙帯、石帯、円面硯、風字硯、皇朝銭、鴻臚館式瓦、老司式瓦、緑釉陶器、墨書須恵器など律令官人の存在を示す遺物が出土するとともに、少なからざる量の越州窯系青磁、長沙窯系陶器、邢窯系白磁も出土しており、博多もまた鴻臚館とならんで交易の場となっていたことを思わせる。909年の交易唐物使派遣の停止は、京都の中央政府が貿易の直接的掌握を放棄したことであり、形式的には大宰府を通じて貿易を管理するというものの、私貿易への動きを促すものとなった。こうした中で、博多は対宋貿易の中心となり、宋商人たちの博多居留がみられる様になったのである。これら在博多宋商人のもとで、中世貿易都市「博多」は誕生する。1151年、大宰府による博多・筥崎の大追捕が行われた。この際、千六百家の資財が大宰府によって押収されており、博多から筥崎にかけてかなりな街が形成されていたことを示している。博多遺跡群の発掘調査によって最も普遍的かつ大量に出土するのは、11世紀後半から13世紀前半にかかる時期の遺構、遺物である。中国陶磁器の占める比率が最も高いのもこの時期であり、宋商人居留のもとでの博多の繁栄を物語っている。

鎌倉時代、２度にわたる元寇で、博多近辺は戦場となる。また、これに関連して、鎌倉幕府は宋人の渡航、居住を禁止する。しかし、この時点までには、婚姻等を通じて宋商人の和人への同化は進んでおり、これによって博多が打撃を受けることは少なかったであろう。13世紀末には、鎮西探題が博多に設置され、貿易の中心地のみでなく、九州の政治的中心地という側面を持つにいたる。

室町時代にはいって九州探題がおかれたが、その後筑前の少弐氏、豊後の大友氏、周防の大内氏による争奪の対象となった。戦国時代には度々兵火にかかり、1586年島津氏の焼き打ちにより灰燼に帰す。九州平定をとげた豊臣秀吉は、朝鮮出兵の兵站基地としての必要性もあり博多の再興をする。しかし、江戸時代にはいり、鎖国政策がとられるに及んで、貿易都市としての博多は幕をおろしたのである。

この様な歴史を持つ博多遺跡群は、極めて重層的な複合遺跡である。最下層を形成する砂丘の砂層の上に、浅い所で１ｍ、深い所では５ｍ以上におよぶ包含層が堆積している。

今回調査した第39次調査地点は、博多遺跡群の中央やや南寄りに位置する。博多遺跡群は、博多湾に沿って並列する３列の砂丘からなるが、その中央の砂丘の最高所にあたる。150ｍ程北東には、鎌倉時代初めの創建にかかる臨済宗聖福寺があり、中世都市博多の中心部の一角であると言えよう。

第二章　発掘調査の記録

1．発掘調査の経過と概要

発掘調査は、1988年５月９日より着手し、８月31日に終了した。ただし、これに先立って、清水建設の手で、重機による近・現代の攪乱層の除去が行われている。除去作業は、試掘調査の所見に基き、現地表下1.8mまでを一率に掘り取った。

博多遺跡群の場合、最下層は砂丘上面の砂層を遺構検出面とするが、その上に数メートルにわたって、継続した生活面が形成されている。この間堆積土壌の変化はほとんどなく、厳密な意味での単一時期の生活面を検出するのは、不可能に近い。そこで、発掘調査にあたっては、掘り下げ→遺構検出→精査→記録→掘り下げをくり返し、半ば意識的に遺構検出面を設定して、遺構調査と遺物取り上げを行なった。その結果、４面の遺構検出を行なった。上層から順次、１面、２面と呼ぶ。また、調査地内への進入、廃土搬出の通路のため、Ｉ～Ｎ－11～15グリッドを２区として、当初の調査から除外した。２区については、１区の調査終了後、第１～３面

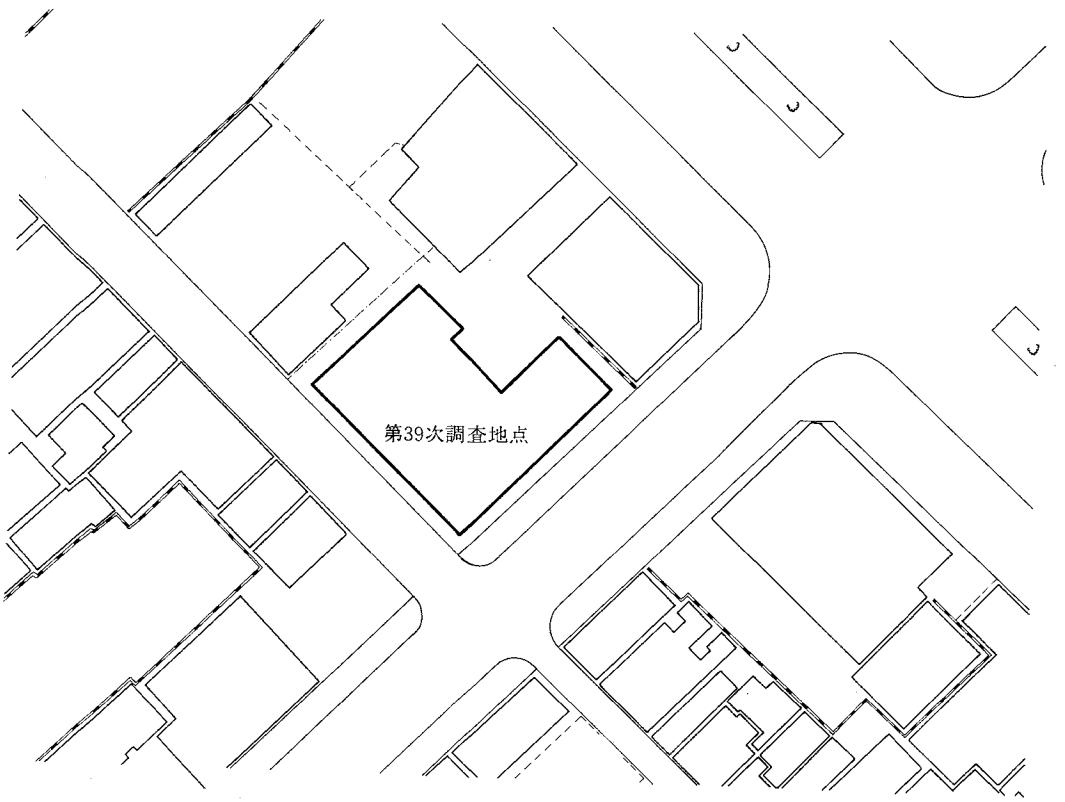


Fig. 3　第39次調査地点周辺測量図（1/500）

までは遺構確認、第４面のみ調査を行なっている。

調査の大まかな経過は、次の通りである。

５月10日～25日　　第１面調査

５月26日～31日　　掘り下げ

５月31日～６月21日　第２面調査

６月21日～28日　　掘り下げ

６月28日～７月15日　第３面調査

７月22日～28日　　掘り下げ

７月30日～８月30日　第４面調査　　（以上１区）

８月24日～26日　　２区掘り下げ（重機）

８月25日　　２区第１面・第２面、遺構の遺存状態のみ立会して確認。

８月27日～29日　　２区第４面調査

８月30日　　２区埋め戻し

８月31日　　事務所撤去、博多遺跡群第40次調査事務所へ引っ越し。調査終了。

以下、第１面から第４面までの概要について、順を追って略述する。

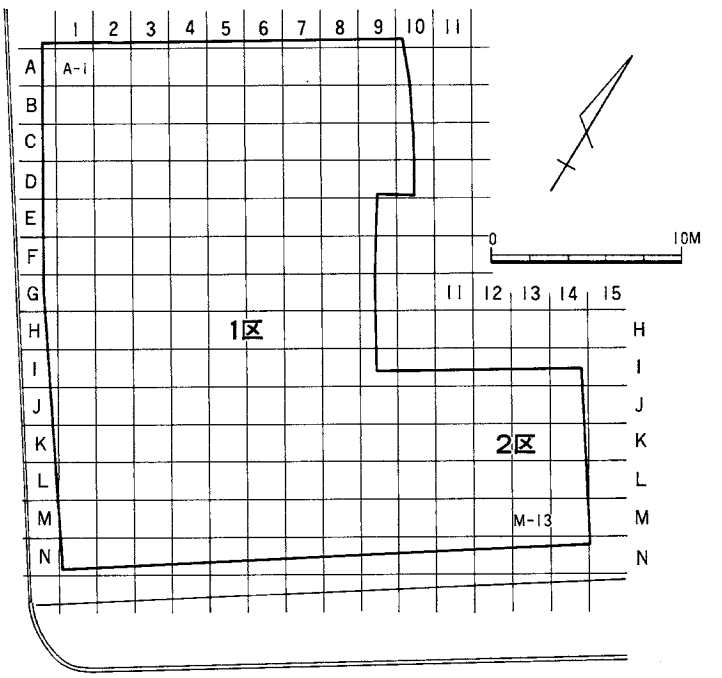


Fig. 4　グリッド配置図（1/400）

第１面

現地表面から、攪乱部分を含む表土約1.8ｍを除去した遺構検出面である。標高3.7～3.9ｍをはかる。検出した遺構は、土壙57基、井戸11基、柱穴97基、溝１条を数える。井戸を除くと、大半は13世紀代の遺構である。調査区の南辺で検出された１号溝は、近世の溝であり、１号溝の南側は道路面としての整地層をとどめていた。太閤町割り（1587年）以後の道路ということになるが、第１面においては、井戸を除いて近世の遺構は検出されていない。したがって、道路部分については、掘り込み地業がなされていたと考えられる。

第２面

第１面から30cmほど掘り下げた、標高3.4～3.6ｍで調査した遺構検出面である。土壙29基、井戸11基、柱穴120基を検出している。12世紀から13世紀にかかる時期の遺構である。

第３面

第２面から30cmほど掘り下げた、標高3.1～3.2ｍで調査した遺構検出面である。検出面の基盤は、砂質土となり、砂が多くみられる様になる。この掘り下げにともなって、Ｆ－９区より「延喜通寶」１枚が出土した。検出した遺構は、土壙41基、井戸３基、柱穴263基、溝１条である。124号土壙は、長方形の掘り方に板を置いたもので、木材はほとんどが朽ちて残っていないが、床面と、一部壁面において確認できた。おそらくは、箱状を呈したものであったと推定される。人骨は検出していないが、木棺墓である可能性も考えられる。

第４面

第３面から20～40cmほど掘り下げた、標高2.8～3.0ｍで調査した遺構検出面である。検出面の基盤は、淡黄色の砂で、砂丘の上面にあたる。遺構検出作業中に、Ｈ－３区より丸鞆未製品と思われる石製品が出土した。検出した遺構は、土壙88基、井戸22基、柱穴521基、溝９条である。８世紀後半から12世紀前半代の遺構が調査されている。144号土壙は、土壙墓と思われる土壙で、完形品の白磁椀５個が出土した。その内の４個はきれいに重ねて伏せてあり、棺外に副葬されたものと考えられる。172号土壙は、側壁に板材を立て並べた木室である。床面からは、板材は確認されていない。181号土壙は、木棺墓である。南の小口側を171号土壙に切られており、副葬品は出土しなかった。207号土壙も木棺墓で、左大腿骨と骨盤の一部が残っていた。27号井戸掘りかたからは、銅製鉈尾の裏金具が出土した。216号土壙は、板と棒で方形の枠を組むもので、埋土には、白色粘土が厚くつまっていた。43号井戸は、廃棄の際大量の牛骨を投棄したもので、牛骨はバラバラの状態で、厚さ約40cmにわたって堆積していた。８世紀後半から10世紀頃の遺構としては、土壙、溝、柱穴が調査されている。

なお、第４面を主として、布留式期の甕・高坏片等が出土しているが、当該期の遺構は検出できなかった。

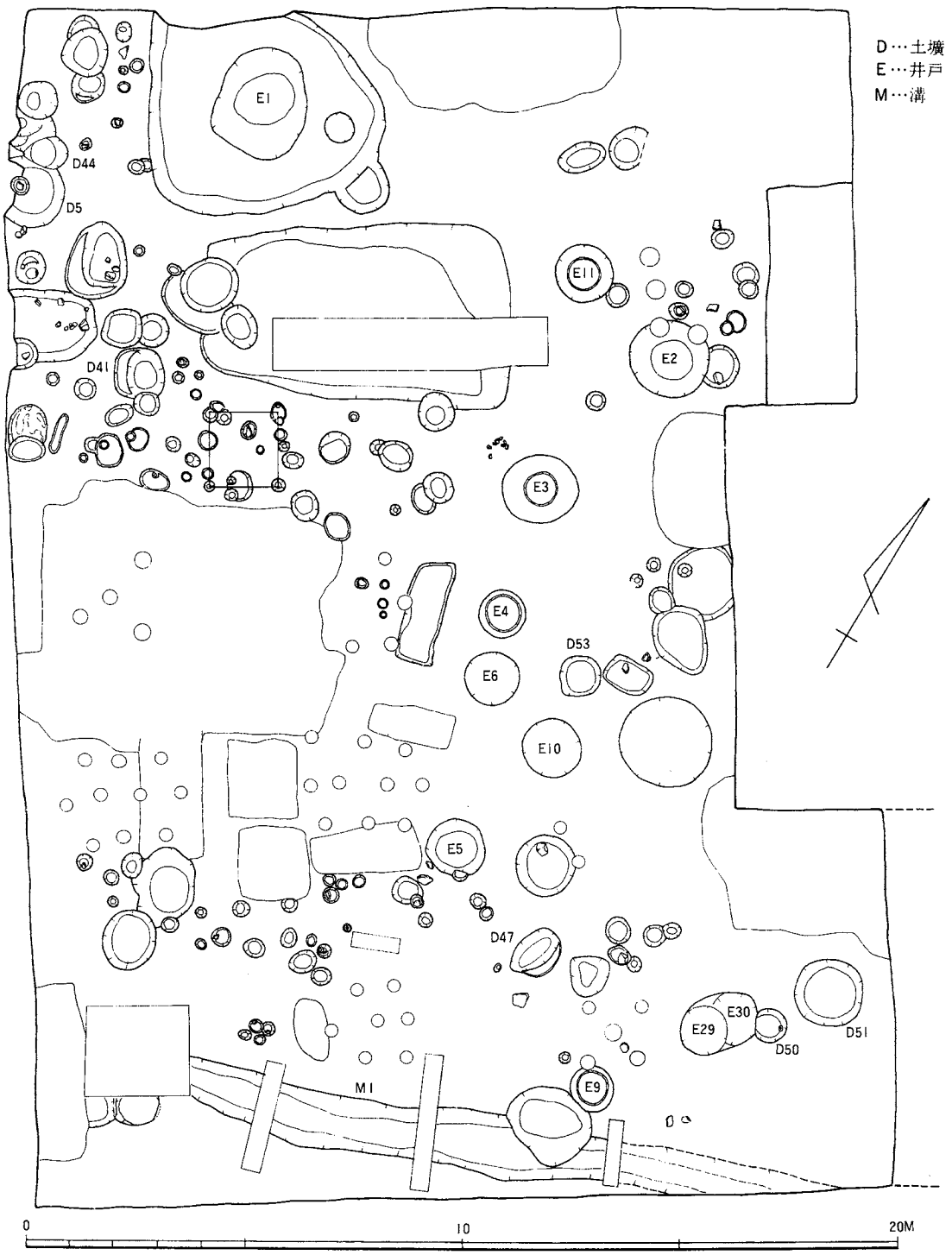


Fig. 5 第1面遺構平面図（1/150）

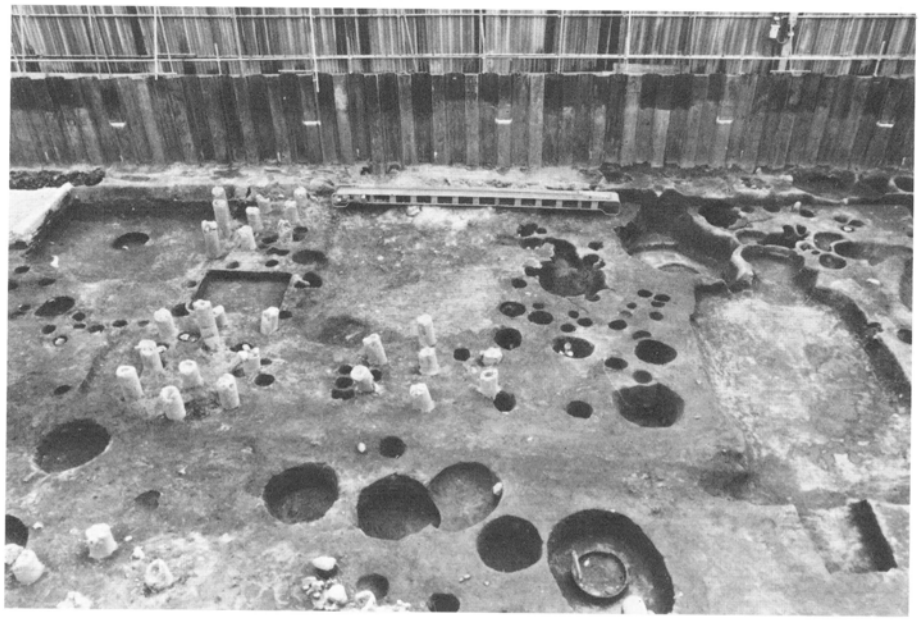
（1） 北西より

（2） 北東より

Fig. 6 第１面遺構全景

Fig. 7 第2面遺構平面図 (1/150)

（1） 北西より



（2） 北東より

Fig. 8 第２面遺構全景

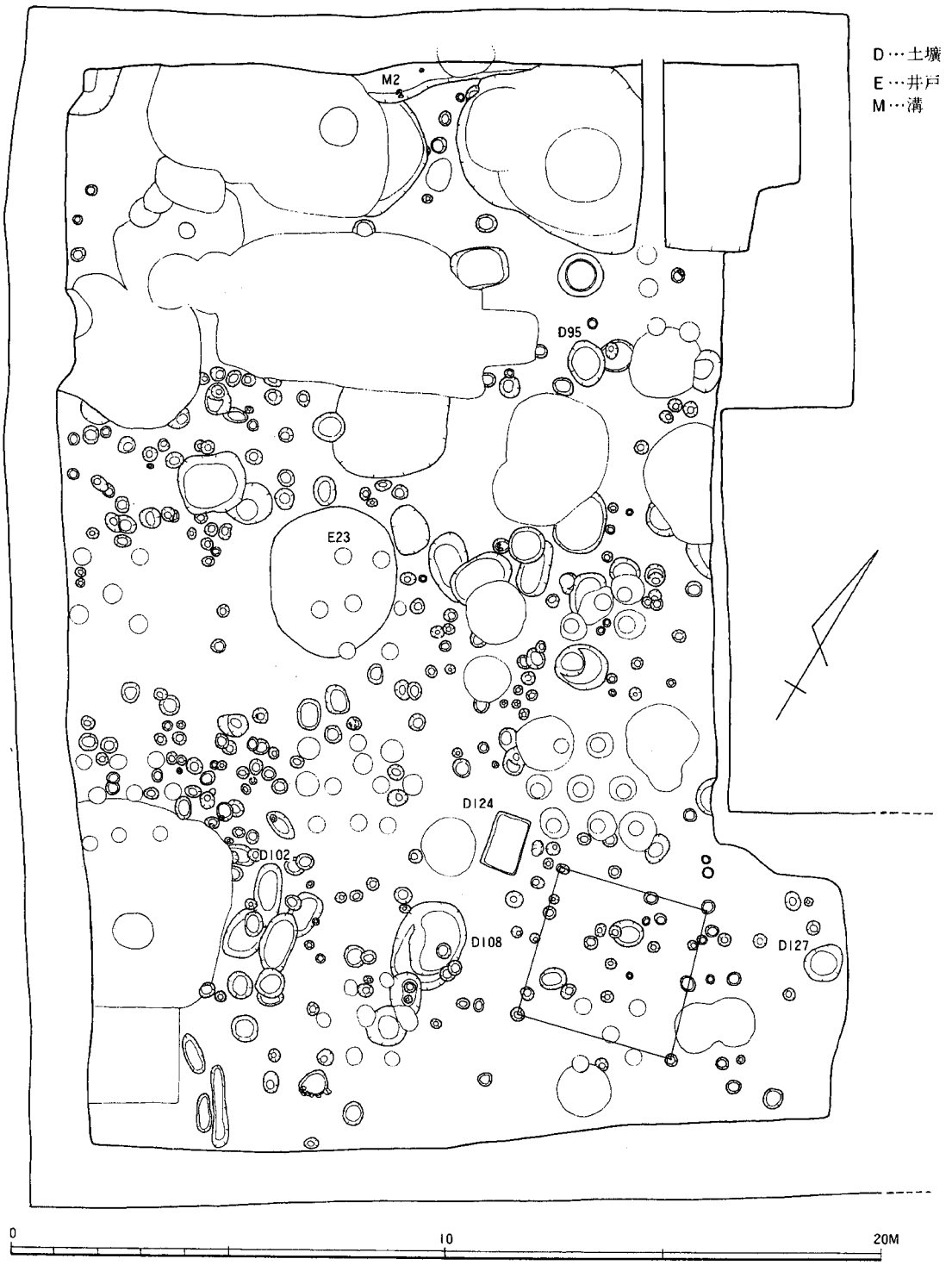
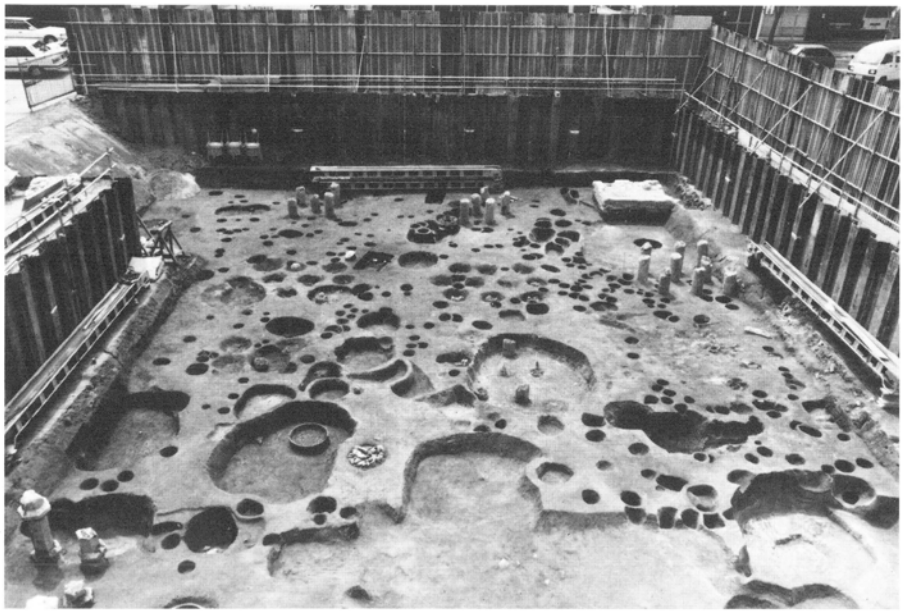
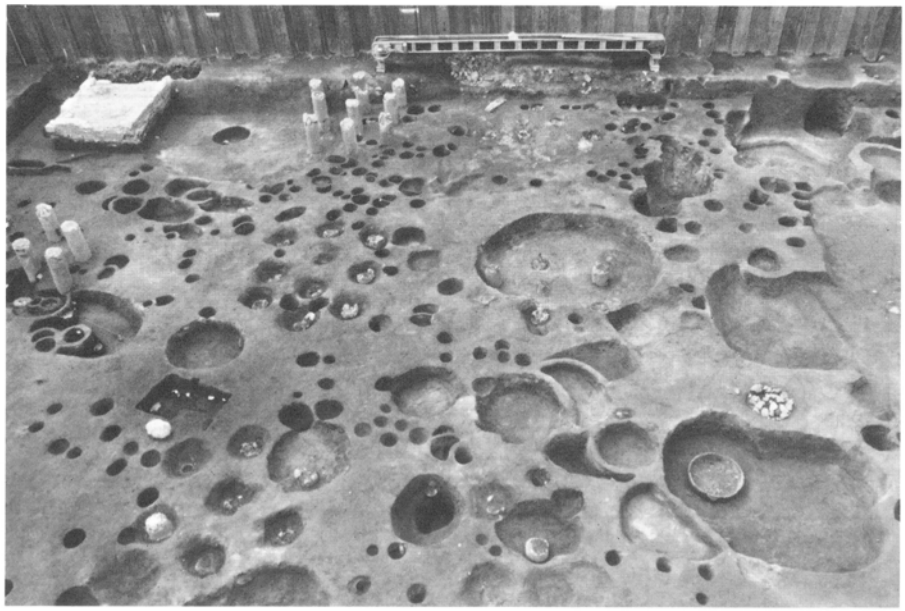


Fig. 9 第3面遺構実測図（1/150）



（1） 北西より



（2） 北東より

Fig. 10 第3面遺構全景

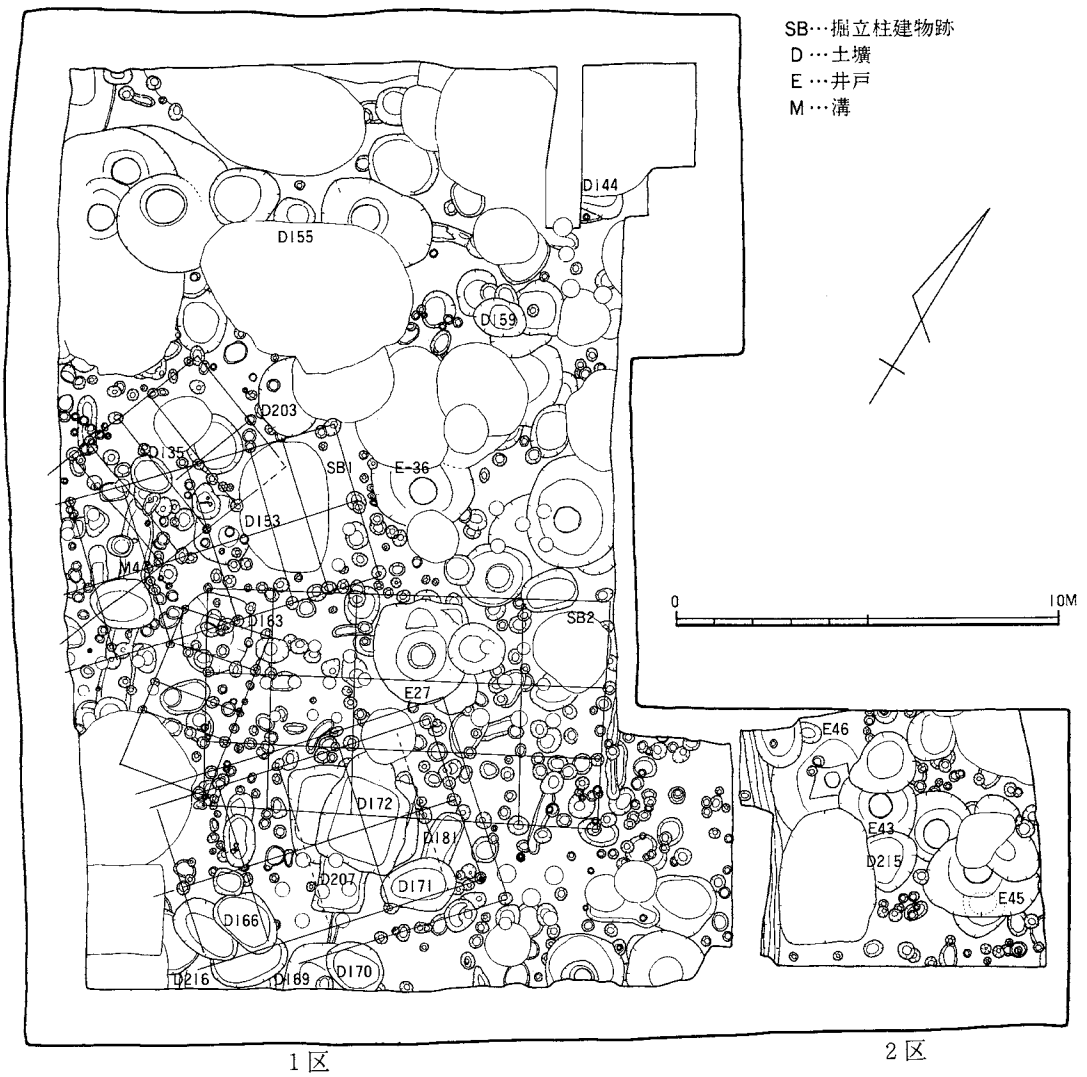
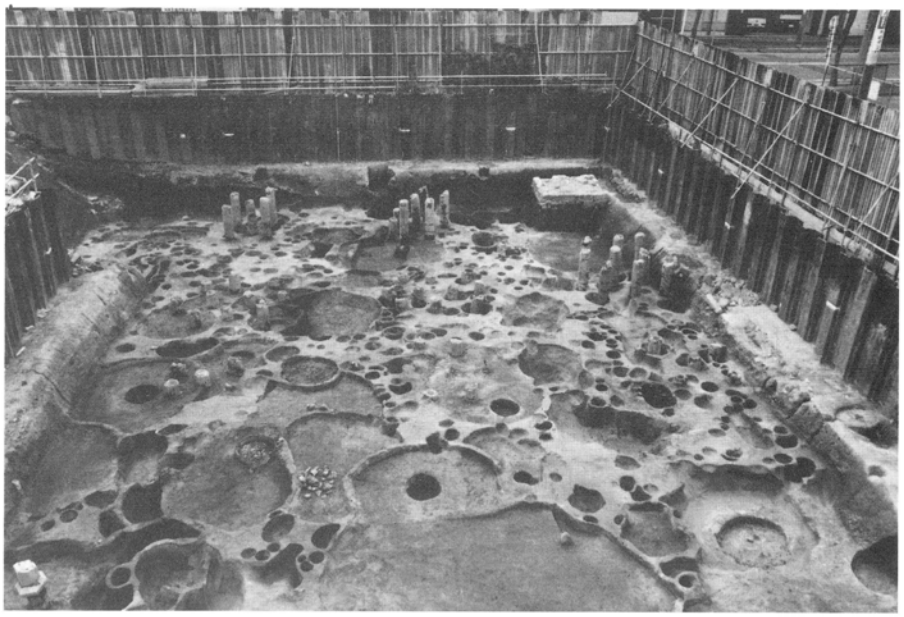
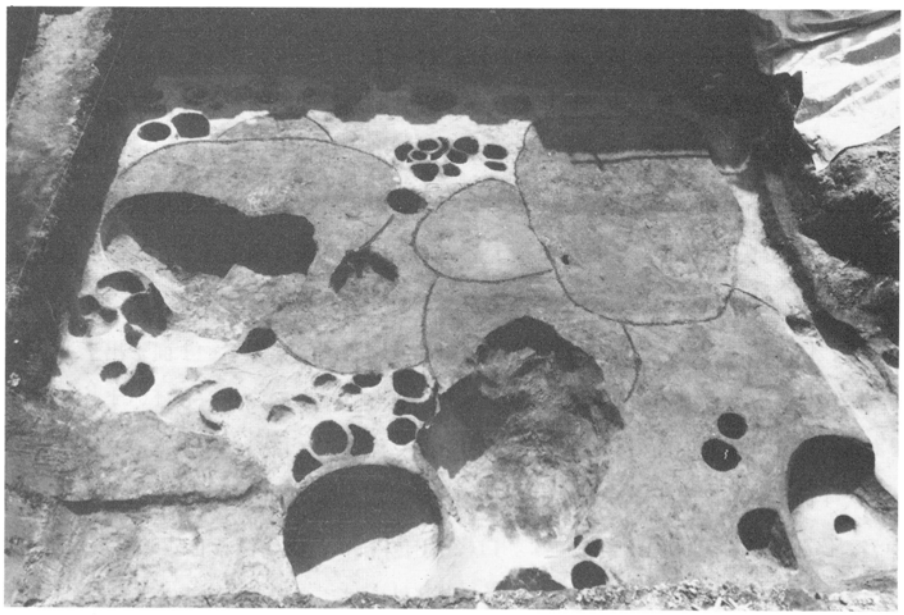


Fig. 11 第4面遺構平面図 (1/200)



（1）　1区　　北西より



（2）　2区　　南西より

Fig. 12　第4面遺構全景

2．弥生時代の遺物

本調査地点からは、弥生時代の遺構は全く検出できなかったが、若干の弥生式土器が出土している（Fig. 13－**1**～**3**、Fig. 91－**1**）。

1は、中期の甕の口縁部である。小片のため図上復原するのはひかえたが、口径約41cm程に復原できる。2面下出土。**2**は、後期の鉢である。わずかに丸味をおびた底部から内湾して立ち上り、ゆるく外湾しつつ大きく開く体部を持つ。口縁部は、丸くおさめる。内面は、放射状を呈すると思われるヘラ磨きを施す。口縁直下には、ヘラ磨きの下に斜め方向の刷毛目がわずかにみられる。外面は、細かい単位の縦刷毛調整で、下位には、刷毛目の上から疎らにヘラ磨きがなされている。4面170号土壙出土。**3**は、後期の壺の口縁部である。開いた頸部から、直立する口縁部をつくる。口縁内面は斜めに刷毛目、頸部内面は横位の刷毛目を施す。屈曲部の内面は、横ナデ調整で刷毛目を消している。外面は縦位の刷毛目で、屈曲部付近は横ナデ調整のため、刷毛目は消されている。調整は粗雑で、胎土にも大小の砂粒が混り粗い。4面170号土壙出土。この他、4面27号井戸からも、後期の壺が出土している（Fig. 91－**1**）。

3．古墳時代の遺物

古墳時代にかかわる遺構も、検出されなかった。遺物は、量としては少ないが、甕破片を中心に少量採集されている（Fig. 13－**4**～**11**、Fig. 23－**7**）。

4は、小型器台である。体部内面は放射状ヘラ磨き、口縁部内面から体部外面の上半までは横位のヘラ磨きを施す。体部下半は、横ナデする。胎土は精良で、茶褐色を呈する。2面19号井戸出土。**5**は、小形丸底壺である。体部下半内面はナデ、体部上半内部は横方向のケズリ、口縁部内面から体部上半外面にかけては横ナデ、体部中位外面は刷毛目をとどめ、外底部にはナデ調整を施す。胎土は精良で、茶色を呈する。1面2号井戸出土。**6**は、甕である。体部内面はケズリ、口縁部は内外とも横ナデ、体部外面は横刷毛調整を施す。1面下出土。**7**は、甕である。調整は**6**と共通する。2面17号井戸出土。**8**も甕である。**6**～**8**はいずれも布留式系の甕であるが、**8**の体部内面のケズリは、器内を薄く仕上るにはいたらず、やや厚目のまま終っている。4面Ⅰ－5区出土。**9**は、山陰系の甕である。体部内面は横方向のケズリ、口縁部は横ナデ、体部外面は縦刷毛調整を施す。口縁部内外には、煤が付着している。4面859号柱穴出土。**10**・**11**は高坏である。坏部の内外面と脚部外面は、密にヘラ磨きを施す。脚部内面には横位のケズリ痕、裾部内面には横刷毛がみられる。ともに4面M－6区出土。この他、4面46号井戸からも前期の在地系壺の口縁部が出土している（Fig. 23－**7**）。

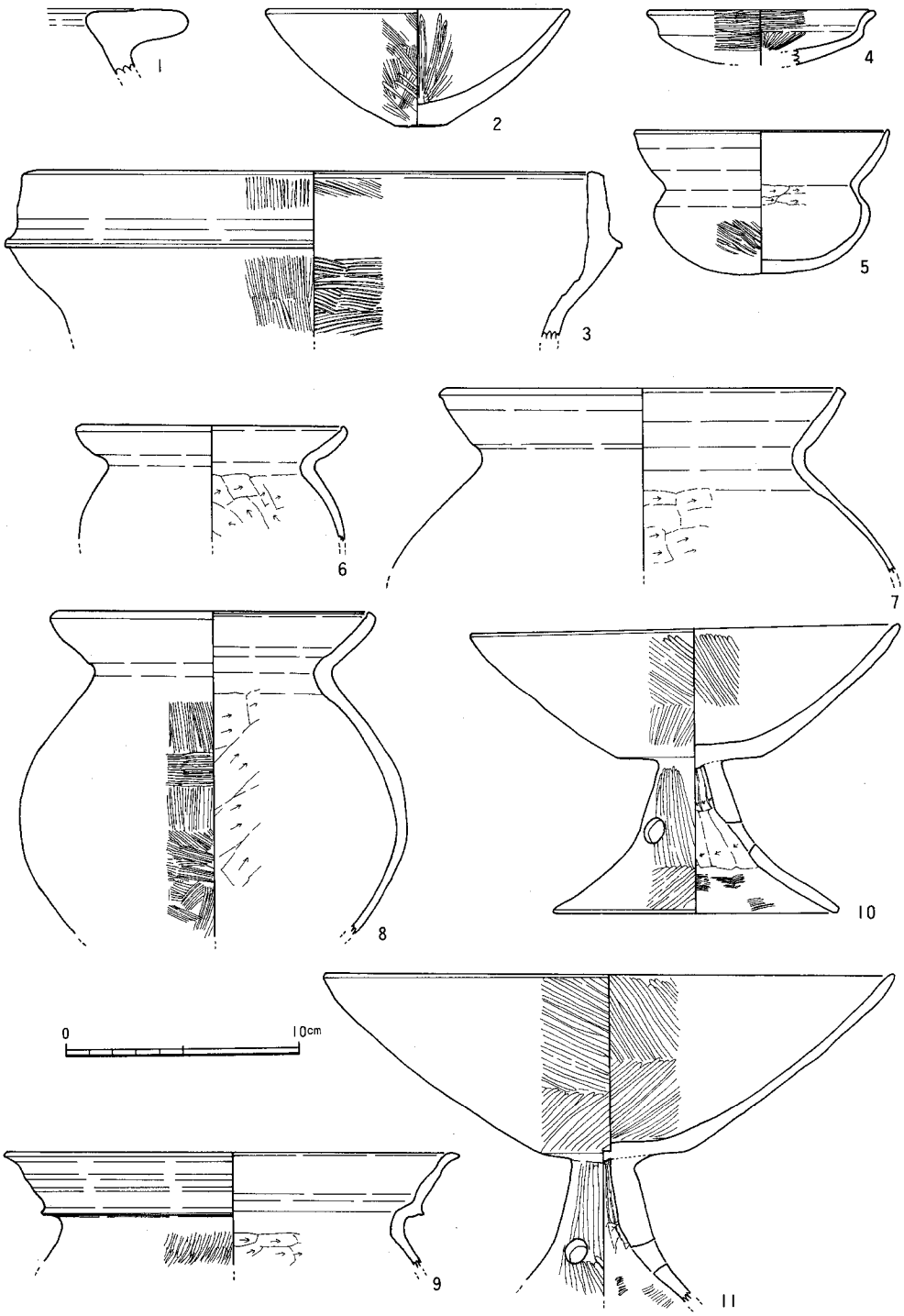


Fig. 13 弥生時代・古墳時代、遺物実測図 (1/3)

4．古代の遺構・遺物

本調査では、奈良時代の８世紀後半以後の遺構が検出されている。なお、ここで古代の遺構・遺物として扱うのは、８世紀後半から11世紀前半までのものとする。

153号土壙（0921）

４面で検出した楕円形の土壙である。長径180cm、短径推定150cm、深さ110cmをはかる。床面から35～45cmで、赤変した焼砂を検出した。焼砂は、径50cmほどの円形の範囲内でみられた。土壙の埋土は、灰色の砂であり、埋積の途中で火を焚いたものと思われる。

遺物の出土量は少ない。Fig. 14 の**1～3**は、**須恵器**である。**1**は坏蓋である。横ナデ調整を施す。径15.6cmをはかる。**2**は、高台付坏の体部片であろう。内外面とも、横ナデする。口径13.6cm。**3**も坏である。横ナデ調整を施す。口径19.2cmと復原される。

4・5は、**土師器**である。いずれも小形の甕形土器である。**4**は、ややすぼまった頸部から外反して開く口縁部を持つ。調整痕はやや磨滅気味でみにくいが、体部外面は縦刷毛、他の部分は横ナデする。口径14.2cm。**5**は、口縁部内面を横刷毛、体部内面は横ケズリ、口縁部外面は横ナデ、体部外面には縦刷毛調整が一部残る。復原口径18.4cm。

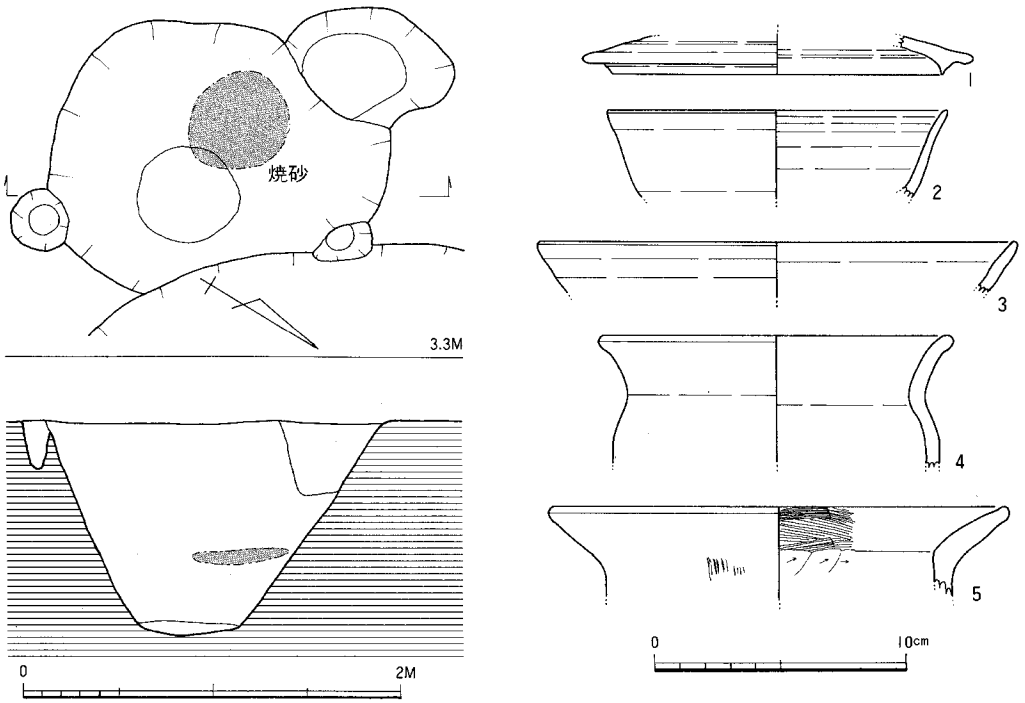


Fig. 14　153号土壙遺構実測図（1/40）、遺物実測図（1/3）

163号土壙（0960）

4面で検出。ややいびつな楕円形を呈する。長径210cm、短径180cm、深さ110cmをはかる。床面から46～55cmで、25×45cmの範囲で焼砂を検出した。焼砂は、火熱によって砂が赤変したもので、土壙が埋っていく途中で火を焚いたものと思われる。土壙の埋土は、灰色の砂である。

土師器、須恵器が、少量出土した。**1・2**は**土師器**である。**1**は、皿の小片であろう。内外面とも横ナデ調整を施す。胎土は比較的良く、赤茶色を呈する。**2**は、坏である。大きく開く体部から、ゆるく外湾して口縁にいたる。内面はナデ調整であるが、外面には指頭圧痕がならび、手捏ねを思わせる。焼成は普通で、淡褐色を呈している。**3～5**は、**須恵器**である。**3**は、坏である。丸味を持つ腰部から、直線的に開く体部を持つ。おそらく、腰部の丸い屈曲の内側に、高台を貼り付けたものであろう。内外面とも、横ナデ調整を施す。**4**も坏である。直線的に開く体部から口縁にかかる破片である。内外面とも、横ナデである。**5**は、壺の口縁部と思われる。ゆるく外反して開く頸部から、小さくまっすぐに立ちあがって、口縁部をつくる。口唇部を平らにつくる為か、やや肥厚してみえる。内外面とも、横ナデである。以上の遺物は、焼砂よりも上層から出土したものである。下層のものは、小片のため図示しえなかった。

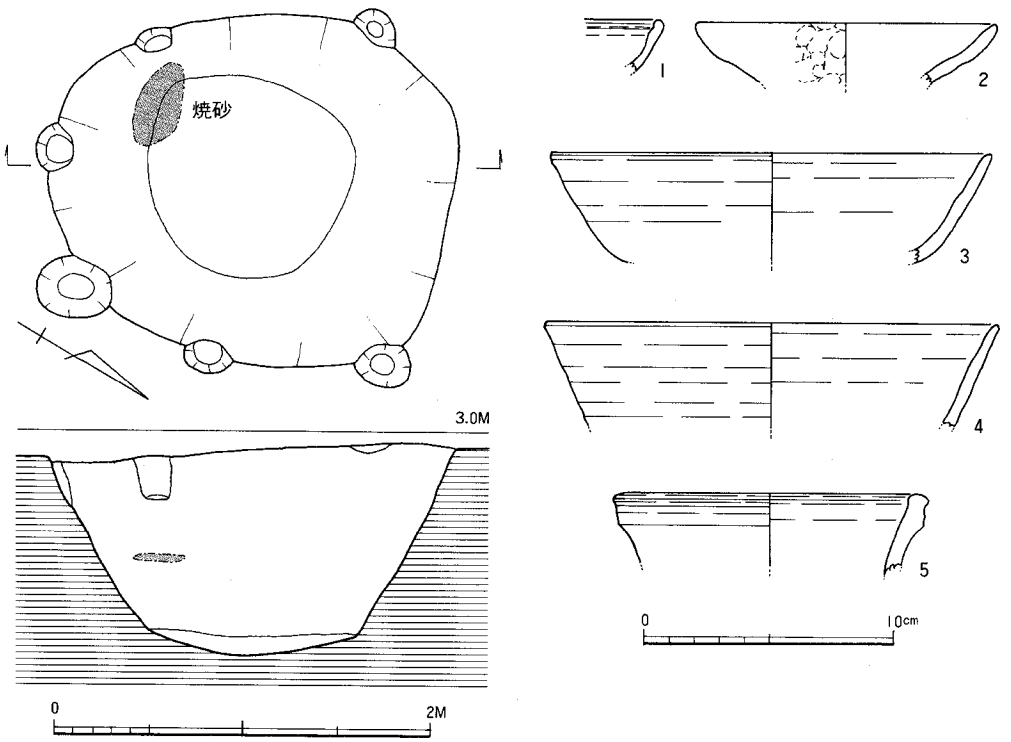


Fig. 15 163号土壙遺構実測図（1/40）、遺物実測図（1/3）

4号溝（0767）

4面で検出した溝状遺構である（Fig. 17－1）。中世の遺構に切られており、約5.8m分を調査したにとどまった。幅85cm前後、深さ20～35cmで、底は南から北へ傾斜する。主軸は、N－22°50′－Wにとる。遺物は小片のみであるが、8世紀後半頃のものと考えられる。

169号土壙（1124）

4面で検出した土壙である。半分近くは調査区外であり、また他の遺構に切られるため、一部を調査しえたにすぎない。おそらく、直径1.8mほどの略円形のプランを持つと思われる。深さは、136cm前後をはかる。

Fig. 16 の **1～8** は、**土師器**である。**1・2** は坏で、底部をヘラ切りする。内底部には、ナデ調整を行なっており、外底部に板状圧痕が残る。**3・4** は、埦である。高台は、平坦な底部

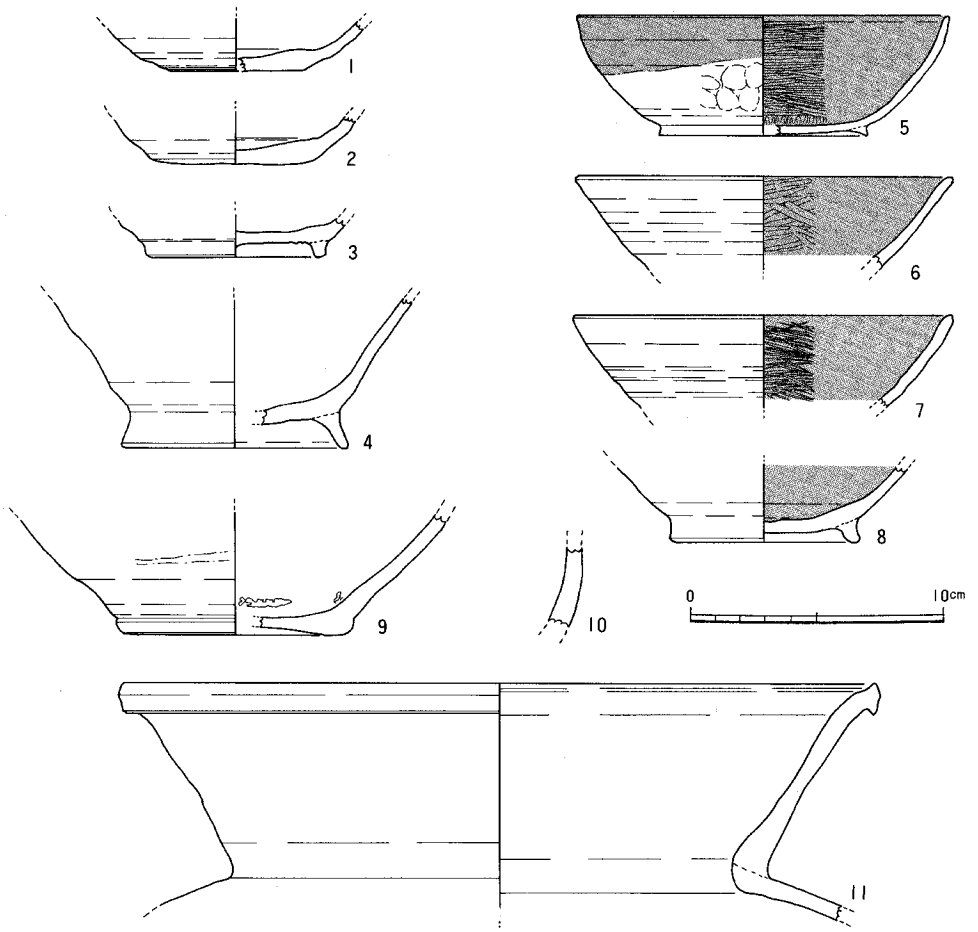
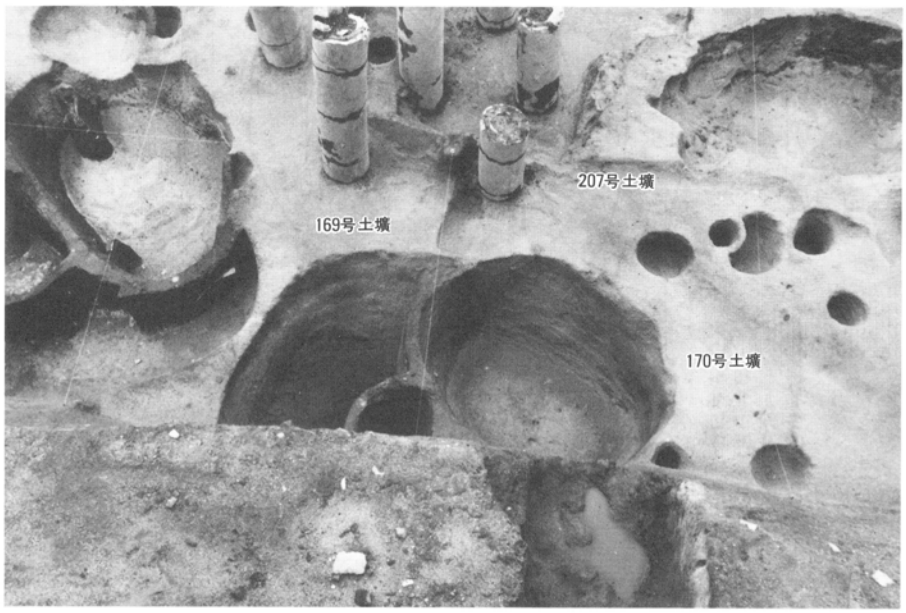


Fig. 16 169号土壙遺物実測図（1/3）

（1） 4号溝（北西より）



（2） 169号土壙（南東より）

Fig. 17 4号溝・169号土壙検出状況

から直線的に体部が開く、その境界の底部側に付けられる。**5～8**は、**内黒土器**の埦である。**5**は、薄手で丸味の強い埦に、断面三角形の低い高台が付く。内底部には、ジグザグ状のヘラ磨き、体部内面には横位のヘラ磨きを密に施す。体部外面は横ナデで、中程には指頭圧痕が認められる。胎土は比較的良く、赤茶色を呈する。**6～8**は、**5**に比べると器肉が厚く、体部の丸味も少ない。いずれも、内面は密にヘラ磨きし、外面は横ナデする。**9**は、**越州窯系青磁**の碗である。灰色のやや粗い胎に、オリーブ色の不透明釉を施す。体部外面の下位は、露胎である。見込みには、重ね焼きの目痕がならぶ。**10**は、**灰釉陶器**の壺の胴部片である。明灰色、須恵質の胎に、灰緑色の透明釉がかかる。**11**は、**須恵器**の甕の口縁である。頸部から口縁部の内外面は横ナデ、体部外面はナデ、内面は平行タタキ痕をとどめる。10世紀後半頃の遺構と考えられる。

216号土壙（1381）

4面で検出された土壙である。径約2.0mの略円形で、深さは約1.2mをはかる。土壙の床面には、棒材と板材が96×116cm程の長方形に組まれている。この南辺には、幅約34cmと22cmの板材が立てられていた。土壙の埋土は、白色粘土が土壙壁に沿ってドーナツ状に堆積し、その中央部分を、暗褐色土が充塡するもので、検出当初には、井戸かとも考えられた。しかし、土

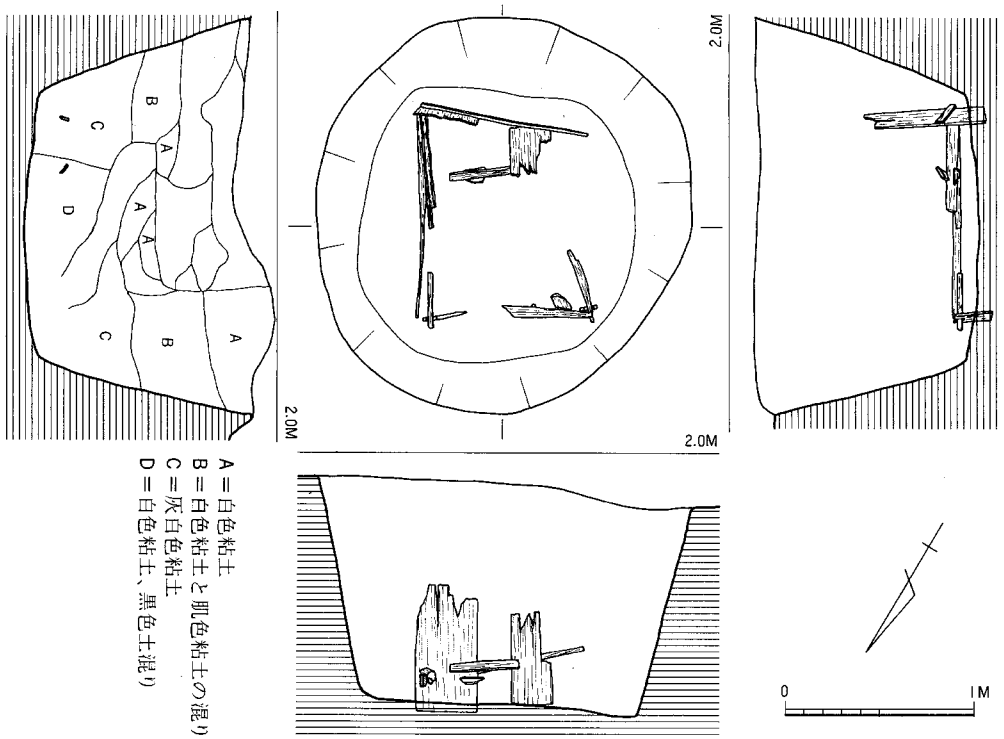
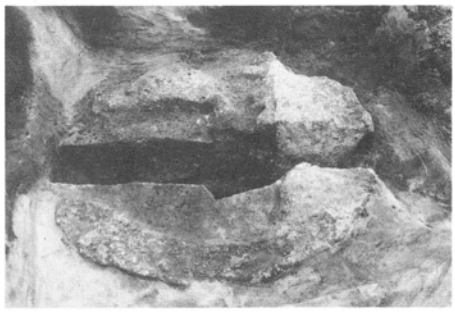
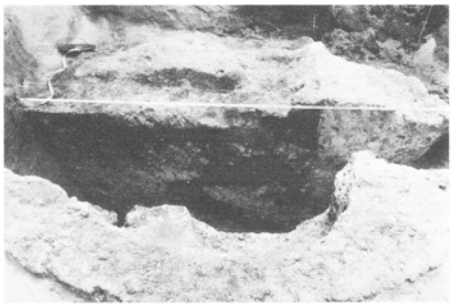


Fig. 18 216号土壙遺構実測図（1/40）

（1） 白色粘土検出状況（北西より）

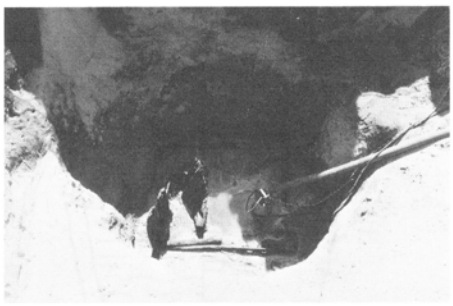


（2） 同左（北東より）

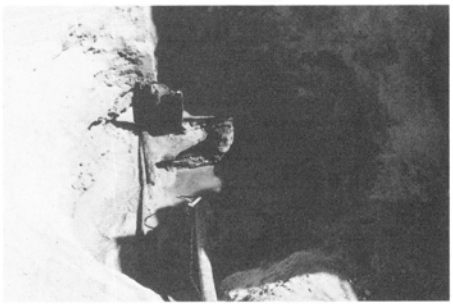


（3） 土層断面（北東より）

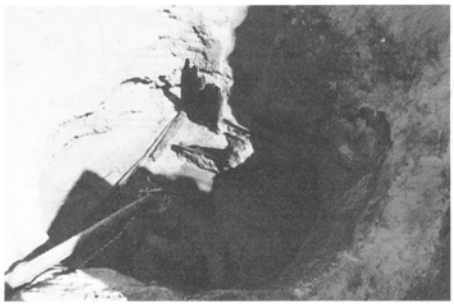
（4） 白色粘土堆積状況（東より）



（5） 木枠組検出状況（北東より）



（6） 同左（北西より）



（7） 同上（西より）

（8） 出土文様塼(Fig 21-13)

Fig. 19 216号土壙検出状況・出土遺物

層断面観察の結果、白色粘土は上から下まで同じ幅で重なるものではなく、暗褐色土層との入り組みがみられること、板材は白色粘土中に封入されていることが確認された。したがって、井戸とは思われず、性格不明のまま土壙として報告するものである。

出土遺物は、土師器、須恵器、白磁、青磁、陶器、瓦、塼等である。**1**は、**土師器**の埦である。高く外方に開く高台を持つ。外底部中央には、ヘラ切り痕をとどめる。**2～4**は**須恵器**である。**2**は坏で、おそらく高台がつくものと思われる。**3**は盤である。**4**は甕の口縁である。頸部の丁度破片の縁辺に、波状文の沈線がみられる。**5～7**は、**白磁**である。良質な白色の胎に、白色透明な釉を施すもので、**5**は皿、**6・7**は碗になる。**8・9**は、**越州窯系青磁**である。**8**は碗で、蛇ノ目高台につくる。体部下位から外底部は、露胎となる。灰褐色の緻密な胎土に、

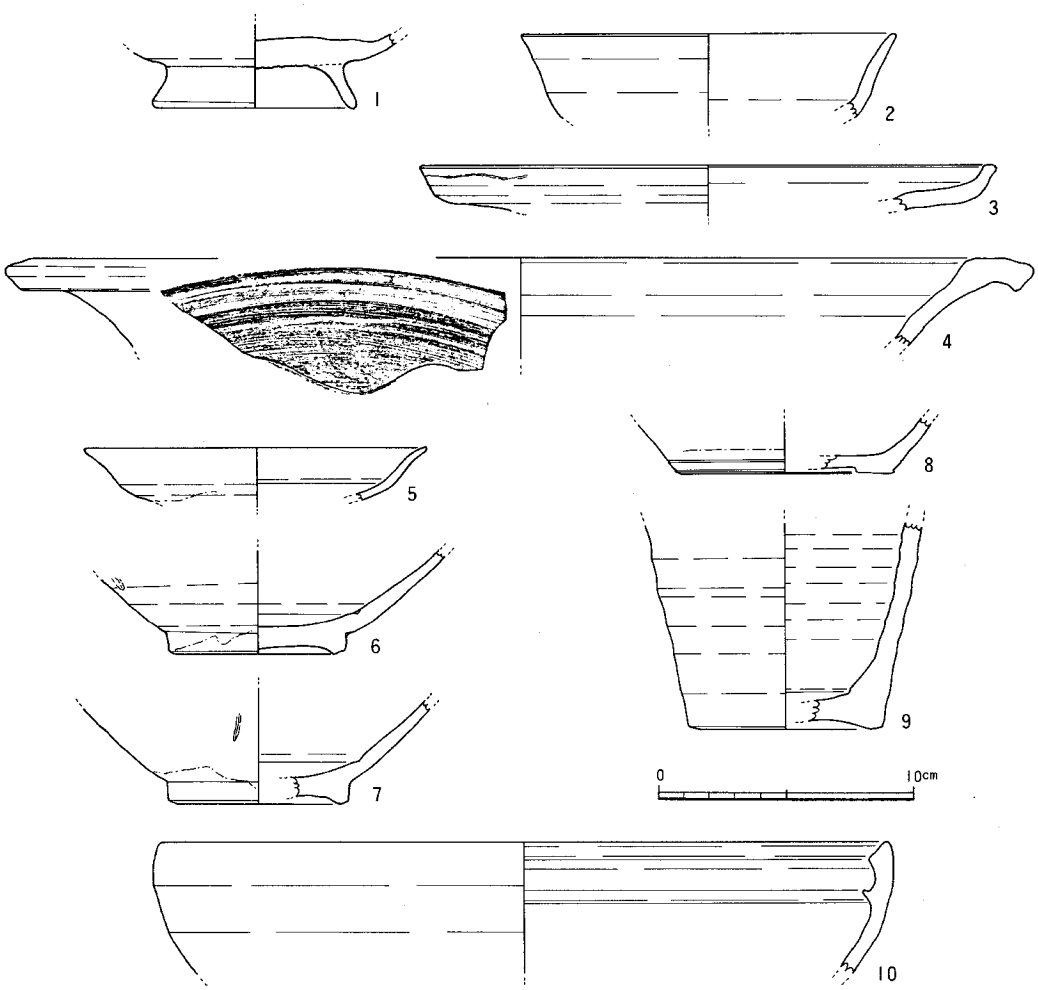


Fig. 20 216号土壙遺物実測図1 (1/3)

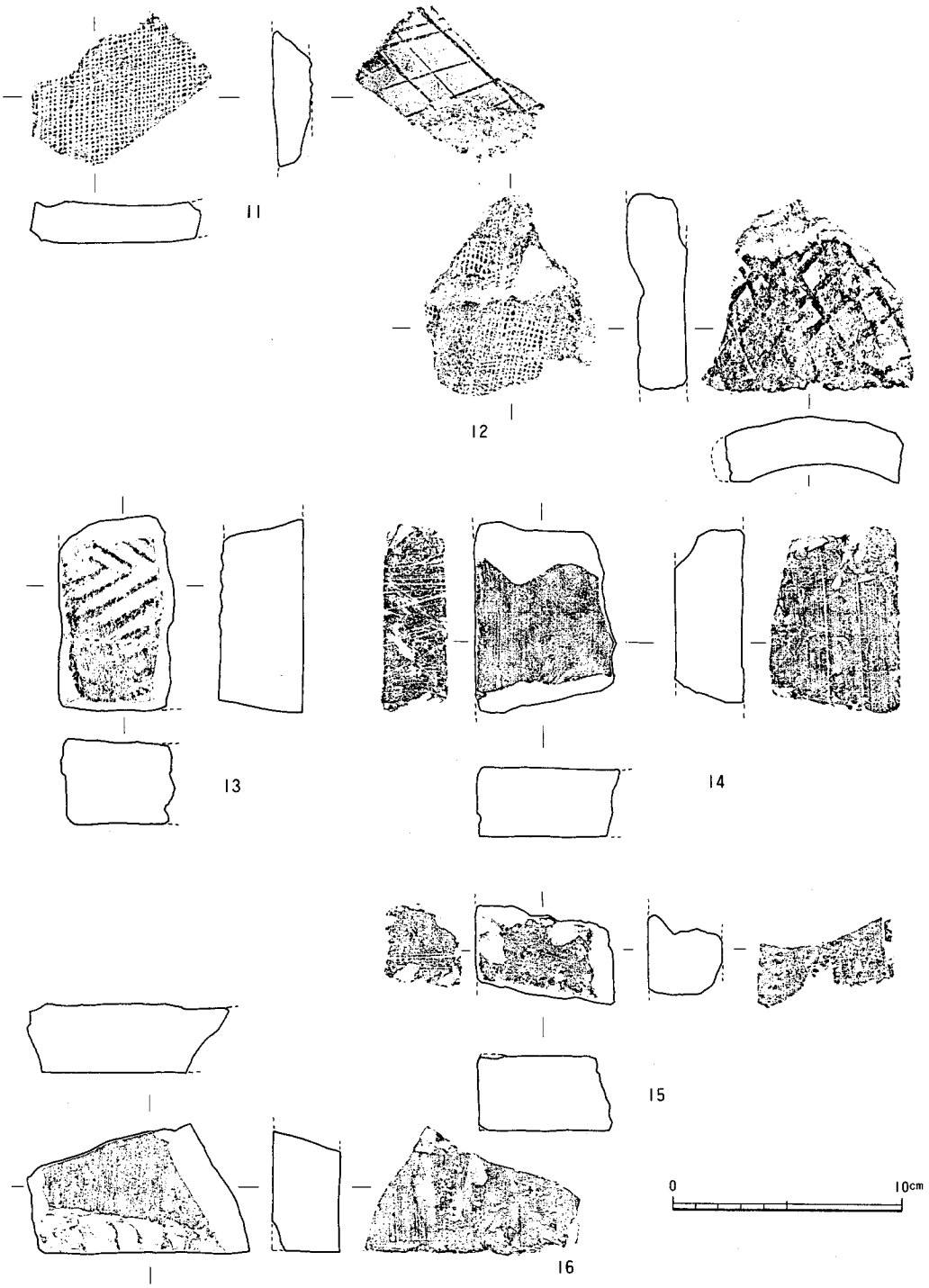


Fig. 21　216号土壙遺物実測図２（1/3）

緑がかったオリーブ色の釉を施す。**9**は、瓶である。外底部のみ露胎となる。灰色の粗目の胎に、灰緑色の釉をうすくかける。**10**は、**無釉陶器**の鉢である。砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好で焼き締り、赤褐色を呈する。**11・12**は**瓦**である。**11**は、平瓦、**12**は丸瓦で、布目に斜格子のタタキ痕を持つ。**13〜16**は、塼である。**13**は文様塼で、片面に型押しで綾杉状の文様をつけている。塼は、いずれも土師質で、焼成はあまり良いとは言えない。いずれの塼も、厚さは3〜3.2cmとほぼそろっている。

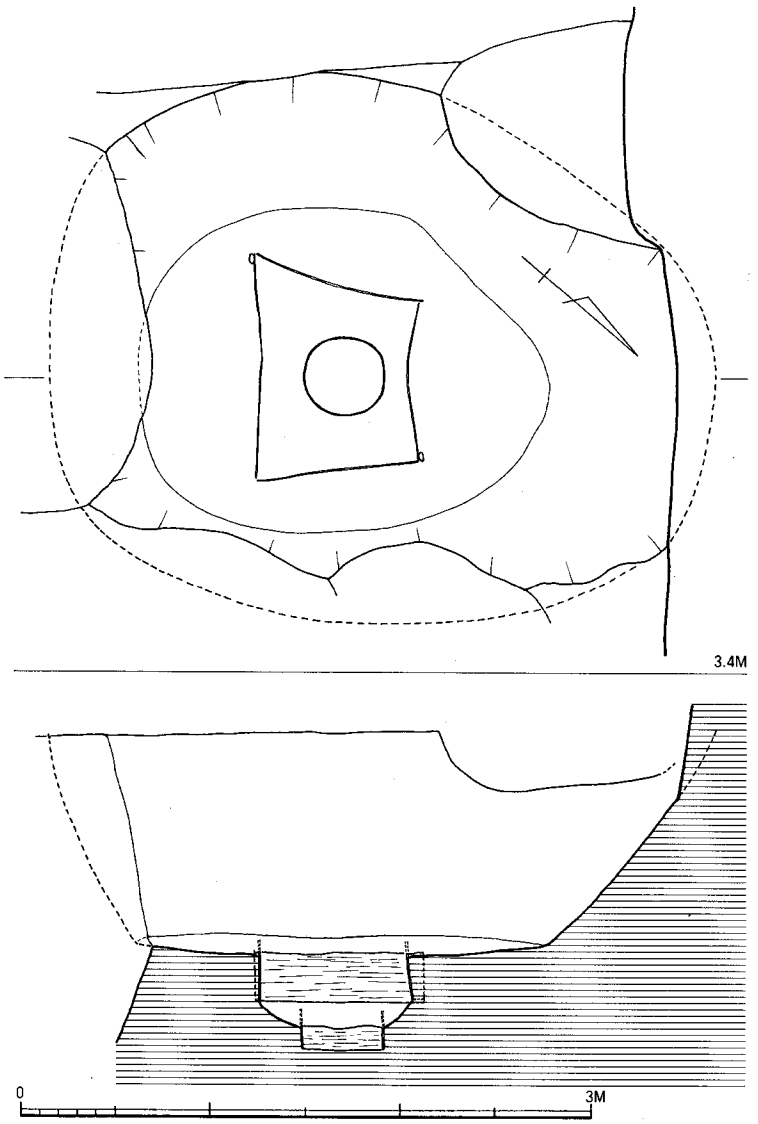


Fig. 22 46号井戸遺構実測図（1/40）

46号井戸（1451）

4面第2区で検出した井戸である。楕円形の掘りかたに、方形の井側をもつ。掘りかたは、長径3.5m、短径2.9m（ともに推定）、深さ1.2mをはかる。井側は、掘りかたの最下面で検出した。木質の痕跡を追うことができ、ややいびつな台形を呈している。長辺で124cm、短辺84cmをはかる。深さは、約30cm残っていた。木の遺存状態が悪く、木目までは確認できなかったが、調査時の木質の崩れ方から推測すると、板材を横に使ったものと思われる。なお、井側の相対する二角の裏側で、木杭を確認している。井側の最下部から、水溜の木質が検出された。これも、遺存状態が悪く、木目を確認しえなかったが、縦方向の崩れがなかったので、桶等ではなく、曲物であろうと考えられる。水溜は、径約42cmで、深さ12cmをはかる。ただし、このレベルでは湧水がはげしく、最下部を完全には出しきっていない。

出土遺物は、土師器・須恵器・緑釉陶器・青磁・白磁・陶器である。**1～4**は、**土師器**である。**1**・**2**は皿である。底部はヘラ切りし、板状圧痕がつく。内底部はナデで、体部は横ナデする。**1**は、口径9.2cm、底径6.4cm、器高1.9cm、**2**は、同じく9.4cm、7.0cm、1.6cmをはかる。**3**は、丸底坏である。底部はヘラ切りし、板状圧痕がつく。内底部は、コテあてで平滑に整え

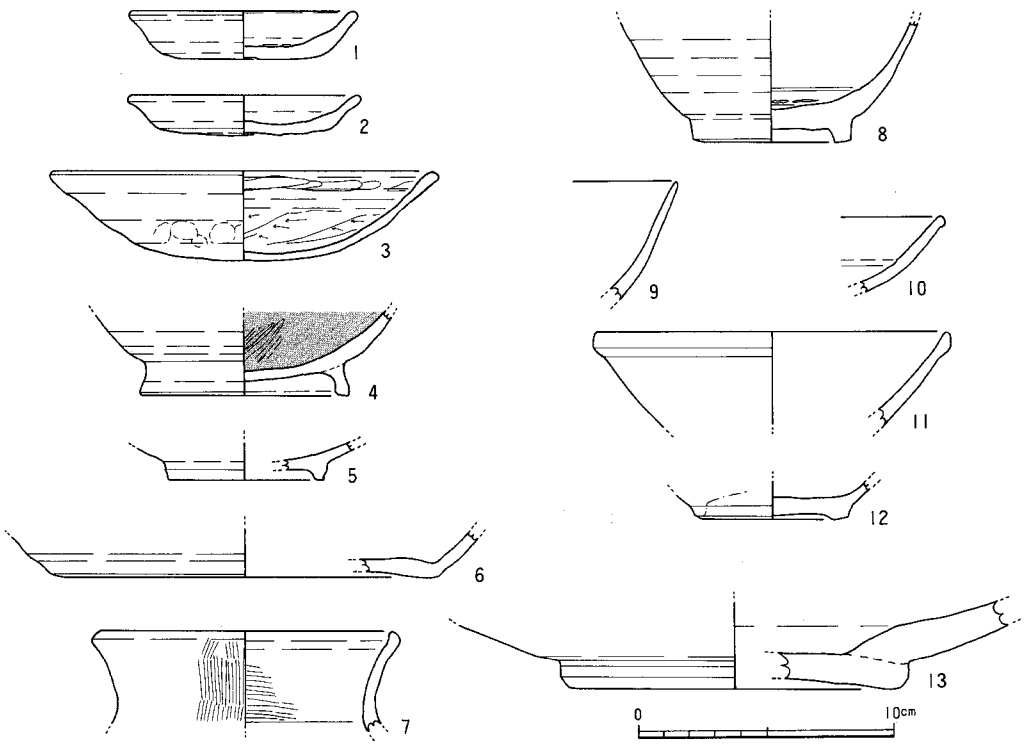


Fig. 23 46号井戸遺物実測図（1/3）

る。体部内面は、横方向のヘラ磨き、口縁内面から体部外面は、横ナデする。体部下位の外面には、指頭圧痕が並ぶ。押し出し技法によって丸底に作ったものと思われる。口径15.5cm、器高3.55cmをはかる。**4**は、**内黒土器**の埦である。高台は、丸底に押し出した底部と体部との境から、やや底部側にはいった所に付けられている。内面は、密にヘラ磨き、高台内側から体部外面は、横ナデする。外底部の中央部分は、ヘラ切り痕をとどめている。高台は高く、外方にやや開き気味である。高台径は、8.5cmをはかる。**5**は、**緑釉陶器**の埦である。削り出しで輪高台をつくる。内面は、ヘラ磨きする。小豆色で須恵質の硬胎に、深緑色の釉がうすくかかる。高台畳付から内側は、露胎である。なお、見込みには、重ね焼きの目跡がみられる。山城の小塩窯の製品と思われる。**6**は**須恵器**の皿である。**7**は、**古式土師器**の壺である。古墳時代前期の在地系の土器である。**8**・**9**は、**越州窯系青磁**の碗である。**8**は、全面施釉し、畳付のみ露胎とする。見込みには、重ね焼きの目痕がみとめられる。**10**〜**12**は、**白磁**の碗である。白色で上質の胎に、白色の透明釉を施している。**10**は、口縁端部を小さく外方へ折り返して、玉縁状につくる。**11**は、三角玉縁である。**13**は、無釉陶器の甕の底部である。胎土は砂粒を含んで粗い。全体のつくりも粗雑である。11世紀前半頃の遺構であると考えている。

その他の古代の遺物

以上に述べた以外に、中世の遺構および各包含層にまじって、多くの古代の遺物が出土している。それらの中から、主要なもののみ、Fig. 24〜26 に示す。

1・**2**は**須恵器**である。**1**は円面硯で、脚部は全く残っていない。陸は、使用のため磨れている。陸の径10.1cm、最大径14.2cmをはかる。4面出土。**2**は坏である。ヘラ切り痕をとどめる外底部に、「上□」と墨書される。2文字目は、かすかに一部分の墨痕が見えるのみである。4面203号土壙出土。**3**〜**6**は、**灰釉陶器**である。**3**〜**5**は皿である。**3**は、内外面横ナデ、内面にうすく緑灰色の釉がかかる。4面出土。**4**は、内外面横ナデ、体部外面下位はケズリで、内面に緑灰色の透明釉がうすくかかる。4面171号土壙出土。**5**は、灰白色のきわめて精良な胎で、焼成も良く、一見磁器の様に見える。外底部には、回転糸切り痕を残す。3面下出土。**6**は、埦である。3面下出土。**7**〜**19**は、**緑釉陶器**である。**7**は皿である。暗灰色で緻密な須恵質の硬胎に、明灰緑色の釉をかける。2面77号土壙出土。**8**は、埦である。口縁は、輪花につくる。灰色でやや柔かい感のする須恵質の胎に、淡緑色の釉を施す。3面下。**9**は埦である。土師質で比較的硬質な胎に、深緑色の釉をかける。3面下出土。**10**は、皿である。灰色で精良な須恵質硬胎。2面17号井戸。**11**は、灰褐色の土師質軟胎。2面15号井戸。**12**は、暗灰色の須恵質硬胎。3面397号柱穴。**13**は、小豆色の須恵質硬胎。2面出土。**14**は、高台内面に沈線をめぐらせる。明褐色で精良な、土師質でやや軟質の胎に、深緑色の釉をかける。畳付から内側は、露胎となる。1面下出土。**15**は、高台畳付に浅い凹み状の沈線をめぐらせる。外底部中央

には、回転糸切り痕をとどめる。濃灰色の緻密な須恵質硬胎で、鮮緑色の釉を全面にかける。ただし、高台内側には、釉のかかっていない部分もみられる。2面19号井戸出土。**16**は、灰色土師質のやや軟胎。1面下。**17**は、灰色土師質でやや軟胎。2次的な火熱を受ける。2面84号土壙。**18**は、青灰色須恵質の硬胎に、深緑色の釉をうすく刷毛塗りする。畳付から内側は露胎。見込みには、輪状に重ね焼き痕がつく。2面17号井戸。**19**は、濃灰色の須恵質硬胎に、深緑色の釉を刷毛塗りする。畳付内側は露胎。見込みには、輪状に重ね焼き痕がつく。3面下。**20**は、**石製品**である。緑色の軟質な石材を削ったもので、形状から丸鞆の未製品と思われる。4面出土。**21**は、**老司式軒平瓦**である。3面323号柱穴。Fig. 25－**22～31** は、**越州窯系青磁**である。この他、4面27号井戸からは、銅製の**鉈尾裏金具**が出土している（Fig. 91－**2**）。

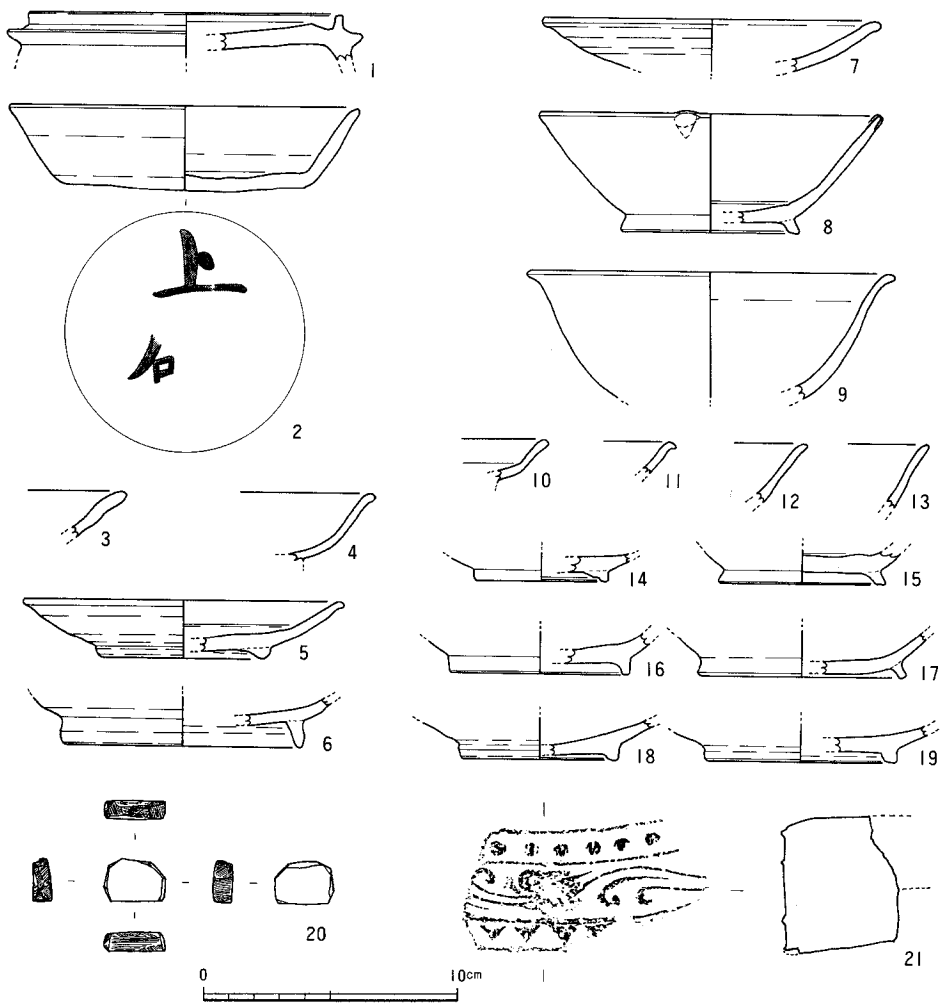


Fig. 24　その他の古代の遺物1（1/3）

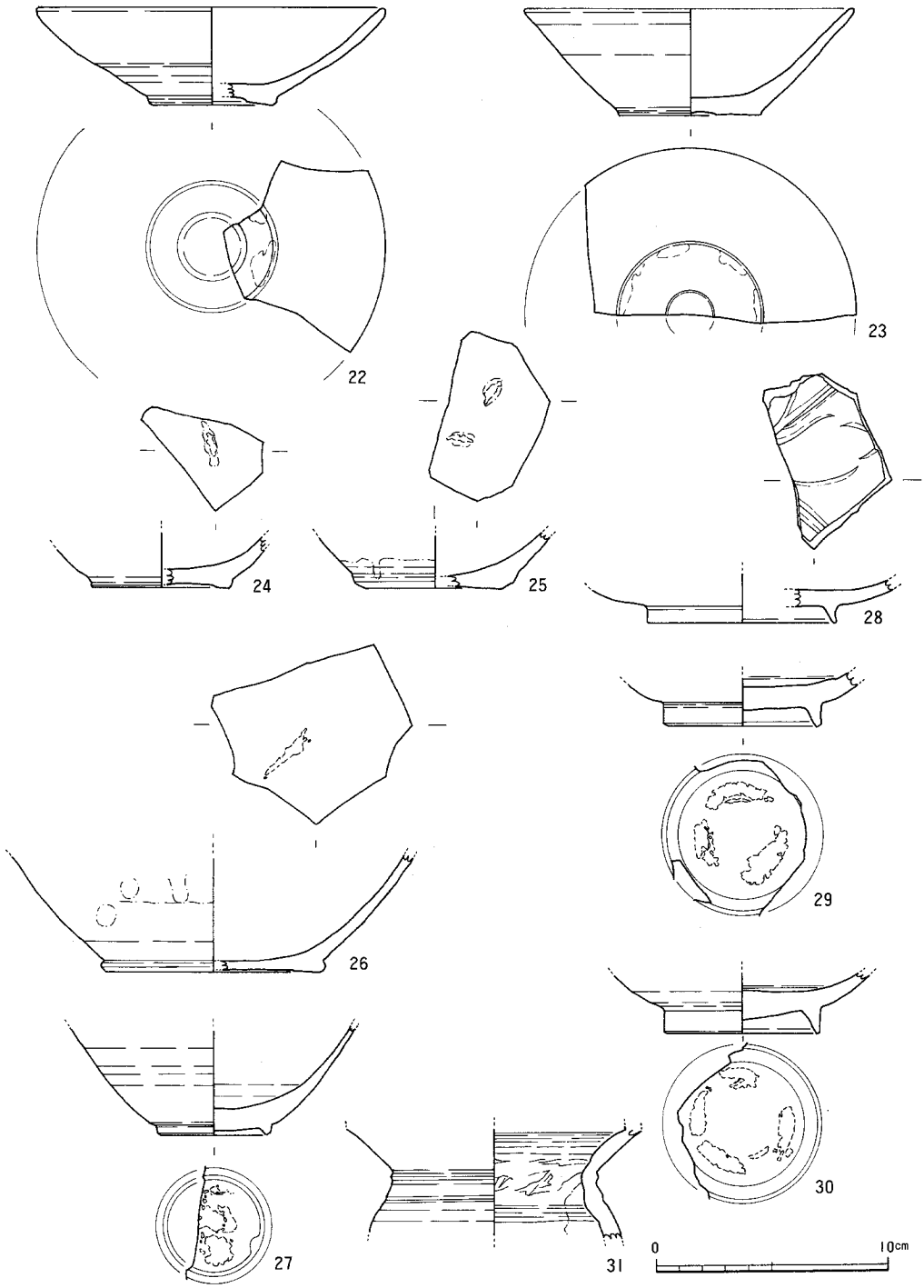


Fig. 25 その他の古代の遺物２（1/3）

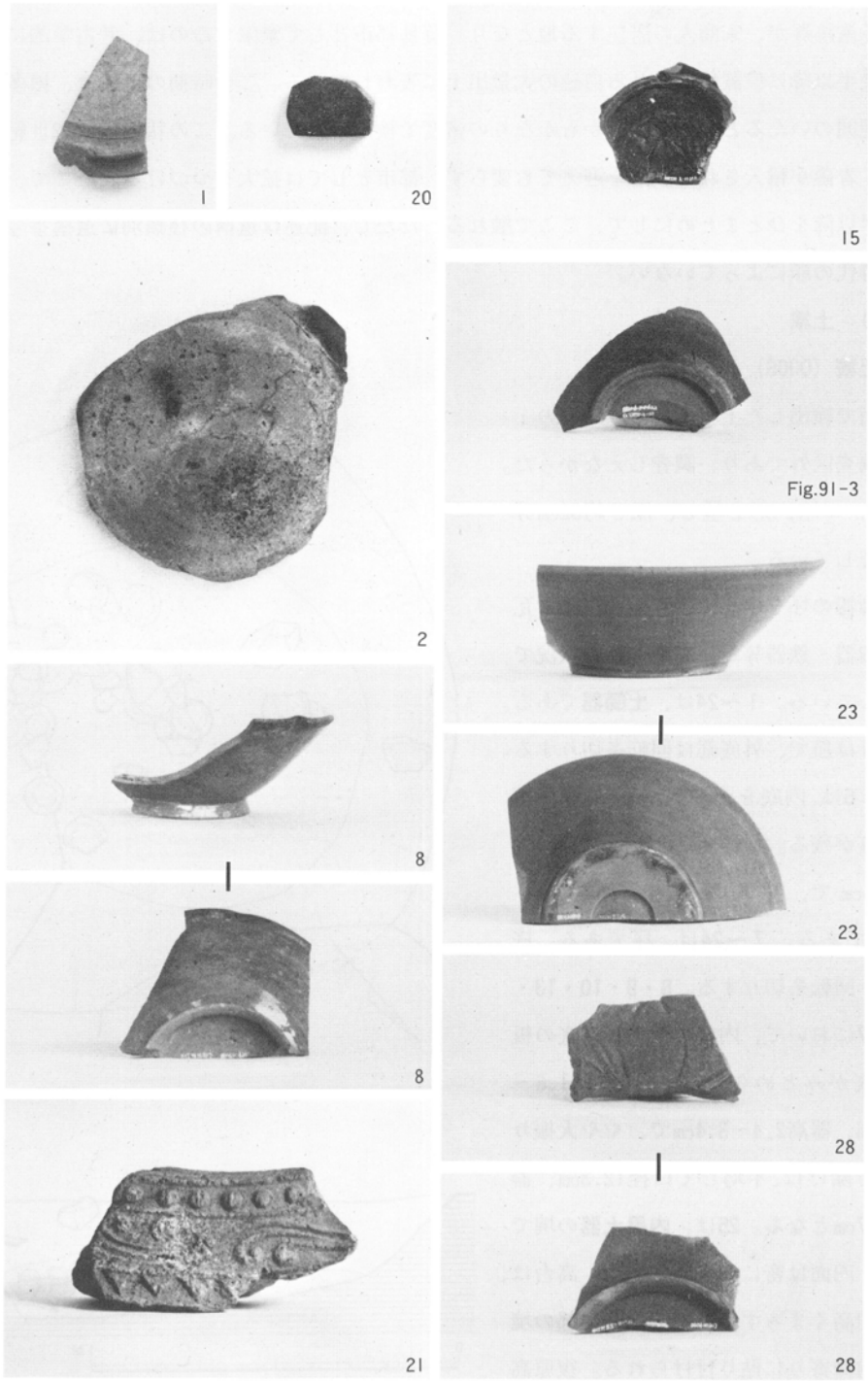


Fig. 26　その他の古代の遺物（約1/3）

5．古代末・中世の遺構・遺物

博多遺跡群が、宋商人の居住する地となり、貿易都市として繁栄するのは、考古学的には11世紀後半以降に位置付けられる白磁の大量出土に表われている。この時期の遺構は、博多遺跡群の範囲のいたるところで、しかもかなりの密度で検出されている。この状態は、12世紀後半以降、青磁が輸入される段階を迎えても変らず、都市としては拡大をつづける。そこで、11世紀後半以降をひとまとめにして、ここで触れる。ただし、記述は遺構の種類別に遺構番号順とし、時代の順によっていない。

（1） 土壙

5号土壙（0006）

１面で検出した土壙である。３分の１は、調査区外であり、調査しえなかった。径1.7ｍの略円形を呈し、深さ約32cm分を調査している。

土師器の坏を中心に、青磁・白磁・瓦器・陶器・鉄器等が、廃棄された状況で出土している。**1～24**は、**土師器**である。**1～6**は皿で、外底部は回転糸切りする。**2・3・6**は、内底をナデ調整し、外底に板状圧痕が残る。口径７～8.5cm、器高1.1～1.4cmで、平均値は各々、8.0cm、1.3cmである。**7～24**は、坏である。底部は、回転糸切りする。**8・9・10・13・16・17**において、内底のナデと外底の板状圧痕がみとめられる。口径は11.6～14.2cm、器高2.4～3.4cmで、やや大振りな**24**を除けば、平均して口径12.3cm、器高2.47cmとなる。**25**は、**内黒土器**の椀である。内面は密にヘラ磨きする。高台は、比較的高くまっすぐで、底部と体部の境から内側寄りに貼り付けられる。復原高台径7.2cm。**26**は、**瓦器**の椀である。丸

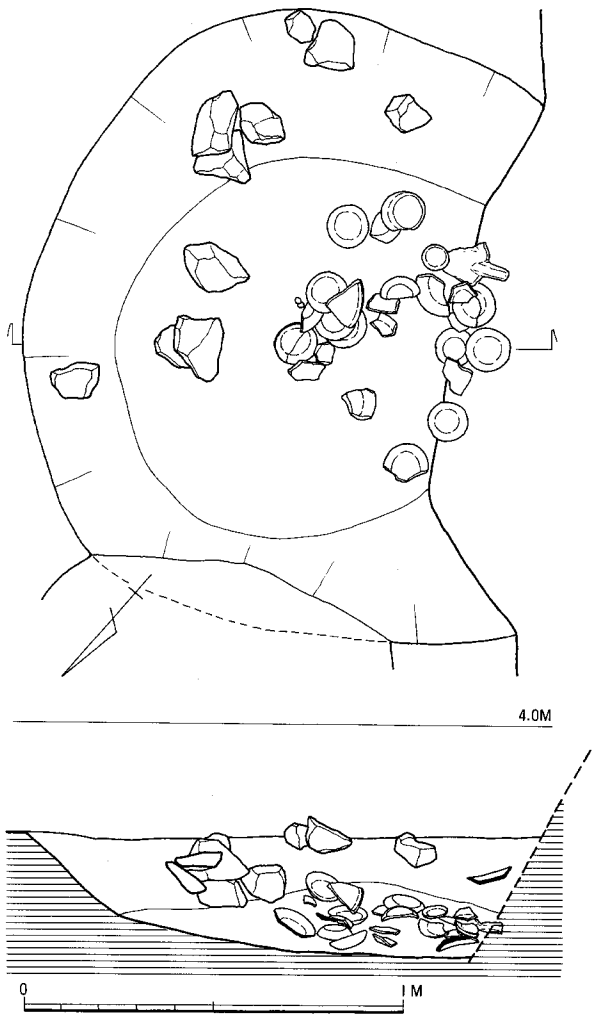


Fig. 27　５号土壙遺構実測図（1/20）

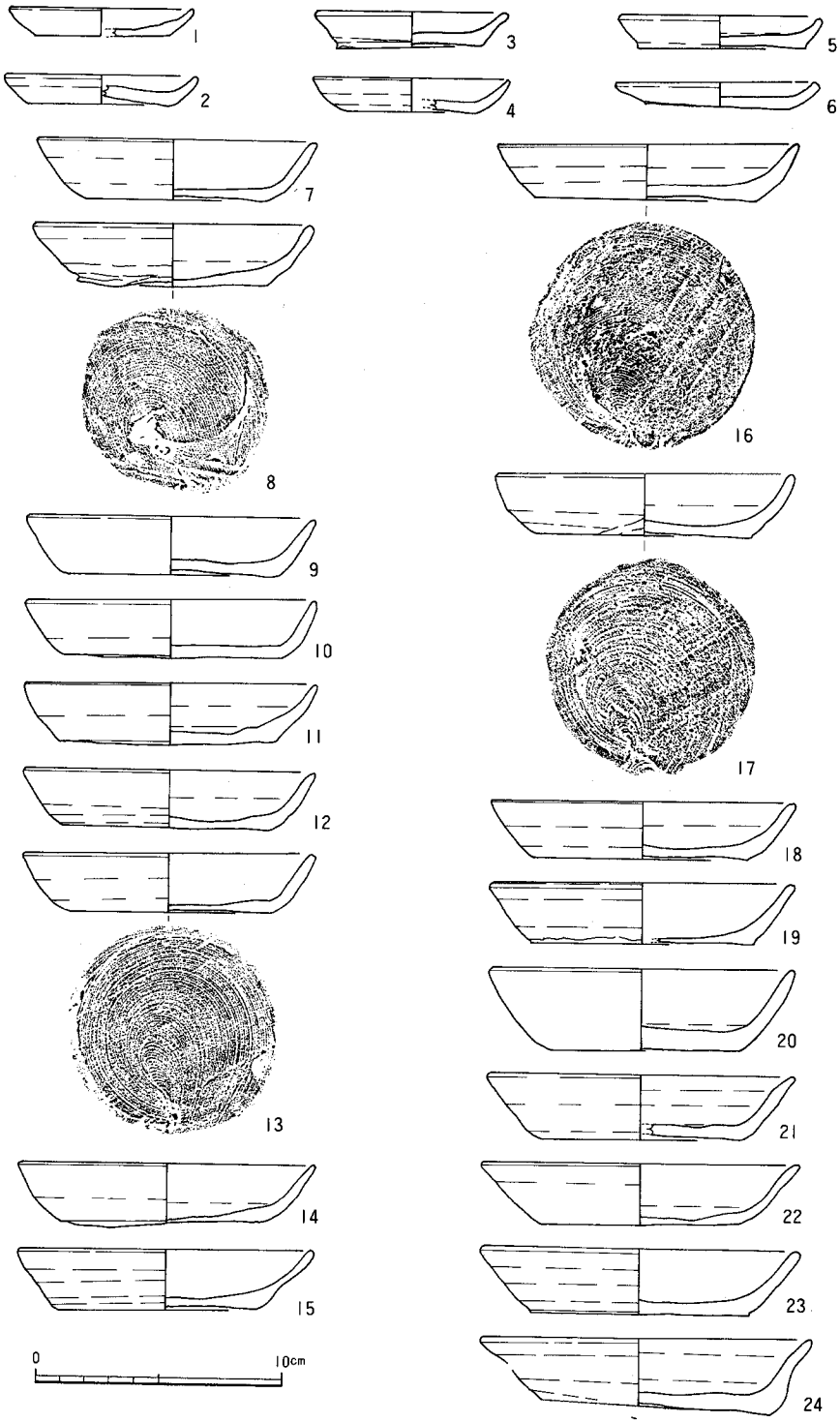


Fig. 28　5号土壙遺物実測図1 (1/3)

味を持った、低平な高台をつける。内底部は、ジクザグ状にヘラ磨きをするが、磨き痕は太くて浅く、痕跡を追いにくい。復原高台径7.2cmをはかる。**27**は、**土錘**である。管状に作った、両端を欠く。径約0.6cm。土師質で、焼成は良い。**28・29**は、**須恵質土器**である。**28**は、捏ね鉢の口縁部から体部、**29**は底部の破片である。ともに、胎土には砂粒を多く含んで粗く、焼成が悪いため軟質に焼き上り、瓦質に近い。内外面とも、横ナデ調整を行なう。外底部には、回転糸切り痕がみとめられる。底部付近の内面は、使用のため磨滅している。**30・31**は、**白磁**の碗である。**30**の口縁は、玉縁となる。体部外面の下位は、露胎となる。**31**の体部下位から外底も、露胎である。**32・33**は、**青白磁**である。**32**は、合子の身の底部であろう。やや青味を帯びた白色の精良な胎土に、淡緑青色をおびた透明の釉をかける。外面は、露胎である。**33**は、合子の身である。外面に、スタンプで花文をあしらう。蓋受けの部分は、露胎となる。**34**は、**中国産の緑釉陶器**である。内面が露胎なので、蓋であろうか。灰色で緻密な胎に、深緑色の釉をかける。外面には、沈線で蓮弁を描く。**35**は、**褐釉陶器**である。壺の底部と思われる。体部外面は、畳付付近まで鉄化粧し、暗紫褐色を呈する。その他、スコップ状の**鉄製品**が、出土している。錆が著しく、図化していない。また、**「景徳元寶」**（初鋳1004年）、**「元豊通寶」**（初鋳1078年）各１枚が出土した。なお、図示していないが、出土遺物には鎬蓮弁文の青磁碗片が

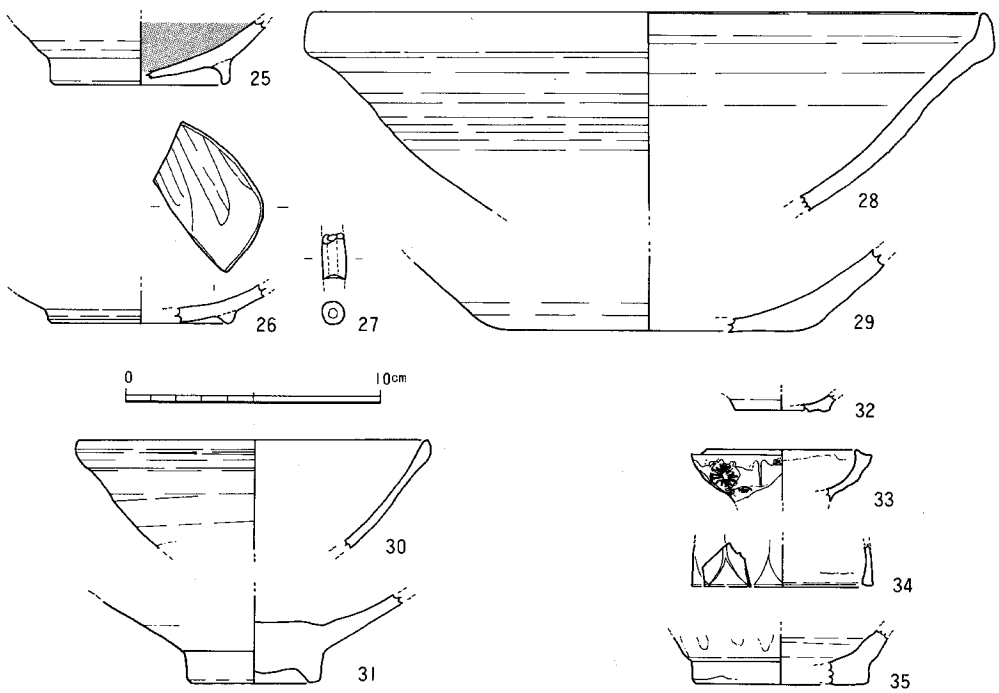


Fig. 29　５号土壙遺物実測図２（1/3）

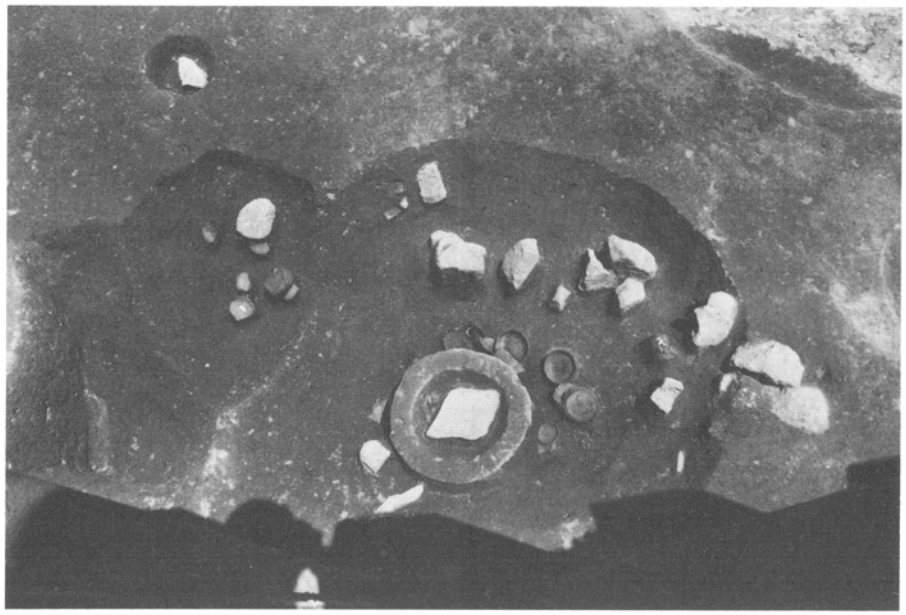


Fig. 30　5号土壙検出状況（南西より）

Fig. 31　41号土壙検出状況（北西より）

含まれていたが、口禿げの白磁碗・皿はみられなかった。このことからみて、5号土壙は、13世紀後半頃の遺構であると思われる。

41号土壙（0154）

1面で検出した土壙である。長軸1.3m、短軸1.2mの楕円形を呈する。土壙底面は三段掘り状で、最も深い部分で、深さ約30cmをはかる。

遺物は、最下部の土壙壁にそって出土した。その状況からみて、一括廃棄されたものと思われる。**1～26**は、**土師器**である。1は小型の皿で、口径4.1cm、底径4.1cm、器高1.1cmをはかる。体部は、一度外方に開いてから、受け口状に内側に折り返す。内面から体部外面は、横ナデ調整を施す。外底部は、回転糸切りで、板状圧痕はみられない。**2～12**は、皿である。内面から体部外面は、横ナデ、外底は回転糸切りする。**10**のみ、外底の板状圧痕と内底ナデがみられる。口径6.8～8.1cm、器高1.1～1.7cmをはかり、平均すると各々、7.66cm、1.42cmとなる。**13～26**は、坏である。体部・内底部は横ナデ、外底部は回転糸切りする。内底ナデ・板状圧痕をもつものは、みられない。口径11.6～12.8cm、器高2.8～3.0cmをはかる。平均では、各々12.4cm、2.87cmとなる。**28～31**は、**白磁**の碗である。**28**は、玉縁口縁につくる。**29**は、外反気味に直行する口縁となる。**30**は、外底部を露胎とする。内面見込みの釉は、輪状に掻き取られる。**31**は、高台から外面を露胎とする。内面には、櫛描き文がみられる。**32**は、**瓦質土器**の鉢である。内面は粗い横刷毛調整で、下位は使用のため磨滅している。外面は、指頭圧痕の上から、粗い斜めの刷毛調整を行なう。**27**は、**ガラス器**である。小片であるが、小壺の口縁部分であろう。鮮やかなライトブルーを呈する。

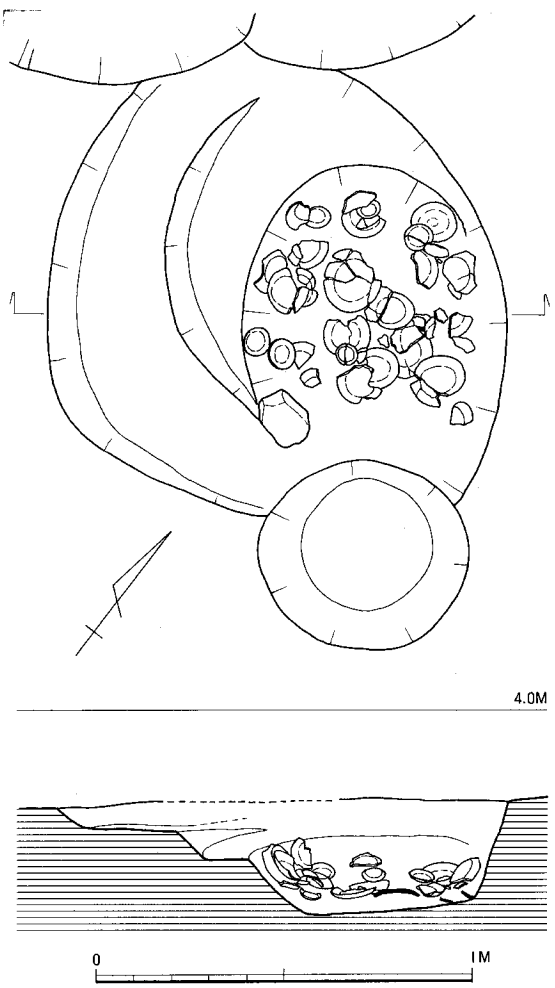


Fig. 32 41号土壙遺構実測図（1/20）

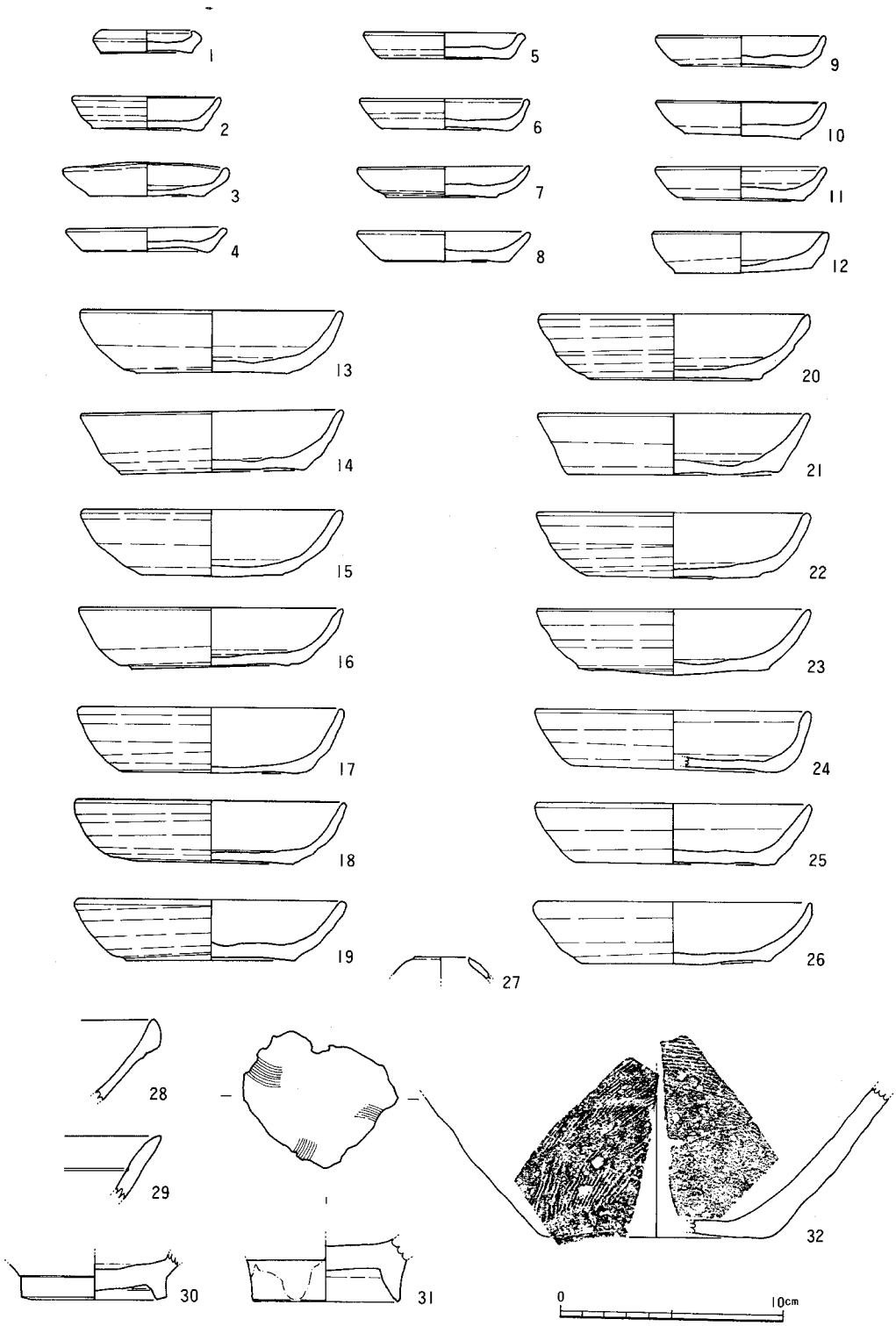


Fig. 33 41号土壙遺物実測図 (1/3)

43号土壙（0156）

１面で検出した遺構である。長方形の攪乱を除去した底から、50×40㎝の範囲で遺物の集中を見たもので、本来は土壙の底に廃棄されたものと思われる。土壙部分は、攪乱のため、全く確認できなかった。

土師器・青磁・白磁・陶器が、出土している。**1～11**は、**土師器**の皿である。すべて、外底部は回転糸切りで、**11**を除いて板状圧痕と内底ナデを施す。口径8.0～9.3㎝、器高0.8～1.3㎝をはかり、平均すると、各々8.59㎝、1.11㎝となる。**11**は、外底に墨書（解読不能）を記す。墨書の上方の体部には、穿孔がある。遺存部分では１孔のみだが、おそらくは一対であったと思われ、紐を通して懸垂したものであろう。呪術的文言が記されていた可能性もある。他の土師器皿と比べると、器肉がうすい、胎土が良い、焼成が良い、内底ナデを行わないなど異なる点が認められ、別途製作されたものと考えられる。**12～16**は、**白磁**である。**12**は皿で、見込みに花文を描く。平底の底部は、露胎となる。**13～16**は、碗である。**16**は、体部内面に櫛描で花文を描く。高台から底部は、露胎である。**17～19**は**青磁**である。**18**は、越州窯系青磁であろう。**17**は、皿である。見込みには、片切彫りで花文を描く。小片の為、数は明らかではないが、口縁を数ヶ所凹ませて、輪花に作る。外底部は、露胎である。**19**は、高台付の皿である。見込みには、櫛状の施文具で放射状文を描く。畳付から外底部は、露胎となる。**20**は、**灰緑釉陶器**である。大型の鉢形容器であろう。焼きぶくれが見られ、粗い。

Fig. 34　43号土壙検出状況（南東より）

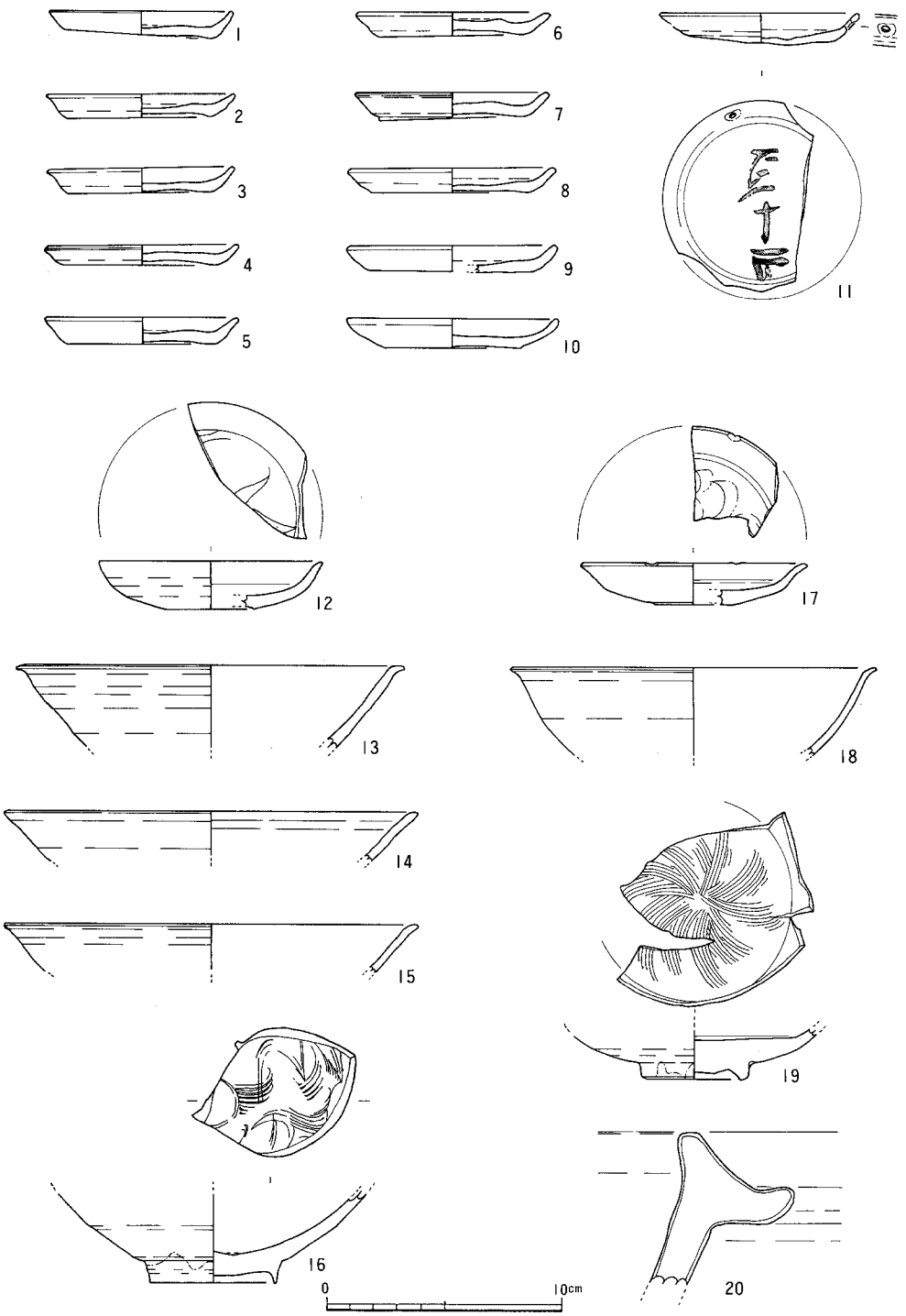


Fig. 35 43号土壙遺物実測図 (1/3)

44号土壙（0157）

１面で検出した土壙である。前述した５号土壙に切られる。径1.0ｍ程度の円形の土壙になると思われる。深さは、約25cm分を調査している。

土壙底からやや浮いて、土師器坏と備前焼の摺り鉢が、また埋土中からは、青磁・白磁の小片が出土した。**1～3**は、**土師器**の坏である。体部・内底は横ナデ、外底は、回転糸切りする。口径12.4cm～13.0cm、器高2.4～2.8cmである。**4**は、**備前焼**の摺り鉢である。内・外面は横ナデで、内面には、９本を単位とした摺り目が刻まれている。また、内面は、使用のため磨滅して、なめらかになっている。

５号土壙の年代観および、備前焼の鉢に摺り目がみとめられる点からして、13世紀後葉の遺構であろう。

47号土壙（0160）

１面で検出した土壙である。長軸1.32ｍ、短軸0.94ｍの楕円形を呈する。東側壁は、２段掘状を呈する。土壙底は、深いところで30cmをはかる。

遺物は、壙底近くと、埋土上面付近にわかれるが、埋土に変化はなく、大きな時期差があるとは、考えられない。**1～8**は、**土師器**である。**1～4**は皿で、すべて回転糸切りする。**4**にのみ、板状圧痕と内底ナデがみとめられる。口径7.1～8.6cm、器高1.2～1.7cmである。**5～8**は、坏である。底部は、回転糸切りで、板状圧痕はみられない。口径12.2～

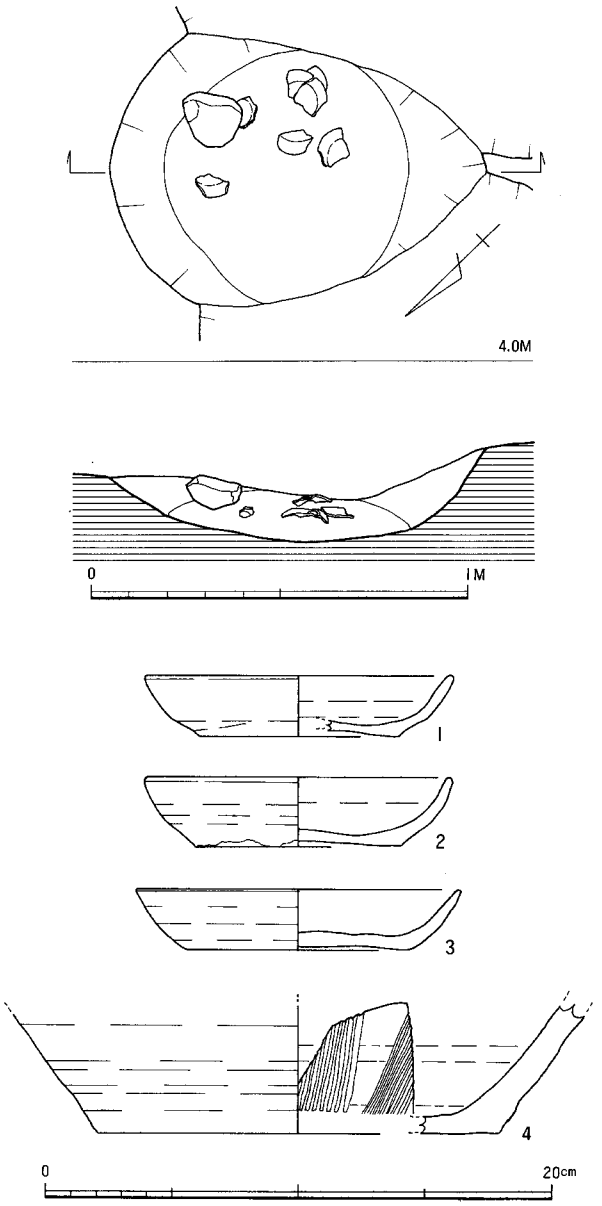


Fig. 36 44号土壙遺構実測図（1/20）、遺物実測図（1/3）

Fig. 37　44号土壙検出状況（北西より）

Fig. 38　47号土壙検出状況（東より）

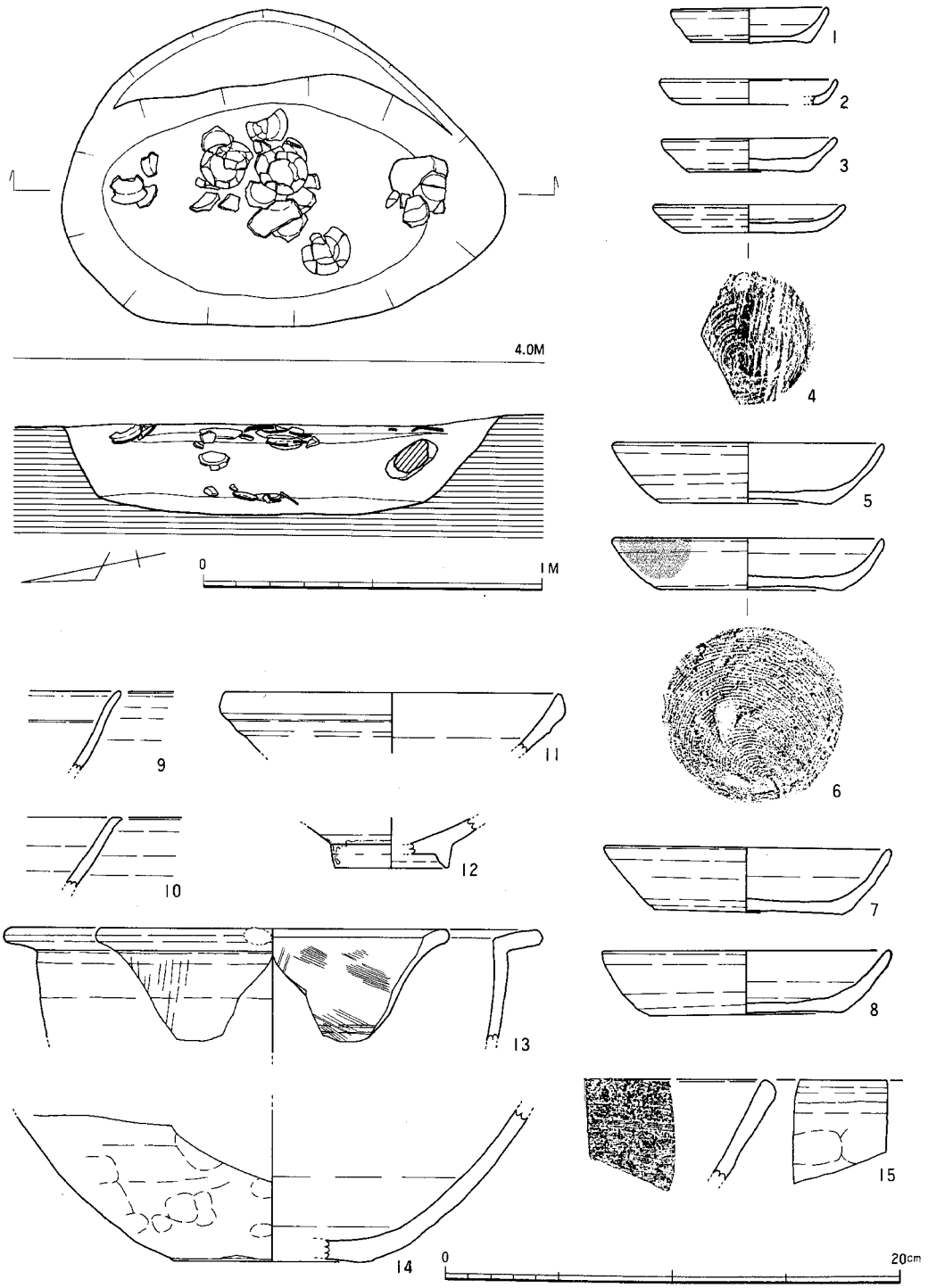


Fig. 39 47号土壙遺構実測図（1/20）、遺物実測図（1/3）

12.9cm、器高2.5～3.0cmをはかる。法量分布からみれば、口径12.2cmの**5・6**と、12.8～12.9cmの**7・8**にわけることができる。**9～12**は、**白磁**の碗である。**9**は、口禿げの碗である。**12**の高台から外底部は、露胎となる。**13**は、**土師質土器**の鉢である。器形的には、鍋に似るが、煤の付着はなく火にかけた痕跡も確認できない。体部外面は、粗い縦方向の刷毛目を、雑なナデで消している。なお、この縦方向の刷毛目は、L字状に折り返した口縁の下面までつづいてみられ、直に口縁を作った後に、端部を外方へ折り曲げたことを物語っている。口縁から内面は、横ナデする。内面には、横ナデの後から、ヘラ先でこすりなでた様な条線がみとめられる。口縁端部の一部には、鉄錆が付着している。**14**は、**須恵質土器**の鉢である。体部外面は指押え、内面は横方向を主体としてナデ調整を行なう。外底部には、糸切り痕が残る。**15**は、**瓦質土器**の鉢である。外面は、細かい縦刷毛の上に指押え、内面には横刷毛を施す。14世紀前半頃にあてられる遺構であろう。

51号土壙（0171）

1面で検出した土壙である。径約1.6mの略円形を呈し、深さは約32cmをはかる。

遺物は、土師器を主として、土壙の東壁際に集中して出土した。埋土中位に包含されていたものである。**1～25**は、**土師器**である。**1～8**は皿で、回転糸切りする。**1・2**において、板状圧痕・内底ナデがみとめられる。口径7.7～8.9cm、器高1.4～1.7cmで、平均すると、各々8.33cm、1.53cmとなる。**9～25**は坏である。**9**は底部の小片で、内外に習字と思われる墨痕がみとめられる。**12・14・17・18・22・25**において、板状圧痕・内底ナデがみられる。口径11.8～13.0cm、器高2.4～2.9cmで、平均すると、各々12.4cm、2.65cmである。**26**は、**瀬戸・美濃焼**の灰

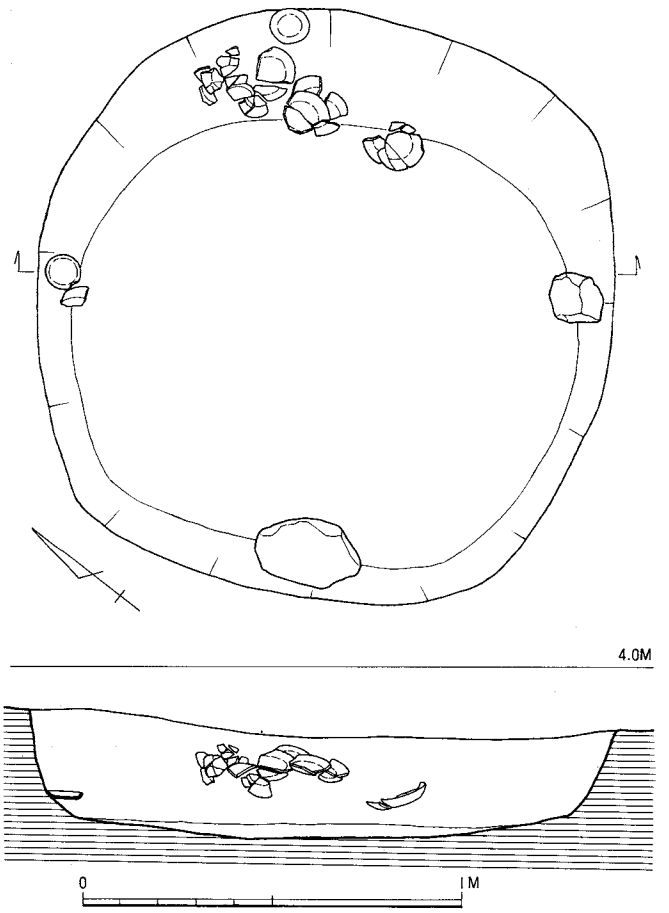


Fig. 40 51号土壙遺構実測図（1/20）

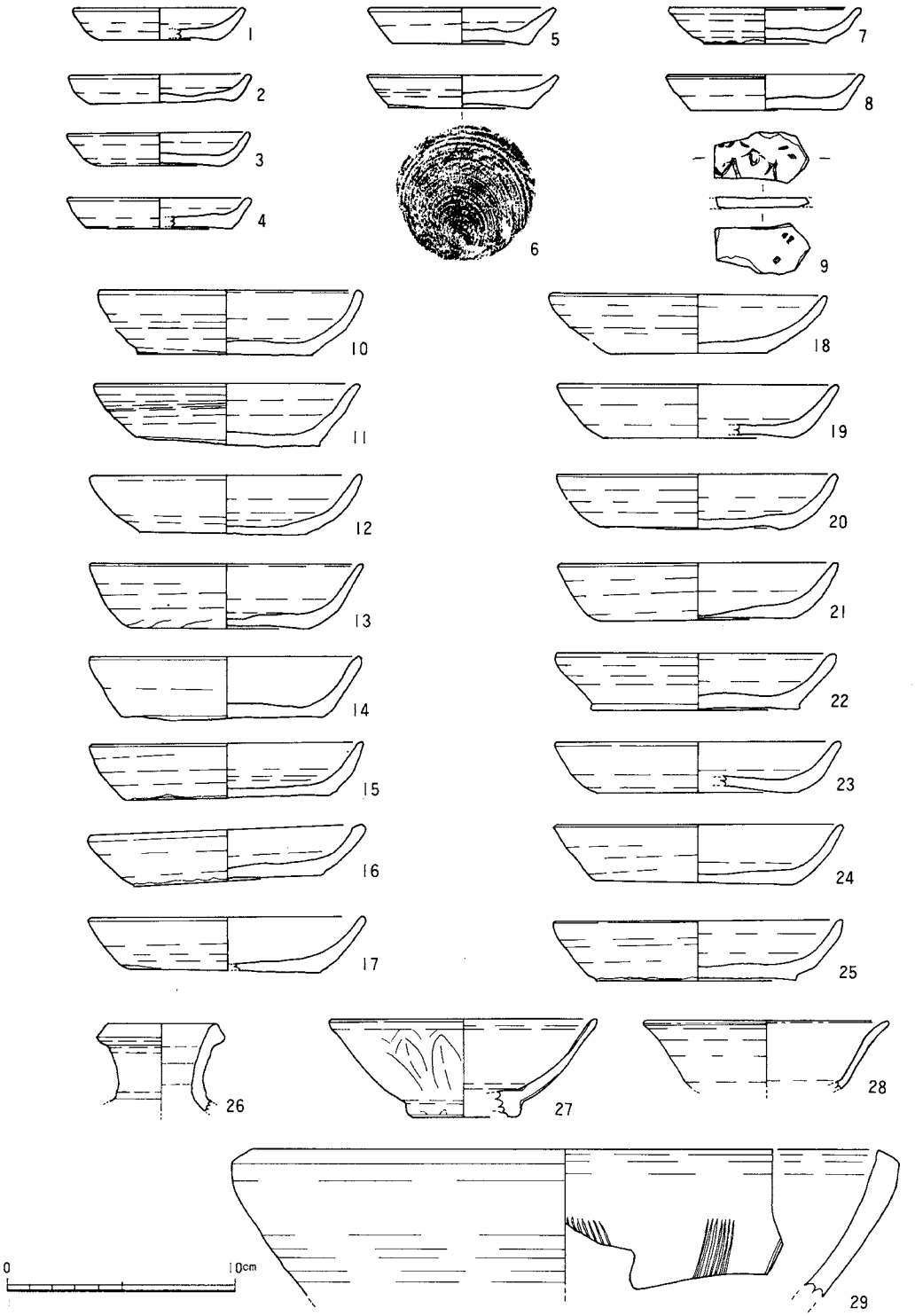


Fig. 41 51号土壙遺物実測図 (1/3)

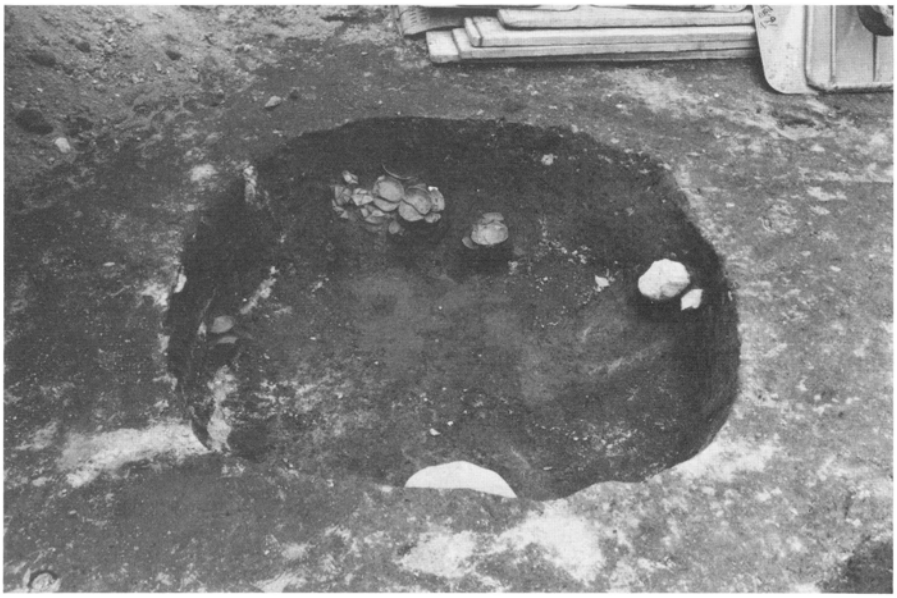


Fig. 42　51号土壙検出状況（南西より）

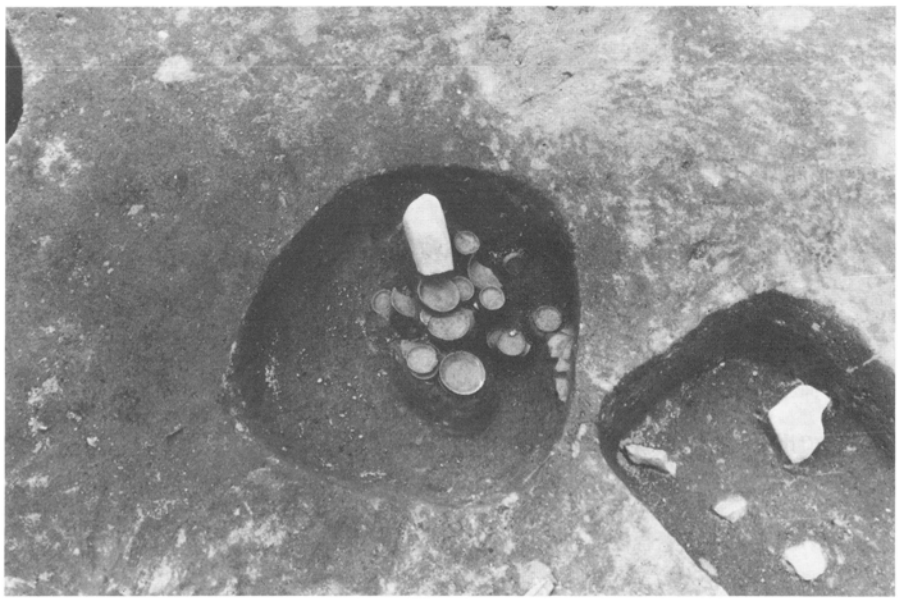


Fig. 43　53号土壙検出状況（南東より）

釉瓶子である。口径4.8cmをはかる。**27**は、**青磁**の碗である。体部外面には、片切彫りで、鎬蓮弁文を陽刻する。畳付から外底部は、露胎となる。**28**は、**白磁**である。口禿げの皿で、口縁部の釉を掻き取って、露胎としている。**29**は、**無釉陶器**の摺り鉢である。内・外面には、飛沫状にテリ状の自然釉がみられる。内外面とも横ナデ調整で、内面には7本を単位とした摺り目がならぶ。

14世紀前半の土壙であろう。

53号土壙（0175）

1面で検出した土壙である。径約1mの略円形を呈する。深さは、約20cmをはかる。埋土の中位から上部にかけて、土師皿・坏が廃棄されていた。

出土したのは、土師器皿・坏、青磁、白磁、銅銭である。**1～23**は、**土師器**である。**1～14**は皿である。すべて底部は、回転糸切りする。**1～3**、**5～8**、**10**において、板状圧痕と内底ナデがみとめられた。口径7.4～8.6cm、器高1.1～1.7cmで、平均すると各々7.94cm、1.36cmとなる。**15～23**は、坏である。外底部は、回転糸切りする。**15・17～19・21**において、板状圧痕と内底ナデがみられる。口径11.2～12.8cm、器高2.1～3.0cmをはかり、平均をとると、各々12.2cm、2.67cmとなる。**24**は、**青磁**である。同安窯系青磁の皿で、片切彫りで花文を描き、間を櫛目文でうめる。平底の底部は、露胎である。**25**は、**白磁**である。口縁は、玉縁につくる。体部中位から下は、露胎となる。その他、銅銭が1枚出土しているが、錆が著しく、銭文を解読することはできなかった。

鎬蓮弁文の青磁、口禿げの白磁等が、全く出土していない点から、14世紀まで下ることはないだろう。13世紀代の遺構と思われる。

73号土壙（0249）

2面で検出した土壙である。長軸約85cm、短軸約67cmの不整楕円形を呈する。調査しえた深さは、46cmをはかる。

遺物は、埋土の中位に、土壙の西南側の傾斜に沿った状態で出土した。土壙からの遺物の出土量は少なく、いわゆる土器溜の様相を示さない。遺物は、土壙の埋土の堆積過程で、西南側から入り込んだ（廃棄された？）ものと考えられる。

出土した遺物は、土師器皿・坏、青磁、白磁、青白磁、陶器等であるが、小片のため、図示しえ

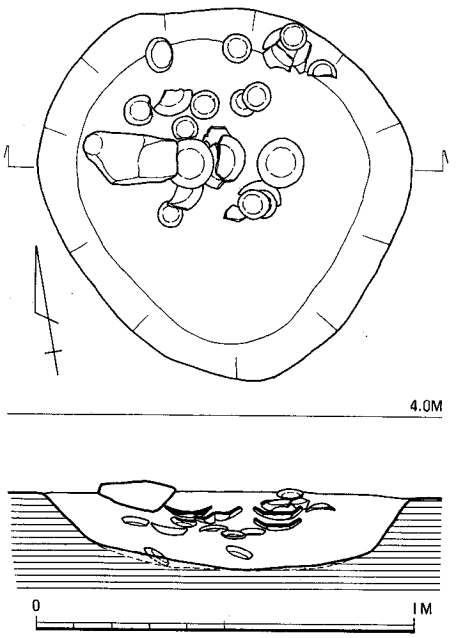


Fig. 44 53号土壙遺構実測図（1/20）

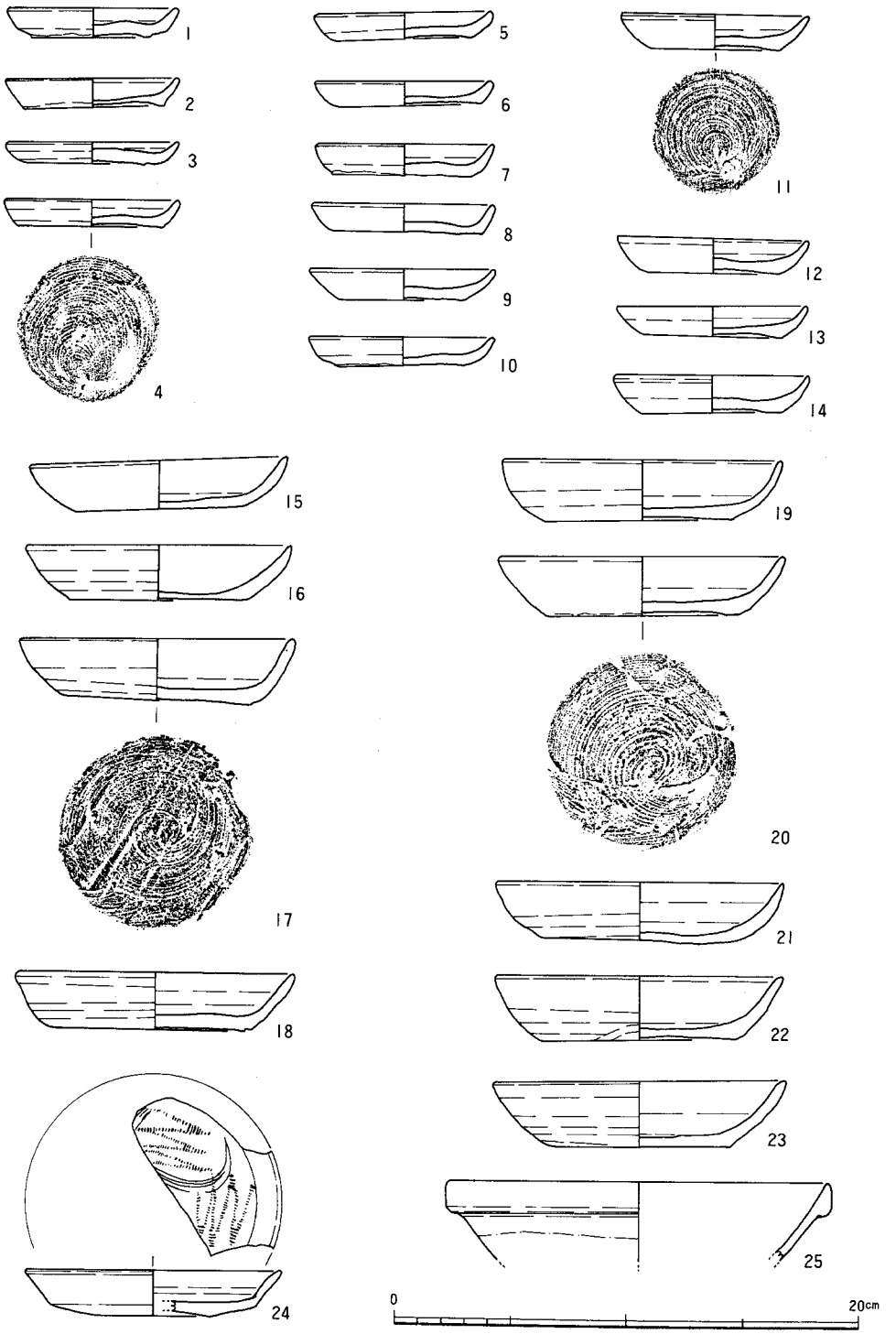


Fig. 45 53号土壙遺物実測図 (1/3)

たのは数点にとどまった。**1～5**は、**土師器**である。**1・2**は、皿である。外底部は、回転糸切りする。**1**には、外底部に板状圧痕、内底部にナデ調整痕がみとめられる。口径8.2cm、底径6.0cm、器高1.5cm。**2**は、口径9.1cm、底径7.5cm、器高1.1cmをはかる。**3～5**は、坏である。外底部は、回転糸切りする。

3・5には、外底部に板状圧痕、内底部にナデ調整がみられる。法量は、それぞれ、口径11.2cm、12.3cm、12.6cm、底径8.0cm、7.4cm、8.6cm、器高2.6cm、2.8cm、2.6cmをはかる。**6**は、**青白磁**の小壺である。口縁部は露胎で、外面の口縁直下には、珠文がならぶ。

78号土壙（0320）

２面で検出された土壙である。長辺約80cm、短辺約55cmの不整長方形を呈する。深さ約26cm分を調査しているが、土壙の南東側２分の１は、１面の１号溝によって削られ、16cm程しか残っていなかった。

土壙内には、礫、イルカ骨、土師器、陶磁器等が、乱雑に廃棄されていた。

出土した遺物は、土師器、白磁、青磁、鉄釘、イルカ背骨等である。**1～14**は、**土師器**である。**1～4**は皿で、底部は回転糸切りである。**1・2・4**において、外底部に板状圧痕、内底ナデ調整がみられる。口径6.8～8.3cm、器高1.2～1.4cmをはかり、法量的には、バラつきがある。**5～14**は、坏である。底部は、回転糸切りする。**5・11・12・14**には、

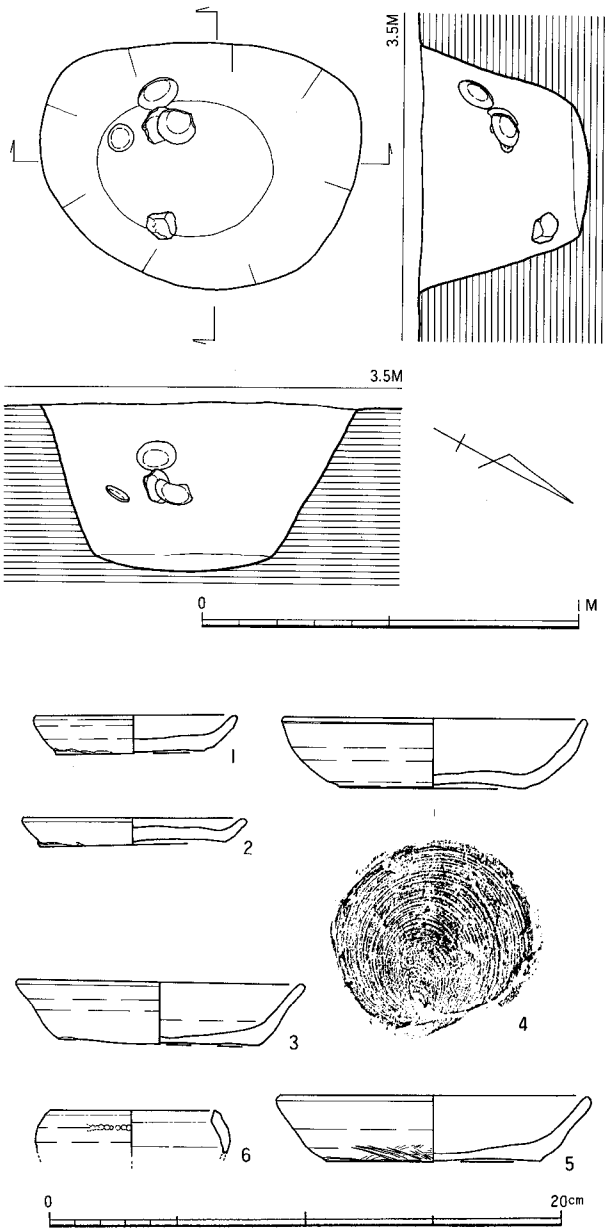


Fig. 46 73号土壙遺構実測図（1/20）、遺物実測図（1/3）

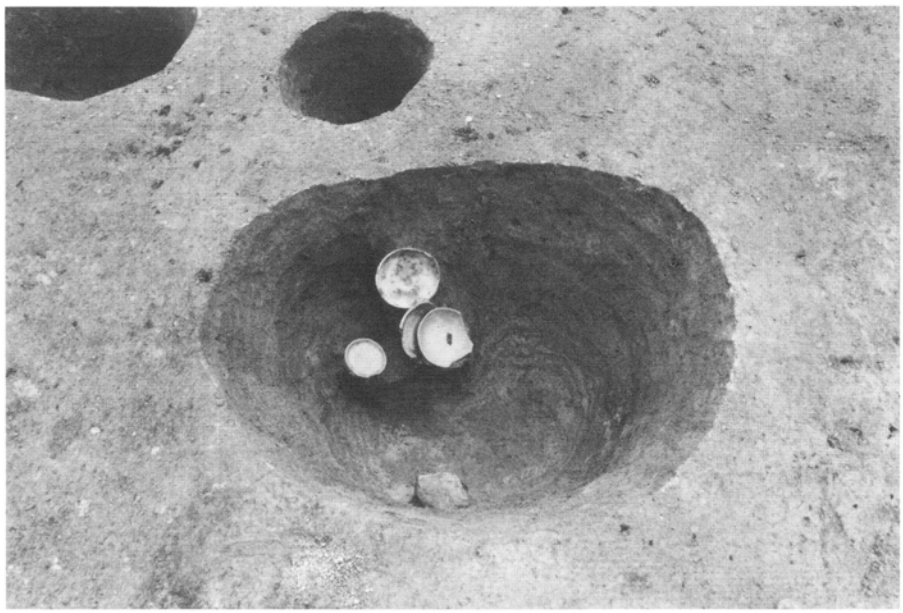


Fig. 47　73号土壙検出状況（北東より）

Fig. 48　78号土壙検出状況（南東より）

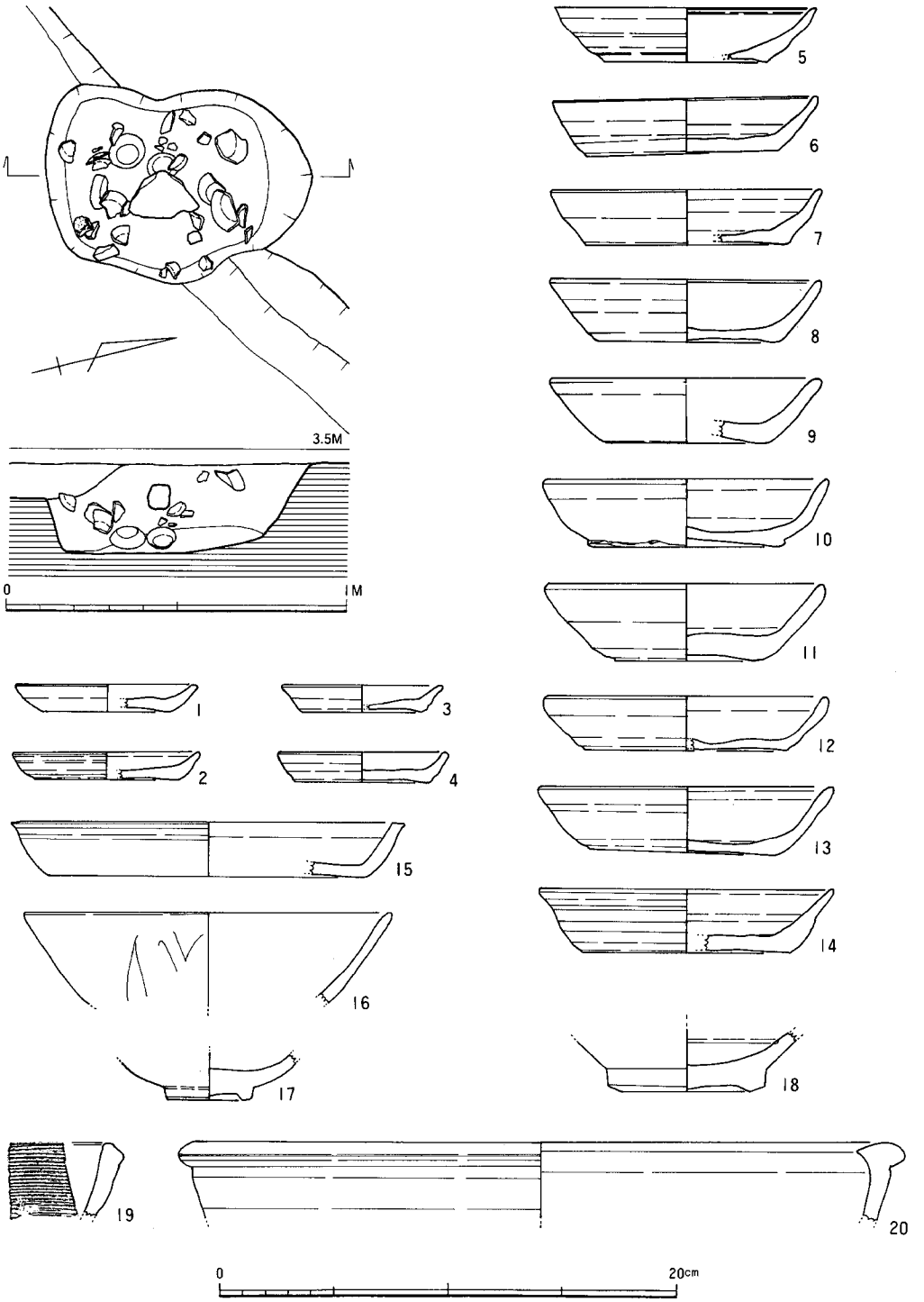


Fig. 49 78号土壙遺構実測図（1/20）、遺物実測図（1/3）

外底部に板状圧痕、内底ナデ調整がみられる。**8・10**には、外底部の板状圧痕はみられるが、内底部にナデ調整はなされていない。口径11.6～13.1cm、器高2.4～3.5cmをはかり、平均値は、各々12.3cm、2.76cmである。なお、**8・12・13**の口縁部には、煤が付着しており、灯明皿として使われたと考える。**15**は、**須恵器**の盤である。口縁端部は、水平に直裁する。**16・17**は、**青磁**の碗である。**16**は、体部外面に片切彫りで鎬蓮弁文をあしらう。**18**は、**白磁**の碗である。**19**は、**瓦質土器**の鉢である。内面は、横刷毛調整する。**20**は、**褐緑釉陶器**の盤である。内面に施釉し、口縁上面から外面は、露胎となる。

鎬蓮弁文の青磁は、1点のみの出土であるが、これによって時期を考えれば、13世紀後半代に求められよう。

81号土壙（0338）

1面からの掘り下げの際に、遺物の集中を確認し、それを残して周囲を2面のレベルまで下げてから、調査したものである。遺物の集中をみてから周囲を観察して、掘り込み等の遺構を捜したが、掘り下げが遺物のレベルまで進んでいたこともあってか、検出できなかった。おそらく、土壙底に遺物を廃棄したものであろう。

遺物は、1.7m×0.7mほどの範囲で出土した。全体としては、北から南へ傾斜したレベルで出土している。仔細にみると、平面的な遺物分布は、北と南でわかれるようで、断面図をみても、北側の遺物は下方に垂れたゆるい弧を描いて出土している。これらの点からみて、北側と南側とで、別の遺構であった可能性も考えられる。ただし、調査時には遺物は、一緒にとりあげている。

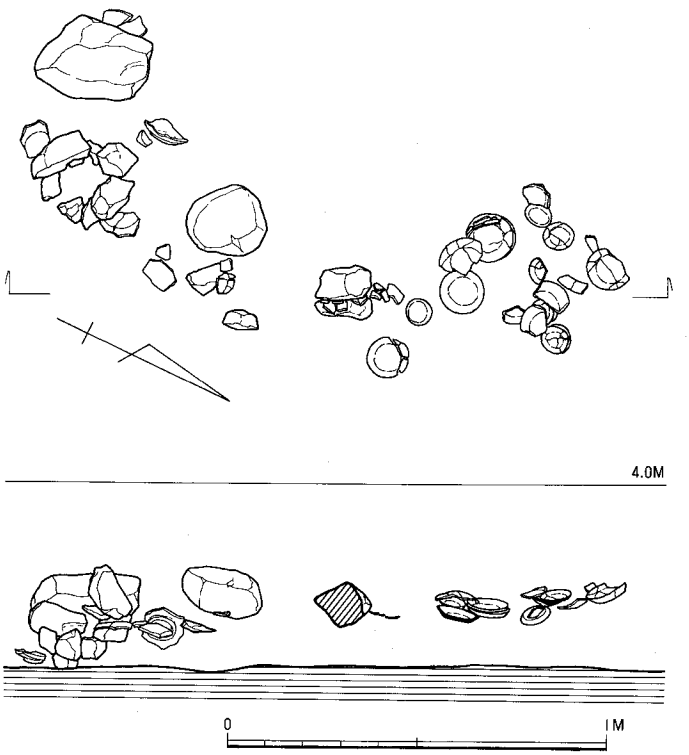


Fig. 50 81号土壙遺構実測図（1/20）

1～25は、**土師器**である。**1～14**は皿で、回転糸切りする。**2・12**には、外底部に板状圧痕、内底部にナデ調整が

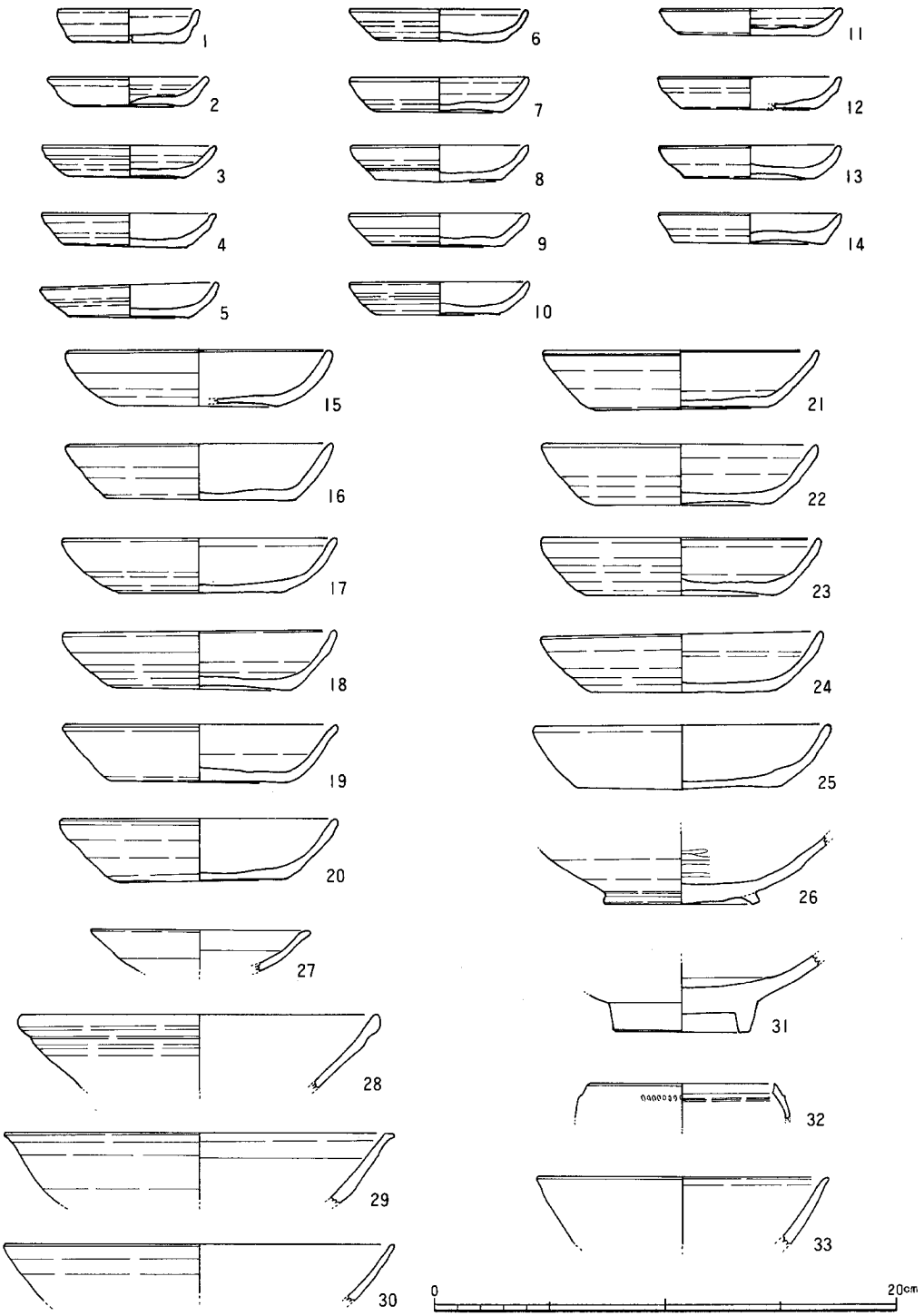


Fig. 51 81号土壙遺物実測図１ (1/3)

みられる。**13**には、外底の板状圧痕はあるが、内底ナデは施されていない。口径6.2～8.1cm、器高1.2～1.6cmである。**1**は、口径が小さい割に深く、口縁部には煤が付着している。灯明皿であろう。**15～25**は、坏である。すべて回転糸切りで、**15・16・24**において、板状圧痕と内底ナデがみられる。**25**は、外底に板状圧痕がつくが、内底ナデはなされていない。口径11.1～13.0cm、器高2.3～2.7cmをはかる。**26**は、**瓦器**の埦である。内面には、幅広で浅いヘラ磨きを施す。体部外面は、中位に指押えがならび、下位は横ナデする。**27～31**は、**白磁**である。**27**は皿、**28～31**は碗。**32**は、**青白磁**の小壺である。口縁部は、露胎となる。肩部に、珠文がならぶ。**33**は、**青碗**の碗である。**34**は、**砥石**である。砂岩で、長さ30cmをこえる大形品で、3面に砥面がみとめられる。中央で2つに折れ、わかれて出土した。なお、遺物と一緒に出土した礫の中

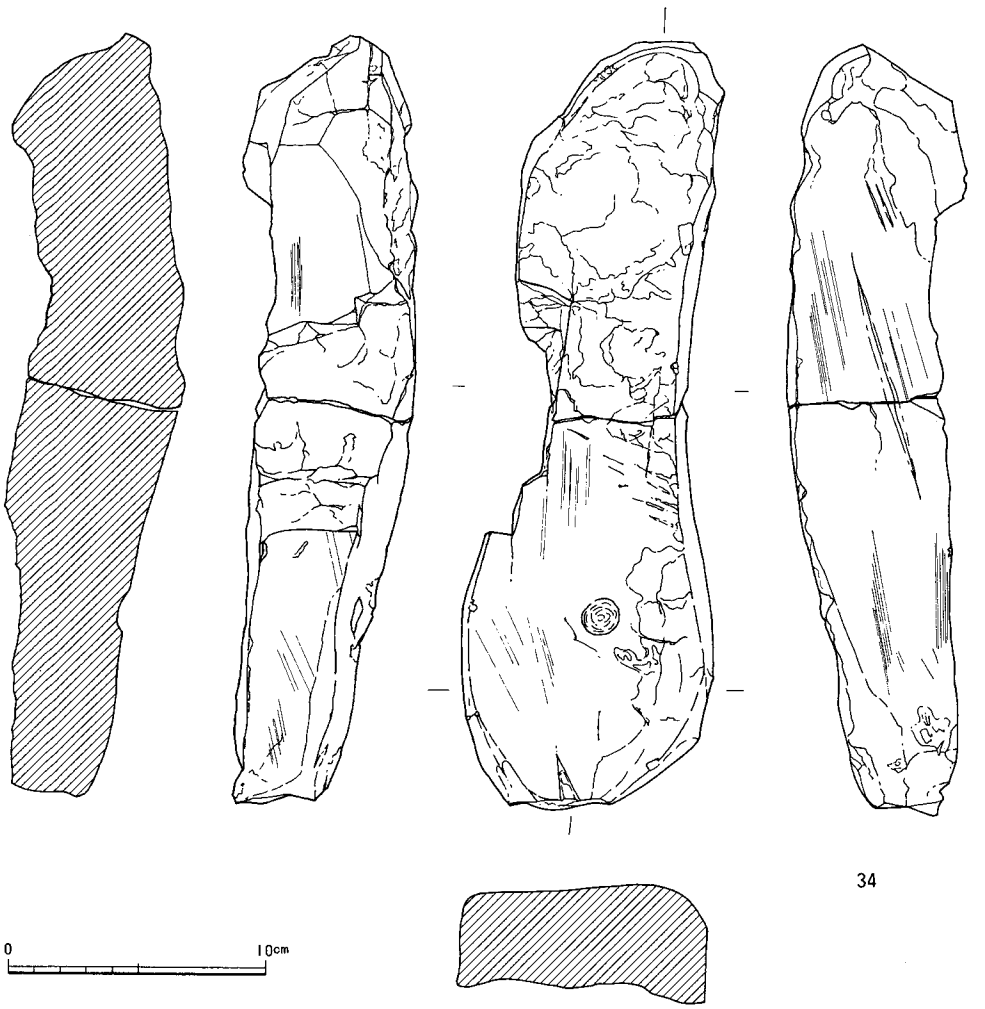


Fig. 52 81号土壙遺物実測図2 (1/3)

には、径30cm程の玄武岩のかたまりが含まれていた。

85号土壙（0359）

2面で調査した遺構である。2面における遺構検出の際、遺物の集中を検出した。この段階では、遺構の掘り込み等は、確認できなかった。そこで、遺物の取り上げ後、再び遺構検出を試み、一応土壙を調査した。したがって、遺物の集中と、その下の土壙とが必ずしも伴なうかどうか明らかでなく、また遺物の散布範囲が土壙の大きさをこえている点からみても、むしろ別の遺構として把えるべきであろうか。

遺物は、1.8m×1.2m程の範囲から出土した。遺物の垂直分布はほぼ平坦で、傾斜等はみられない。バラまく様に廃棄されたものと思われる。また、遺物の平面分布をみると、大きく2群にわかれるが、遺物の接合関係は両者にまたがっており、単一の遺構で、同時に廃棄されたことは疑いないと言える。

土壙部分は、長軸2.15m、短軸0.95mの長楕円形を呈する。深さは、30～35cmをはかる。遺物は、小片のみで、出土量も少なかった。

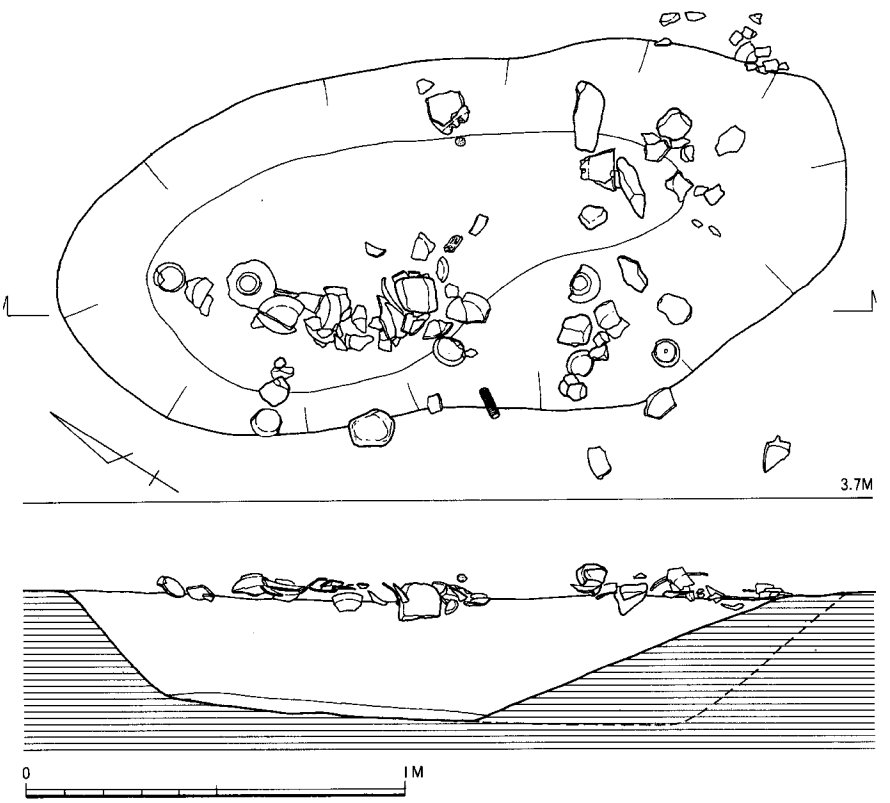


Fig. 53 85号土壙遺構実測図（1/20）

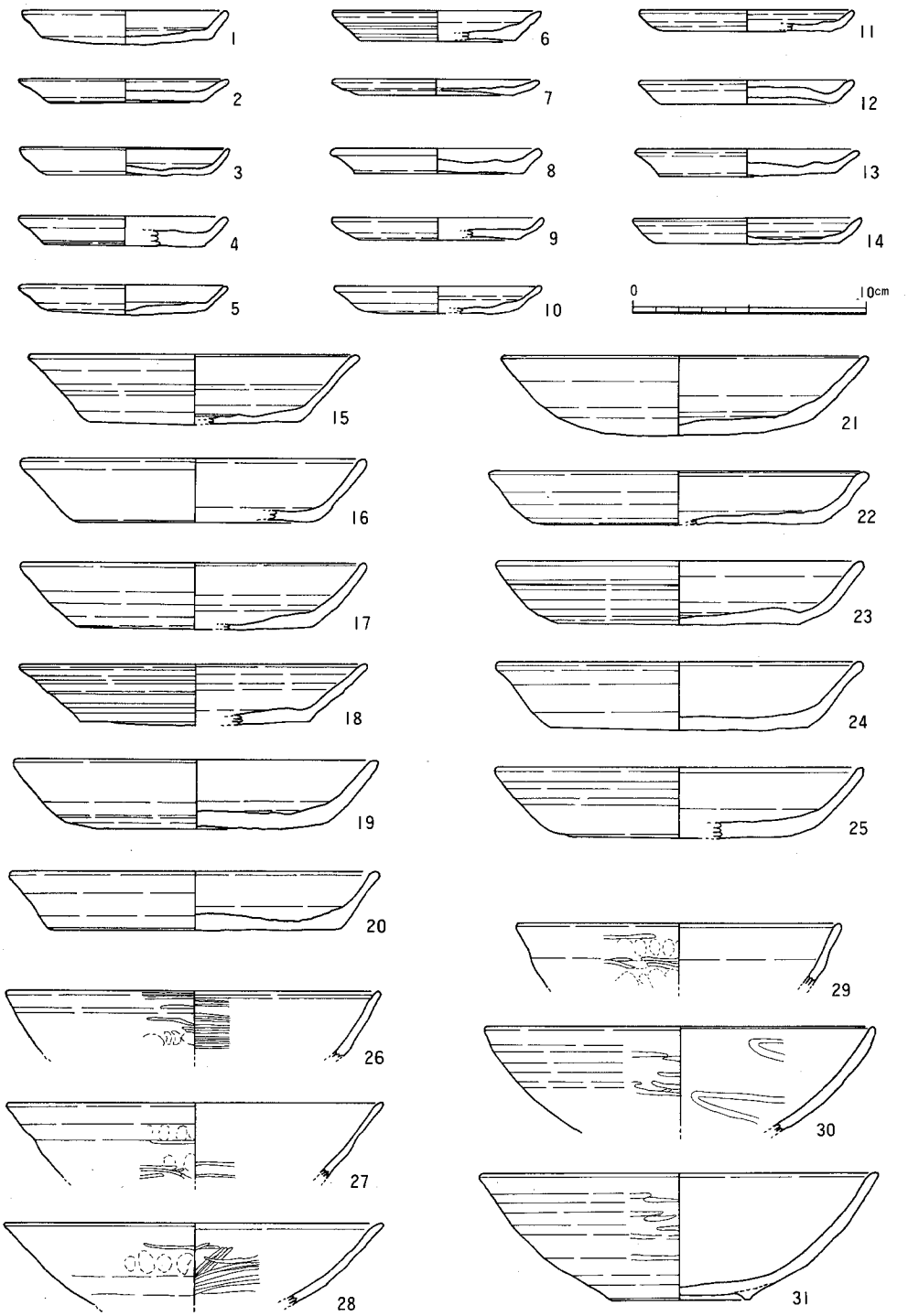


Fig. 54 85号土壙遺物実測図１ (1/3)

Fig. 54～56 に図示した遺物は、すべて上面の遺物集中部分のものである。土師器・瓦器・青磁・白磁・青白磁・陶器・瓦・石鍋・毬球玉等が出土した。**1～25**は、**土師器**である。**1～14**は、皿である。**1～4・7～9・11～14**は、底部を回転糸切り、**5・6・10**は、ヘラ切りする。いずれの皿も、外底部には板状圧痕がみられ、内底部にナデを施している。口径8.9～10.0cm、器高0.7～1.5cmをはかり、平均をとると、口径9.26cm、器高1.15cmとなる。なお、**7**は、扁平な器形を呈し、胎土は精良で、焼成も良く、搬入品の土師皿であると思われる。**15～25**は、坏である。**15～18・22～24**は回転糸切り、**19～21・25**はヘラ切りする。**15・17**を除いて、外底部に板状圧痕、内底部にナデがみとめられる。**17**には、外底部の板状圧痕はみられるが、内底部にナデは施されていない。口径は、14.5～16.1cm、器高2.3～3.5cmをはかる。法量分布からみれば、口径14.5cmの**15**、15.0～15.1cmの**16～18**、15.8～16.1cmの**19～25**の３グループにわけることができる。それぞれに平均値を示すと、各々、口径14.5cm・器高3.1cm、口径15.03cm・器高2.8cm、口径16.02cm・器高2.88cmとなる。**26～31**は、**瓦器**の埦である。**26**は、いわゆる楠葉型瓦器で、摂津からの搬入品である。内面の口縁直下に沈線を一条めぐらせる。内面には、細かいヘラ磨きが密に施される。外面は、やや疎らにヘラ磨きする。**27**は、他の瓦器と比べて、器肉が薄い。また、湾曲の少ない、直線的に開く体部を持っている。搬入品である可能性を考えたい。**28～31**は、在地産の瓦器である。体部内面には、幅広で浅いヘラ磨きを施す。外面には、同様のヘラ磨きを疎らに施すのみである。**32～51**は、**白磁**である。**32・33**は、平底の皿である。体部下位から外底部は、露胎となる。**34～36**は、高台付の皿である。体部下位から外底部は、露胎となる。また、見込みは、輪状に釉を掻き取っている。**37～41・44～51**は、碗である。**39**は、高台外面から外底部を露胎とする。**46～51**では、体部下位から外底部は露胎となる。**42**は、合子の蓋である。鍔部分から内面は、露胎である。上面には、スタンプで菊弁様の文様があしらわれている。釉に若干青味があり、青白磁とすべきか。**43**は、水注の頸部である。内外面ともに釉がかかっている。把手の一部が残っている。**52・53**は、**青磁**である。**52**は、皿である。見込みには、片切り彫りを配し、その間を櫛目文でうめる。平底の底部は、釉を掻き取り露胎となる。同安窯系である。**53**は、碗である。体部外面には、櫛描文で猫描手の沈線を入れる。体部内面は、片切り彫りで花文を描き、その間を櫛目文で埋める。同安窯系青磁である。**54・55**は、**褐釉陶器**である。**54**は、盤である。体部は、内外面とも施釉、外底部は露胎となる。**55**は、蓋である。口縁下面から内側は、露胎となる。本来は、中央部につまみがつくが、つまみは折れて残っていない。**56**は、**瓦**である。北方系瓦と呼ばれるもので、瓦当面には重弧文を配し、瓦当の下端を押圧してフリル状につくる。重弧文も、上から４列目の弧線の下側から、丸棒状工具の先端で向って右から斜めに刺突し、波打たせている。瓦の上面には、布目が残り、内型の模骨を綴じ合わせていたと思われる紐痕が、ネガティブな瘤状の凹みとなってみとめら

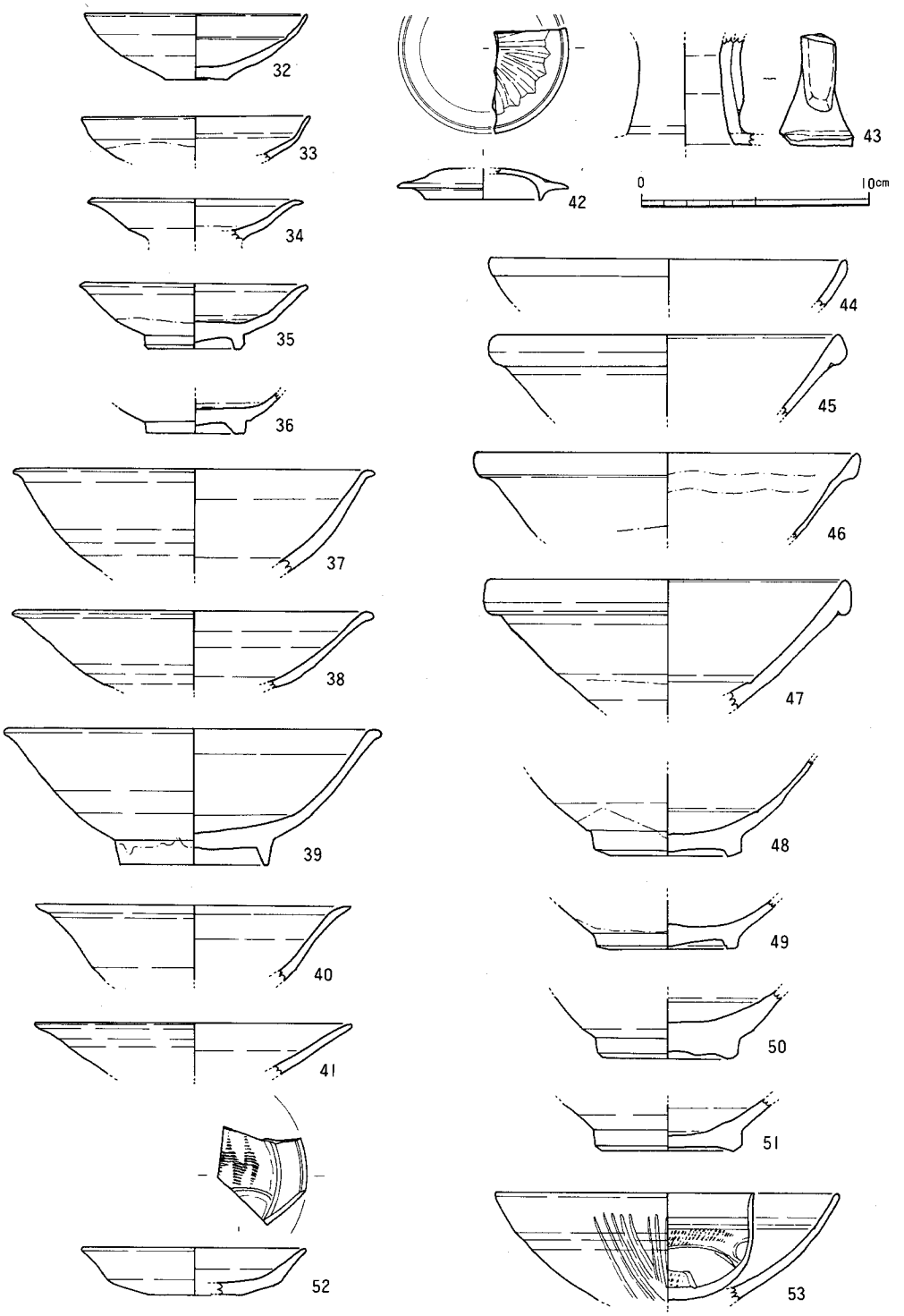


Fig. 55 85号土壙遺物実測図 2 (1/3)

れる。瓦の下面には、縦方向のナデ痕がみられる。また、点々と縄目痕が残っている。瓦の小口は、内側（瓦の上面）からヘラで切れ目が入れられている。なお、瓦当下端の押圧の際には、布の上から指で押したもので、この部分にも布目がみとめられる。**57**は、滑石製の**石鍋**である。ケズリで整形する。外面には、煤が付着している。**58**は、**毬球玉**である。砂岩で、搗打して丸く仕上げる。

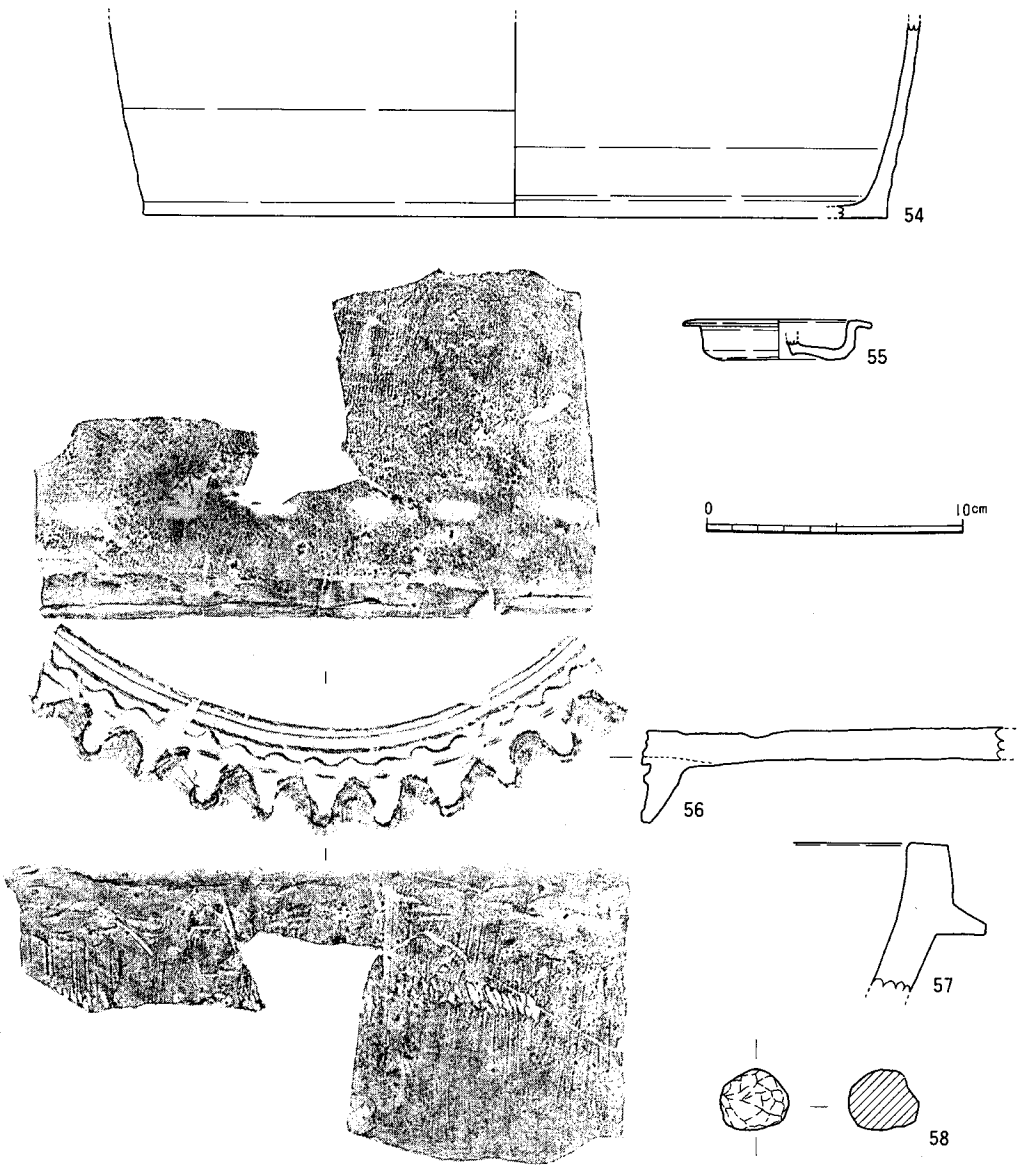


Fig. 56　85号土壙遺物実測図３（1/3）

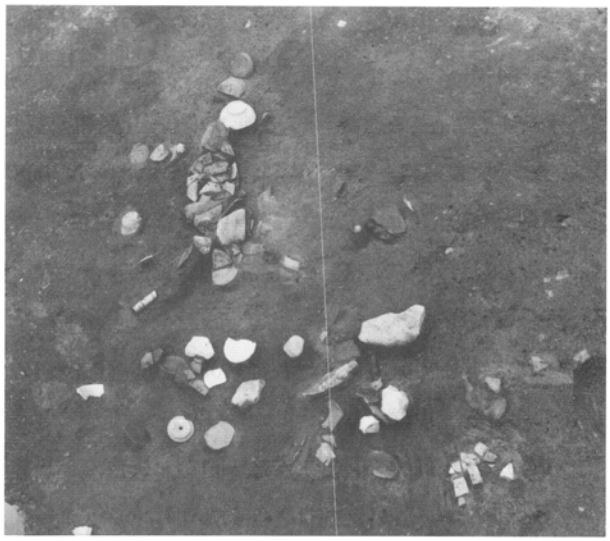


Fig. 57　85号土壙検出情況(東南より)

Fig. 58　85号土壙遺物出土状況

(西南より) ↓

Fig. 59　85号土壙出土北方系軒平瓦 (Fig 56-**56**) (約1/3)

この他、**銅銭**54枚が出土した（P 123、表２）。銭緡に通した状態のまま錆びついており、銭緡は朽ちていた。内訳は、「開元通寶」（初鋳621年）５枚、「咸平元寶」（998年）２枚、「景徳元寶」（1004年）２枚、「祥符元寶」（1008年）１枚、「天禧通寶」（1017年）２枚、「景祐元寶」（1034年）４枚、「皇宋通寶」（1039年）８枚、「至和元寶」（1054年）１枚、「嘉祐元寶」（1056年）１枚、「元豊通寶」（1078年）５枚、「熙寧元寶」（1068年）５枚、「元祐通寶」（1086年）４枚、「紹聖元寶」（1094年）４枚、「聖宋元寶」（1101年）１枚、「大観通寶」（1107年）２枚、「宣和通寶」（1119年）１枚、「正隆元寶」（1156年）１枚、解読不能３枚である。

95号土壙（0397）

３面で検出した土壙である。長径1.05ｍ、短径0.85ｍの略楕円形を呈し、深さ約50㎝をはかる。遺物は、埋土中位より出土した。

出土遺物は、土師器・瓦器・青磁・白磁・青白磁・瓦等である。**１～11**は、**土師器**である。**１～７**は、皿である。外底部は、回転糸切りする。**１～４・６・７**には、外底部に板状圧痕がみられ、内底部にはナデ調整が施されている。口径8.9～10.0㎝、器高1.0～1.3㎝をはかり、平均すると、口径9.35㎝、器高1.2㎝となる。ただし、口径の法量分布をとると、上述の幅の中でバラついており、特に集中する数値はみとめがたい。**８～11**は、坏である。すべて、底部は回転糸切りし、外底部には板状圧痕、内底にはナデ調整がみられる。口径14.9～16.0㎝、器高2.8～3.3㎝をはかる。口径の法量分布をとると、口径14.9㎝、15.0㎝の**８・９**と、15.7㎝、16.0㎝の**10・11**とにわかれる。**12**は、**瓦器**である。高台付近の小片である。内面には、かすかにヘラ磨きがみられる。高台、器肉がうすい点からみて、在地産とは考えがたい。近畿地方からの搬入品とみるのが、妥当であろう。**13**は、**須恵器**の高台付坏である。**14**は、**青白磁**である。合子の蓋で、口縁部外面から内面は、露胎となる。蓋の頂部から側面は、型押しで菊花状に分割される。頂部中央には、花蕊を模した珠文がならぶ。**15～24**は、**白磁**である。**15・16**は、高台付の皿である。体部下位から外底部は露胎となる。見込みは、輪状に釉を掻き取る。**17・18**は、平皿の底で、底部は露胎となる。**18**は、見込みに櫛描文を配する。**19～24**は、碗である。**20**の体部外面には、蕨手状の沈線が垂下する。**21**は、体部下半から外底部を露胎とする。**22・23**は玉縁口縁である。口縁の断面には、折り返しの空隙がみられる。**24**は、見込みの釉を輪状に掻き取っている。体部下位から外底部は、露胎となる。**25・26**は、**青磁**の碗である。**25**は、体部外面に猫描手の櫛描文を、内面には櫛描で花文を描く。

Fig. 60　95号土壙出土北方系軒平瓦（約1/3）

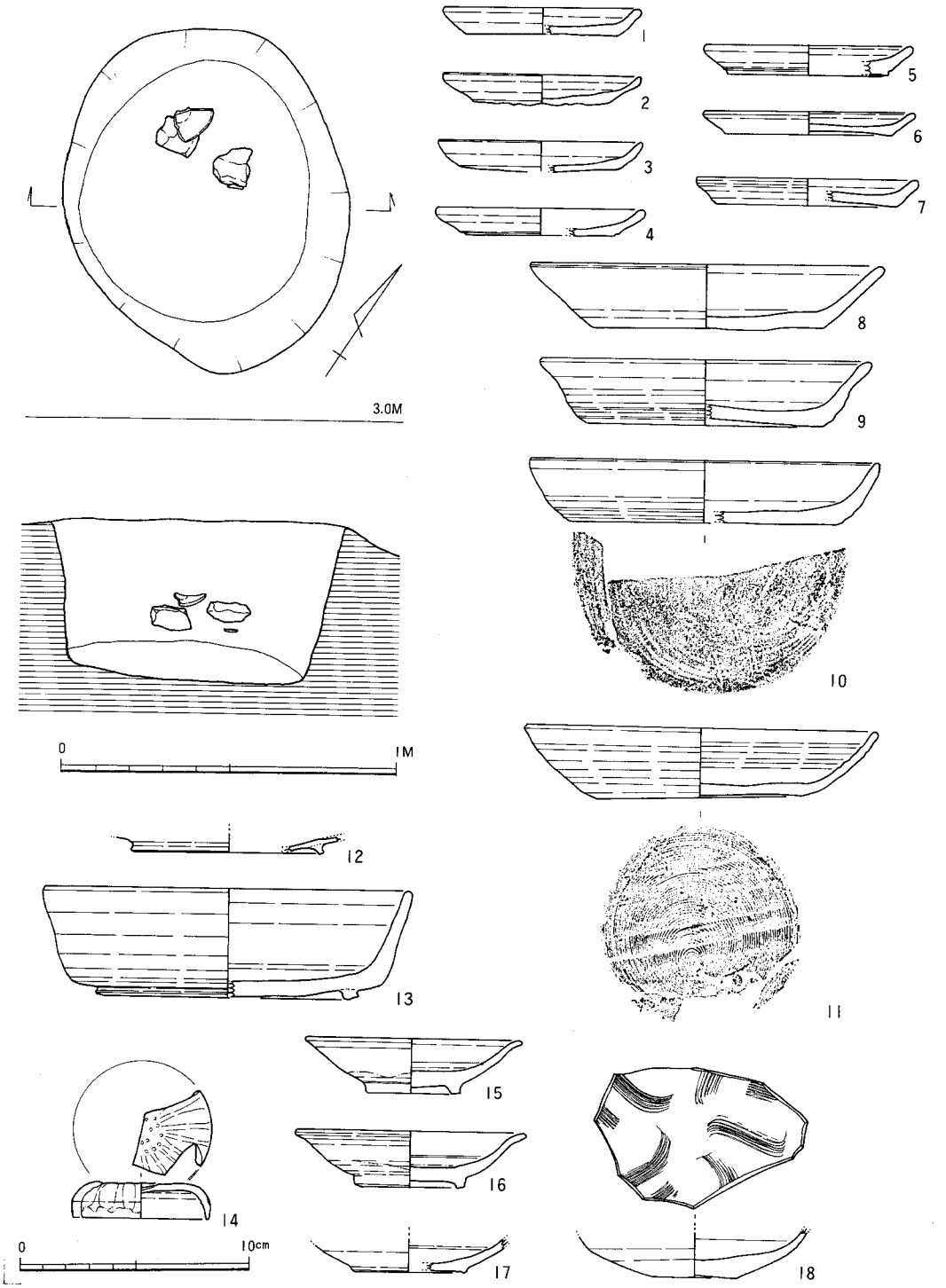


Fig. 61 95号土壙遺構実測図（1/20）、遺物実測図１（1/3）

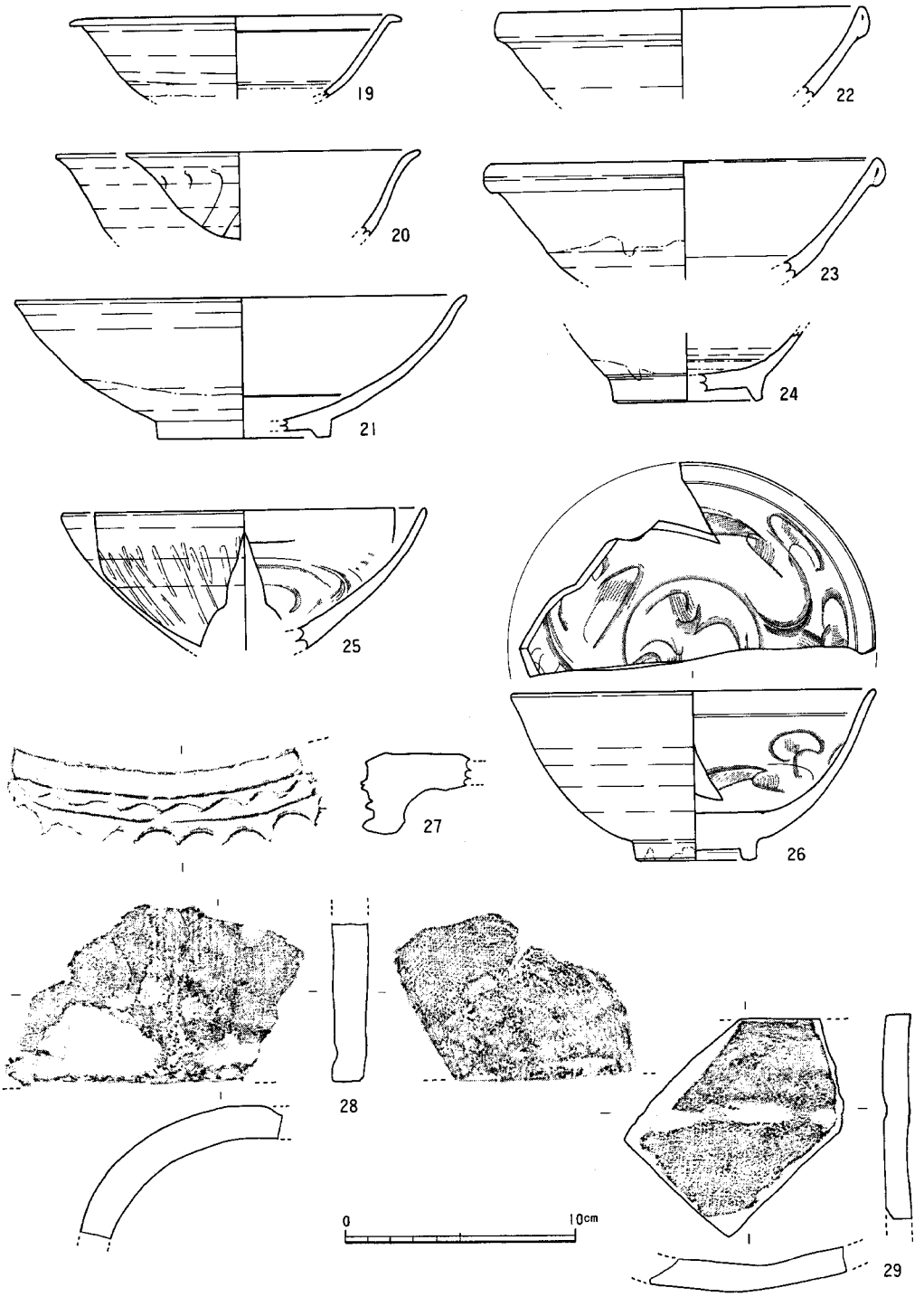


Fig. 62 95号土壙遺物実測図２ (1/3)

同安窯系の青磁である。**26**は、内面に、片切彫りと櫛描文で花文を描く。高台畳付から外底部は、露胎である。**27～29**は、**瓦**である。**27**は、北方系瓦の軒平瓦である。瓦当下端は、押圧でフリル状につくる。押圧による凹みには、布目が残り、布の上から指頭で押圧したことがうかがえる。また、瓦当の重弧文は、中央の弧文をヘラ状工具でねじり、波状に仕上げる。なお、瓦の両端は欠いている。**28**は丸瓦片、**29**は平瓦片である。

108号土壙（0539）

3面で検出した土壙である。長軸2.1m、短軸1.5mの小判形のプランをもつ。土壙底面は、南側部分で2段掘り状となる。最も深い底部で、深さ50cmをはかる。

遺物は、埋土の中位以下から主として出土している。出土状況は、埋土の堆積過程で投棄されたことを示している。

出土遺物は、土師器、瓦器、青磁、青白磁、白磁、陶器、石製品等である。**1～7**は、**土師器**である。**1～4**は皿で、外底部を回転糸切りする。**1・4**において、外底部に板状圧痕、内底部にナデ調整がみられる。**3**には、板状圧痕は残るが、内底部のナデ調整はなされていない。口径は、順に8.4cm、9.0cm、9.8cm、10.0cmとバラついている。器高は、1.2～1.3cmである。**5～7**は、坏である。底部は回転糸切りで、外底部に板状圧痕、内底部にナデ調整がみられる。口径14.8～15.7cm、器高2.6～3.2cmをはかる。**8**は、**青白磁**の合子蓋である。口縁外面から内面は、露胎となる。頂部に、印花文の一部がみとめられる。**9**は、**青磁**の皿である。見込みには、片切彫りと櫛描文で花文を描く。平底の底部は、露胎である。**10～22**は、**白磁**である。**10・11**は皿である。**11**は、見込みに片切彫りと櫛描文で花文を描く。体部下半から平底の底部までは、露胎である。**12～22**は、碗である。**12**の外底部には、墨書がみられる。墨はかすれており、判読しにくい。「百」であろうか。ただし、最後の横一棒が大きく横に張っているようにも見えるので、花押であるかもしれない。**14・17・18**は、見込みの釉を輪状に掻き取っている。**21・22**は、玉縁口縁につくる。**22**の断面には、口縁を折り返して玉縁にする際の空隙がみとめられる。**23～26**は、**陶器**である。**23**は、天目碗である。体部は、直線的に大きく開く。黒褐色の釉が施される。**24・26**は、褐釉陶器の鉢である。**24**は、体部外面の下半を露胎とする。**26**は、全面に施釉する。**25**は、黄釉の盤である。口縁部の上面から体部上位にかけて、露胎となる。**27～29**は、**石製品**である。**27**は、砂岩製の毬球玉で、全体を搞打して丸くととのえている。**28・29**は滑石製の石板である。石鍋の破片を再加工したものと思われる。全面に削り痕をとどめる。**28**の下面には、弧状の抉りこみがみられる。**29**は、2方向に折損面をのこしている。片面には、円錐形の凹みが、2つならんでいる。

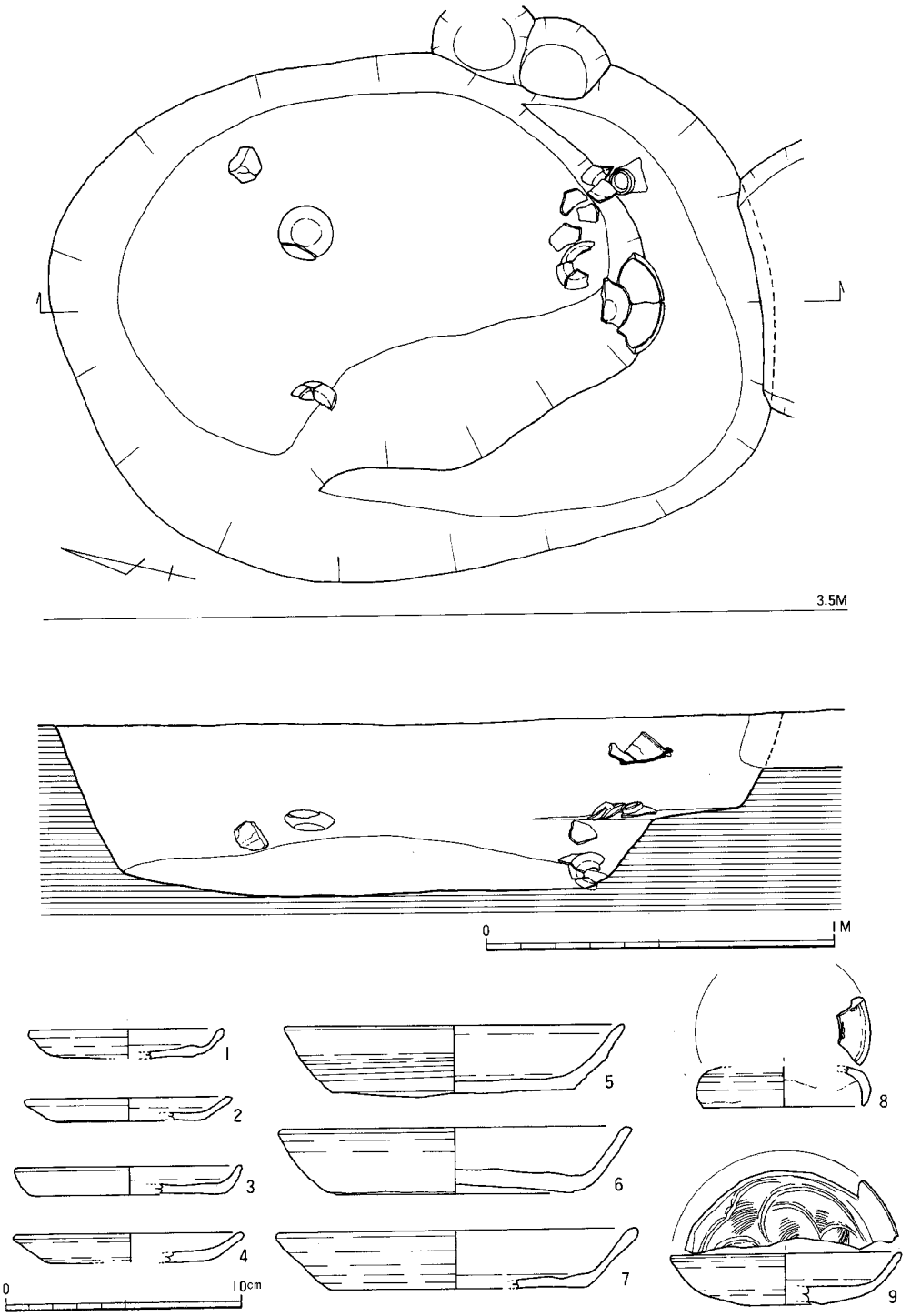


Fig. 63 108号土壙遺構実測図（1/20）、遺物実測図１（1/3）

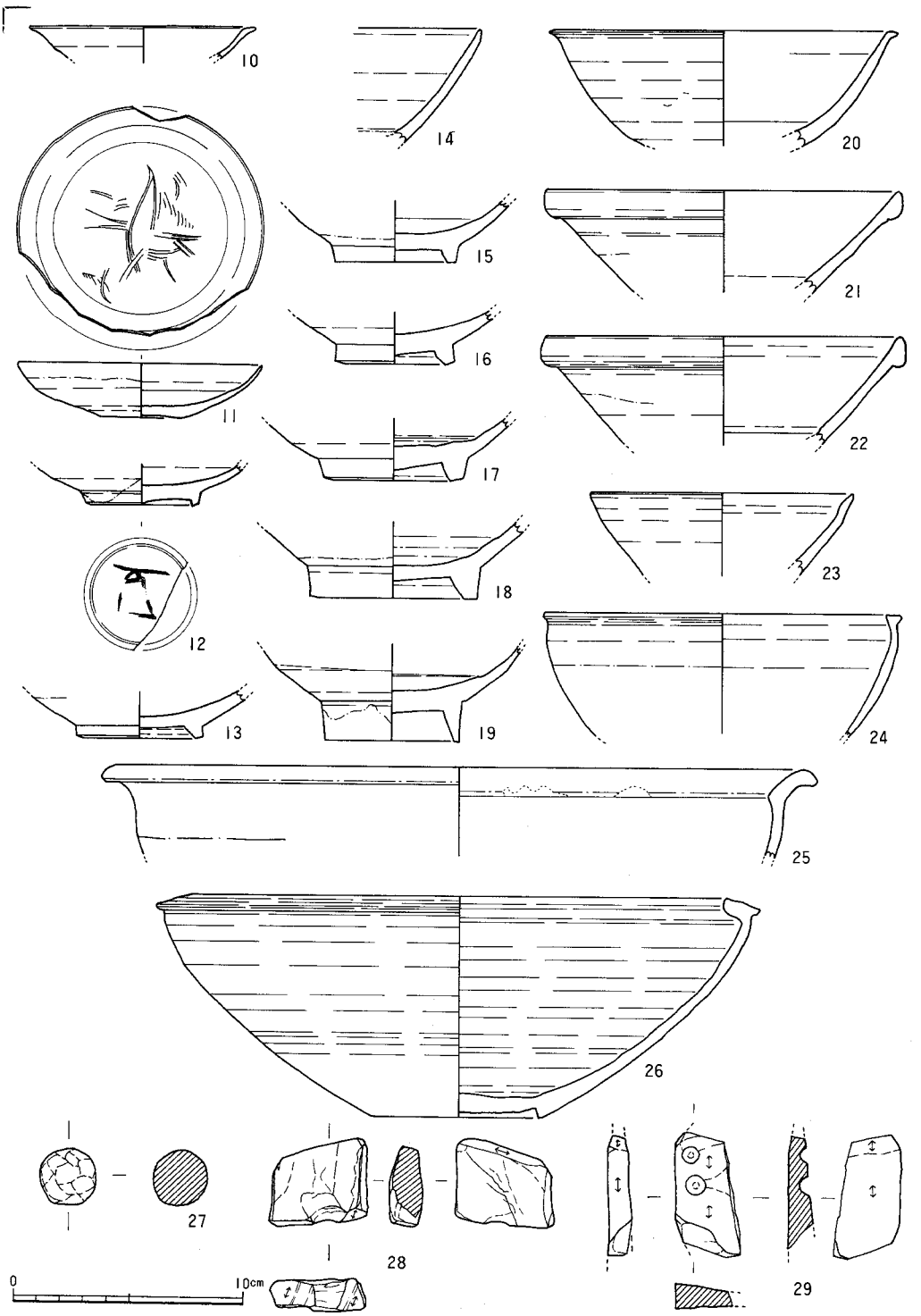


Fig. 64 108号土壙遺物実測図２ (1/3)

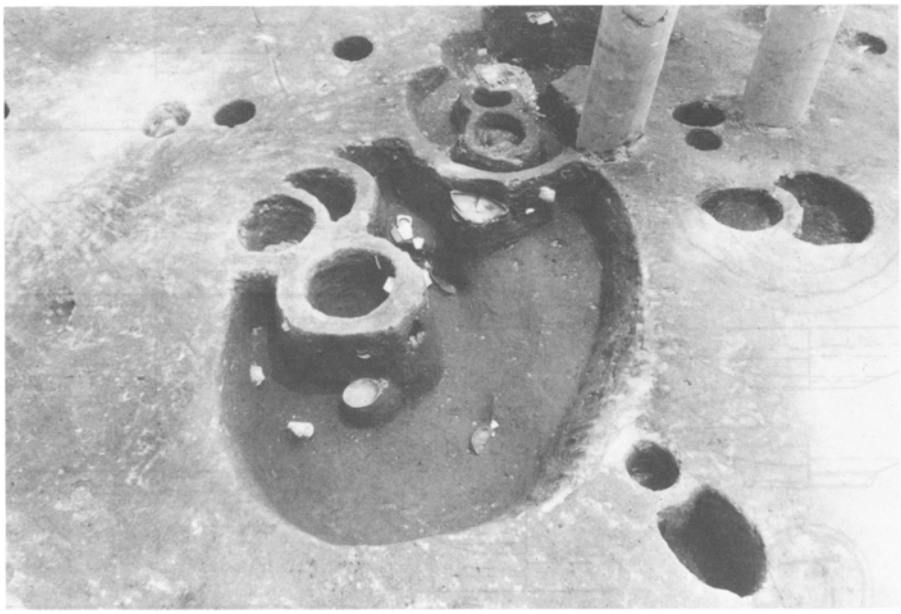


Fig. 65　108号土壙検出状況（北より）

Fig. 66　108号土壙遺物出土状況（北東より）

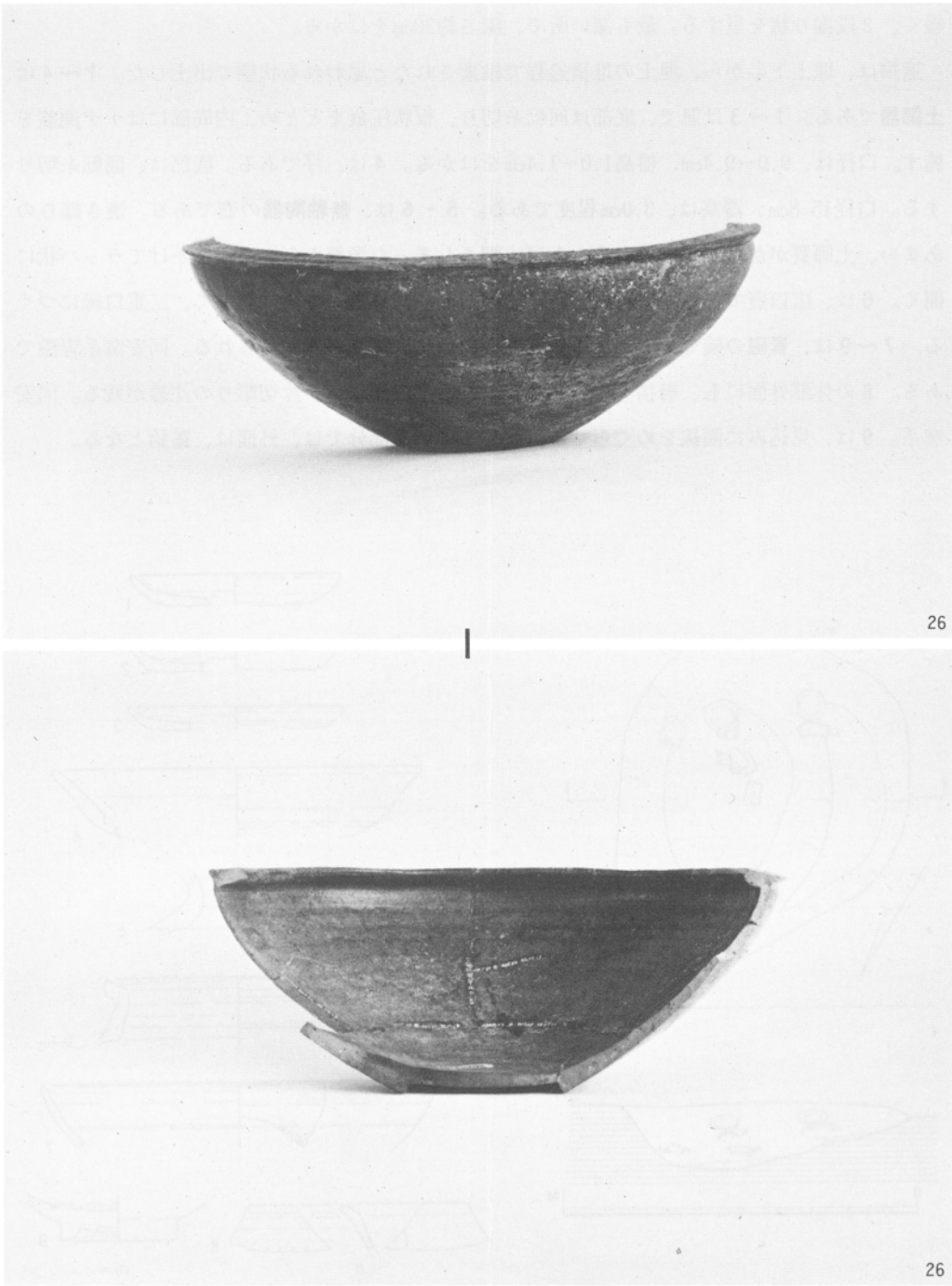


Fig. 67　108号土壙出土遺物（約1/3）

127号土壙（0699）

3面で検出した土壙である。長径94cm、短径84cmの不整楕円形を呈する。南東側壁の傾斜は緩く、2段掘り状を呈する。最も深い所で、深さ約20cmをはかる。

遺物は、埋土下半から、埋土の堆積過程で投棄されたと思われる状態で出土した。**1～4**は、**土師器**である。**1～3**は皿で、底部は回転糸切り、板状圧痕をとどめ、内底部にはナデ調整を施す。口径は、9.0～9.4cm、器高1.0～1.4cmをはかる。**4**は、坏である。底部は、回転糸切りする。口径15.8cm、器高は、3.0cm程度である。**5・6**は、**無釉陶器**の壺である。焼き締りのあまい、土師質がかった焼成である。**5**は、細くしまった頸部から、口縁にかけてラッパ状に開く。**6**は、広口壺である。口縁は外方に曲げた後、折り返して直に立てて、二重口縁につくる。**7～9**は、**青磁**の碗である。**7**の体部外面には、櫛描文がみとめられる。同安窯系青磁である。**8**の体部外面にも、櫛描文の一部がみられる。内面には、片切彫りの沈線が残る。同安窯系。**9**は、見込みに圏線をめぐらせる。遺存している部分では、外面は、露胎となる。

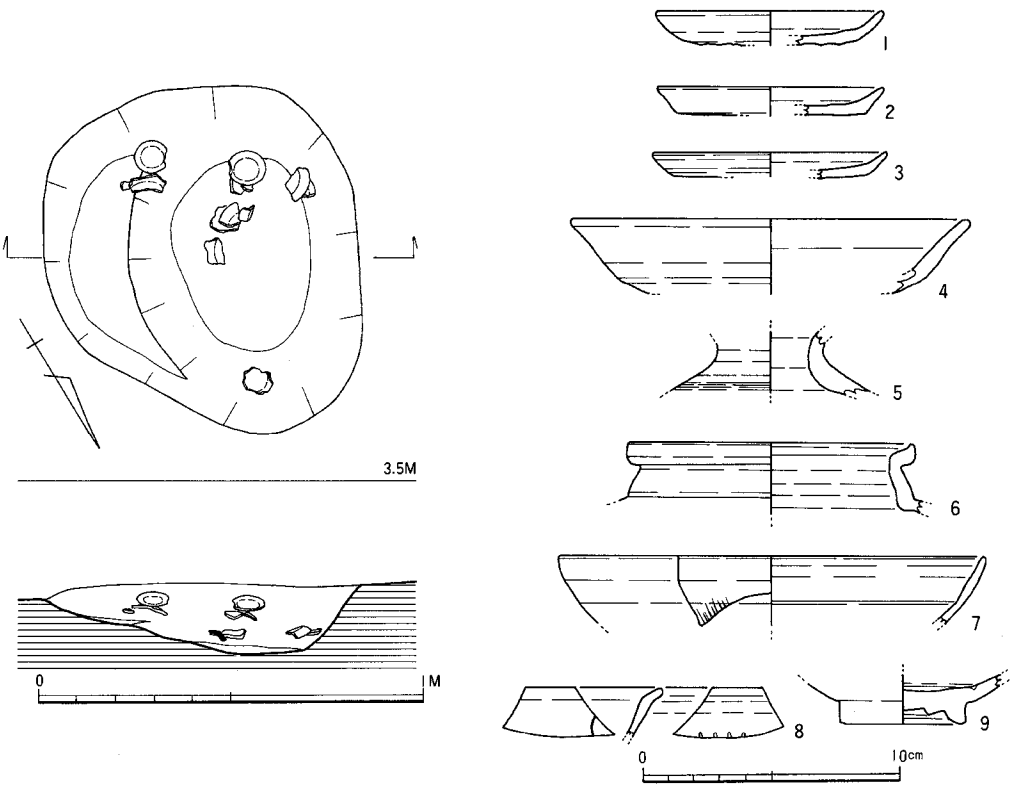


Fig. 68 127号土壙遺構実測図（1/20）、遺物実測図（1/3）

Fig. 69　127号土壙検出状況（南東より）

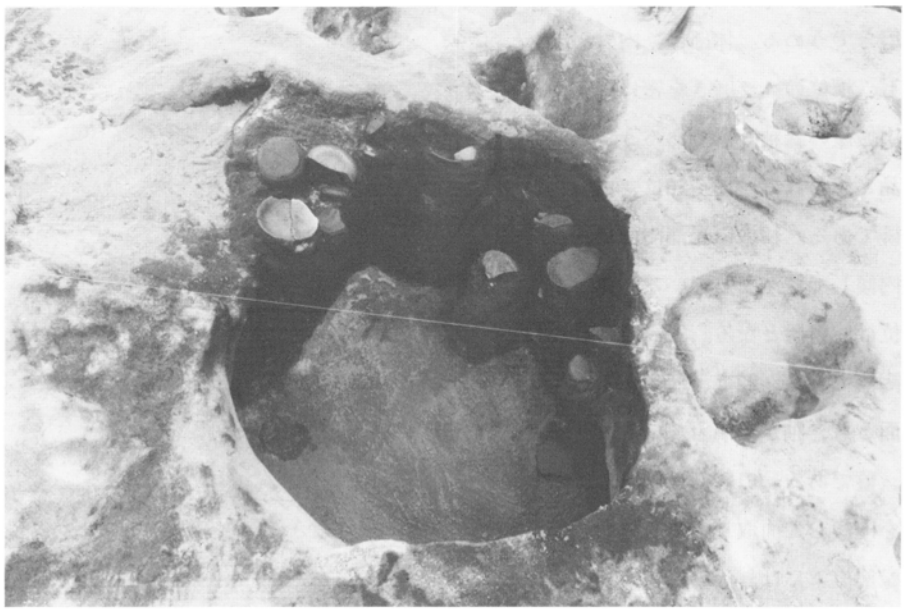


Fig. 70　135号土壙検出状況（北より）

135号土壙（0740）

4面で検出した土壙である。土壙の上端は、長径1.45m、短径0.95mの不整楕円形を呈するが、側壁中位で拡がり、巾着状を呈する。深さは、60cm前後をはかる。

遺物は、埋土中に混入する形で出土した。土師器、須恵器、緑釉陶器、白磁、青磁、陶器、石鍋等が出土した。**1～15**は、**土師器**である。**1～6**は、皿である。底部は、回転糸切りする。**2・4・5**において、板状圧痕と内底部のナデがみとめられる。口径7.0～9.1cm、器高1.1～1.6cmをはかる。口径が小さい割に器高が高い**1**と、口径が飛びはなれて大きい**6**を除けば、平均して、口径7.8cm、器高1.25cmとなる。**7～15**は、坏である。底部は、回転糸切りする。**11・14**において、外底部の板状圧痕と内底部のナデ調整がみとめられる。**7・10**には、外底部に板状圧痕はつくが、内底部のナデは行なわれていない。口径11.5～13.2cm、器高2.3～2.9cmをはかる。**7・15**の口縁部には、煤が付着しており、灯火器として使われたことを示している。**16・17**は、**須恵器**の坏蓋である。擬宝珠形のつまみを付け、口縁端部は下方に折りまげる。時期的には、8世紀後半頃におかれるもので、混入品であろう。**21**は、**緑釉陶器**の埦である。淡茶色で土師質、やや軟質気味の胎に、緑黄色の釉をうすく施す。畳付から高台内は、露胎である。高台は、削り出しで、蛇ノ目高台につくる。見込みは、やや雑な平行ヘラ磨きでうめる。体部は、内外面とも、横位のヘラ磨きを密に施す。山城産の緑釉陶器であろう。混入品と思われる。**18～20**は、**白磁**の碗である。**18**の口縁部内面は、やや内傾して稜をなしている。体部下位は、露胎となる。**22・23**は、**褐釉陶器**である。**22**は、壺である。内外面とも、釉がかかっている。**23**は、盤である。口縁部は肥厚し、端部を内傾して面取りする。外面の口縁部直下には、浅い凹線が横走している。

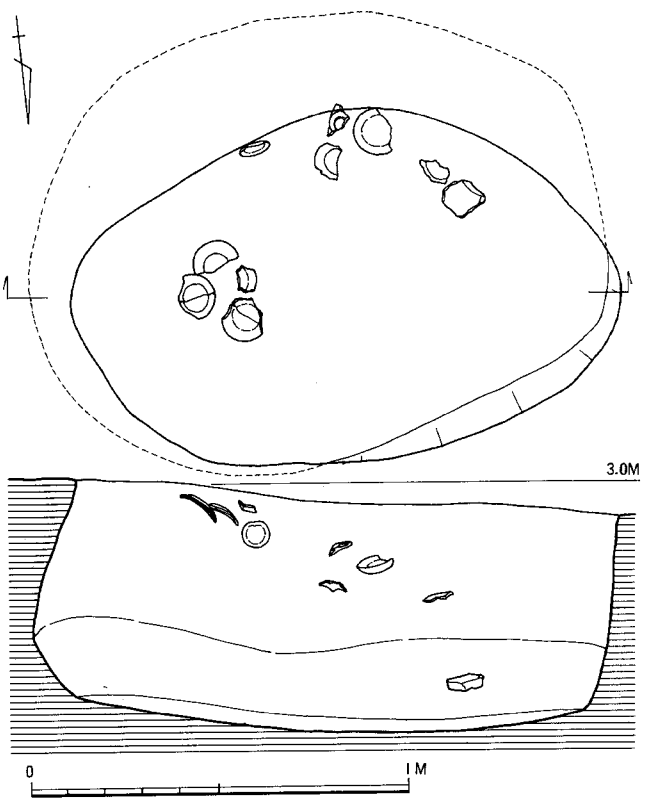


Fig. 71 135号土壙遺構実測図（1/20）

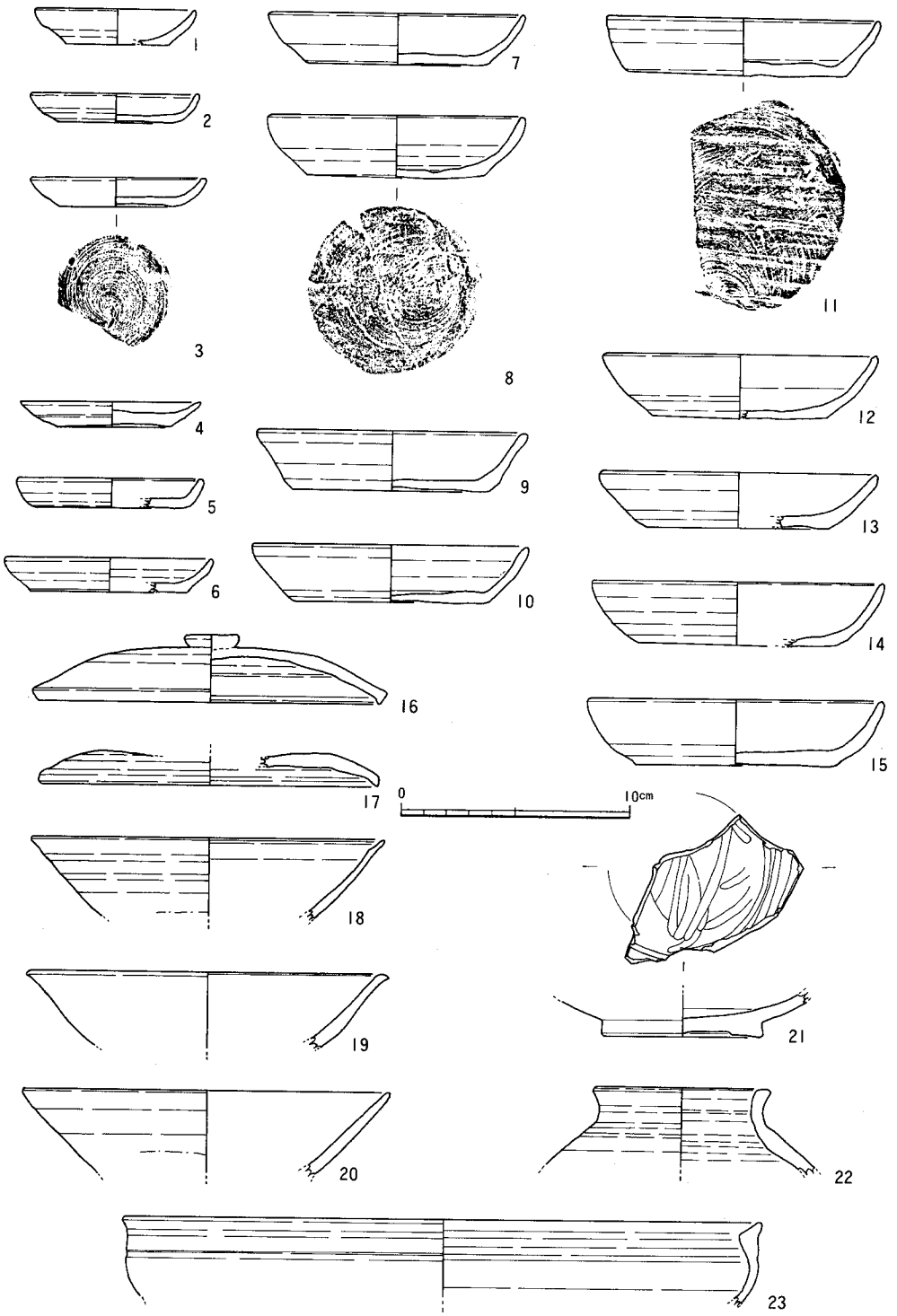


Fig. 72 135号土壙遺物実測図 (1/3)

215号土壙（1447）

4面第2区で検出した土壙である。近世の井戸に切られて、4分の1弱を失なっている。長軸1.6m、短軸1.5m（推定）の卵形を呈し、深さ44～62cmをはかる。

埋土中から、土師器、瓦器、青磁、白磁、陶器等が出土した。**1～13**は、**土師器**である。**1～7**は皿である。**2・3**は、底部をヘラ切り、他は回転糸切りする。すべて、外底部には板状圧痕、内底部にはナデ調整が施される。口径は8.8～9.4cm、器高0.9～1.3cmで、平均をとると、口径9.14cm、器高1.16cmという数値が得られる。**8～13**は、坏である。底部は回転糸切り、板状圧痕を持ち、内底部にはナデ調整がなされる。口径は、15.0～16.6cm、器高は、3.1～3.4cmをはかる。**14・15**は、**内黒土器**の埦である。内面は、幅広で浅いヘラ磨きを、密に施す。高台は、比較的高く、撥形に開くものである。体部と底部との境からすぐ内側に寄って、付けられている。**16**は、**瓦器**の埦である。見込みには、幅広で浅いヘラ磨きが、やや疎らに施される。ヘラ磨きの下地は、コテあてによって、平滑に整えている。低平な断面三角形の高台が、外底部につけられる。**17～29**は、**白磁**である。**17～19**は皿である。**18・19**の体部下半は、露胎となる。**20～27**は、碗である。**24**は、体部内面に、櫛描文で水波文を描く。**26**は、体部下位から外底部を露胎とするが、外底の露胎部分には、墨書がみられる。墨痕はかすれており、判読できない。**28・29**は、四耳壺である。高台から外底部は、露胎となる。**29**で、器高24.9cmをはかる。**30・31**は**青磁**である。**30**は、**越州窯系青磁**の碗である。体部下半は、露胎である。見込みには、重ね焼きの目痕がみられる。**31**は、体部外面に片切彫りで垂線を、内面には片切彫りと櫛描文で花文を描く。同安窯系。**32～39**は、**陶器**である。**32・33**は盤、**34**は鉢、**35・36・39**は壺、**37・38**は捏ね鉢である。**37・38**は、**無釉陶器**で、かたく焼きしまる。**38**の内面は、使用のため磨滅し平滑になっている。この他、**ガラス玉**が出土している。(Fig. 115－**16**)。

Fig. 73　215号土壙出土遺物（約1/3）

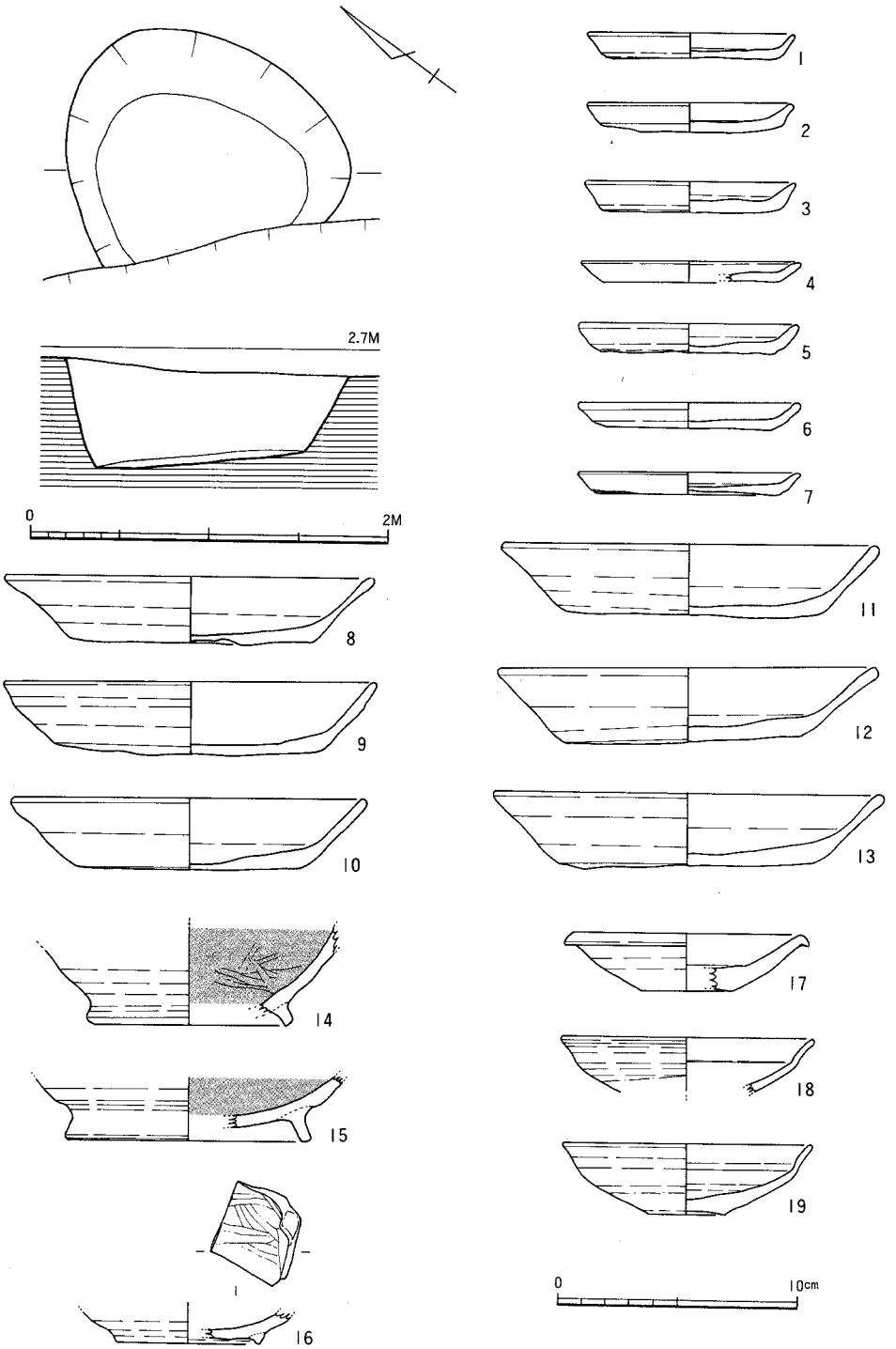


Fig. 74 215号土壙遺構実測図（1/40）、遺物実測図１（1/3）

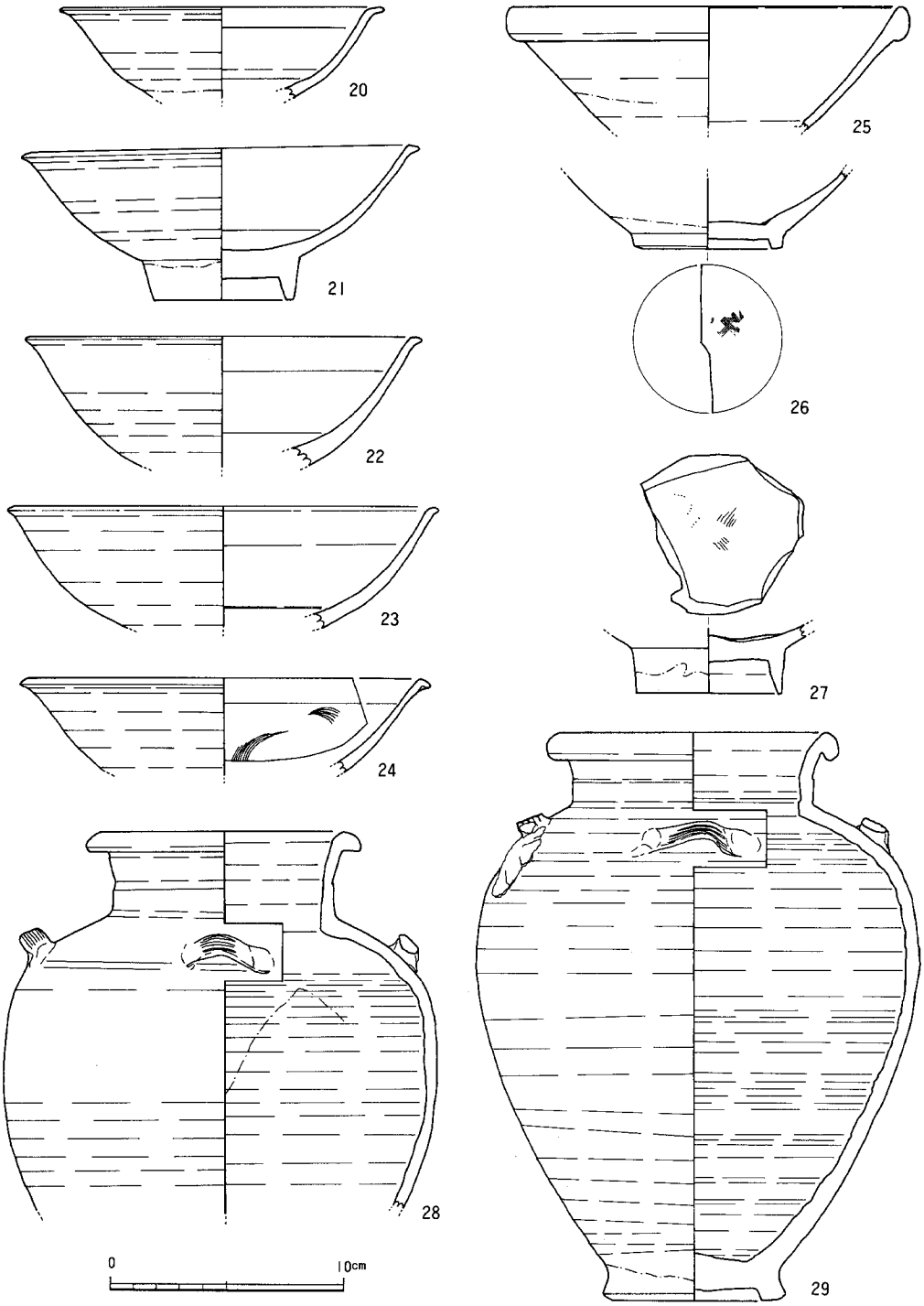


Fig. 75 215号土壙遺物実測図２ (1/3)

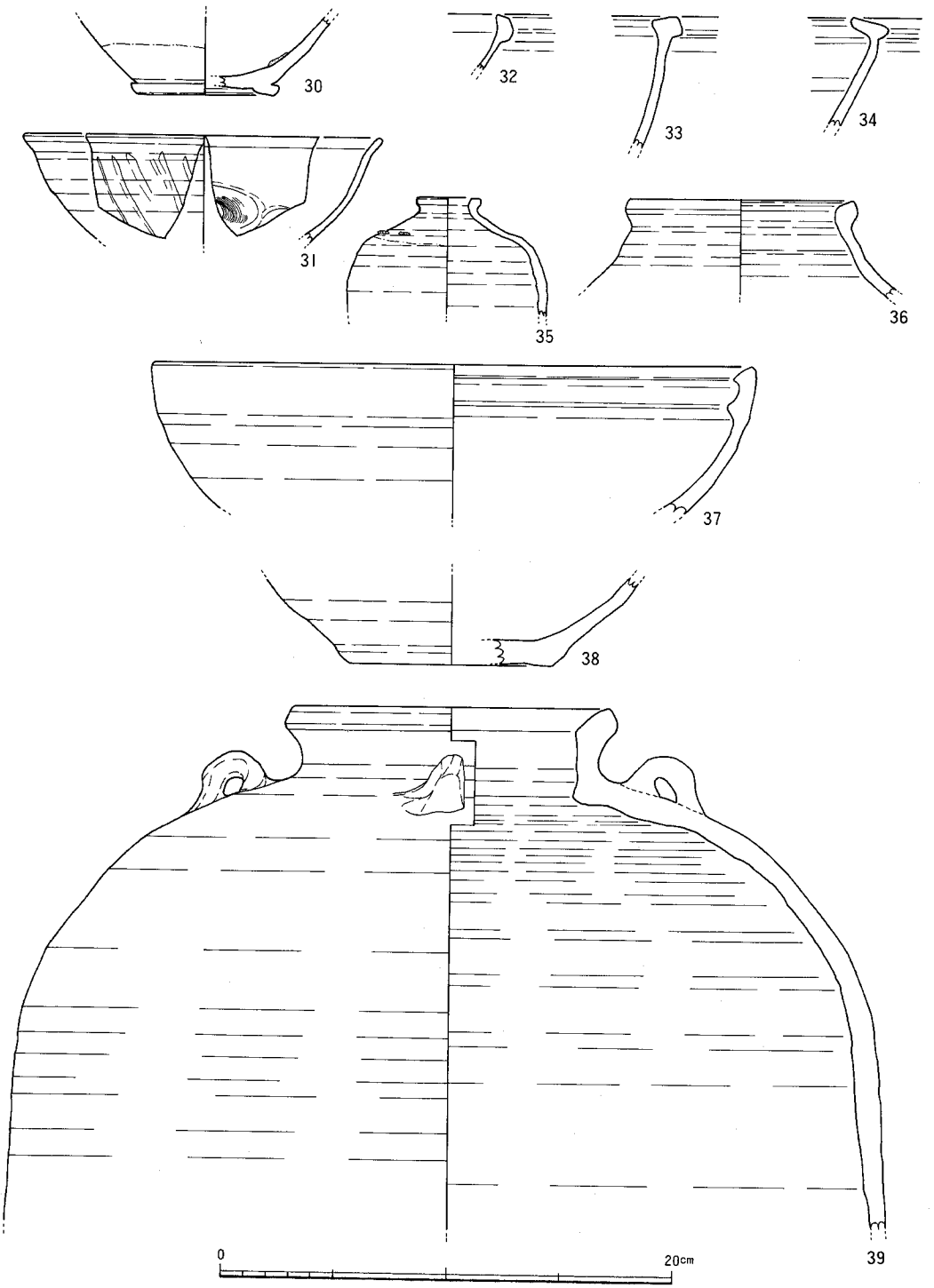


Fig. 76 215号土壙遺物実測図３ (1/3)

（2） 地下室状遺構

172号土壙（1127）

4面で検出した遺構である。方形の掘りかたの四壁に、板材を立て並べるもので、四隅には木杭が打ちこまれていた。掘りかたは、長辺2.2～2.4m、短辺1.96～2.04mで、やや胴張りのある長方形を呈する。深さは、最も残りの良い北西壁側で、約136cmをはかる。室は、この掘りかたの内側に、2.08×1.76mの長方形に板材を立て並べたもので、床面積は、3.2平方メートルほどになる。側壁の板材は、四壁全面で確認されたが、北西壁は地山の砂の崩落のため、南東壁は既存建築物のコンクリート基礎杭打ちこみによる攪乱で、遺存状態は良くなかった。

板材はすでにほとんどが朽ちて、木質の痕跡を検出したにとどまった。それによると、板材は幅5～15cmで、一定していない。長さは、長いもので98cmまで確認しているが、もっと長かった可能性もある。板材は、すべてが垂直方向に揃うものではなく、例えば南西側壁では、向って右手の板材が垂直に近いのに対し、左手に行き次第傾斜している。板材は、すき間なくビッシリと立て並べたものではなく、板と板との間があく部分もみられる。ただし、板と板の間

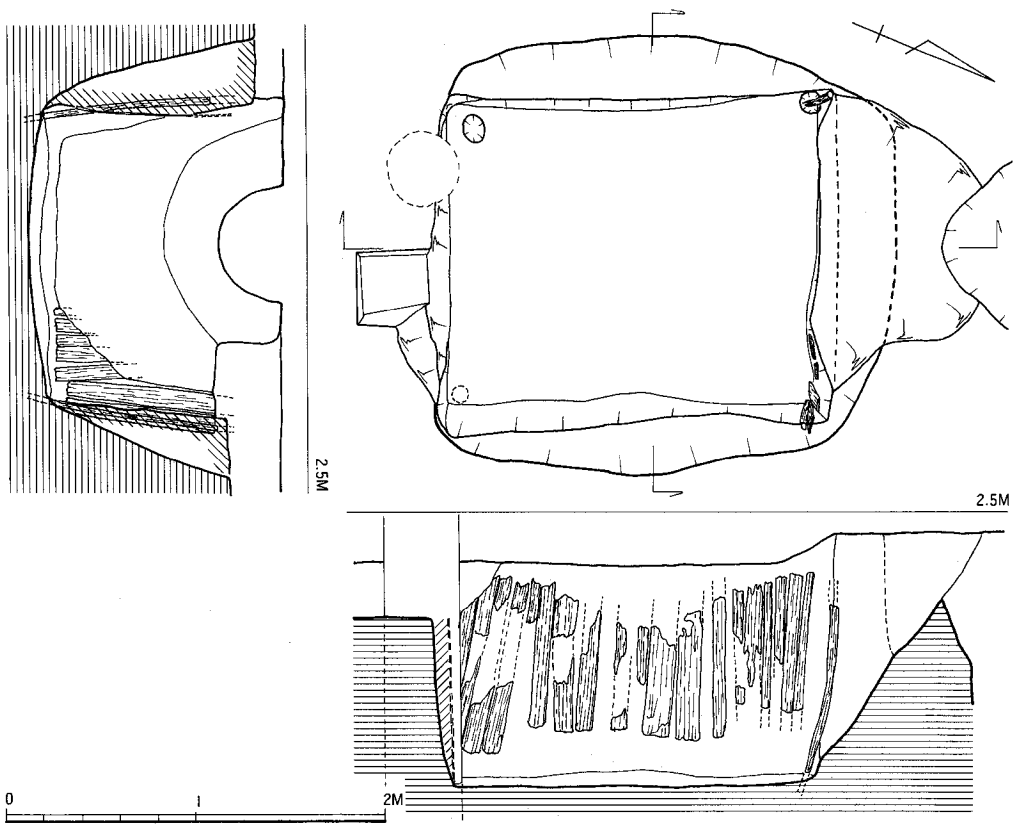
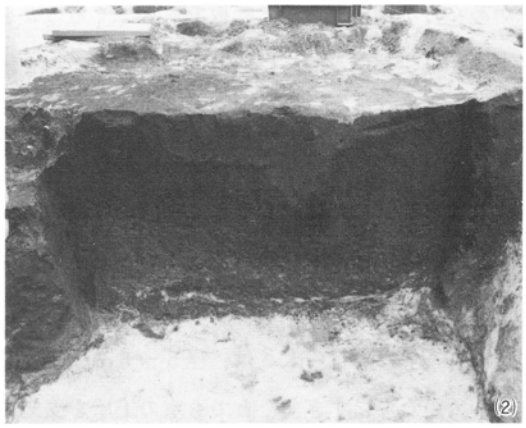
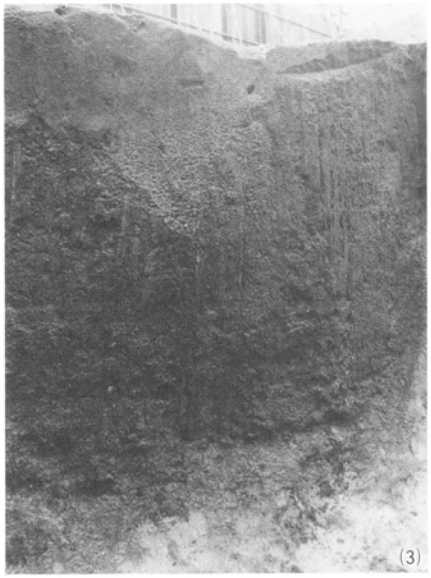
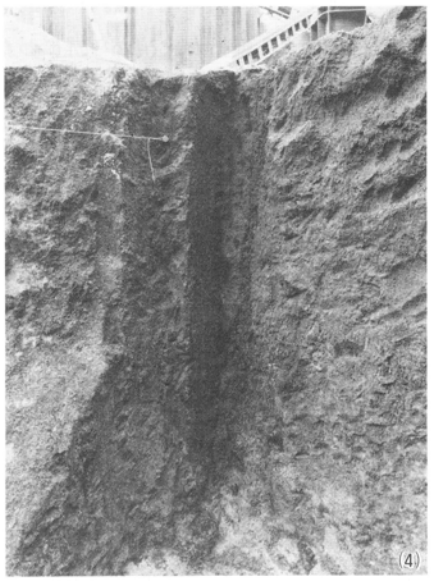


Fig. 77 172号土壙遺構実測図（1/40）







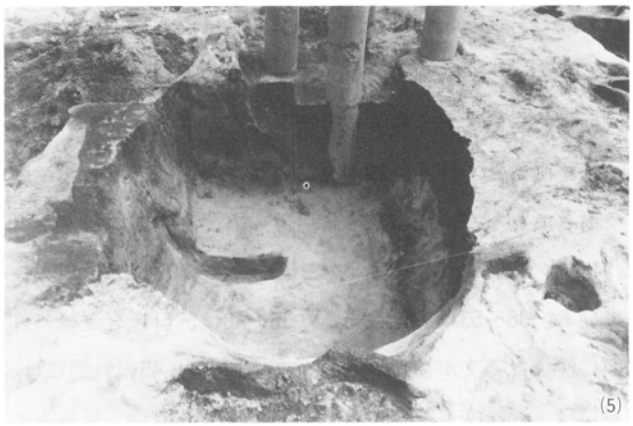


Fig. 78 172号土壙検出状況
（1） 検出状況（北西より）
（2） 南西壁（北東より）
（3） 板壁検出状況（南西壁）
（4） 北隅杭検出状況
（5） 掘りかた完掘状況（北西より）

があく方が悕で、あくまで板で壁をつくることを目的としていたと考えられる。また、板材の下端部は、レベル的には揃っていない。これを仔細にみると、板材が同じ傾きで接して並べられている部分では、板の下端も直線的にそろっている。言い換えると、仮りに板材が右に傾いて立てられたとするとこれに接した数枚の板列の下端は、左上りの直線にそろっているということである。これは、おそらく一回の作業の単位（幅）を表すものであろう。

室の四隅には、木杭が打たれていた。杭の先端は、地山砂層中に深く打ちこまれ、確認できなかったが、床面から15cm以上は下に刺っていた。木杭は、側壁板材の内側に、板材に接して打たれていた。杭の太さは、径５～６cm（遺存していた木質は、朽ているため２～３cmにまで縮んでいた）にすぎず、とても室の上屋を支えることは不可能である。おそらくは、立てならべただけの側壁の板材をおさえるためのもので、痕跡すらなかったが、角々の杭を横に結んで側壁の板材を押える横桁が、杭から杭にわたされていたものと推測される。

なお、掘りかたの側壁が室の板壁に対して傾斜し、その間にすき間ができるのは、地山が砂のため垂直に掘りおとすのが不可能だったことによるのであろう。おそらく、板壁を立て並べながらこのすき間に砂を充塡し、その土圧を内側からの杭と横桁で受けることによって、側壁の板壁を固定したものと思われる。

遺物は、室の埋土中から主として出土した。土師器・瓦器・白磁・青磁・青白磁・陶器・銅銭等が、出土している。**1～25**は、**土師器**である。**1～16**は、皿である。**4・12・15**は、底部をヘラ切り、他は回転糸切りする。**15**を除いて、板状圧痕と内底ナデ調整がみられる。口径8.6～9.8cm、器高0.8～1.3cmで、平均すると、各々、9.1cm、1.1cmとなる。**17～25**は、坏である。**17・18・23・25**は、底部をヘラ切りする。外底部には、板状圧痕がみられ、内底部はコテをあてて平滑に仕上げる。他は、回転糸切りである。**21**において底部の遺存が小さいため確認できないのを除けば、すべて外底部の板状圧痕と内底ナデ調整を持つ。口径が他に比べて大きく、その割に器高が低い**25**（口径17.0cm、器高2.55cm）を除けば、口径14.2～16.2cm、器高2.6～2.85cmをはかる。平均値は、各々15.2cm、3.16cmである。**26～30**は、**瓦器**の埦である。すべて在地系である。**26・28**の体部内面は、全周をおそらく４分割したヘラ磨きがなされている。**27・30**は、内面をコテあてによって平滑に仕上げる。**29**の見込みは、一方向の平行ヘラ磨きである。**26**の体部外面は、密にヘラ磨きされるが、他は疎らに磨くのみで、指頭圧痕がみとめられる。**31**は、**灰釉陶器**の短頸壺の小片である。**32～53**は、**白磁**である。**32～35**は皿で、**33・35**の内面には、櫛描文が施されている。**36～53**は、碗である。**36～40**は、口縁を玉縁に作る。**41**は、小碗の底部であろう。内面に沈線で弧文が描かれる（花文か）。**44・45**の外面には、蕨手状の沈線文が垂下する。**45**の内面には、櫛描文もみとめられる。**47・50・51**は、見込みの釉を輪状に掻きとるものである。**54・55**は、**青白磁**である。**54**は蓋である。上面に菊花状のス

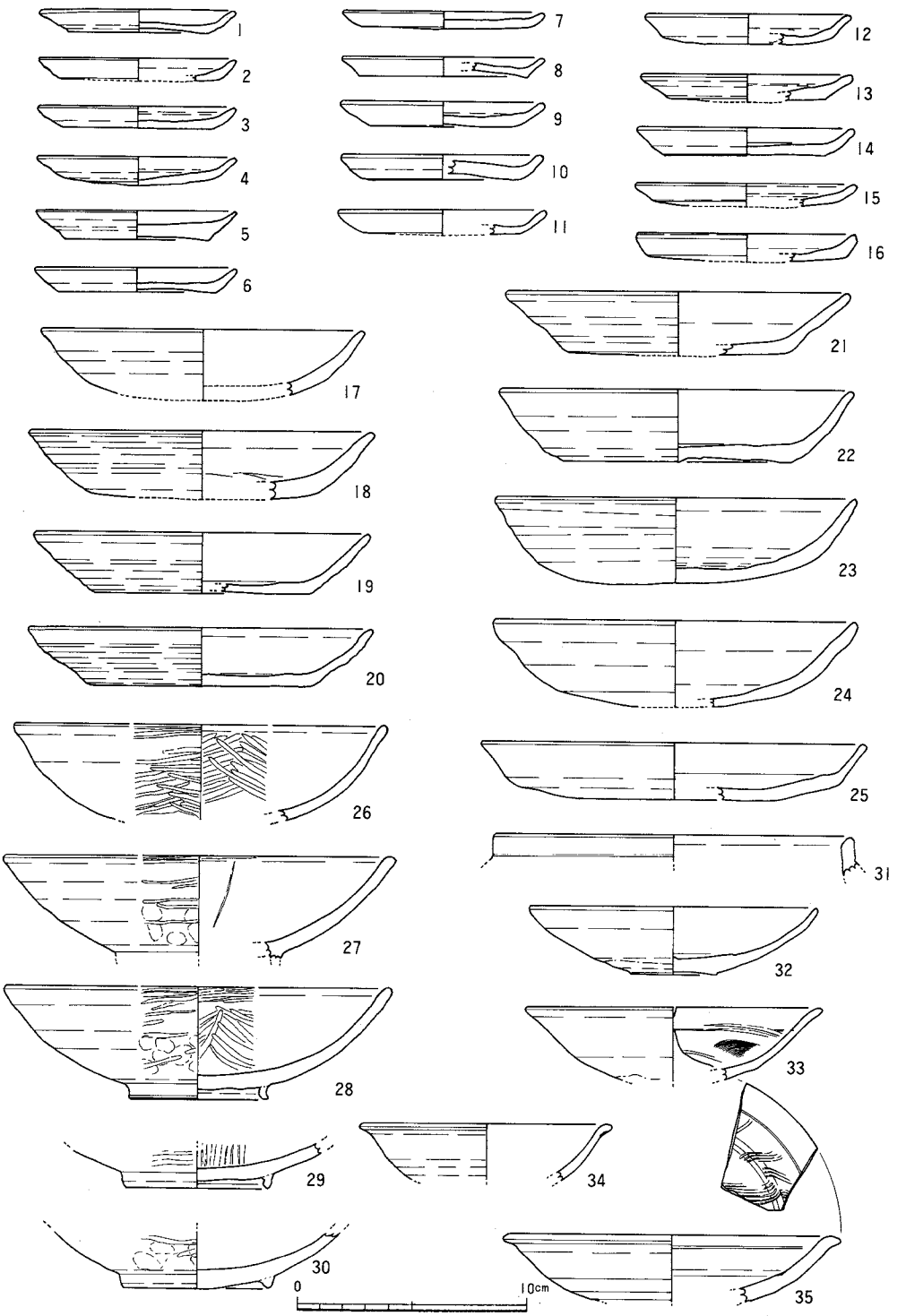


Fig. 79 172号土壙遺物実測図１ (1/3)

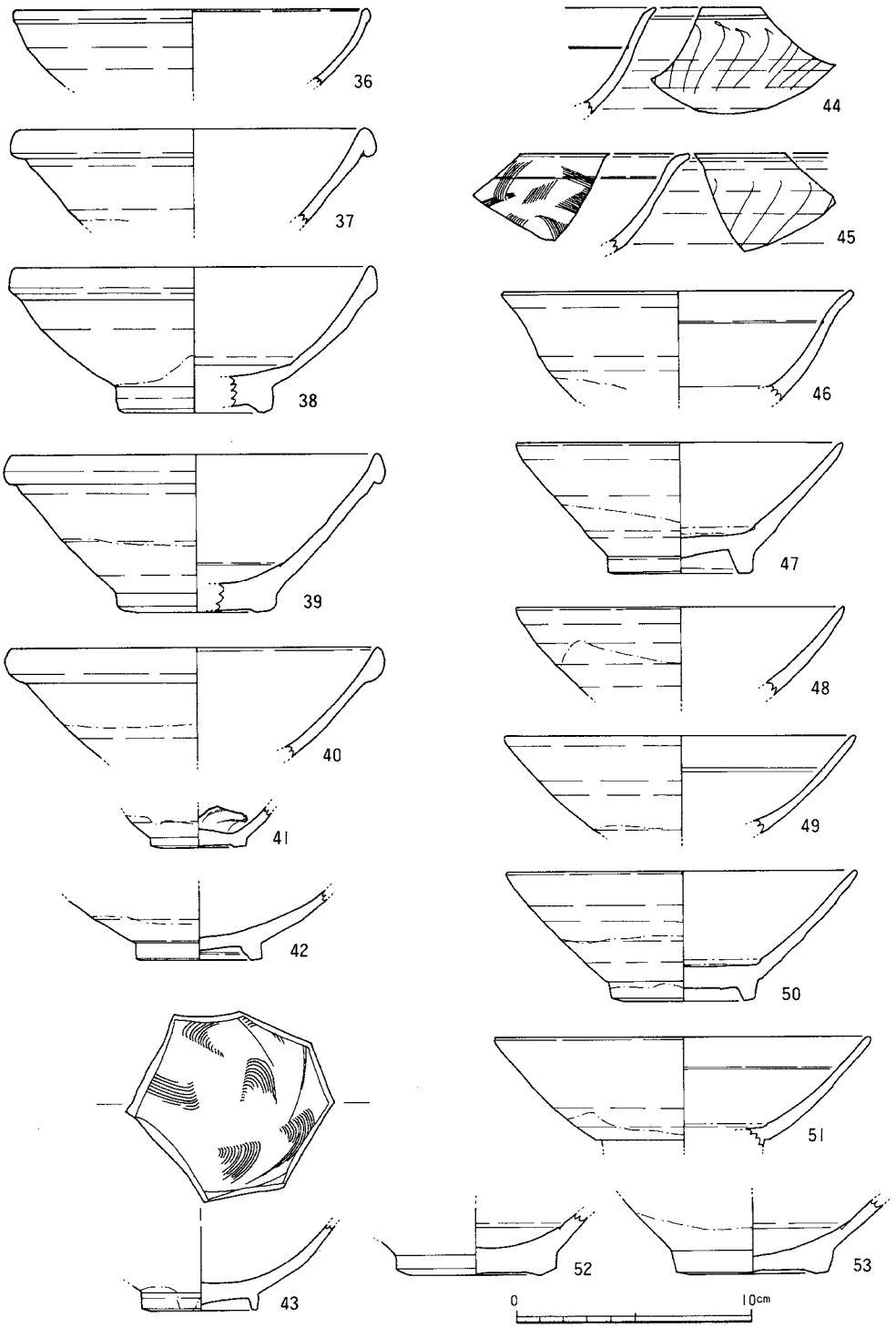


Fig. 80 172号土壙遺物実測図２ (1/3)

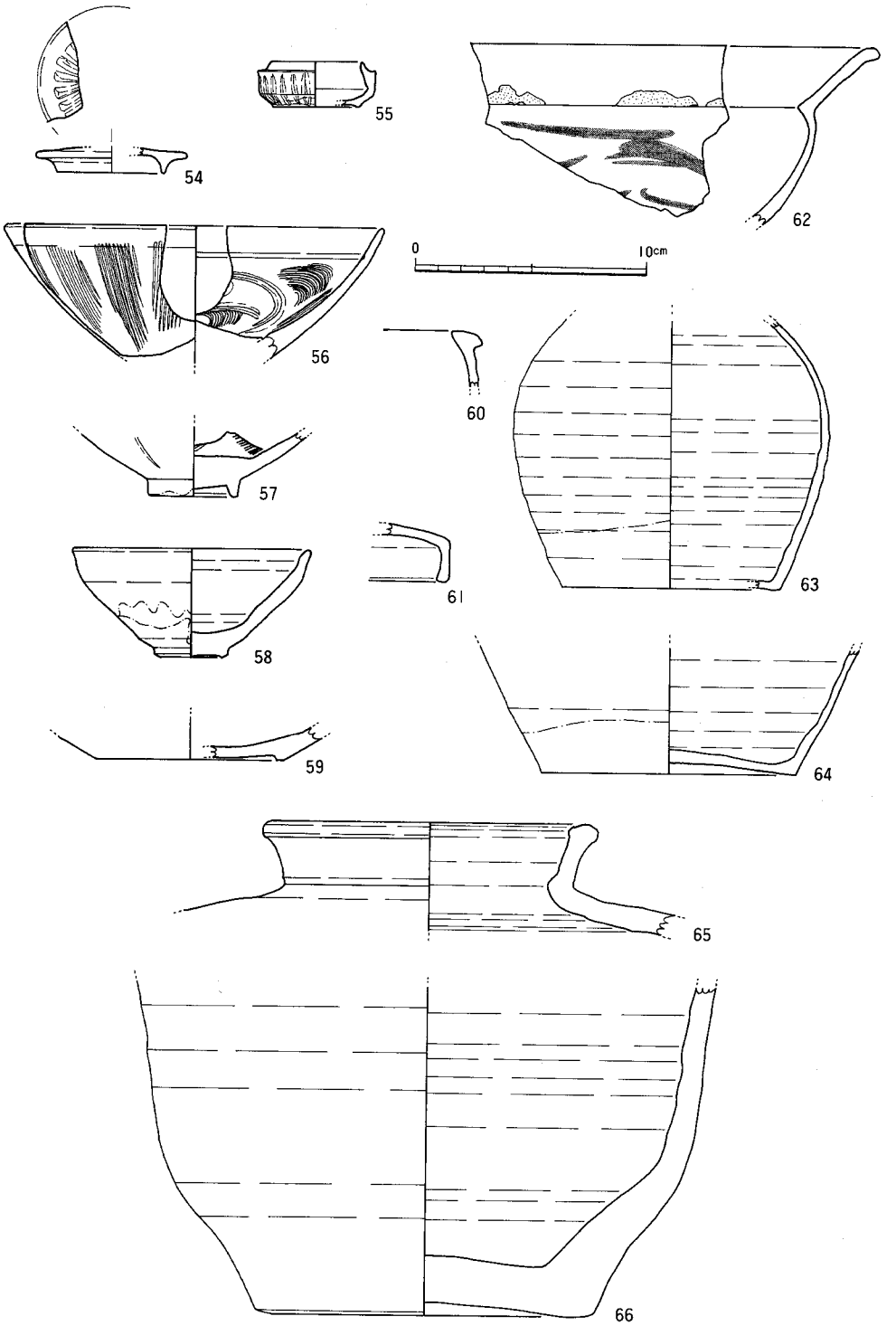


Fig. 81 172号土壙遺物実測図３ (1/3)

タンプを押す。**55**は、合子の身である。**56・57・59**は、**青磁**である。**56・57**は、同安窯系青磁の碗で、体部外面に櫛描きで猫描手の沈線を、内面は、片切彫りで花文を描き、その間を櫛描文で埋める。**58・60～66**は、**陶器**である。**58**は、いわゆる天目茶碗で、黒褐色の釉をたっぷりと施す。**61**も黒褐色の釉を施す蓋である。口唇部は、露胎となる。**60・62**は、盤である。**62**は、黄釉を施し、鉄絵で雲文を描く。**63・64**は、壺である。茶褐色の釉を施す。体部下位から外底部は、露胎となる。**65・66**は、甕である。**65**は、頸部内面から外面に、灰褐色の釉を施す。**66**は、体部外面に茶褐色の釉を施す。外底部は、露胎である。焼けひずみ、焼きぶくれがみられ、胴部はややひずんでいる。この他、**銅銭**が３枚、出土している。内訳は、「開元通寶」（初鋳621年）１枚、「咸平元寶」（初鋳999年）１枚、解読不能１枚である。

以上の遺物から、遺構の年代は、12世紀中頃と考えられる。

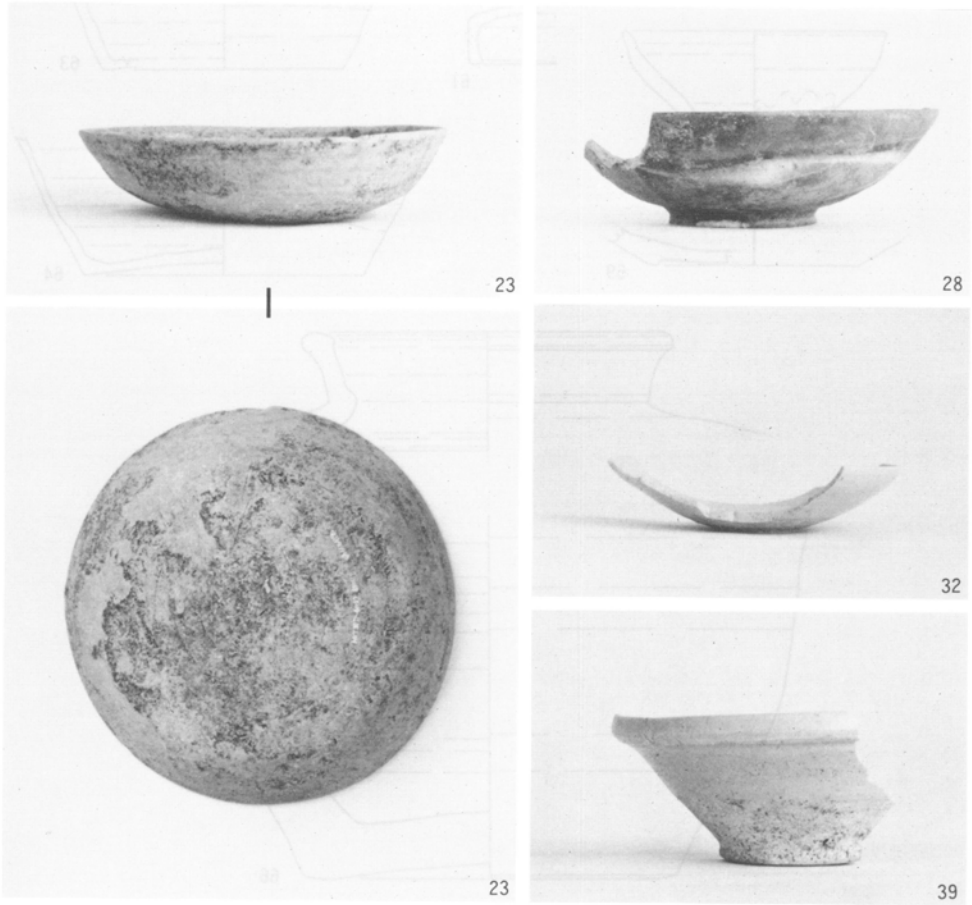


Fig. 82　172号土壙出土遺物１（約1/3）

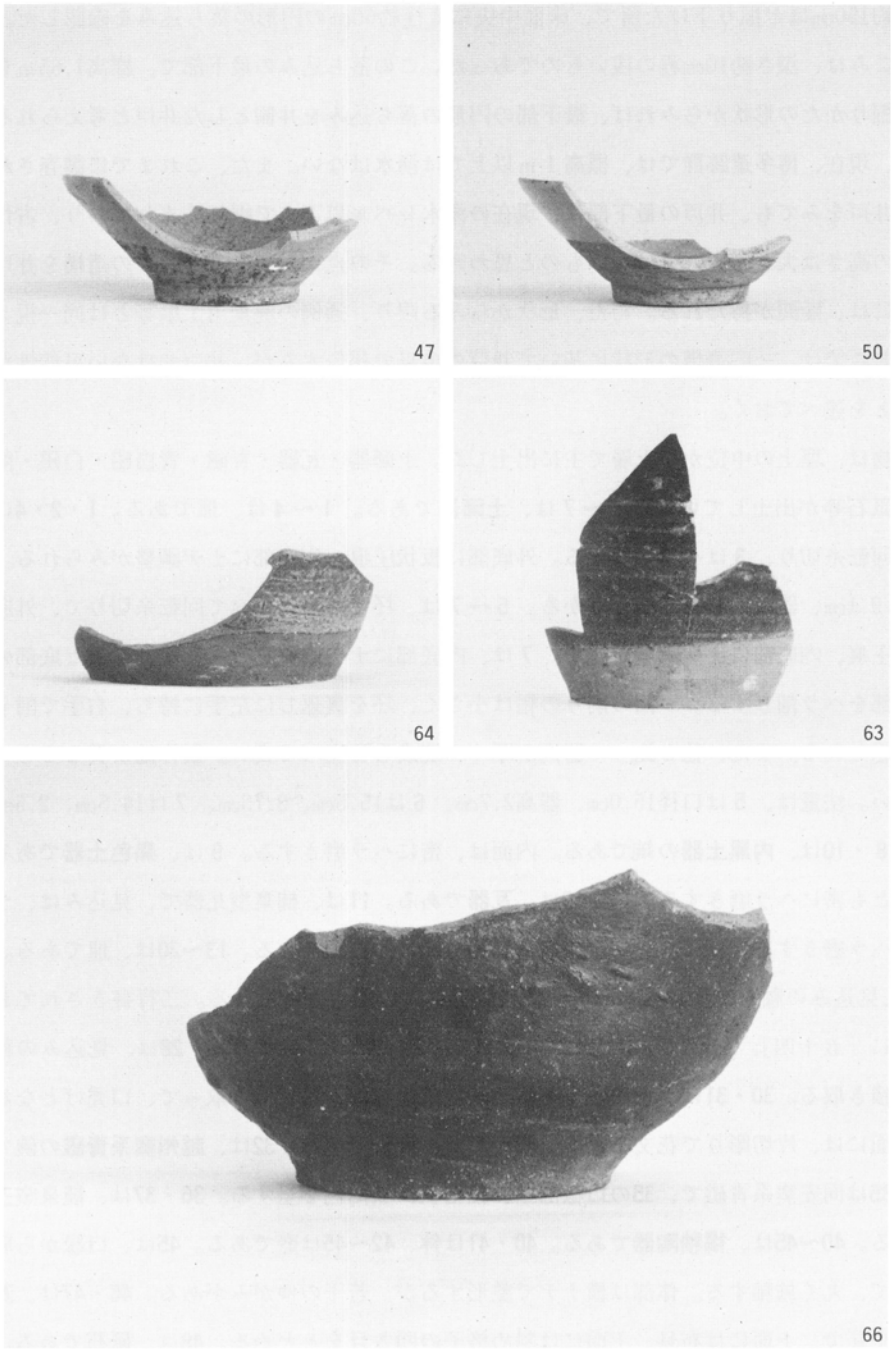


Fig. 83　172号土壙出土遺物２（約1/3）

（3） 井戸

71号土壙（0228）

２面で検出した、井戸状の土壙である。上端は、長径1.75ｍ、短径1.45ｍの楕円形を呈する。深さ約150cmほど掘り下げた所で、床面中央に直径約60cmの円形の落ち込みを確認した。この落ちこみは、深さ約10cm程の浅いものであった。この落ち込みの最下部で、標高1.65ｍをはかる。掘りかたの形状からみれば、最下部の円形の落ち込みを井側とした井戸と考えられる。ただし、現在、博多遺跡群では、標高１ｍ以上では湧水はない。また、これまでに調査された周辺の井戸をみても、井戸の最下部は、現在の湧水レベル以下まで掘り込まれており、古代以来湧水の高さは大きく変っていないものと思われる。その点から考えると、この遺構を井戸とするのには、疑問が持たれる。ただ、形状からみる限り、通例の廃棄用土壙等とは同一視しがたい。ここでは、一応遺構の形状に基いて井戸の項目で報告するが、井戸ではない可能性が大きいことを述べておく。

遺物は、埋土の中位から上層で主に出土した。土師器・瓦器・青磁・青白磁・白磁・陶器・瓦・砥石等が出土している。**1～7**は、**土師器**である。**1～4**は、皿である。**1・2・4**は、底部を回転糸切り、**3**はヘラ切りする。外底部に板状圧痕、内底部にナデ調整がみられる。口径8.6～9.1cm、器高0.9～1.2cmをはかる。**5～7**は、坏である。すべて回転糸切りで、外底部に板状圧痕、内底部にナデ調整を施す。**7**は、内底部にナデ調整を行った後、体部と底部の境の屈曲部をヘラ削りする。一回の削りの幅は小さく、坏を裏返しに左手に持ち、右手で削ったものと思われる。また、他と比べて器肉が厚く、焼成も目立って良い。製作地が異なるものと考えたい。法量は、**5**は口径15.0cm、器高2.7cm、**6**は15.5cm、2.75cm、**7**は14.5cm、2.5cmである。**8・10**は、**内黒土器**の椀である。内面は、密にヘラ磨きする。**9**は、**黒色土器**である。内外面とも密にヘラ磨きする。**11・12**は、**瓦器**である。**11**は、楠葉型瓦器で、見込みは、ラセン状にヘラ磨きする。**12**は、在地産である。**13～29**は、**白磁**である。**13～20**は、皿である。**13・14**は、見込みの釉を輪状に掻き取る。**19**の底部には、墨書がみられる。二行書きされており、右行に「五十四」、左行に「市丸ヵ」と読める。**21～29**は、碗である。**28**は、見込みの釉を輪状に掻き取る。**30・31**は、**青白磁**である。**30**の口縁部は、釉を掻き取って、口禿げとなる。**31**の外面には、片切彫りで花文を描く。**32～37**は、**青磁**である。**32**は、**越州窯系青磁**の碗である。**33～35**は同安窯系青磁で、**35**の口縁部は、覆輪状に黒褐色を呈する。**36・37**は、龍泉窯系青磁である。**40～45**は、**褐釉陶器**である。**40・41**は鉢、**42～45**は壺である。**45**は、口縁から肩部にかけて、丸く施釉する。体部は横ナデで整形するが、若干のゆがみがある。**46・47**は、**瓦**である。平瓦で、上面には布目、下面には斜め格子の叩き目をとどめる。**48**は、**砥石**である。裏面には割り取ったままの面を残し、他の面はすべて砥面に使う。

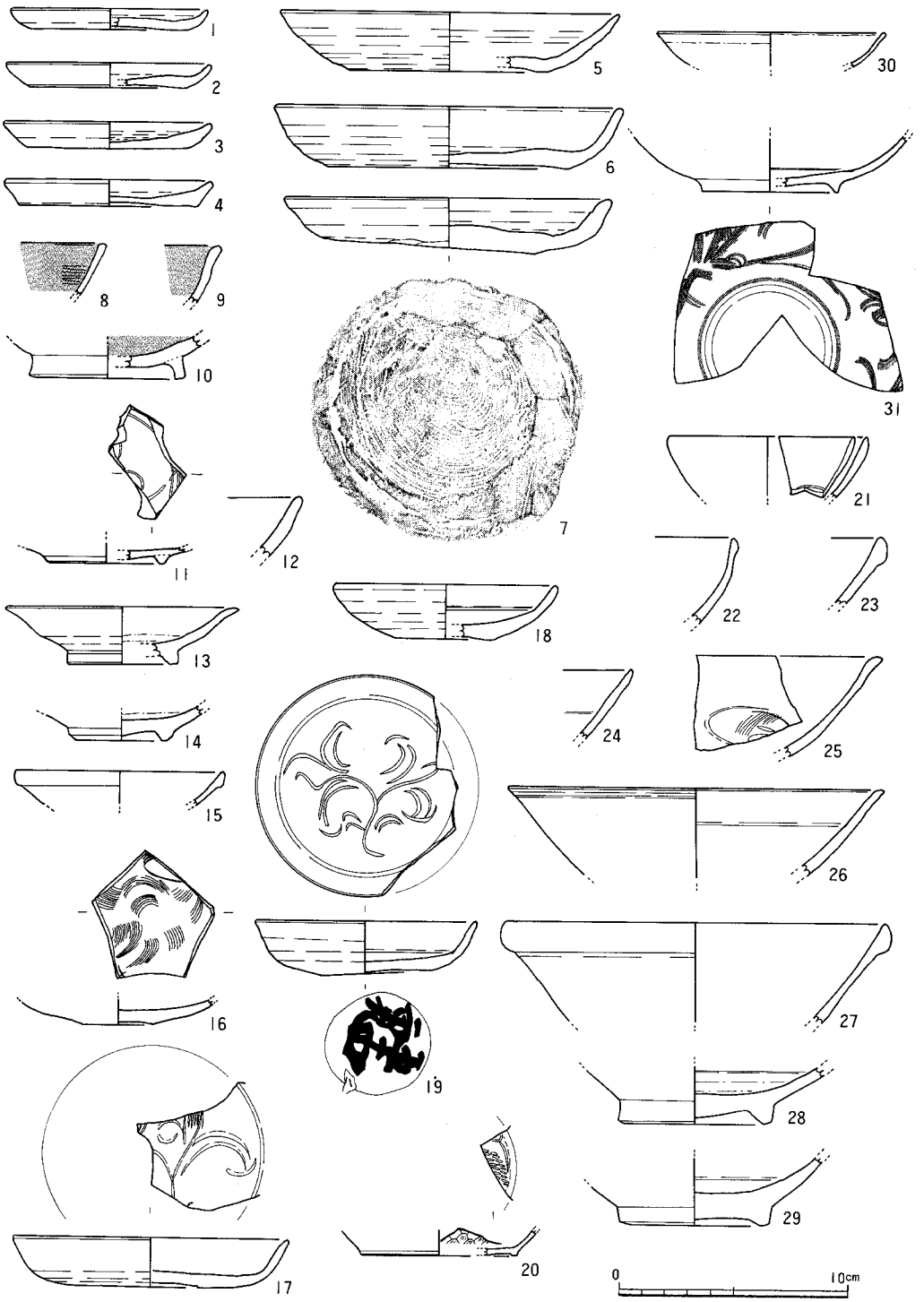


Fig. 84 71号土壙遺物実測図1 (1/3)

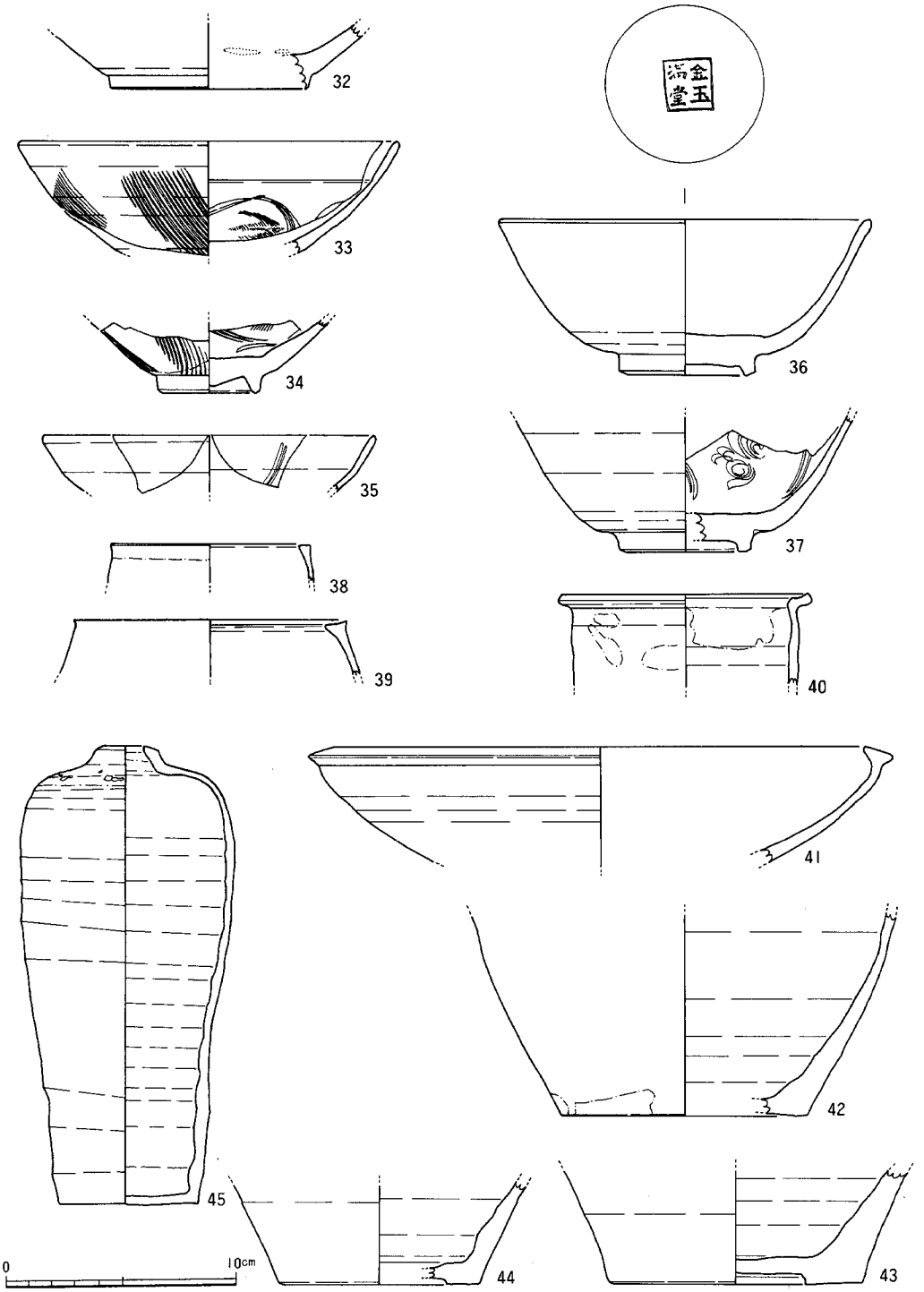


Fig. 85 71号土壙遺物実測図２ (1/3)

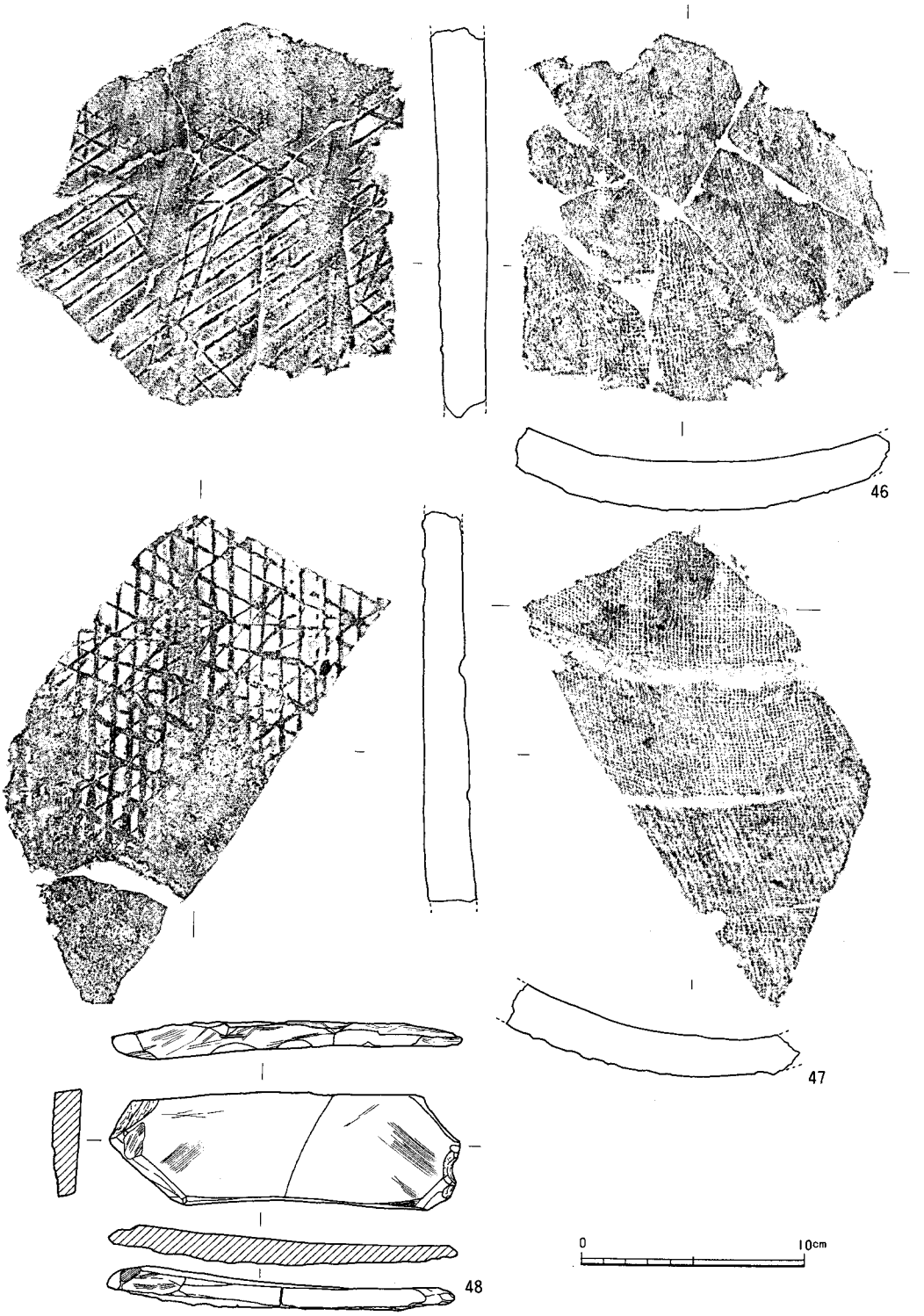


Fig. 86 71号土壙出土遺物実測図３ (1/3)

Fig. 87　71号土壙検出状況（西より）

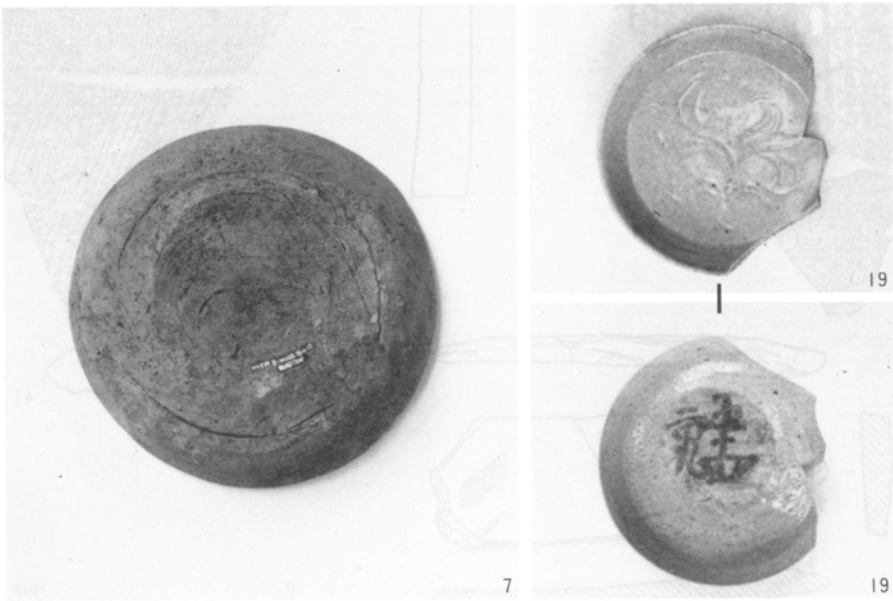


Fig. 88　71号土壙出土遺物１（約1/3）

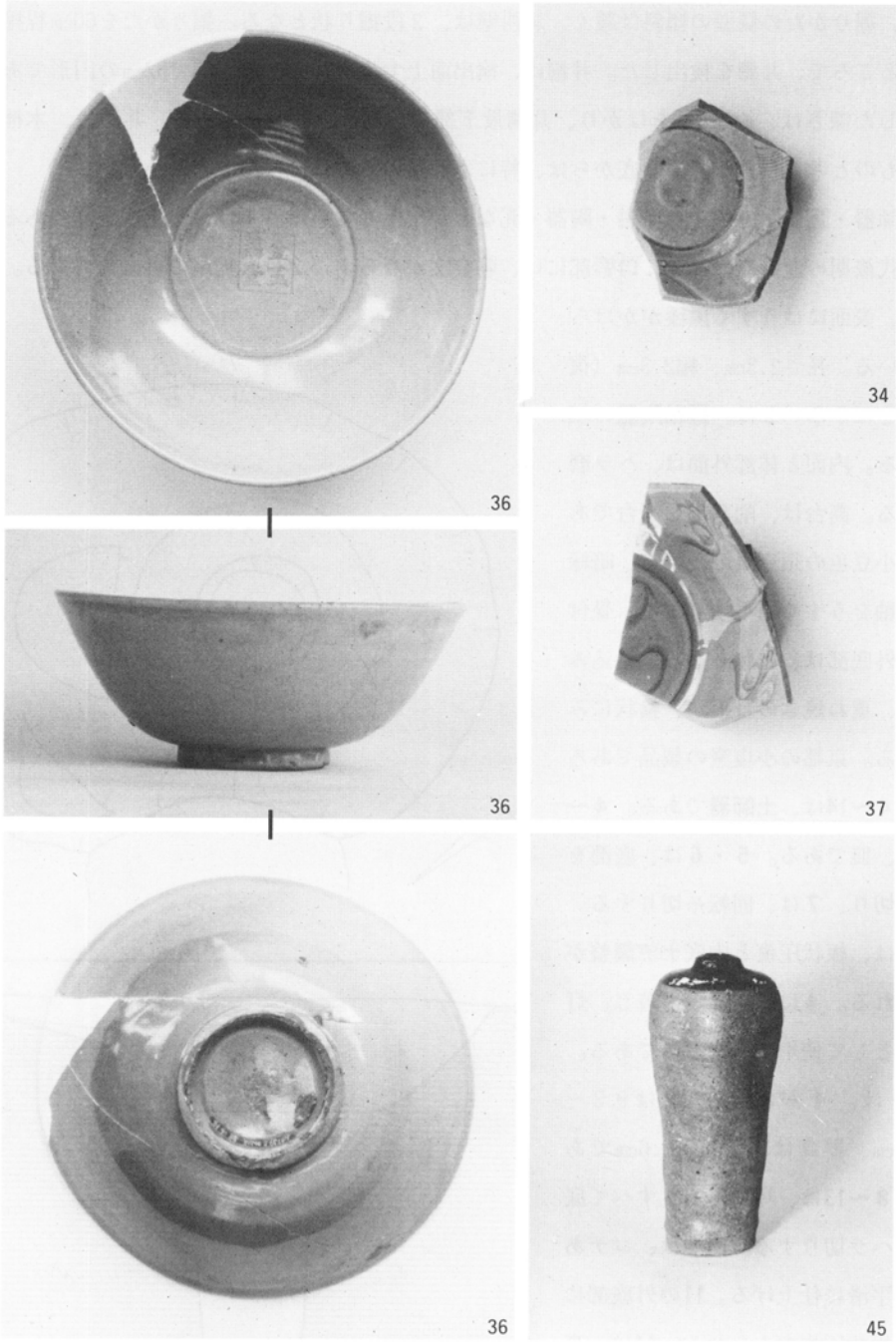


Fig. 89　71号土壙出土遺物２（約1/3）

27号井戸（1139）

4面で検出した井戸である。掘りかたは、長径2.8m、短径2.5m（推定）の不整楕円形を呈する。掘りかたの側壁の傾斜は緩く、北西壁は、2段掘り状となる。掘りかたを60cm程掘り下げたところで、井側を検出した。井側は、検出面上で直径70cm、最下部で52cmの円形である。調査した深さは、約1.8mをはかり、井側最下部の標高は、0.94mである。井側は、木桶を重ねたものと考えられる。井側底からは、特に水溜状のものは、検出できなかった。

土師器・瓦器・白磁・青白磁・陶器・瓦などが出土している。**1**は、**弥生式土器**である。弥生時代後期の壺の口縁部で、口唇部には、刺突文がならぶ。**2**は、**鉈尾**の裏金具である。青銅製で、表面にはうすく黒漆がかけられている。長さ2.3cm、幅2.3cm（復原）をはかる。**3**は、**緑釉陶器**の埦である。内面と体部外面は、ヘラ磨きする。高台は、削り出し高台である。小豆色の須恵質の硬胎に、暗緑色の釉をうすく刷毛塗りする。畳付から外底部は、露胎となる。見込みには、重ね焼きの目痕が、輪状にみられる。京都の小塩窯の製品であろう。**4～14**は、**土師器**である。**4～7**は、皿である。**5・6**は、底部をヘラ切り、**7**は、回転糸切りする。**7**には、板状圧痕と内底ナデ調整がみられる。**4**には、煤が付着し、灯明皿として使用されたものである。口径は、**4**が8.2cm。他は9.2～9.75cm、器高は、1.05～1.6cmである。**8～13**は、坏である。すべて底部をヘラ切りする。内面は、コテあてで平滑に仕上げる。**11**の外底部には、板状圧痕がみられる。**14**は、高台付の埦である。**15**は、**内黒土器**である。**16～21**は、**瓦器**である。**18**は、

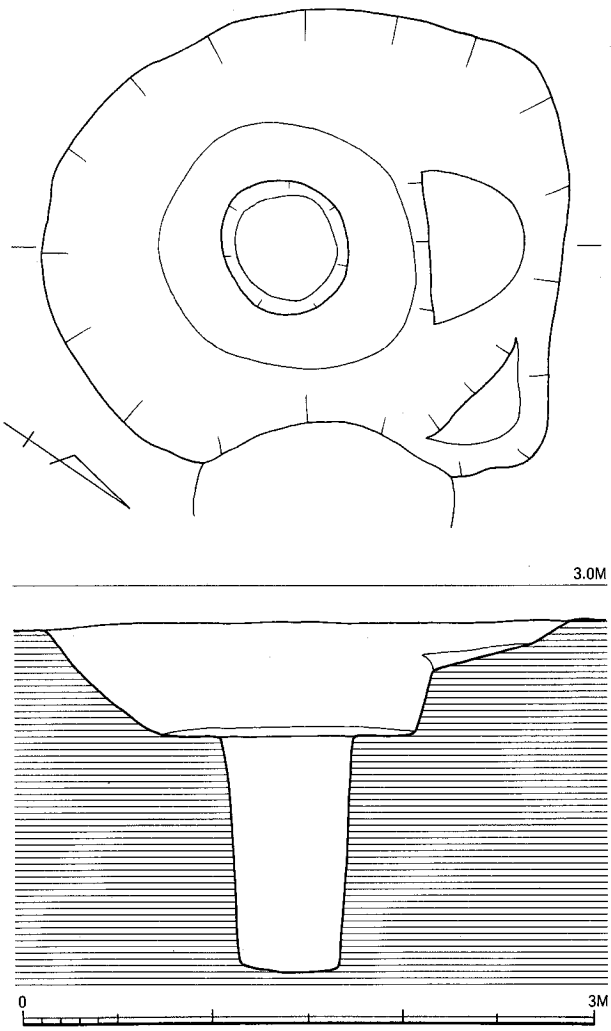


Fig. 90 27号井戸遺構実測図（1/40）

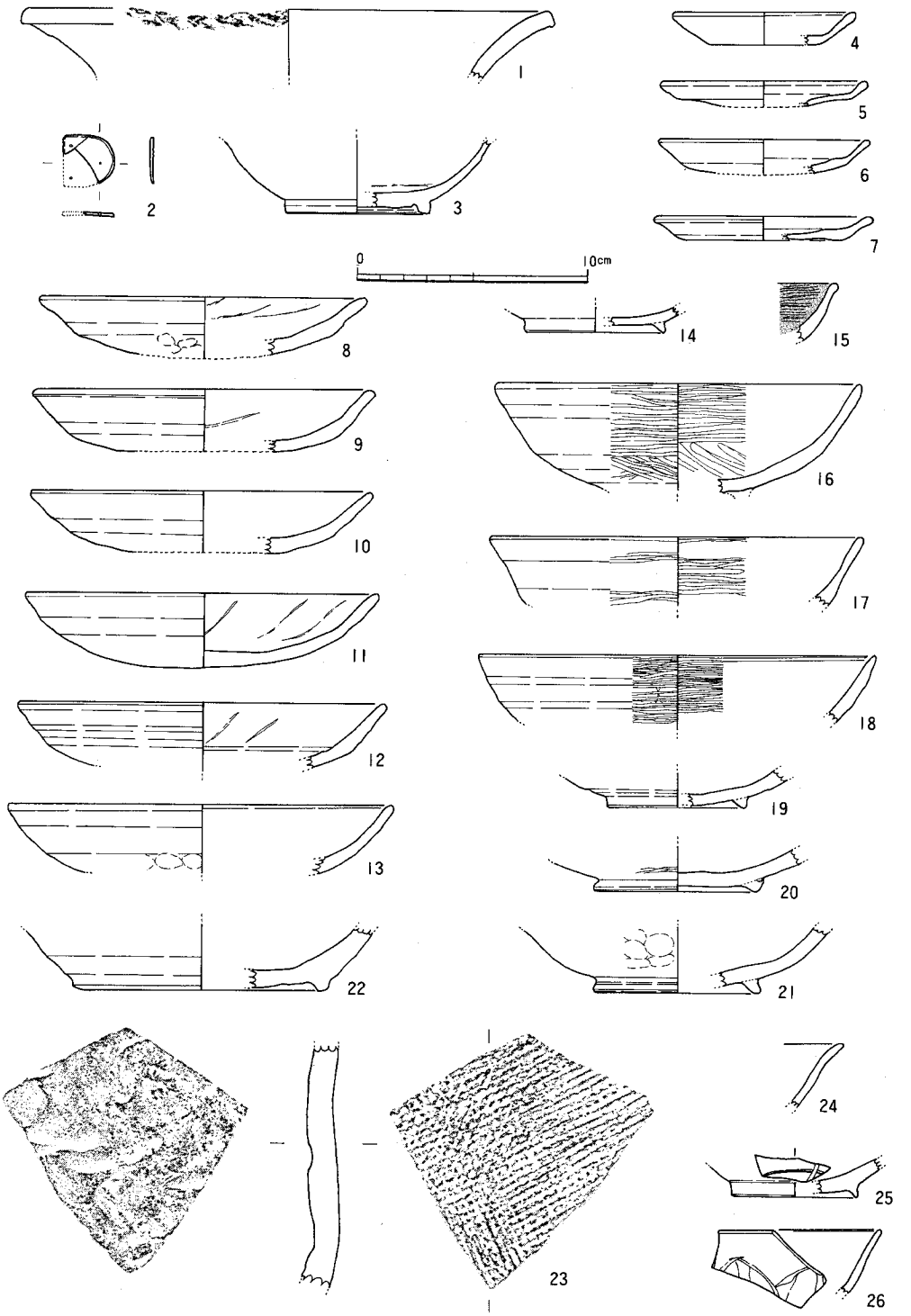


Fig. 91 27号井戸遺物実測図1 (1/3)

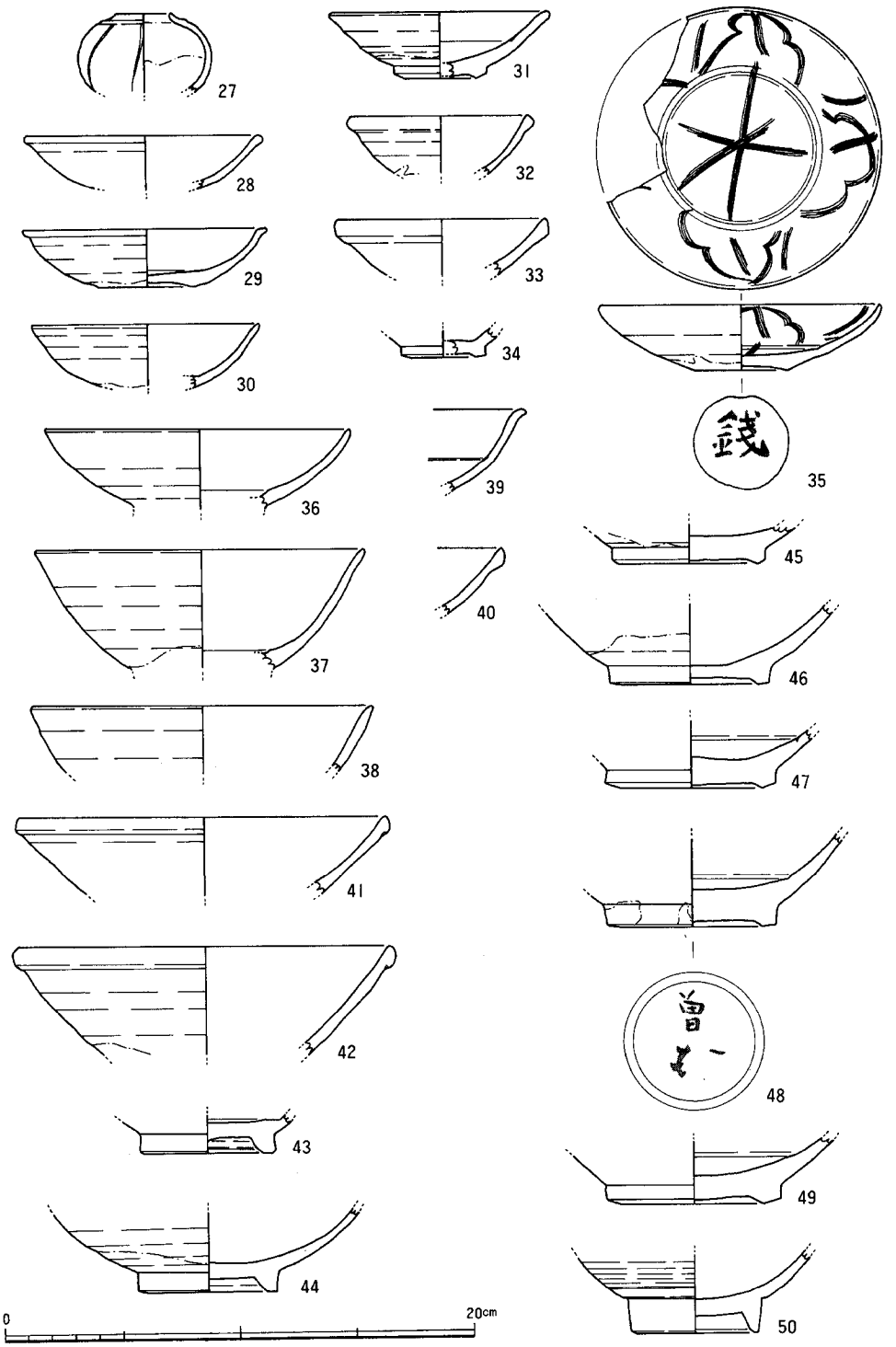


Fig. 92 27号井戸遺物実測図２（1/3）

楠葉型瓦器である。**22・23**は、**須恵器**である。**22**は、高台付の鉢である。**23**は、甕の胴部片である。**24・25**は、**越州窯系青磁**の碗である。**25**の見込みには、沈線で花文を描く。**26～51**は、**白磁**である。**26**は、体部外面に鎬蓮弁文をあしらう。**27**は、瓜形小壺である。**28～33・35**は皿である。**35**の外底部には、墨書がみとめられる。墨痕はうすくかすれるが、「銭」と判読できる。**36～51**は、碗である。**48**の外底部には、墨書がみとめられる。２文字書かれているが、２文字目は、はっきりと見えない。１文字目は、「曽」である。２文字目は、平仮名の「も」にも見える。**51**は、釉下褐彩を持つ白磁の大碗の小片である。褐彩の雲文の一部が残っている。**52**は、**青磁**の水注の頸部片である。越州窯系であろう。**53～55**は、**陶器**である。**53**は、壺の口縁部で、褐釉を施す。**54**は、小口瓶である。青黄色の釉が施されている。**55**は、黄釉鉄絵の盤である。見込みには花文、体部内面には雲文をあしらう（Fig. 96）。外底部には、墨書がみとめられる。大書されているが、字体が明らかにできず判読不能である。**56**は、**石錘**である。滑石製であり、石鍋片の転用か。27号井戸の時期は、同安窯系・龍泉窯系青磁が全く含まれていない点から、12世紀前半と考えられる。

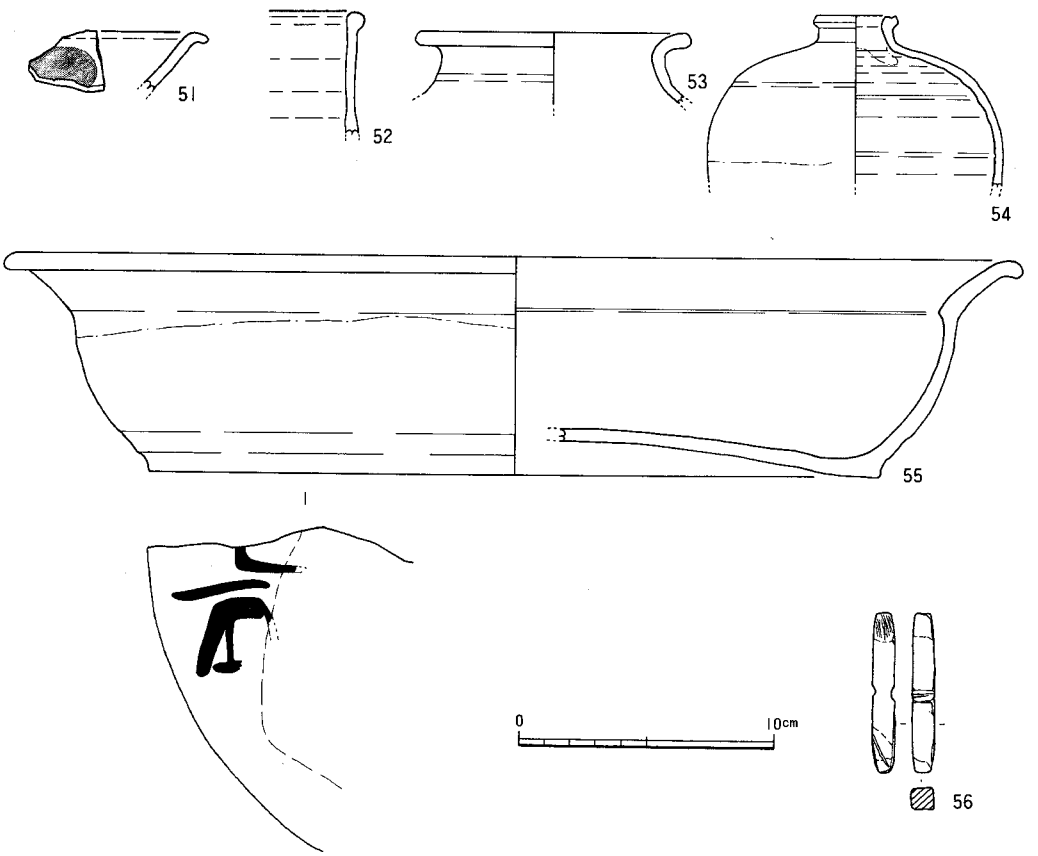


Fig. 93　27号井戸遺物実測図３（1/3）

Fig. 94　27号井戸検出状況（北東より）

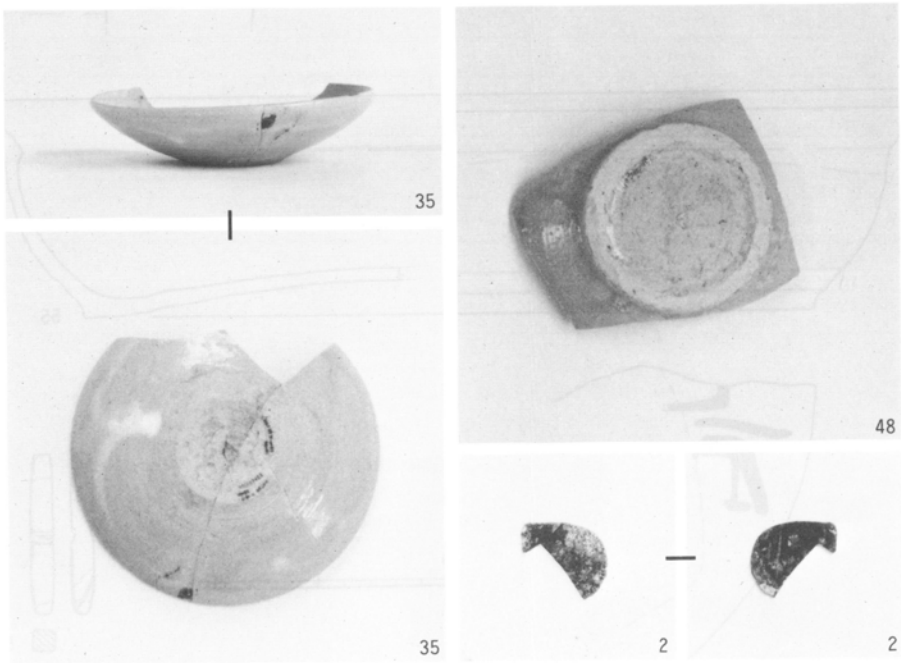
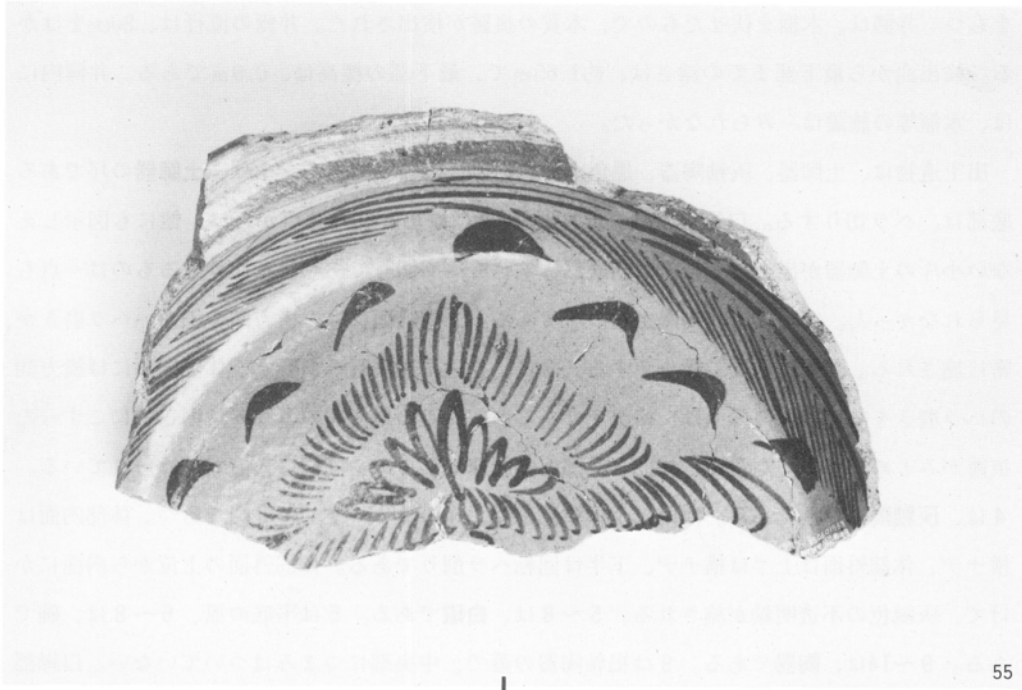


Fig. 95　27号井戸出土遺物 1 （約1/3）



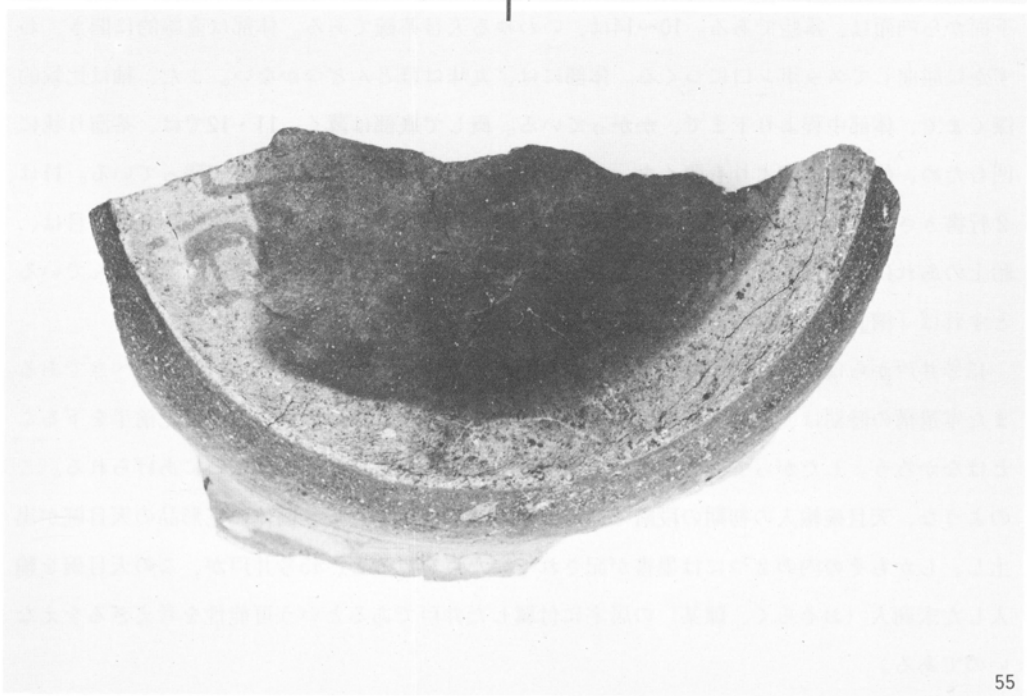


Fig. 96　27号井戸出土遺物２（約1/3）

45号井戸（1450）

4面第2区で検出した井戸である。長径約3m、短径約2.3m（推定）の楕円形の掘りかたをもつ。井側は、木桶を伏せたもので、木質の痕跡が検出された。井側の直径は、80cmをはかる。検出面から最下部までの深さは、約1.65mで、最下部の標高は、0.9mである。井側内には、水溜等の施設は、みられなかった。

出土遺物は、土師器、灰釉陶器、黒色土器、白磁、陶器等である。**1**は、**土師器**の坏である。底部は、ヘラ切りする。口径14.2cm、器高2.8cmをはかる。45号井戸からは、他にも図示しえない小片の土師器が出土しているが、底部はすべてヘラ切りであり、糸切りするものは一点も見られなかった。**2・3**は、**内黒土器**の埦である。**2**の内面には、横方向の細かいヘラ磨きが、密に施される。体部外面は、横ナデする。**3**は、見込みを平行ヘラ磨き、体部内面には横方向のヘラ磨きを施す。体部外面は、横ナデであるが、高台の外側にのみヘラで磨き状にこすった痕跡がみとめられる。高台は、体部と底部との屈曲部からやや内側に入って付けられている。**4**は、**灰釉陶器**の埦である。器肉は全体に薄手で、ゆるくカーブして丸味をもつ。体部内面は横ナデ、体部外面は上半は横ナデ、下半は回転ヘラ削りである。体部外面の上位から内面にかけて、灰緑色の不透明釉が施される。**5～8**は、**白磁**である。**5**は平底の皿、**6～8**は、碗である。**9～14**は、**陶器**である。**9**は褐釉陶器の蓋で、中央部につまみはついていない。口縁部下面から内面は、露胎である。**10～14**は、いわゆる天目茶碗である。体部は直線的に開き、わずかに屈曲してスッポン口につくる。体部には、丸味はほとんどつかない。また、釉は比較的深くまで、体部中程より下まで、かかっている。概して底部は薄く、**11・12**では、茶溜り状に凹むため、体部の器肉よりも薄くなっている。**11・14**の外底部には、墨書が残っている。**11**は、2行書きされている。右行は「大」と読める。左行の一文字目は「陳」である。2文字目は、胎土のあれにかかって、はっきりしない。花押のようにも見えるが、部分的に墨がとんでいるとすれば「綱」の可能性もある。**14**の墨書は一文字で、「馬」である。

45号井戸からは、天目碗が5個体、しかも完形に近い形で出土したのは、注意すべきである。また本遺構の時期は、底部を糸切りする土師器が全くみられない点から、12世紀前半を下ることはなかろう。したがって、天目碗の出土例としては、最も早い例のひとつにあげられる。このような、天目碗輸入の初期の段階で、ひとつの遺構に集中して5個体の完形品の天目碗が出土し、しかもその内の2つには墨書が記されていた点を見ると、45号井戸が、この天目碗を輸入した宋商人（おそらく、陳某）の居宅に付属した井戸であるという可能性を考えざるをえないのである。

（4） 土壙墓・木棺墓

102号土壙（0503）

3面で検出した土壙である。長軸1.35m、短軸0.58mの隅丸長方形を呈する。深さは、20～22cmをはかる。木棺の痕跡は、確認できなかった。遺物は、土壙の北西隅の床上にかためて置かれており、副葬品と考えられる。

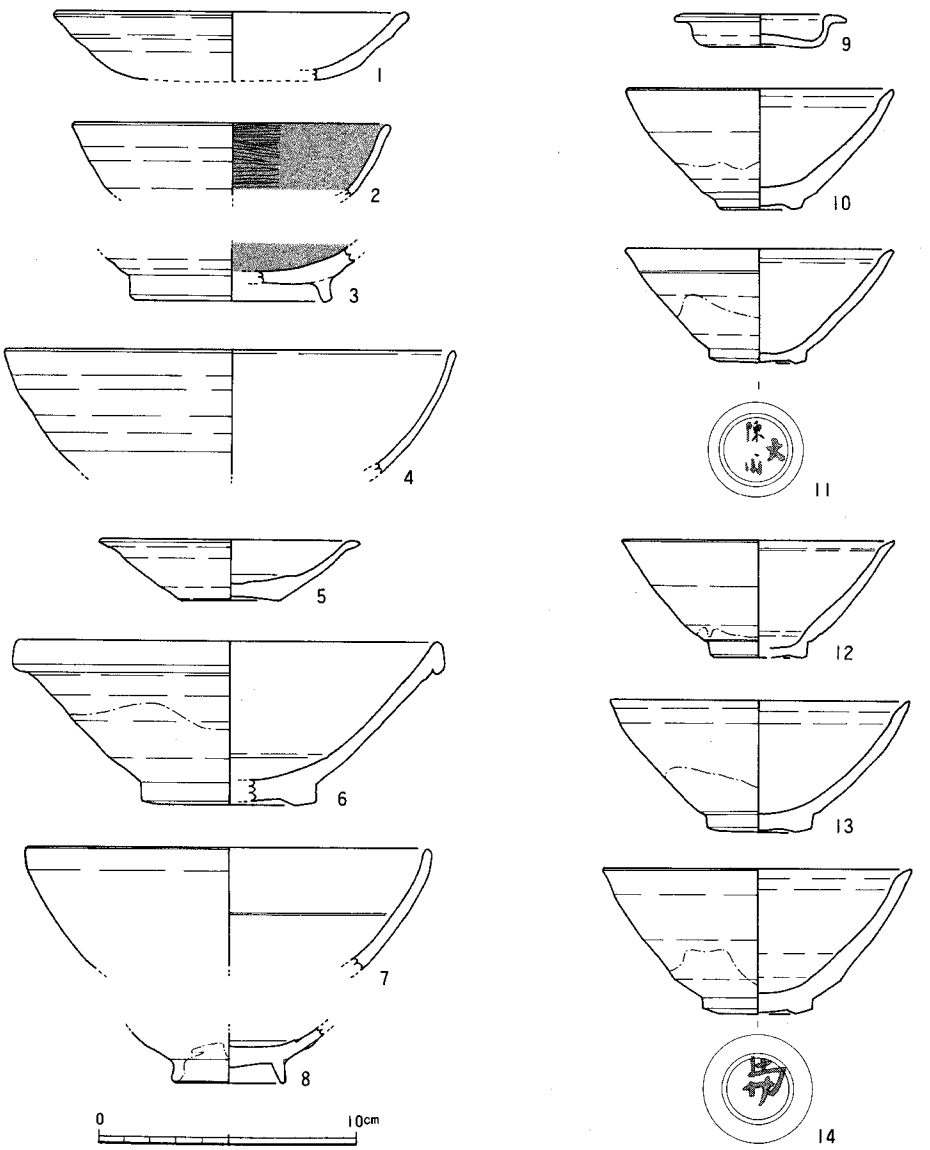


Fig. 97 45号井戸遺物実測図（1/3）

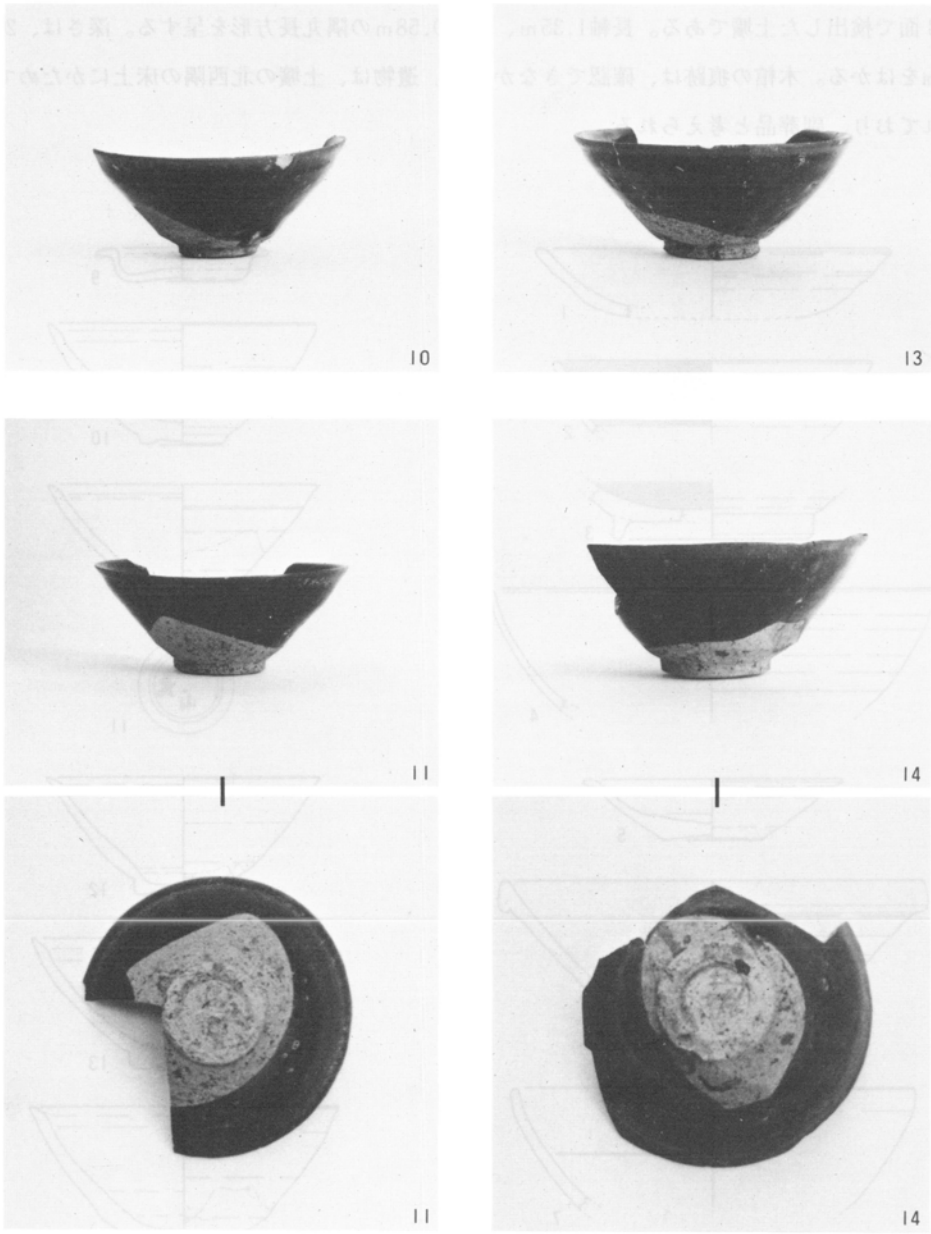


Fig. 98　45号井戸出土遺物（約1/3）

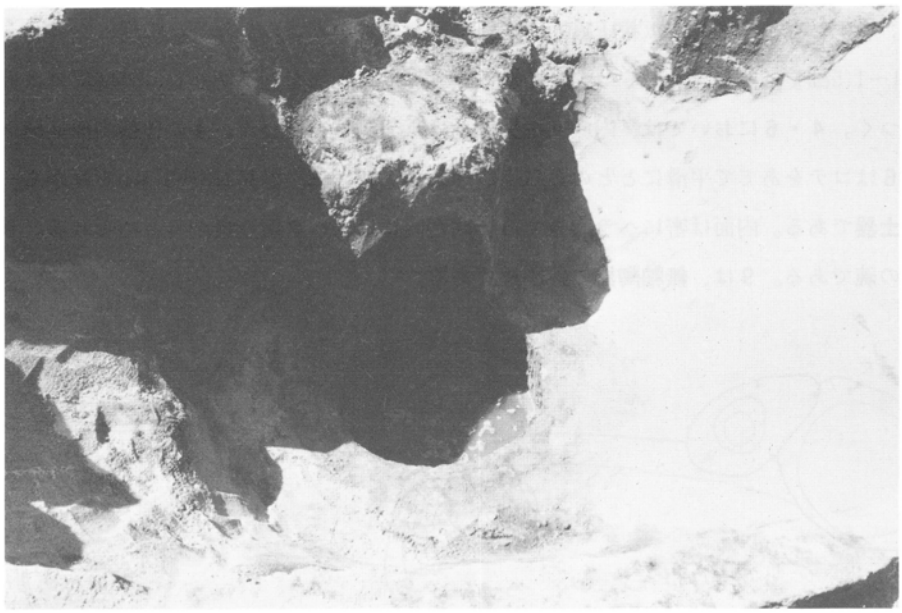


Fig. 99　45号井戸検出状況（西より）

Fig. 100　102号土壙検出状況（北東より）

副葬品は、土師器の皿、坏で、その他に埋土中から、瓦器・白磁・青白磁・陶器片が出土している。**1～6**は、**土師器**である。**1～3**は皿で、**1・2**は回転糸切り底、**3**はヘラ切り底を持つ。いずれも、外底部に板状圧痕・内底部にナデ調整がみとめられる。口径8.8～9.5cm、器高1.1～1.5cmをはかる。**4～6**は、坏である。すべて、底部をヘラ切りし、外底部には板状圧痕がつく。**4・6**においては、内底部中央付近はナデ調整を行なう。**4**の体部内面は横ナデ、**5・6**はコテをあてて平滑にととのえる。口径15.0～16.2cm、器高2.8～3.1cmをはかる。**7**は、**内黒土器**である。内面は密にヘラ磨きする。高台内には、ヘラ切り痕がみとめられる。**8**は、**白磁**の碗である。**9**は、**無釉陶器**の鉢小片である。

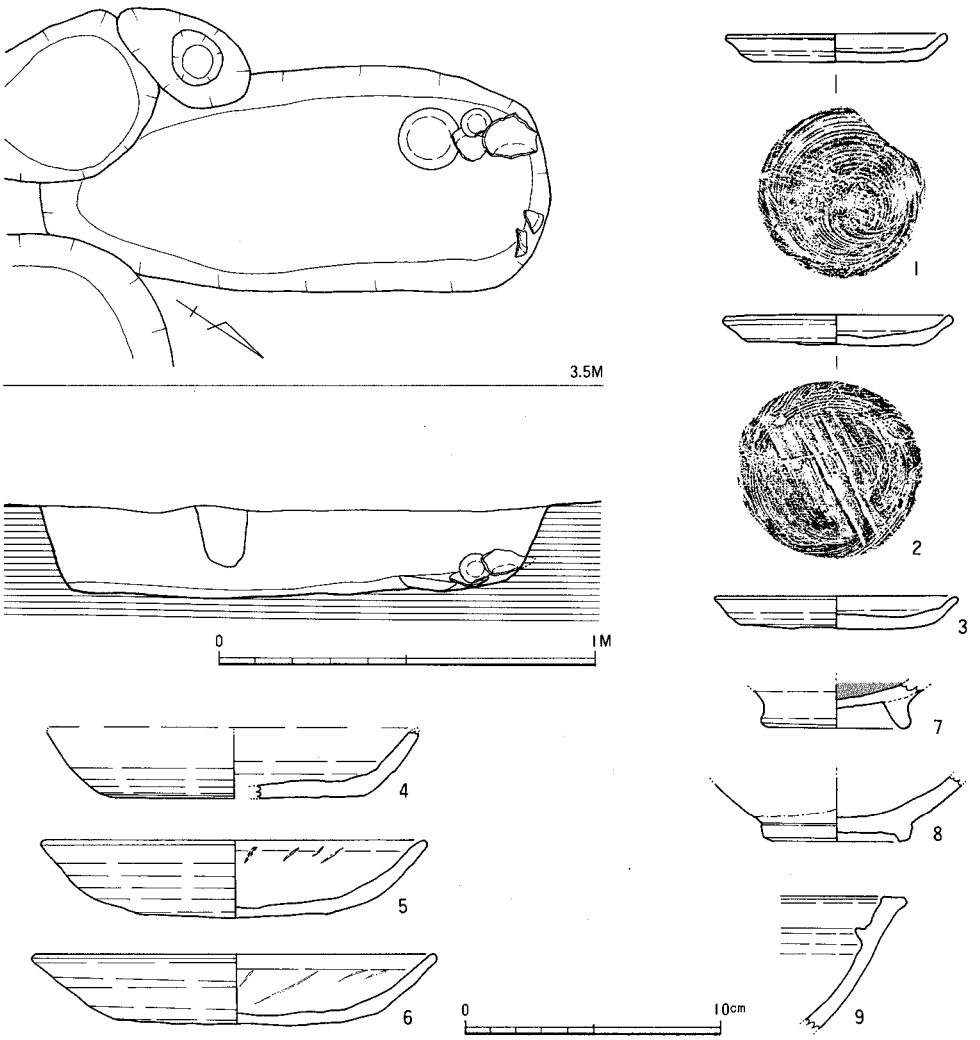


Fig. 101 102号土壙遺構実測図（1/20）、遺物実測図（1/3）

124号土壙（0627）

３面で調査した土壙である。1.2～1.3ｍ×0.8～0.85ｍの長方形の掘りかたの内側に、板材をあてて、木棺状に作るもので、深さは約29cmほどが残っていた。木質は、ほとんど朽ちて失なわれているが、床材の一部と東側壁を検出することができた。この部分の木材は、火に罹って焼けこげたものを転用したらしく、表面が炭化していた。床板は、木目を追って観察すると、何枚かの異なる板を敷いていたものらしい。現場で、わずかにのこった板材から類推したところでは、少なくとも６枚の板が使われている。南側小口から30cm程内側には、床材の上に幅５cm、長さ17cm程の棒材が、小口に平行して置かれている。棒材の小口は、土壙の東壁に接している。この部分には、柄穴を設け、別の棒材を篏め込んでいる（Fig. 104－３・４）。これらの棒材も、表面がこげており、火災にあった建築材を転用したものであろう。なお、この棒材は、棺材に転用した当初から、この長さしかなかったものと思われ、棺内を圧切るものではない。何のためにおかれたのか、意味不明である。

遺物は、埋土の中位以下に含まれており、床に直に置かれたものは、１点もなかった。出土状況から、明らかに副葬品とみられる遺物も、出土していない。

出土遺物は、土師器・瓦器・白磁・陶器等である。**１～４**は、**土師器**である。**１・２**は皿で、

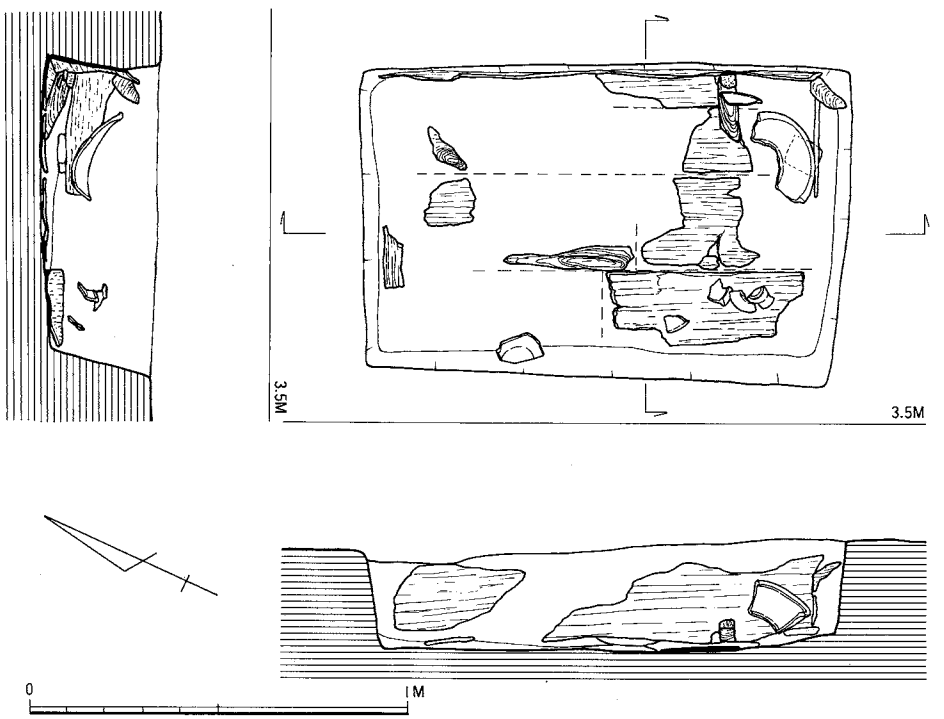


Fig. 102　124号土壙遺構実測図（1/20）

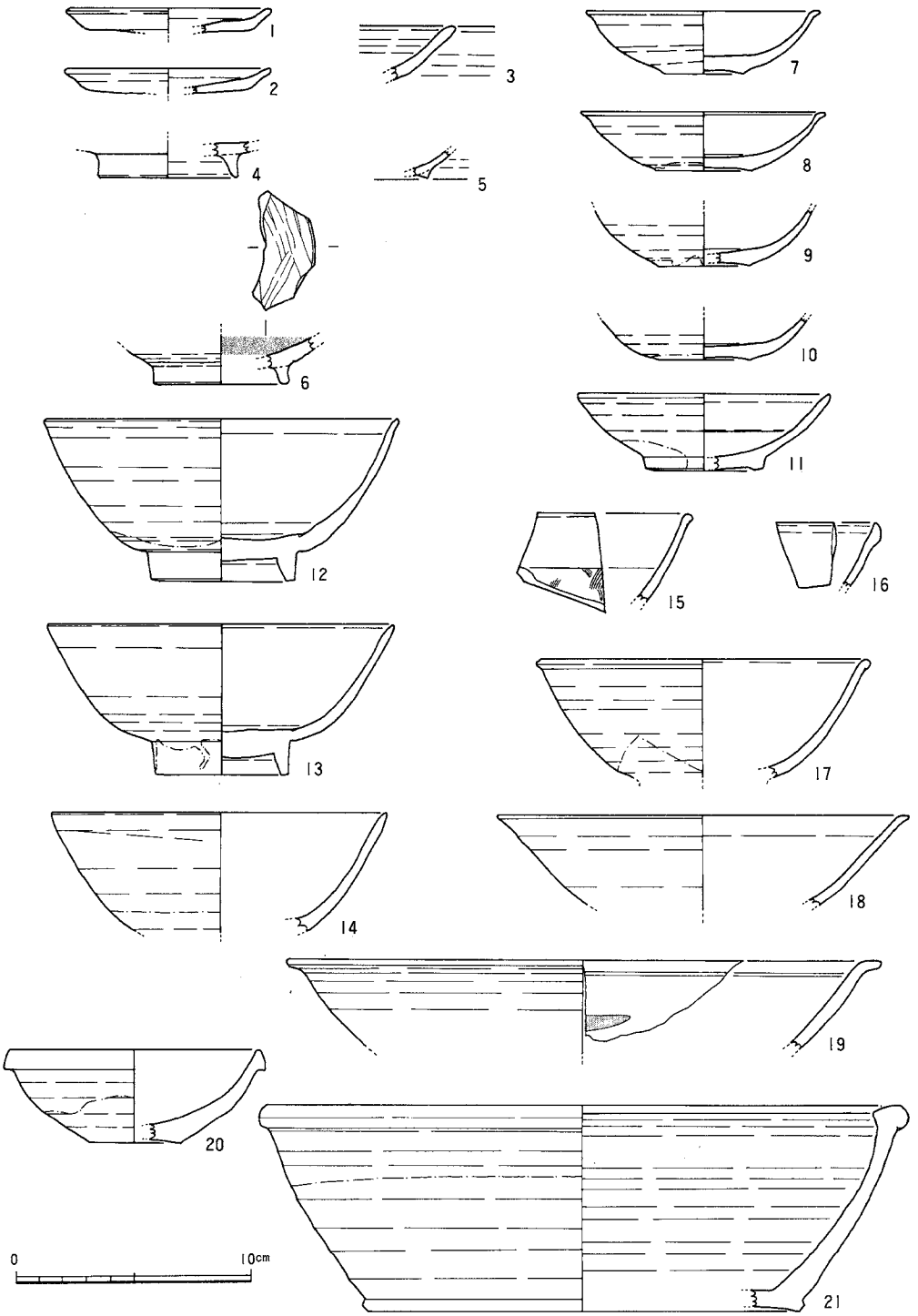


Fig. 103 124号土壙遺物実測図 (1/3)

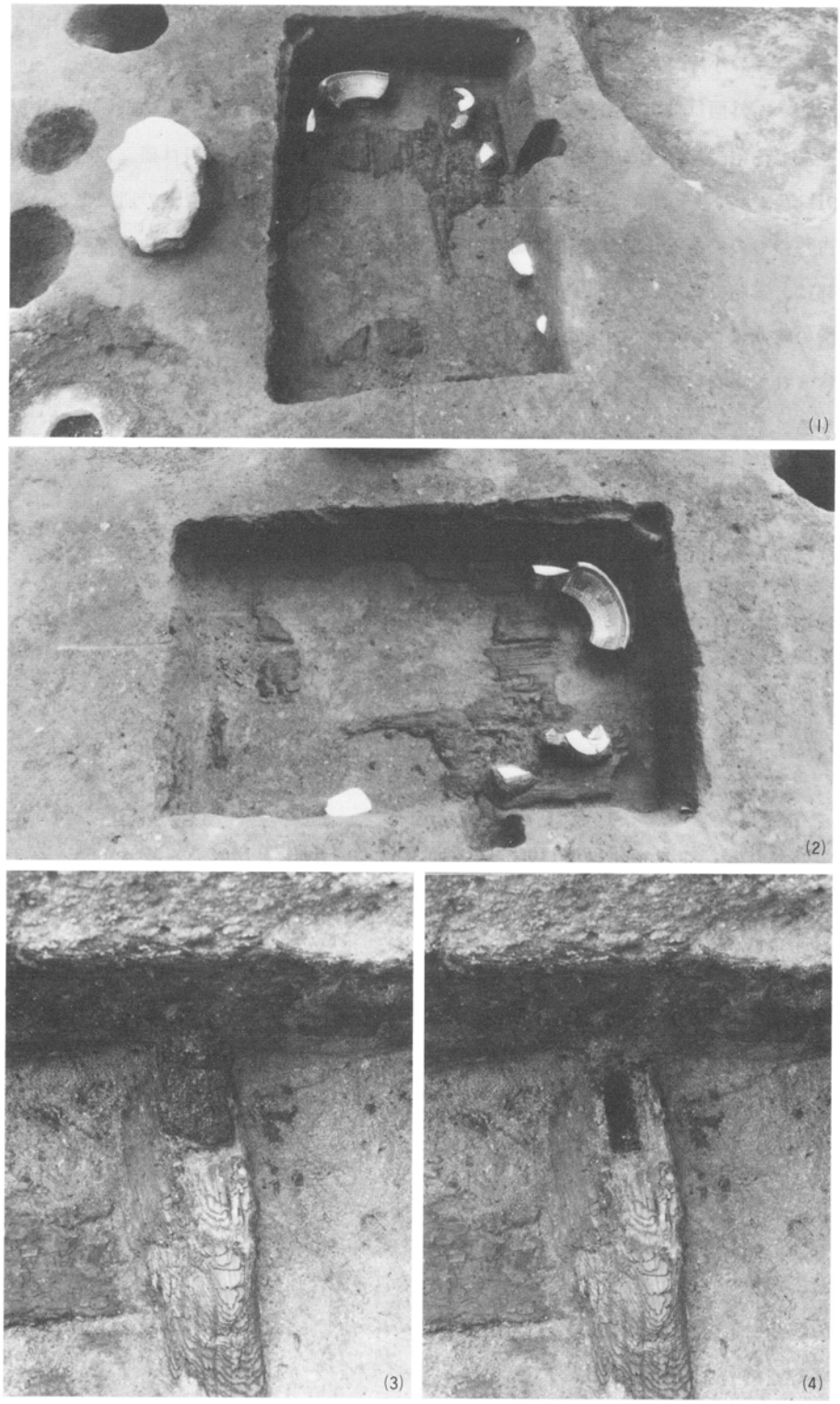


Fig. 104 124号土壙検出状況（1）北西より（2）南西より（3）・（4）桟状棒材（南西より）

底部は回転糸切りし、板状圧痕・内底ナデ調整を持つ。ともに、口径9.0cm、器高1.1cmをはかる。**3**は、坏の小片である。**4**は、埦の高台片である。**6**は、**内黒土器**の埦である。内面は密なヘラ磨き、外面は横ナデ調整を行なう。**5**は、**瓦器**である。断面三角形の低い高台を貼りつけており、楠葉型瓦器埦と考えられる。**7～19**は、**白磁**である。**7～11**は皿、**12～19**は碗である。**19**は、釉下褐彩を行なう大碗で、体部内面に雲文を描く。**20**は、**青磁**の皿である。越州窯系の古手のものである。**21**は、**褐釉陶器**の盤である。黄褐色の釉を施す。口縁部と体部下半・外底部は、露胎である。

遺構の時期については、土師器の皿が糸切りされている点、同安窯系・龍泉窯系の青磁が1片も含まれていない点などから見て、12世紀中頃あるいは、中頃を大きくは降らない時期と考えられる。

Fig. 105　124号土壙出土遺物（約1/3）

144号土壙（0838）

4面で調査した土壙である。北側を近代の井戸で、西側を既存建物のコンクリート基礎杭と近代の井戸とで破壊されており、土壙の一部を検出しえたにとどまった。掘りかたは、隅丸長方形と推定される。長軸は、北東―南西にとると思われるが、その長さは復原できない。短軸は、推定で1.1m程度になる。埋土の堆積状況・土質の相違から、木棺が置かれていたものと判断できたが、木棺の痕跡は、一部でその側壁と思われる立ち上りを確認しただけで、検出することができなかった。

遺物は、2ヶ所にわかれて出土した。東側の1群は、白磁の完形の碗を、2つづつ伏せて並べ重ねるもので、掘りかたの上面近くに置かれて（埋められて）いる。西側の1群は、40cm四方程の範囲に集中して、土師器・白磁が出土したもので、埋土中位に、落ちこむ様な形で出土している。破損してはいるものの、本来は完形か、それに近い状態のものが多い。副葬品とみて間違いないだろう。

この副葬品の出土状況をみると、副葬が２度にわたって行なわれたと思われる。１度目は、土壙内に木棺を安置した際で、木棺の蓋の上に土師器・白磁等を供えたものである。２度目の副葬は、土壙を埋めてしまった後、あるいはほとんど埋め終ろうという段階で、白磁碗を重ね並べたものである。この２度目の行為は、副葬というよりも、呪術的な性格の方が強いかもしれない。なお、西側の遺物の垂直分布が約40cmにもわたっているのは、木棺材が腐朽するにしたがって、土砂と共に下へ落ち込んだためと思われる。

出土遺物は、土師器・瓦器・白磁・陶器等である。**1～6**は、**土師器**である。**1～4**は皿で、底部を回転糸切りする。外底部には板状圧痕がみられ、内底部はナデ調整する。口径8.6～9.2cm、器高1.0～1.3cmをはかる。**5**は、坏である。底部は、回転糸切りされる。口径15.0cm、器高3.0cmに復原される。**6**は、埦である。いわゆる研磨土器で、内面はコテをあてて平滑に仕上げる。**7・8**は、**瓦器**である。内外面とも、幅広で浅いヘラ磨きが施される。**9**は、**青白磁**である。碗の小片で、内面には片切彫りの沈線と、櫛目文がみられる。**13～34**は、**白磁**である。**13～20**は、皿である。**13**は、内面に片切彫りで花文を描く。底部は、小突起状に削り出した輪高台につくる。**16・17**は、口縁を輪花につくる。輪花部分の体部内面には、白堆線が垂下する。**18～20**は、高台付の皿である。体部下位から外底部は、露胎となる。**21～34**は、碗である。**21～24**は、土壙埋土上に伏せて置かれていたものである。**25**の外底部には、墨書がみられる。墨

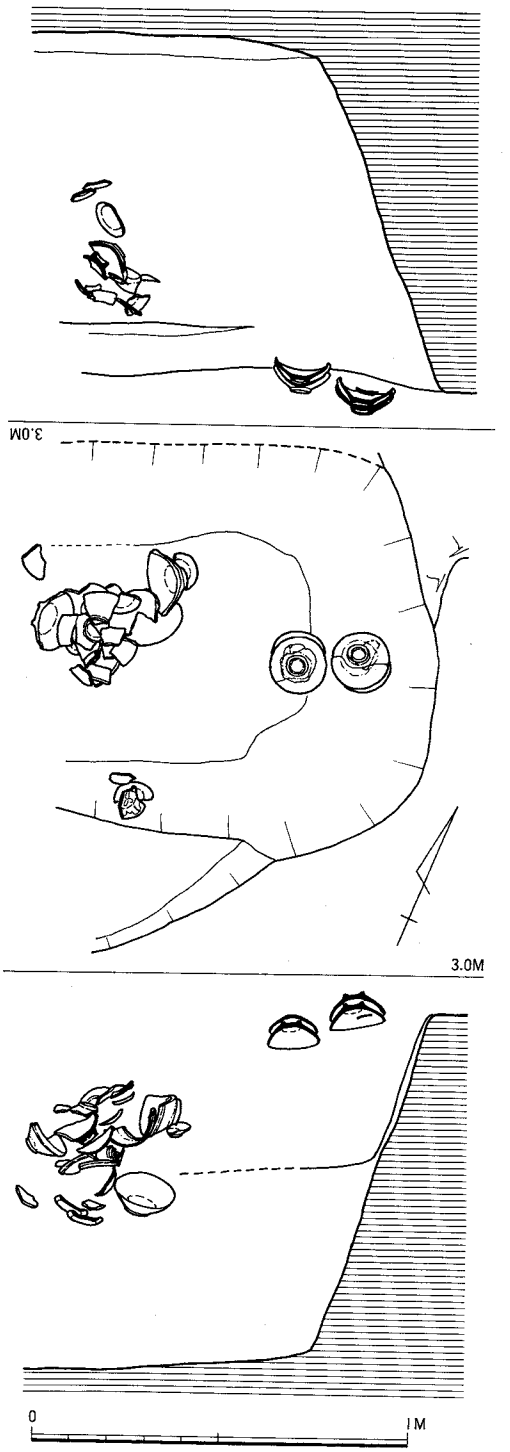
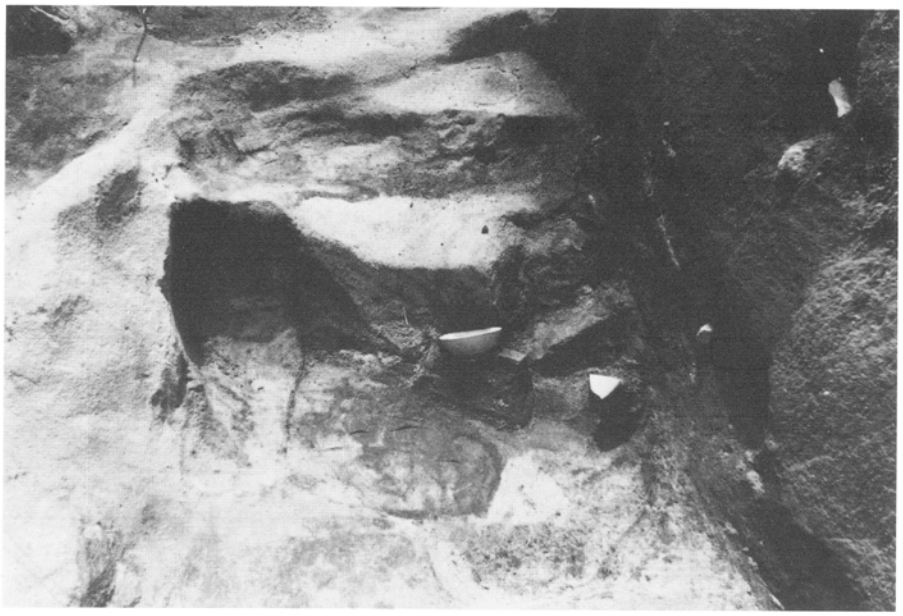


Fig. 106 144号土壙遺構実測図（1/20）

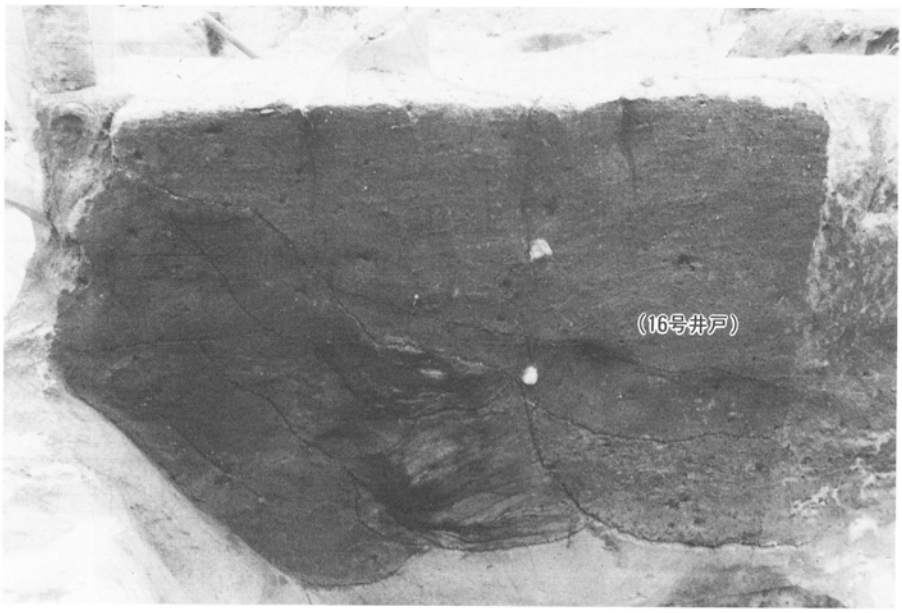
（1） 北東より

（2） 北西より

Fig. 107 144号土壙検出状況 1



（1） 断面、遺物出土状況（北西より）



（2） 土層堆積状況（北東より）

Fig. 108 144号土壙検出状況 2

痕がかすかに見え、「毛」と読めるが、はっきりとはしない。**28～34**は、玉縁口縁につくる。玉縁は、肥厚気味につくるもので、玉縁の下端は下に垂れない。また、底径も広く、玉縁の白磁碗としては古い形態を示している。**10・11**は**陶器**である。**10**は黄釉鉄絵の盤で、体部内面には鉄絵で雲文を配する。**11**は、無釉陶器の捏ね鉢である。焼成は堅緻で、焼き締る。**12**は、**石製品**である。滑石で、石鍋の転用か。全面を削り、角柱状にととのえる。

遺構の時期は、12世紀前半頃、新しくみても12世紀中頃から降ることはなかろうと思う。

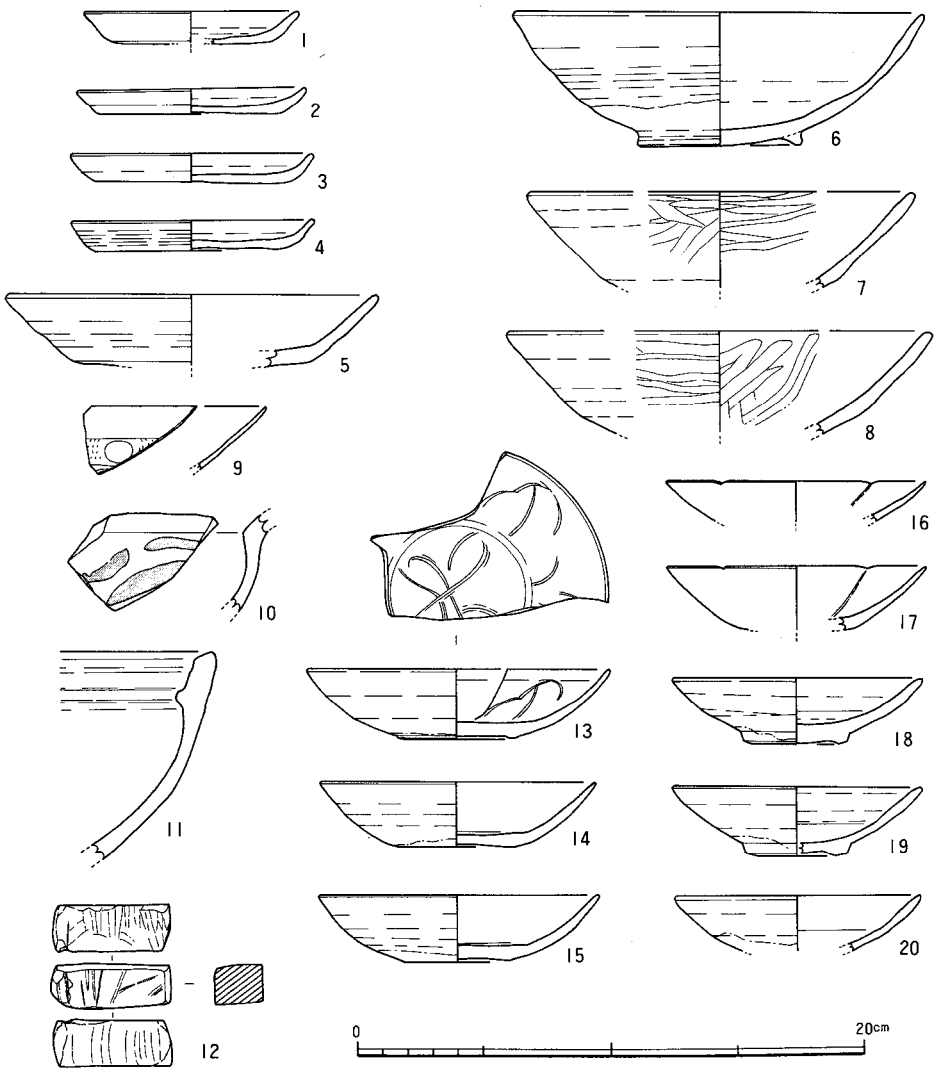


Fig. 109 144号土壙遺物実測図１（1/3）

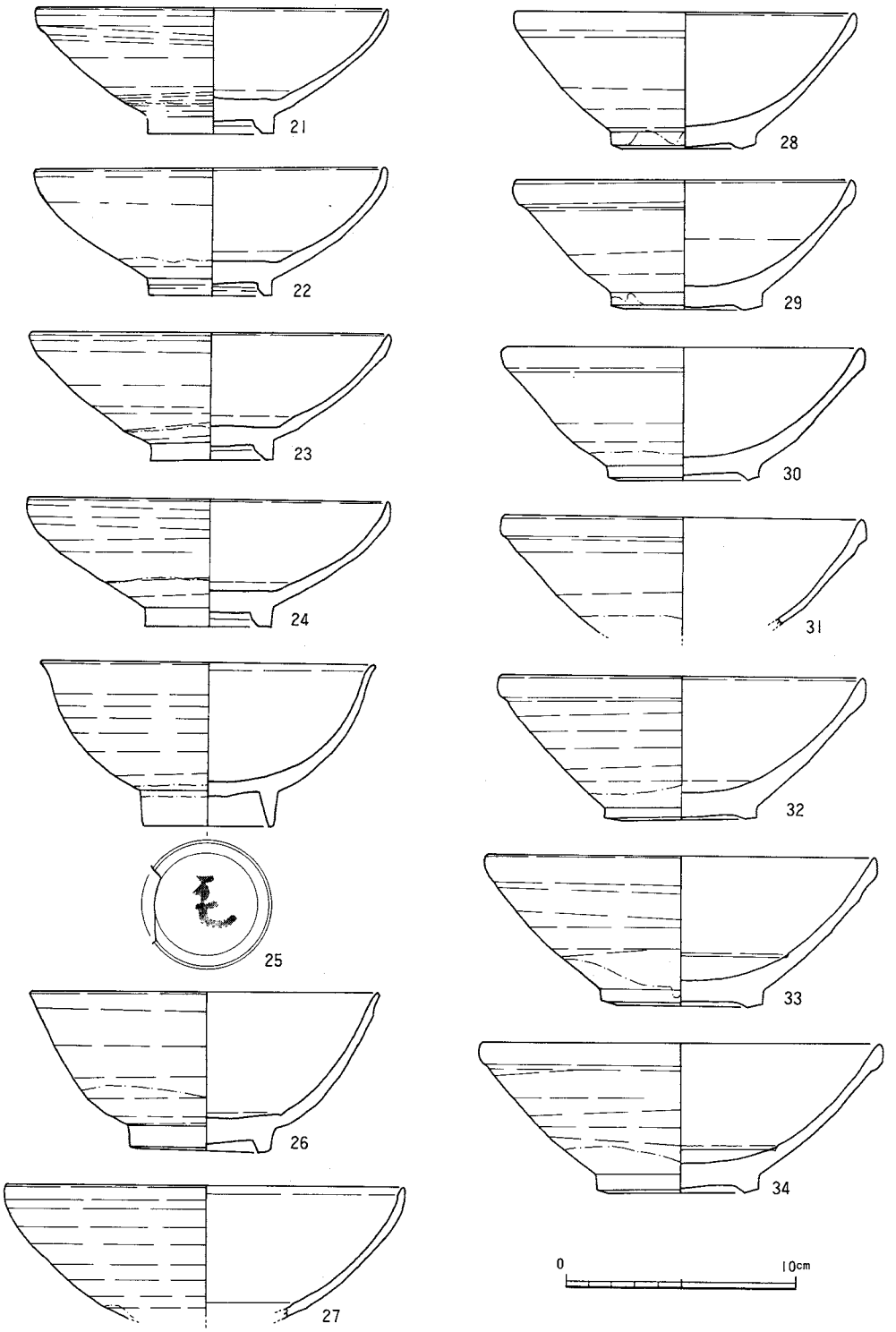


Fig. 110 144号土壙遺物実測図 2 (1/3)

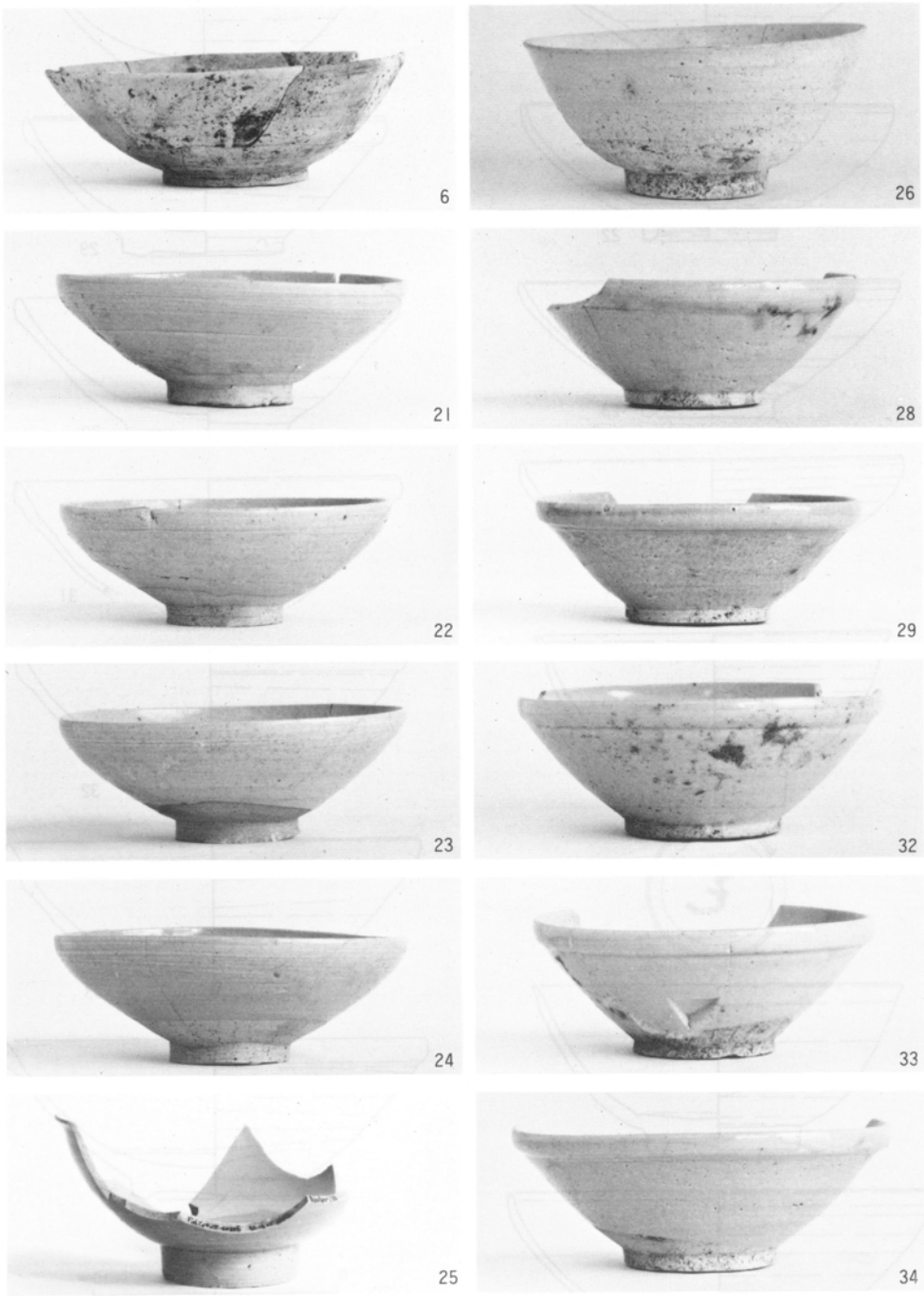


Fig. 111　144号土壙出土遺物（約1/3）

207号土壙（1379）

4面で調査した土壙である。既存建物のコンクリート基礎杭が密に打ちこまれており、かなり破壊されている。また、中世の地下室状遺構である172号土壙に、北側を切られている。

掘りかたは長方形を呈し、長辺は1.5m以上、短辺は1.3mで、深さ76cm分を調査している。埋土中には木質が見られ、遺存状態は極めて悪いものの点々と続いていた。木棺墓の蓋材と考えられた。木棺の床材、側板は確認できなかったが、木棺を置いたものと推測している。

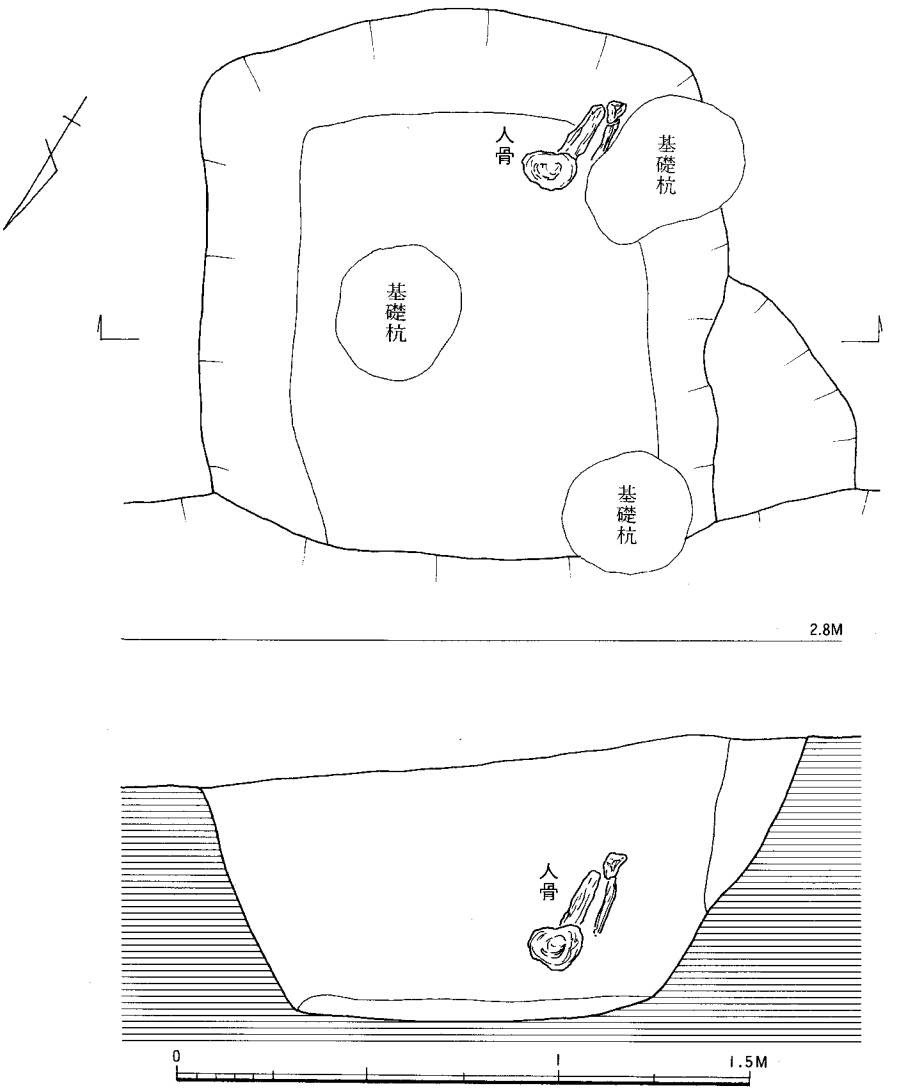


Fig. 112 207号土壙遺構実測図（1/20）

また、土壙の北隅から人骨が出土した。九州大学医学部解剖第２講座の中橋孝博氏に見ていただいたところ、左大腿骨と骨盤の一部とのことであった。したがって、被葬者は、腰を木棺の南側小口につけて、膝を立てて葬られていたことになる。なお、人骨の遺存状態は、極めて悪く、取り上げは断念した。

土師器・瓦器・白磁・陶器・石鍋等が出土した。**1～12**は、**土師器**である。**1～6**は皿で、底部を回転糸切りする。外底部には板状圧痕・内底部にはナデ調整がみられる。口径8.5～10.2cm、器高0.9～1.3cmをはかる。**7～12**は、坏である。底部は回転糸切りし、板状圧痕と内底ナデ調整がみられる。口径14.3～16.1cm、器高2.7～3.5cmをはかる。**13**は、**瓦器**の皿である。内面は、ジクザグ状にヘラ磨きの暗文を入れる。**14**は、**越州窯系青磁**の碗である。高台はほとんどを欠くが、蛇ノ目高台である。**15～21**は、**白磁**の碗である。**18**は、見込みの釉を輪状に掻きとる。**19・20**は、玉縁口縁につくる。**22～24**は、**陶器**である。**22**は、褐釉陶器の瓶の口縁部である。口縁は、丸く肥厚させる。**23**は、壺である。釉は、施されていない。**24**も無釉陶器で、捏ね鉢である。胎土は、砂粒を含んで粗い。焼成は堅緻で、焼き締り赤褐色を呈する。体部内面の下半は、使用のため磨滅している。**25**は、**石鍋**である。滑石製。内面は横位のケズリ、外面は縦位のケズリで整形する。外面の鍔から下には、煤が付着している。

本遺構出土の土師器はすべて糸切りであるが、青磁は１片も含まれていない。このことからみて、12世紀中頃の遺構で、降っても後半までは下らないと思われる。

Fig. 113　207号土壙検出状況（東より）

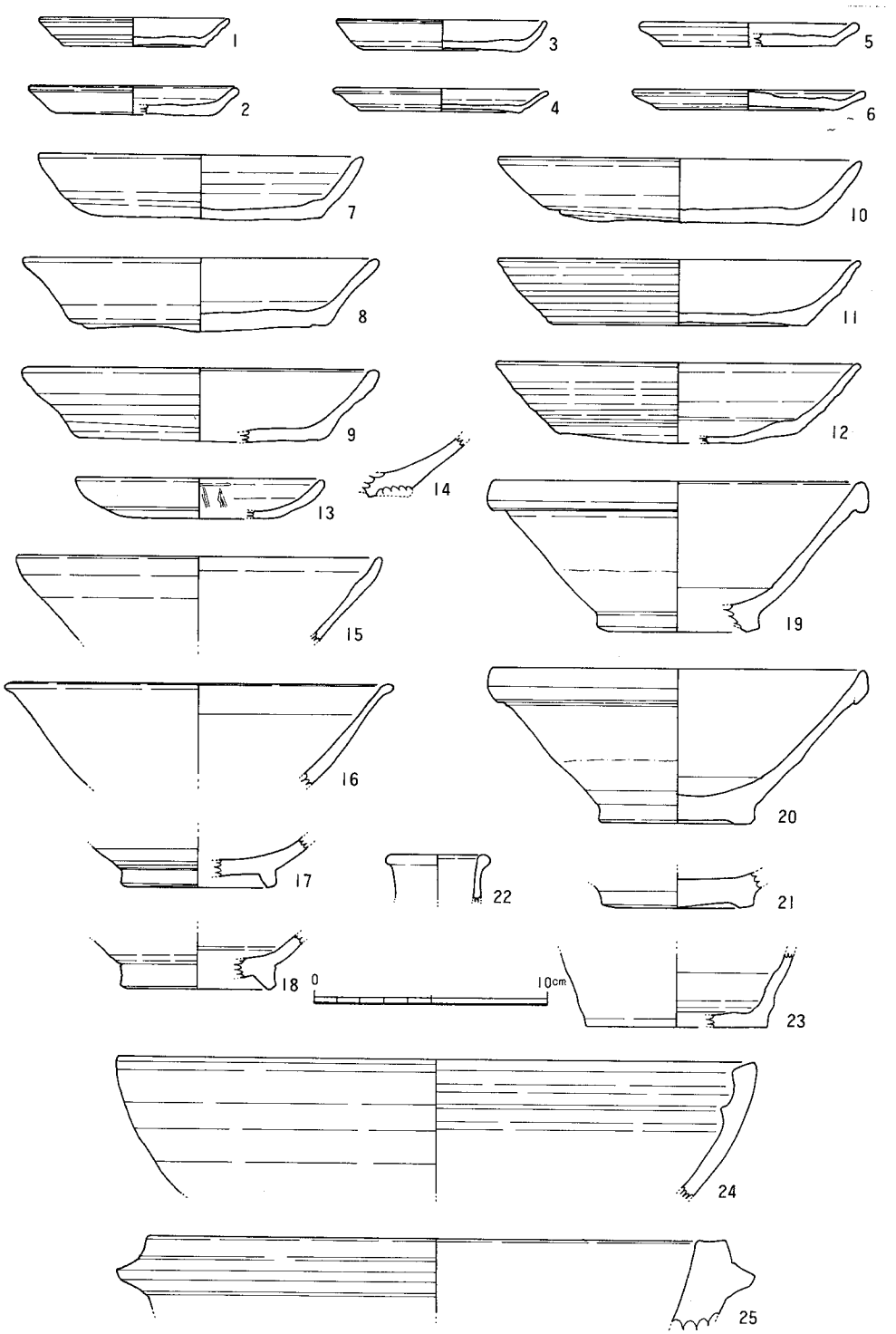


Fig. 114 207号土壙遺物実測図 (1/3)

(5) その他の中世の遺物

本概要報告書で触れることのできた遺構・遺物は、第39次調査の記録・出土遺物の、ほんの一部にすぎない。そこで、これまでに述べられなかった中世の遺物について、重要遺物を中心に紹介する。

① 土器・陶磁器・石製品

1～3は、**搬入瓦器**である。1の見込みには、ラセン状の暗文がみとめられる。**2・3**の見込みの暗文は、ジクザク状の平行ヘラ磨きである。**4**は、**瀬戸・美濃焼**の灰釉入子皿である。口唇部のみ施釉する。底部の粘土を小指の爪でえぐって寄せ、三足につくる。底部には、糸切り痕が残る。**5～7**は、**須恵器**の埦である。**6・7**の外底部には、回転糸切り痕がみられる。**8**は、**青磁**の碗である。畳付から内側を露胎とする。**9～11**は、**天目碗**である。**10**は、いわゆる吉州窯系の玳玻天目である。畳付から底部は、露胎である。**11**は、金彩文字天目である。体部内面に金彩で禾目と花弁風の縁取りをして、「金玉満堂」の祥句を書き込む。**12**は、石製の**仏像頭部**である。砂岩製。**13**は、**碇石形石製品**である。半折するが、中央部には削り込んでくびれをつくる。形態的には、碇石をかなり正確に模している。砂岩製。面取りも丁寧で、平滑に仕上げる。**14・20～22**には、**石硯**である。**14**の裏面には「高嶋本青石」と彫られており、近江高島郡で作られたことを示している。**14**は、近世に下る可能性が高い。**15**は、滑石製の**石板**である。石鍋片の転用であろう。表・裏面に陰刻があり、櫛形製品の型と思われる。**16・17**は、**ガラス製品**である。**16**のガラス玉は、前述した215号土壙から出土した。**17**は、ガラス容器片である。出土遺構からみて、12世紀以前のものである。**18**は、いわゆる**早島式土器**の埦である。**19**は、**石権**である。頂部を破損するが、ここに穿孔がある。

② 墨書土器

輸入陶磁器を主として、多様な墨書資料がみられる。墨書の内容としては、人名、綱首銘、花押、数字等である。

1～6は、綱首銘を書くものである。第39次調査でみられた綱首銘は、「丁綱」・「陳綱」・「郑ヵ綱」・「大綱」である。**7～22**は、人名もしくは、文字を記すものである。人名にかかわるものとしては、「國吉」・「忠吉」・「劉」・「馬」・「穎」・「錢」・「王」・「林」・「師」・「仲」などである。**24**は、意味不明であるが、「縢哭」と読める。**25**は、「僧器　六十内」と2行書きされる。**26～30**は、数字である。「六」・「十」・「十一」・「十八」・「佰」などがみられる。**31～35**は、花押である。**36**は、戯画であろう。扇を描いている。

以上の墨書は、ほとんどが11世紀後半から13世紀前半の輸入陶磁器である。

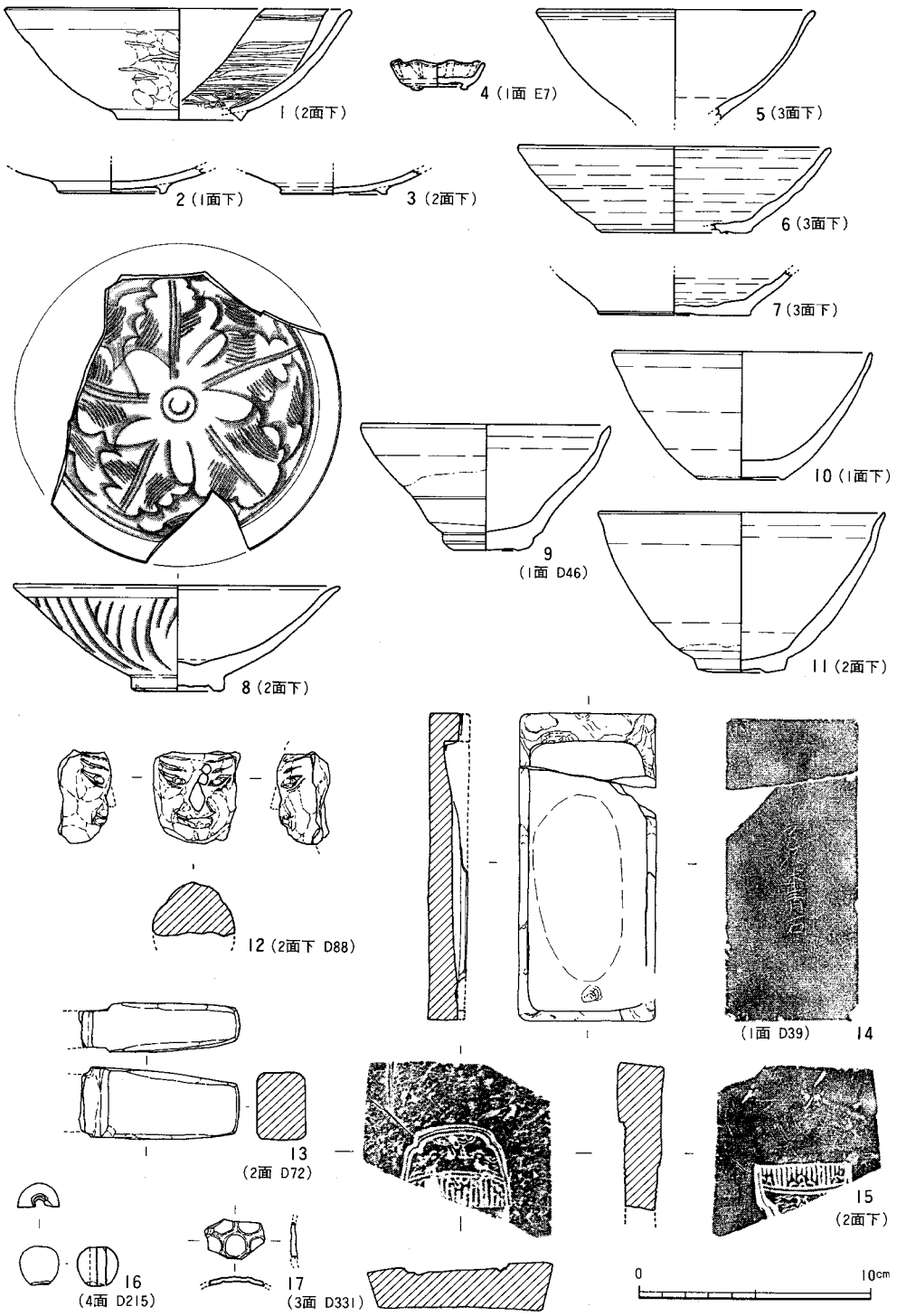


Fig. 115 その他の中世の遺物 1 (1/3) D…土壙、E…井戸、P…柱穴

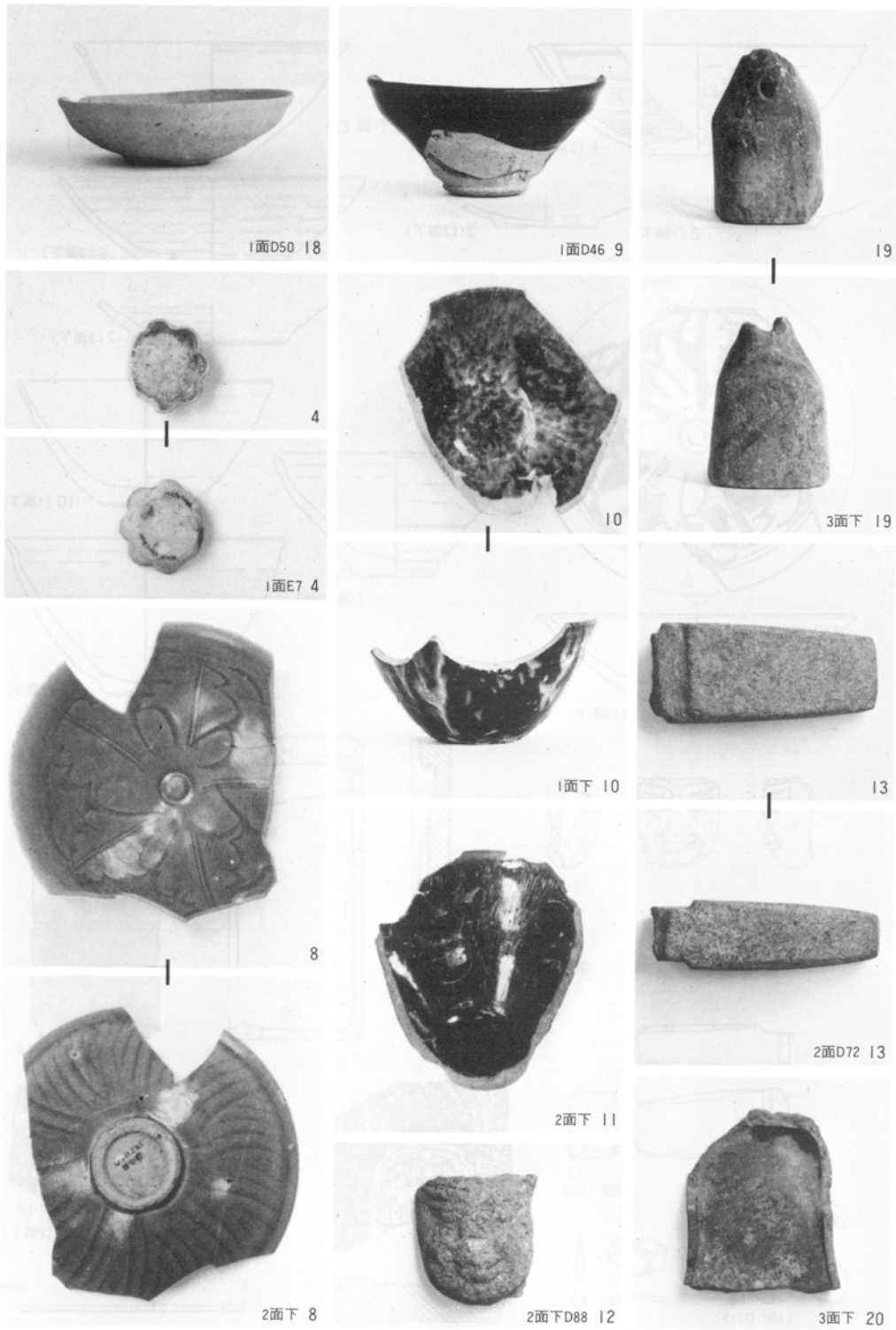


Fig. 116 その他の中世の遺物２ (1/3) D…土壙、E…井戸、P…柱穴

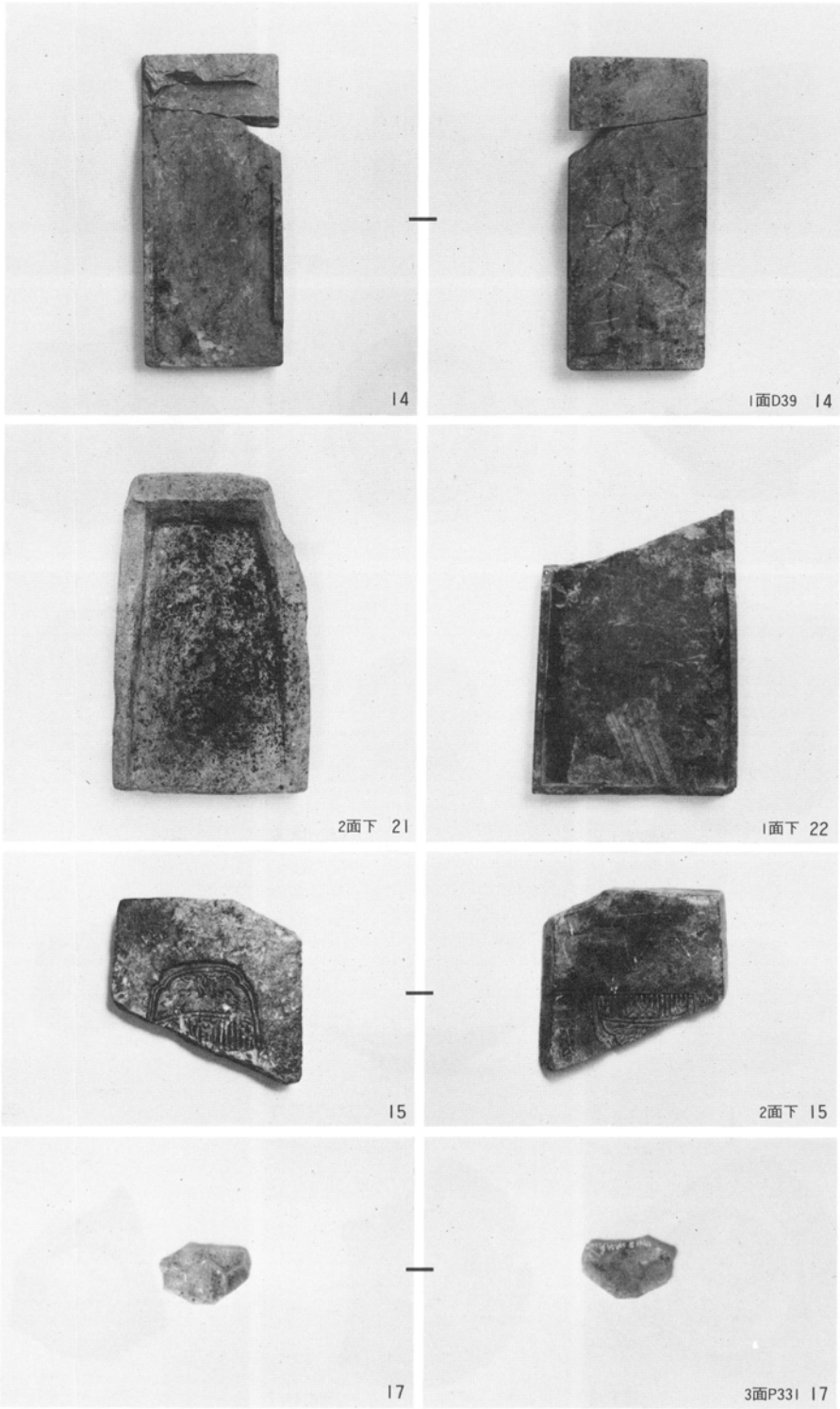


Fig. 117 その他の中世の遺物 3 (1/3) D…土壙、E…井戸、P…柱穴

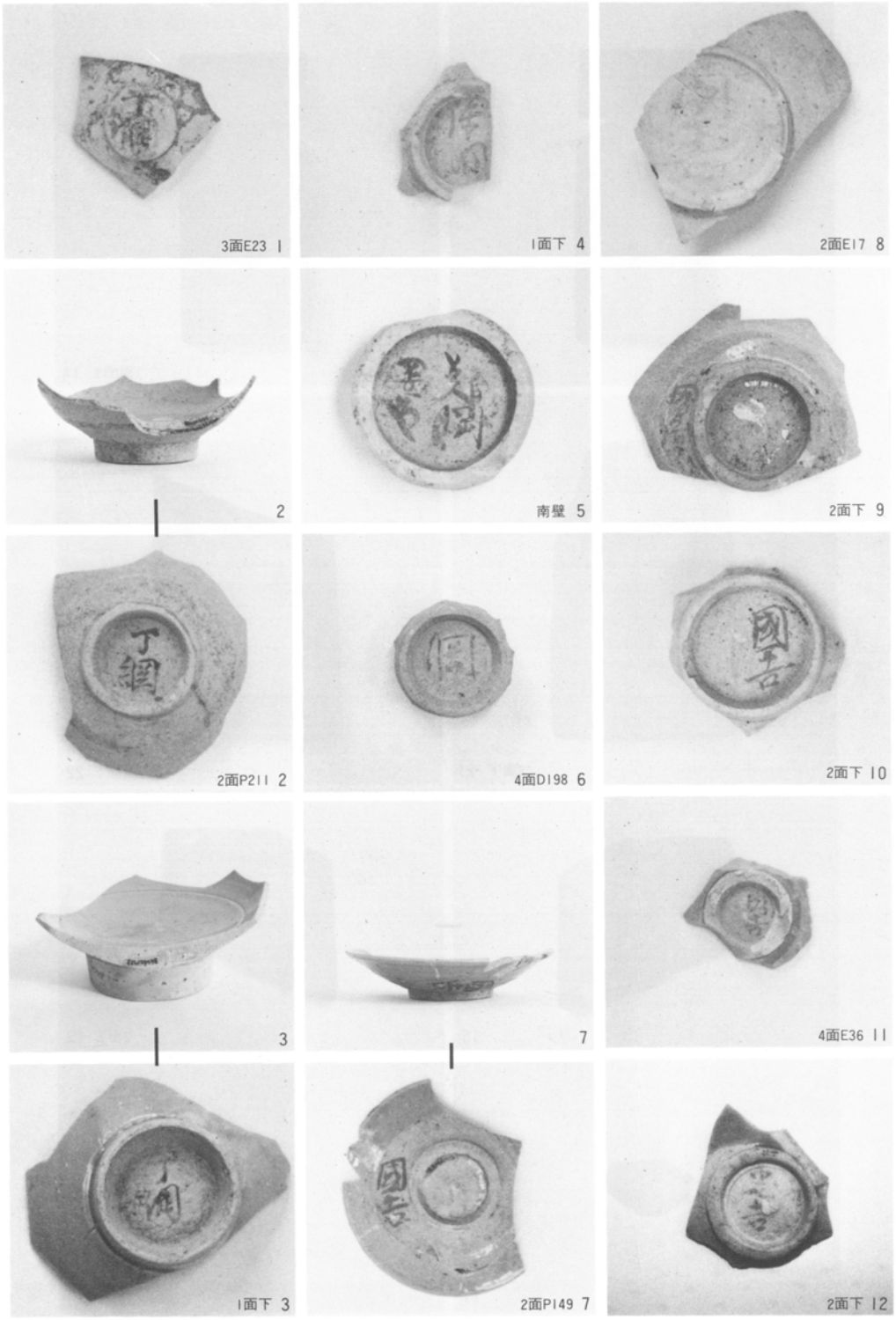


Fig. 118 墨書土器1 (約1/3) D…土壙、E…井戸、P…柱穴

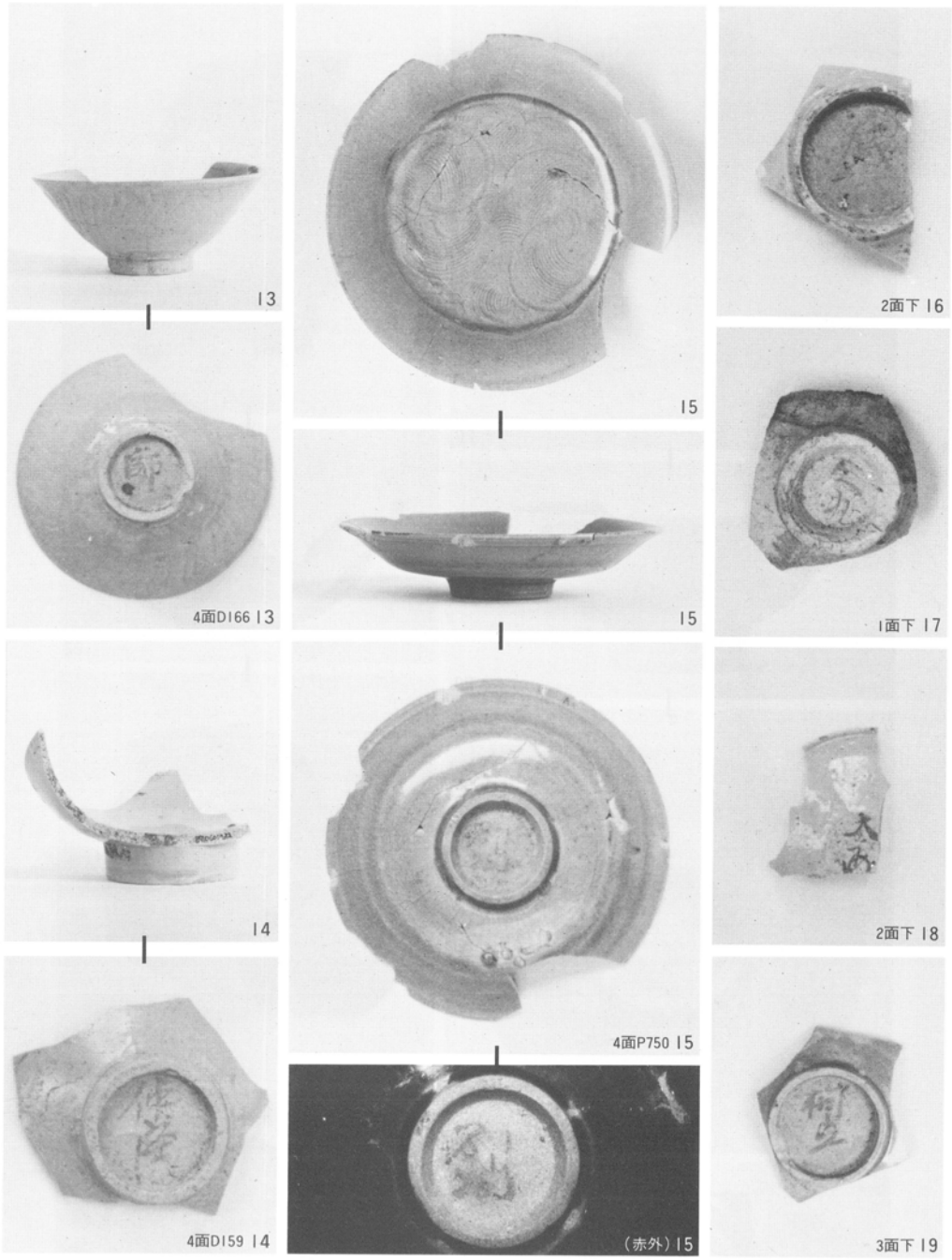


Fig. 119 墨書土器 2 (約1/3) D…土壙、E…井戸、P…柱穴

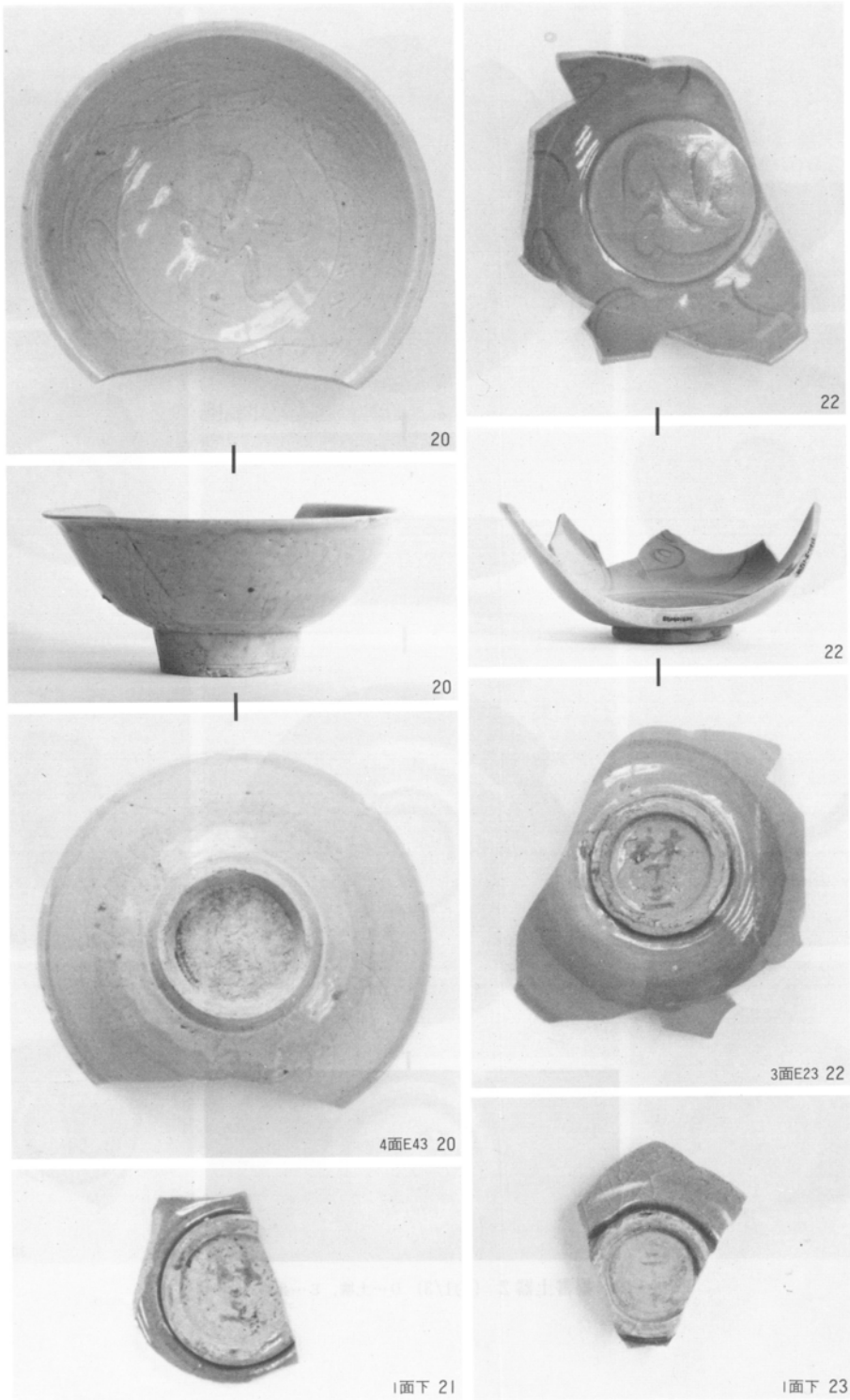


Fig. 120 墨書土器３（約1/3）D…土壙、E…井戸、P…柱穴

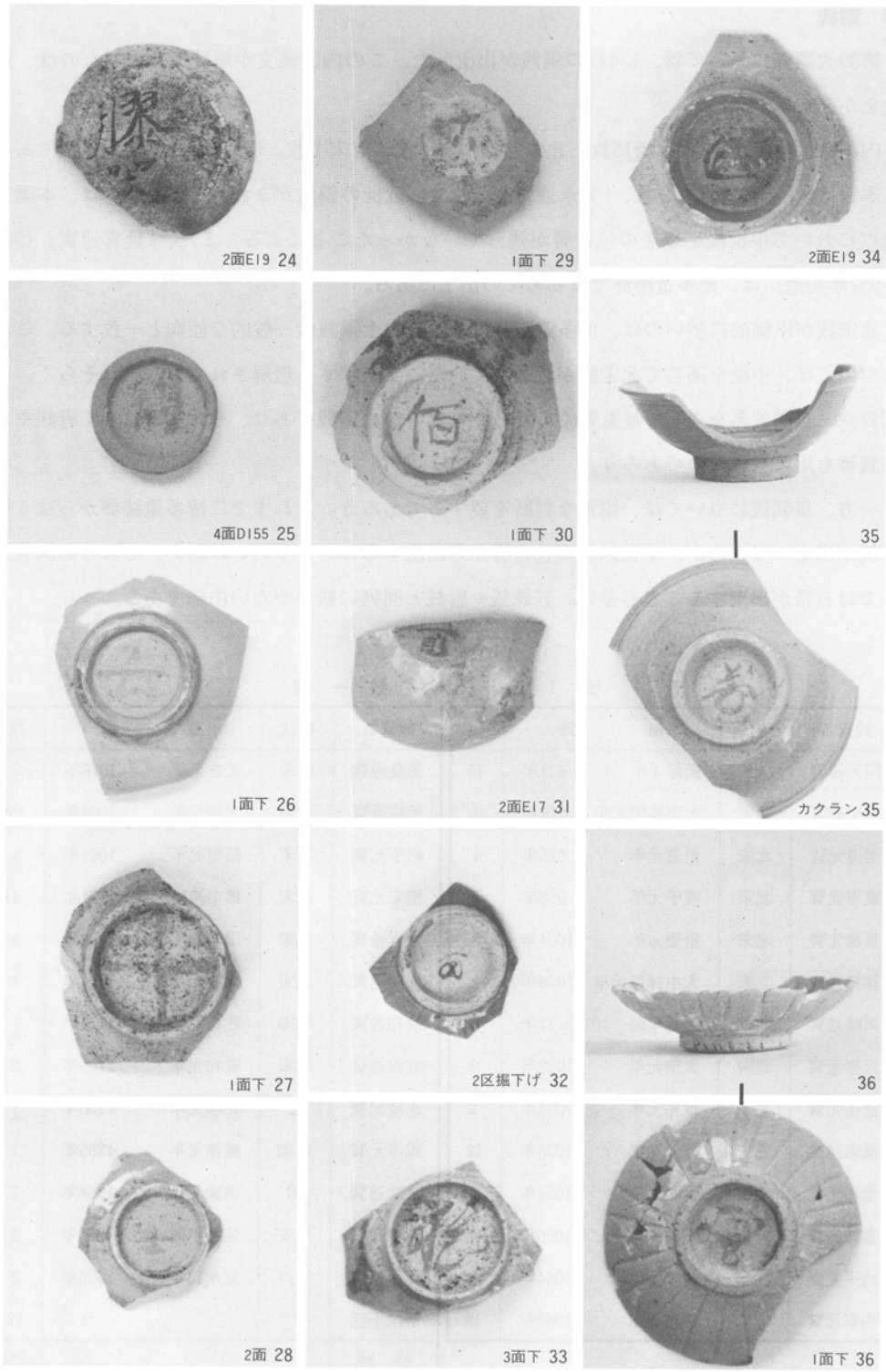


Fig. 121 墨書土器4 (約1/3) D…土壙、E…井戸、P…柱穴

③ 銅銭

第39次調査においては、134枚の銅銭が出土した。この内、銭文が解読できないものは、19枚をかぞえる。

内訳は、中国銭111枚（唐15枚、北宋93枚、金１枚、南宋１枚、明１枚）、日本銭４枚である。日本銭は、「延喜通寶」２枚、「寛永通寶」２枚で、近世の銅銭がきわめて少ないのは、本調査地点において中世後半以後の包含層が残っていなかったことによる。また、「延喜通寶」（907～957年鋳造）は、博多遺跡群では初めての出土である。

北宋銭が圧倒的に多いのは、博多遺跡群における出土銅銭の一般的な傾向と一致する。これについては、中世を通じて北宋銭が流通していたことを示すと理解されている。おそらく、日宋貿易・日明貿易を通して最も多くもたらされたのが北宋銭であり、それにまじって唐銭や南宋銭等も用いられたのであろう。

一方、皇朝銭については、慎重な判断を要するであろう。これまでに博多遺跡群からは４種９枚が出土しているが、中世以後の包含層から出土することが多いとは言え、それらの調査地点では石帯が出土することも多い。五銖銭や唐銭と同列に扱いがたい由縁である。

表 1　出土銅銭一覧

銭貨名	時代	初鋳		数
開元通寶	唐	武徳４年	621年	15
太平通寶	北宋	太平興国元年	976年	1
至道元寶	北宋	至道元年	995年	1
咸平元寶	北宋	咸平元年	998年	6
景德元寶	北宋	景德元年	1004年	3
祥符元寶	北宋	大中祥符元年	1008年	2
天禧通寶	北宋	天禧年間	1017～21年	3
天聖元寶	北宋	天聖元年	1023年	6
景祐元寶	北宋	景祐元年	1034年	1
皇宋通寶	北宋	寶元２年	1038年	12
至和元寶	北宋	至和元年	1054年	2
嘉祐元寶	北宋	嘉祐元年	1056年	4
治平元寶	北宋	治平元年	1064年	2
熙寧元寶	北宋	熙寧元年	1068年	15
元豊通寶	北宋	元豊元年	1078年	9
元祐通寶	北宋	元祐元年	1086年	10
紹聖元寶	北宋	紹聖元年	1094年	4
聖宋元寶	北宋	建中靖国元年	1101年	4
崇寧通寶	北宋	崇寧元年	1102年	1
大観通寶	北宋	大観元年	1107年	4
政和通寶	北宋	政和元年	1111年	1
宣和通寶	北宋	宣和元年	1119年	2
正隆元寶	金	正隆元年	1156年	1
咸淳元寶	南宋	咸淳元年	1265年	1
洪武通寶	明	洪武元年	1368年	1
延喜通寶	平安	延喜年間	907～957年	2
寛永通寶	江戸	寛永13年	1636年	2
解読不能				19
総　計				134

表 2 銅 銭 出 土 遺 構 一 覧

検出面	出土遺構	銭貨名数
1面	5号土壙	景徳元寶 1
		元豊通寶 1
	18号土壙	皇宋通寶 1
		解読不能 1
	25号土壙	熙寧元寶 1
	53号土壙	解読不能 1
	49号ピット	元祐通寶 1
	55号ピット	開元通寶 1
	7号井戸	宣和通寶 1
		解読不能 1
	1号溝	解読不能 1
	検出面	開元通寶 1
		咸平元寶 1
		天聖元寶 1
		至和元寶 1
		熙寧元寶 2
		元豊通寶 1
		元祐通寶 2
		聖宋元寶 1
		咸淳元寶 1
		洪武通寶 1
		寛永通寶 1
		解読不能 1
1面下		開元通寶 2
		至道元寶 1
		咸平元寶 1
		祥符元寶 1
		皇宋通寶 3
		嘉祐元寶 1
		治平元寶 1

検出面	出土遺構	銭貨名数
1面下		熙寧元寶 5
		元祐通寶 1
		聖宋元寶 2
		政和通寶 1
		解読不能 7
2面	70号土壙	元豊通寶 1
	85号土壙	開元通寶 5
		咸平元寶 2
		祥符元寶 1
		景徳元寶 2
		天禧通寶 2
		天聖元寶 5
		景祐元寶 1
		皇宋通寶 8
		至和元寶 1
		嘉祐元寶 1
		元豊通寶 5
		熙寧元寶 5
		元祐通寶 4
		紹聖元寶 4
		聖宋元寶 1
		大観通寶 2
		宣和通寶 1
		正隆元寶 1
		解読不能 3
	146号ピット	太平通寶 1
	13号井戸	咸平元寶 1
	15号井戸	崇寧通寶 1
	19号井戸	治平元寶 1
2面下		延喜通寶 1

検出面	出土遺構	銭貨名数
2面下		元祐通寶 1
		寛永通寶 1
3面	474号ピット	大観通寶 1
	25号井戸	開元通寶 1
		大観通寶 1
		天禧通寶 1
		嘉祐元寶 1
		治平元寶 1
		元祐通寶 1
		元豊通寶 1
4面	172号土壙	開元通寶 1
		咸平元寶 1
		解読不能 3
	197号土壙	熙寧元寶 1
	816号ピット	開元通寶 4
	48号井戸	解読不能 1
	検出面	延喜通寶 1

延喜通寶 2 面下

延喜通寶 4 面

延喜通寶 2 面下

延喜通寶 4 面

開元通寶
4 面816号ピット

太平通寶
2 面146号ピット

咸平元寶
2 面85号土壙

崇寧通寶 2 面15号井戸

景德元寶
1 面 5 号土壙

天聖元寶
2 面85号土壙

天聖元寶
2 面85号土壙

皇宋通寶
2 面85号土壙

皇宋通寶
1 面18号土壙

治平元寶
3 面25号井戸

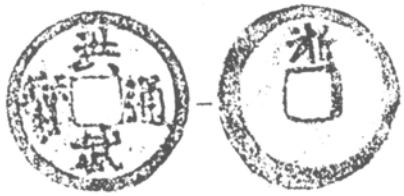
熙寧元寶
1 面下

元豐通寶
2 面 5 号土壙

大觀通寶
2 面85号土壙

宣和通寶
2 面85号土壙

正隆元寶
2 面85号土壙



洪武通寶—裏「浙」
1 面

Fig. 122 出土銅銭拓本（1/1）

6．近世の遺構・遺物

前述した様に、調査に先立って行なった重機による表土掘削のため、中世後半以後の遺構はほとんど残っていない。最初の遺構検出面である１面で調査した近世の遺構は、井戸・溝・土壙である。ここでは、近世の道路にともなったと考えられる１号溝について、報告する。

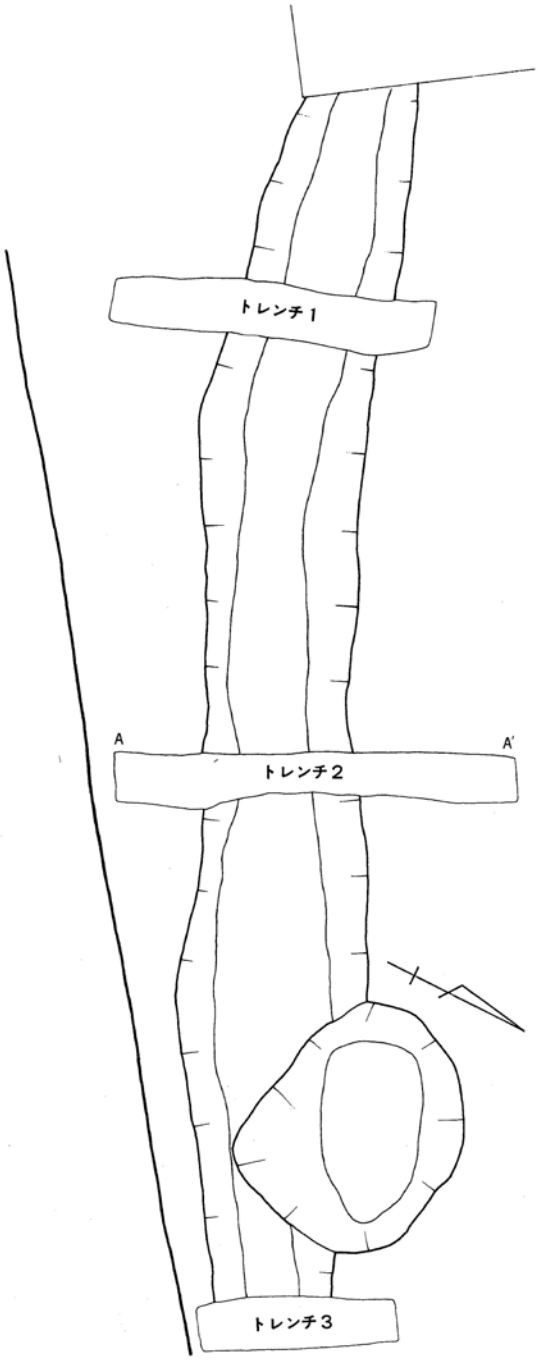
１号溝（0061）

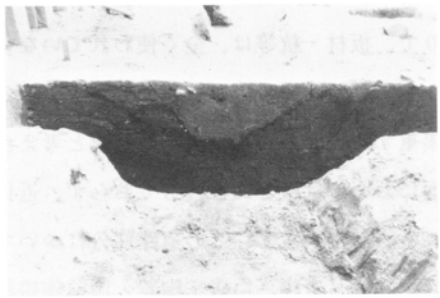
１面で検出した溝である。調査区の南辺を、北東から南西に通る。わずかに弧を描くが、直線的な溝と考えて差支えなかろう。主軸方位は、N－70°－Eである。

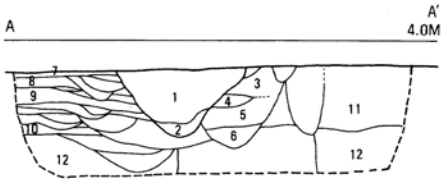
溝は、上端で、幅1.1～1.5mをはかる。深さは30～42cmで、西から東へ傾斜している。素掘りで、板材・杭等は、全く使われていない。溝の側面から底には、鉄分が沈着し、黄色の層をなしていた。溝の南側は、トレンチ１～３及び溝の南側面での土層観察では、こまかい単位で累重する層がみられ、道路の地業と考えられる。しかし、前述した様に、近世の遺構は、第１面においてはほとんど残っておらず、近世の生活面は第１面よりも上層にあったものと推測される。したがって、この道路部分については、掘込地業がなされていたと思われる。

土師器・青磁・白磁・陶器・肥前陶磁器・銅銭等が出土している。**１～10**は、**土師器**である。**１～３**は、皿である。底部は、回転糸切りする。**１・２**には、外底部に板状圧痕が、内底部にナデ調整がみられる。**１**は、全体に小振りで、口径の割合には器高が高い。口径7.0cm、器高1.8cmをはかる。**２・３**は、口径7.8cm、8.3cm、器高1.0cm、1.6cmである。**４～10**は、坏である。法量から、３群にわかれる。**４・５**は、口径10.9cm、11.0cm、器高2.8cm、2.7cmである。**６～８**は、口径12.2cm、12.2cm、12.5cm、器高2.4cm、2.6cm、2.9cmをはかる。**９・10**は、口径13.0cm、13.0cm、器高2.3cm、2.9cmである。形態的には、直線的に大きく開く体部の**４・８**と、腰部に丸味を持ち体部がやや外弯するものとにわかれる。底部はすべて回転糸切りであり、**５・８・９**には、板状圧痕と内底ナデ調整を施す。**11**は、**須恵器**の甕である。**12**は、**越州窯系青磁**である。高台の内側には、目痕がならんでいる。**13**は、**青磁**の碗である。体部の下半は、露胎である。**14・15**は、**青白磁**である。**14**は、燭台の頸部であろうか。**15**の内面には、花文を描く。**16・17**は、**白磁**である。**16**は、口縁部の釉を掻き取る、いわゆる口禿げの皿である。**17**の底部には、墨書がみられる。墨書は、花押である。**18**は、**肥前染付**の皿である。見込みには、コンニャク印判で、五弁花文がみられる。畳付は、露胎である。**19・20**は、**褐釉陶器**である。**19**は、鉢である。**20**は、壺である。肩部に耳がつくが、破片の為、耳が何ヶ所につくかは確認できない。この他、**銅銭**が１枚出土しているが、錆がひどく、銭文は解読できなかった。

１号溝の時期は、肥前染付の年代観からみて、18世紀代と考えられる。







1. 灰褐色粘質土と黄褐色砂質土の混り。下面は鉄分が沈着し、かたい。
2. 濃褐色砂質土。やわらかい灰が混り、若干の粘りを出す。
3. 灰褐色粗砂
4. 黄褐色粗砂
5. 3.とほぼ同質
6. 濃褐色土。粘性有
7. 灰色土。粗砂混り、かたくなる。
8. 灰色土。砂まじり
9. (暗)灰色土
10. 濃灰色土。褐色粘土を若干含む。
11. 灰色土。鉄分の黄色粒土まじり。
12. 灰色土

Fig. 123　1号溝遺構・断面実測図 (1/60)

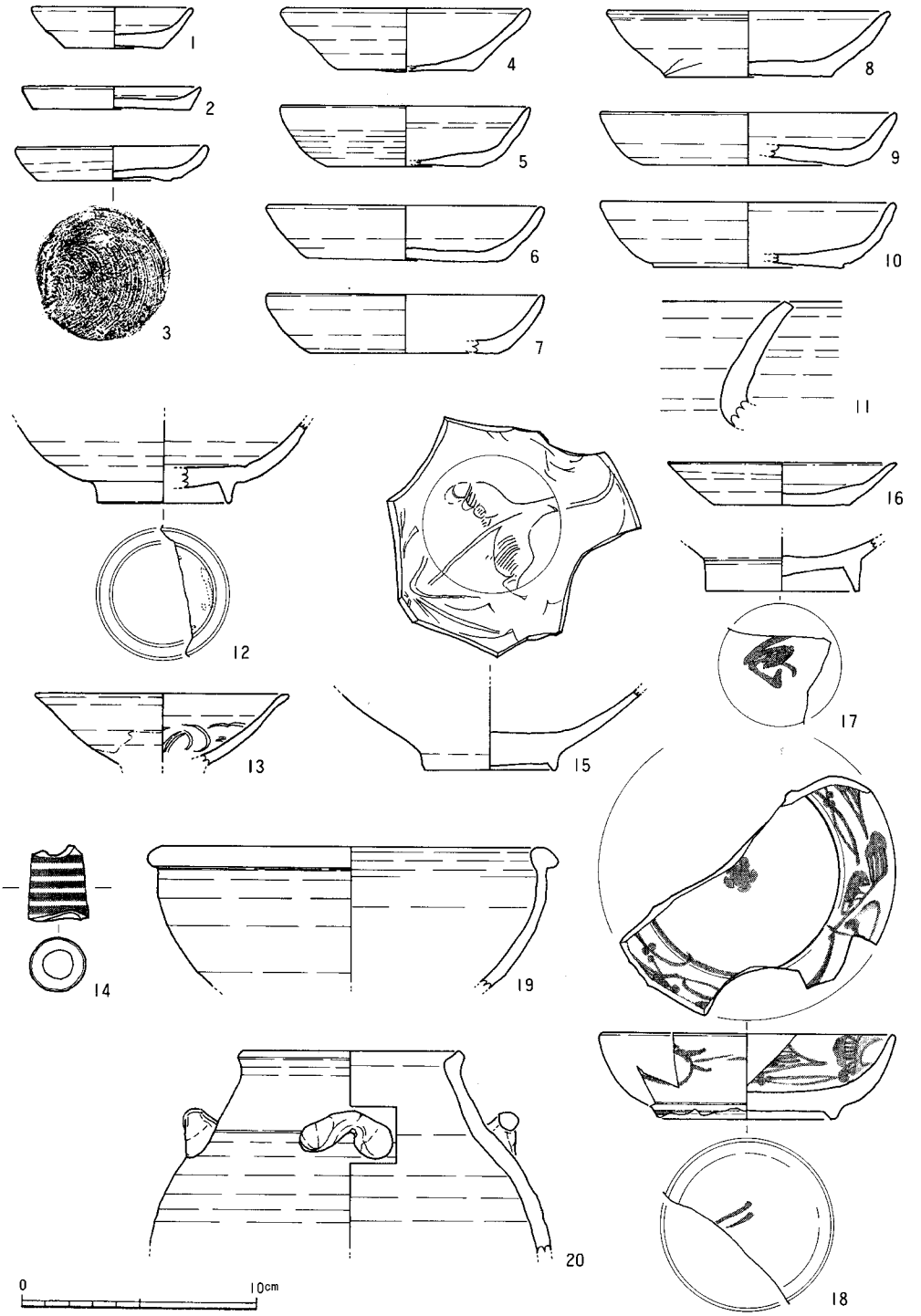


Fig. 124　1号溝遺物実測図（1/3）

第三章　小　　結

博多遺跡群第39次調査の概要について、若干の遺構を中心に述べてきた。報告書の末尾にあたって、調査成果をまとめるとともに、これまでで触れられなかった問題点について私見を述べておきたい。

調査成果の総括

1．本調査では、8世紀後半から18世紀におよぶ遺構を調査した。ただし、14世紀後半以降の遺構は、ほとんど検出できなかった。

2．古代の遺構としては、土壙・溝・柱穴などがある。柱穴は、大きなものでも直径30～40cmにとどまり、官衙等が営まれていたとは考えられない。しかし、古代の遺物には、銅製の帯金具・須恵器の円面硯・墨書須恵器・老司式瓦・緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁などがあり、一般集落とは異なる。

3．中世の遺構としては、土壙・地下室状遺構・土壙墓（木棺墓）・溝・柱穴・井戸などがある。土壙墓・木棺墓などの墓は、集まって墓地を作らず、建物から隔離されていない。

4．近世の遺構としては、土壙・井戸・溝を検出した。溝は、18世紀代のものであるが、道路の側溝と考えられる。

1.について

14世紀以降の遺構が検出できなかった原因としては、攪乱層を対象とした表土掘削によって掘り取ってしまったことが考えられる。しかし、それがすべての原因ではないようである。

前述したように、第1面では、18世紀代の道路側溝が検出され、土層観察では、道路が掘込み地業されていると推測された他、少数の近世の土壙も検出されている。また、発掘調査に先立って行われた試掘調査においては、第1面の20～30cm上には焼土層がみられ、表土から焼土層までの間では、近世～現代の遺物しか出土しなかった。この点から、この焼土層は、博多遺跡群に広く認められる、1586年の島津軍による博多焼亡に係わるものと考えられた。したがって、近世の生活面は、第1面からさほど遠からぬレベルにあったとみることができよう。すると、中世後半の遺構を破壊しているのは、近世の整地であったとも思われる。

近世の博多の町割りを形作ったのは、豊臣秀吉である。秀吉は、九州平定の帰途で博多の再興を命じたが、この時の博多は、前年（1586年）筑前に侵攻した島津軍によって、焼き払われていた。この戦禍は大変なものだったようで、『黒田家臣伝』（元禄4年、1691）によると、「其の跡は草ふかくして、町を割べき縦横も定めがたかりしに」とあり、秀吉が博多再興を命

じたときには、かつての屋敷割りも道路筋もわからなくなっていたという。秀吉の博多再興はかなり大規模なものであったと思われ、これまでの発掘調査においても、この時の整地と考えられる焼土処理層と整地層が、各所で確認されている。調査地点によっては、この整地層を除去すると、その下からいきなり鎌倉時代の遺構が顔を出す地点もあり、太閤町割りが、かなりの削平と地均しを伴ったことを推測させる。

これらの点から見て、第39次調査地点においては、戦国時代末期の整地によって中世後半期の包含層が削平されてしまったものと考えることができよう。

2.について

第39次調査地点の周辺からは、律令官人の存在をうかがわせる遺物が多く出土している。しかし、いずれの調査地点においても、官衙風の建物遺構は検出されていない。ただ、8世紀後半から9世紀では、井戸・溝・地鎮遺構などが調査されており、居住施設があったことは疑いない。

ところで、博多遺跡群における越州窯系青磁の出土状況を見ると、調査地点によってその出土数にかなりの偏りがあることがわかる。本調査では、156点が出土した。ちなみに、地下鉄関係調査A・B区では、644㎡の調査で7点、祇園駅出入口2・3では、434.5㎡の調査で13点、築港線関係第2次調査では564㎡の調査で224点が出土している（福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集　1984年、第184集　1988年）。

3.について

本調査地点からも、数基の墓が検出された。これらは、1基ずつが点々と分布するもので、一ヶ所に集中する傾向はみられない。もとよりこれらの墓は同時に営まれたものではないが、時期幅にして150年程度の間の埋葬であり、もしも墓地が場所として特定されていたならば、当然それは継承されたはずである。したがって、12～13世紀頃の博多においては、生活の場と墓地とが、未だ分化していなかったと考えられる。おそらく、こうして検出される墓地は、屋敷墓のように、被葬者の屋敷地の中に設けられたものであろう。しかし、一度の調査に数基ずつくらいの割合で検出される墓が、中世都市博多の住人すべてをカバーするものでないことは明らかである。博多遺跡群で調査されているこの時期の土壙墓・木棺墓は、大抵輸入磁器を副葬している。中には、築港線関係第2次調査982号土壙（木棺墓）の被葬者のように、青磁碗1点・青磁皿4点に化粧道具一式を副葬したものもある。これらの例を見ると、どうもある程度の富裕層が、屋敷墓に葬られていると言えそうである。すると、一般民衆はどこに葬られたのであろうか。発掘調査によって確認できていないので、推測の域を出ないが、博多の南東と

南西を限る旧比恵川や博多川の河原に放置された死体も多かったのではあるまいか。

ところで、これら都市内部に点々と営まれた墓地が集中しはじめるのは、14世紀前半のようである。築港線関係第2次調査では、この時期の集石墓が、群を成して検出された。集石墓は、礫を方形に集めたもので、その上に五輪塔を立てたものもみられた。集石墓を検出した第Ⅲ面においては、集石墓の周辺には柱穴・礎石は見られず、建物とは若干の空間を置いて墓地を成

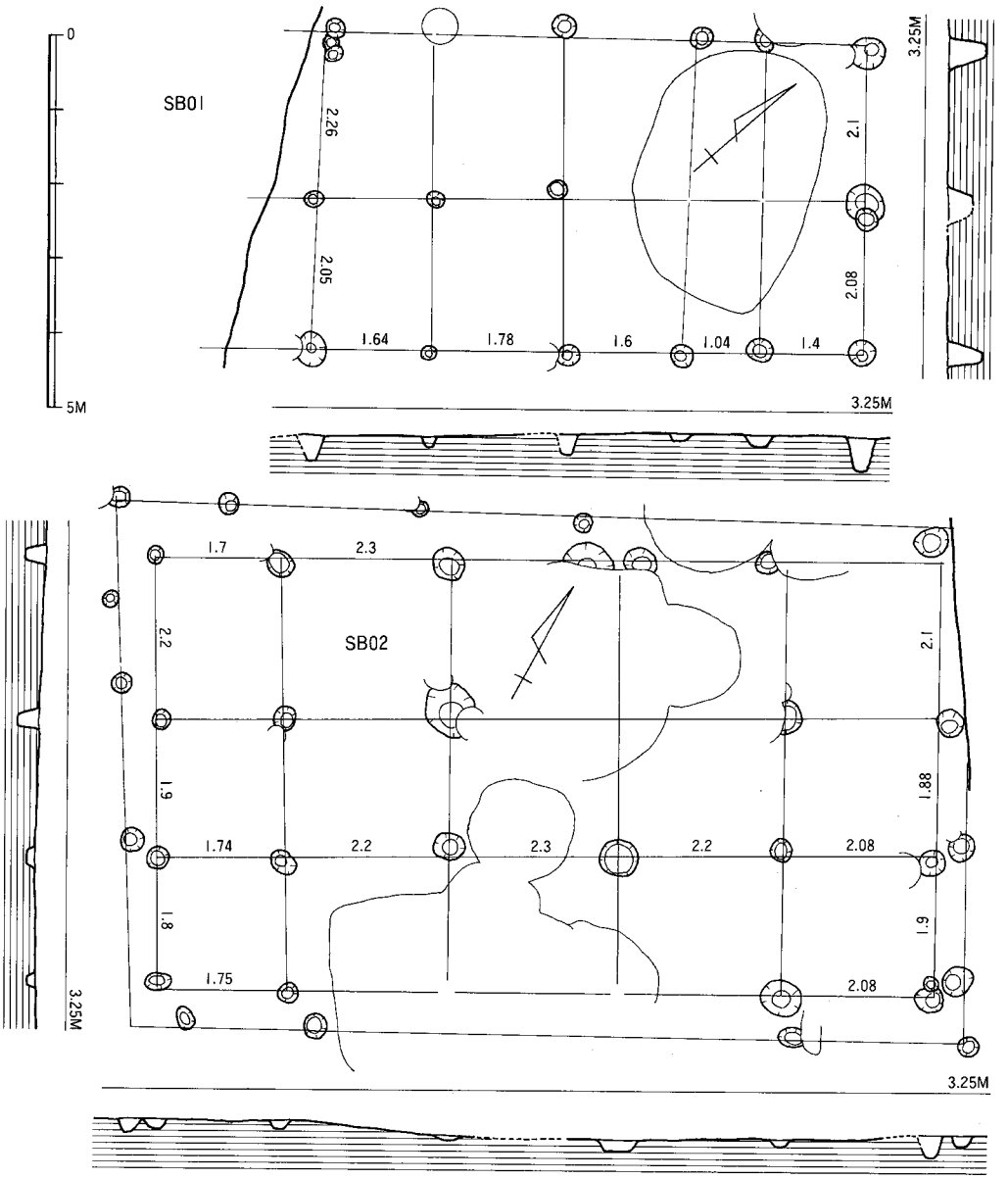


Fig. 125 掘立柱建物跡復原図（1/100）

していたと考えられる。すなわち、町の中の小さな空き地に、五輪塔が数基立ち並んでいたのである（福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集　1988年）。このあり方が博多遺跡群において一般的なものかどうかは、調査例が少ないので断定できないが、墓地の流れとして、散在したものから都市の中で数ヶ所に集中するようになるということは、想定できるのではあるまいか。

本概報の中では触れていないが、柱穴から建物を復原する作業も試みている。しかし、柱筋が直線に並ばなかったり、建物のプランが矩形を呈さなかったりで、復原は困難である。とりあえず可能性が強いと思っている復原案を Fig. 125 に示す。いずれも柱穴の深さが揃わず、難点がある。また、考えられる掘立柱建物跡については、Fig. 5・Fig. 7・Fig. 9・Fig. 11 の遺構全体図中に示している。なお、これらの掘立柱建物跡は、柱穴出土の遺物を見るかぎりにおいては、必ずしも中世に属するとは限らず、図示した SB02 のように10世紀以前の遺物しか出土しないものも含んでいる。

4. について

前述したように、本調査で検出した１号溝は、18世紀の道路側溝である。この近世道路は、主軸方位（N－70°－E）から見ると、第35次調査・第40次調査などで検出されている中世の道路（N－40°－E前後）とは全く方向をことにする。したがって、中世の町筋を継承しているとは考えがたい。この近世道路は、太閤町割りによって創設されたもので、系譜的には、調査区南東を通る現代の道路につながるものである。ただし、現代の道路は主軸方位をN－58°－Eにとっており、これとも異なっていると言える。しかし、江戸時代に関しては、古絵図が残っており、18世紀代のものもある。これらを見ると道路割りについては基本的に変化しておらず、１号溝によって画された道路もこの範疇で捉えるべきである。また、１号溝の延長上にあたる第56次調査においては近世の道路は検出されていない。したがって、単に道路もしくは側溝が蛇行していたものと考えるのが妥当であろう。

太閤町割りの跡を調査で検出することは、太閤町割りによって作り出された道路のほとんどが現在の道路の下になっていることから、不可能に近いと言える。今回の調査は、その数少ない調査例であり、太閤町割りの道路が必ずしも真っ直ではなかったこと、太閤町割りが中世の町筋を継承していないことを示したものである。

最後に、第39次調査で出土した遺物のほとんどは未だ実測されておらず、写真・実測図等の記録類も十分に紹介できなかったことをお断りしておく。

博 多 14

－博多遺跡群第39次調査概報－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第229集

1990年 3 月31日

発 行 福 岡 市 教 育 委 員 会

印 刷 福 岡 印 刷 株 式 会 社